### 3 出土遺物

狭山池 2 号窯灰原から出土した遺物の総量は、コンテナ約70箱分である。本項では実測が可能であった遺物をすべて掲載した。以下、各灰原層ごとに出土した須恵器の概要を述べる。なお個別の遺物観察結果については表16~表19の遺物観察表を参照されたい。

①上層灰原出土遺物(図196、 図版88、表16)

上層灰原から出土した須恵器の総量はコンテナ約19箱分であるが、そのほとんどが細片であるため、図化できるものは非常に少ない。図化した遺物の器種別の個体数は以下の通り。

杯 H 身 4 点・杯 H 蓋 7 点・ 高杯 2 点・壺蓋 1 点

杯 H 身の口径平均値は 12.7 cm、杯 H 蓋の口径平均値は 14.6cm である。杯 H 身の法量は、図312のような数値分布を示している。杯 H 身のたちあがり高、たちあがり角度は、図 315のような数値分布を示している。

高杯はいずれも脚部のみが残存し、13は脚部中位以上を欠損しているようであり、2段3方向に長方形スカシを有している。14はおそらく破断面の直上で杯

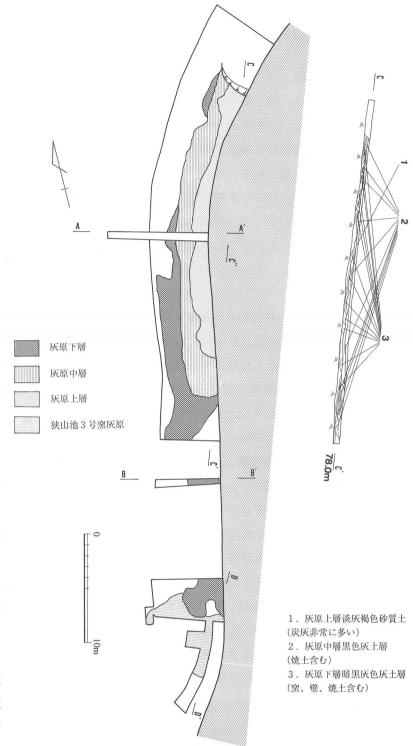


図 194 狭山池 2 号窯灰原平断面図 (S=1/300)

部に接合するようで、3方向に長方形スカシを有している。

②中層灰原出土遺物(図196~198、図版87~88、表17)

中層灰原から出土した須恵器の総量はコンテナ約21箱分である。図化を行った器種別の個体数は以下の通り。

杯 H 身14点・杯 H 蓋11点・壺蓋 1 点・短頸壺 2 点・高杯 1 点・短頸壺 2 点・提瓶 1 点・甕 5 点 杯 H 身の口径平均値は 12.2cm、杯 H 蓋の口径平均値は 13.7cm である。杯 H 身の法量は、図312 のような数値分布を示している。杯 H 身のたちあがり高、たちあがり角度は、図315のような数値分

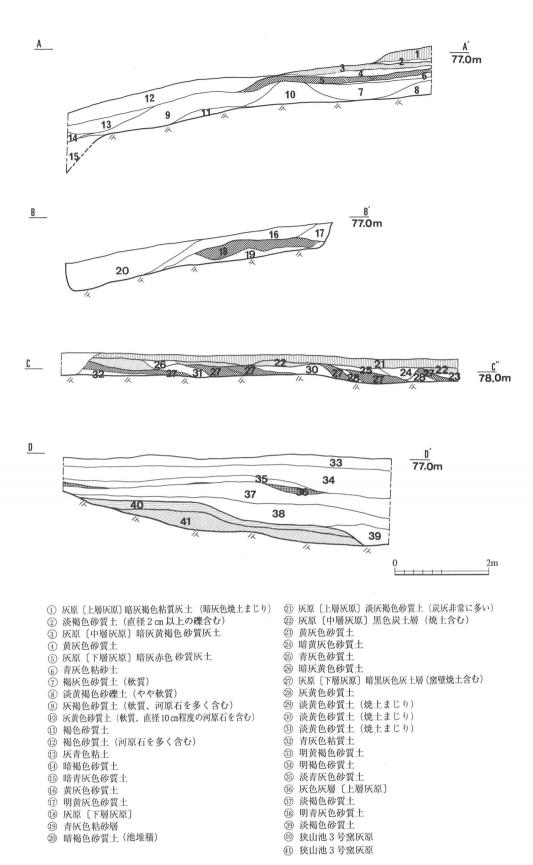


図 195 狭山池 2 号窯灰原土層断面図 (S=1/80)

布を示している。

高杯15は脚部中位以上を欠損しているが、2段3方向に長方形スカシを有するものと思われる。 短頸壺44の体部最大径は16.0cmを計測する。

口頸部が大型の甕82・83は、頸部沈線の間に櫛描き斜行沈線文を施文する。口頸部が小型のもの79・80・81の頸部外面は無文である。

③下層灰原出土遺物(図198~202、図版87~89、表18)

下層灰原から出土した須恵器の総量はコンテナ約30箱分である。図化をした器種別の個体数は以下の通り。

杯 н 身13点・杯 н 蓋11点・高杯蓋 3 点・高杯 1 点・腺 1 点・甕11点

杯 H 身の口径平均値は 12.2cm、杯 H 蓋の口径平均値は 14.1cm である。杯 H 身の法量は、図312 のような数値分布を示す。杯 H 身のたちあがり高、たちあがり角度は、図315のような数値分布を示す。

高杯蓋は、69・70が天井部と体部の境界に凹線をめぐらすが、71には凹線はない。3点とも天井部外面中央に、中央部が凹む扁平なつまみを付している。

腺72は口頸部のみの残存で、口径 10.0cm を測る。

口頸部が大型の甕85・87・88は、頸部沈線の間に櫛描き斜行沈線文を施文する。口頸部が小型のもの84・86・89・90・91・92・93・94の頸部外面は無文である。

④灰原表面採集遺物出土遺物(図199、図版89、表19)

2号窯の灰原は、ある時期に上層灰原・中層灰原・下層灰原が雛壇状に露出していたものと考えられる。このため、表面採集された須恵器は、各灰原層のものを含んでいる。

表面採集資料として掲載した須恵器は、杯 н 身 3 点・杯 н 蓋 2 点である。

### 4 小 結

狭山池 2 号窯の灰原各層から出土した須恵器には、層の違いにおける型式差は確認できなかった。 3 章の考察で述べているように、杯  $\mathbf{H}$  身の法量は  $\mathbf{T}$   $\mathbf{K}$   $\mathbf{43}$  集中域において  $\mathbf{T}$   $\mathbf{G}$   $\mathbf{10}$   $\mathbf{-I}$  集中域寄りに偏向した分布を示しており、そのたちあがり角度は  $\mathbf{T}$   $\mathbf{K}$   $\mathbf{43}$  号窯の杯  $\mathbf{H}$   $\mathbf{9}$   $\mathbf{4}$   $\mathbf{9}$   $\mathbf{10}$   $\mathbf{1$ 

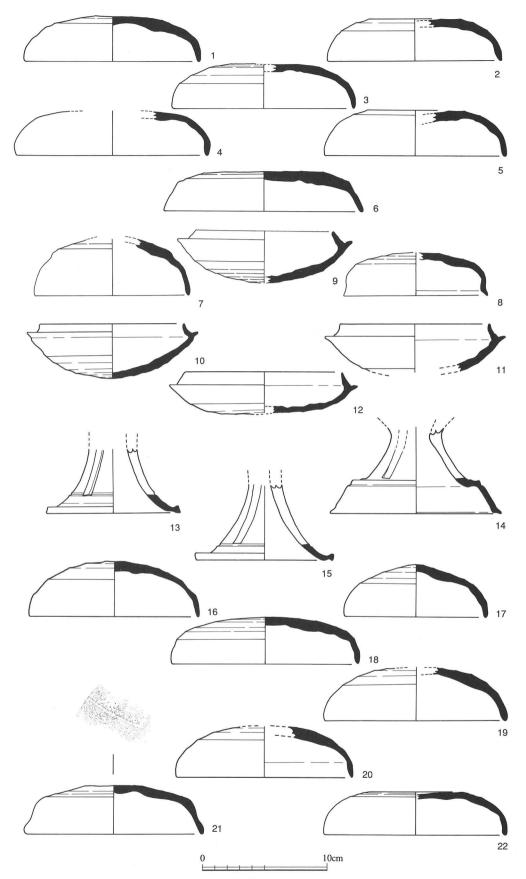


図 196 狭山池 2 号窯灰原出土遺物 (1) (1~14:上層灰原、15~22:中層灰原)

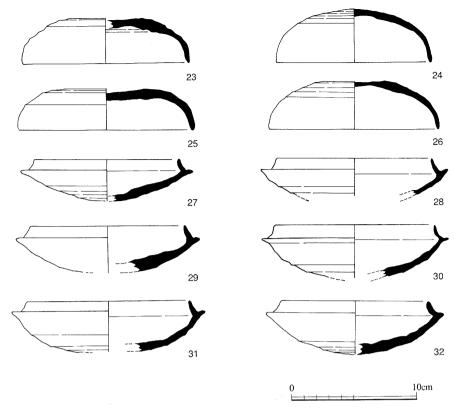


図 197 狭山池 2 号窯灰原出土遺物 (2) (23~32:中層灰原)

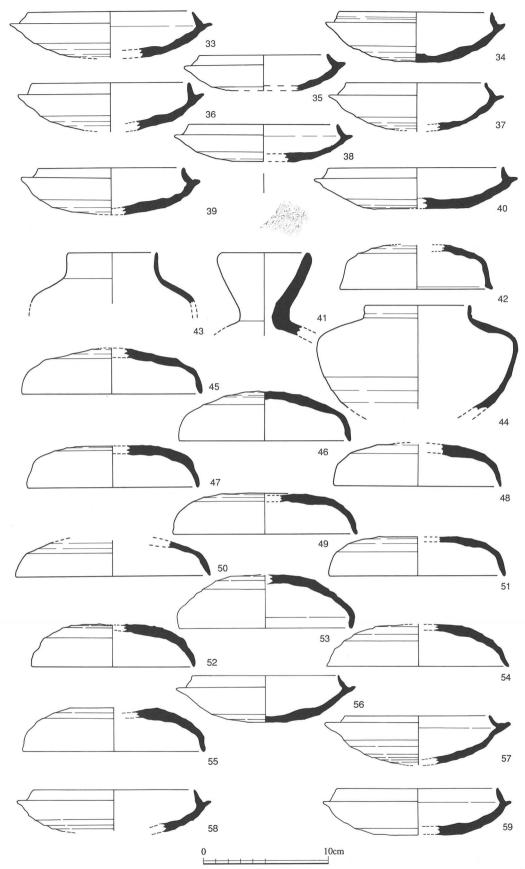


図 198 狭山池 2 号窯灰原出土遺物 (3) (33~44:中層灰原、45~59:下層灰原)

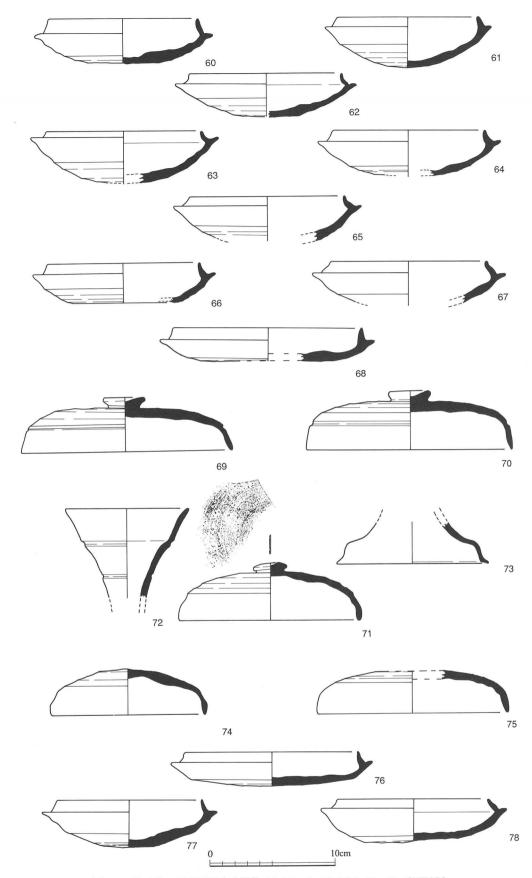


図 199 狭山池 2 号窯灰原出土遺物 (4) (60~73:下層灰原、74~78:表面採集)

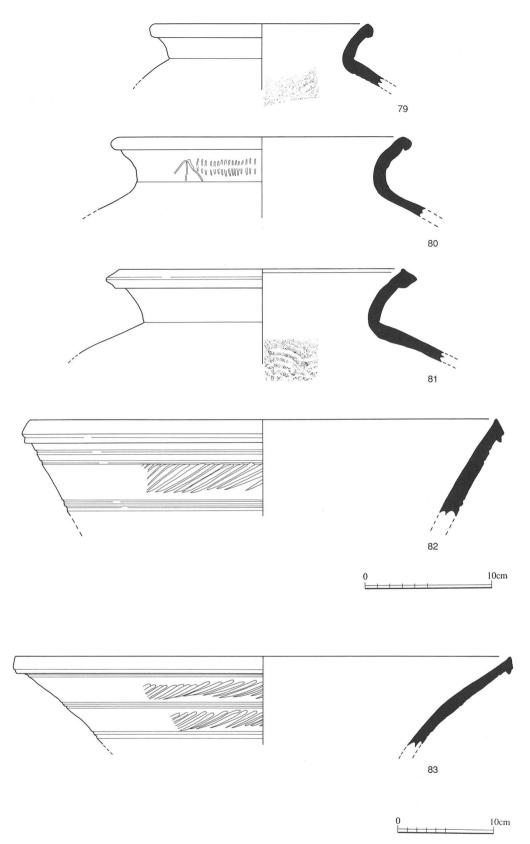


図 200 狭山池 2 号窯灰原出土遺物 (5) (中層灰原)

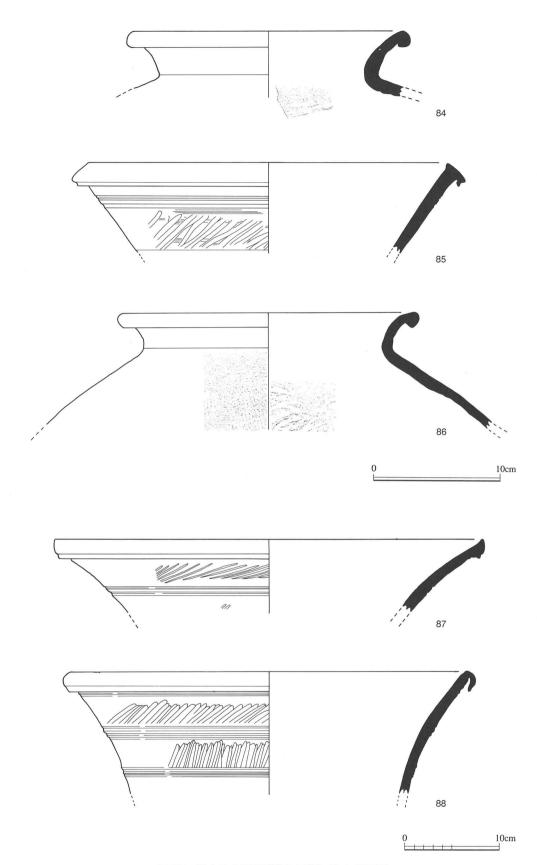


図 201 狭山池 2 号窯灰原出土遺物 (6) (下層灰原)

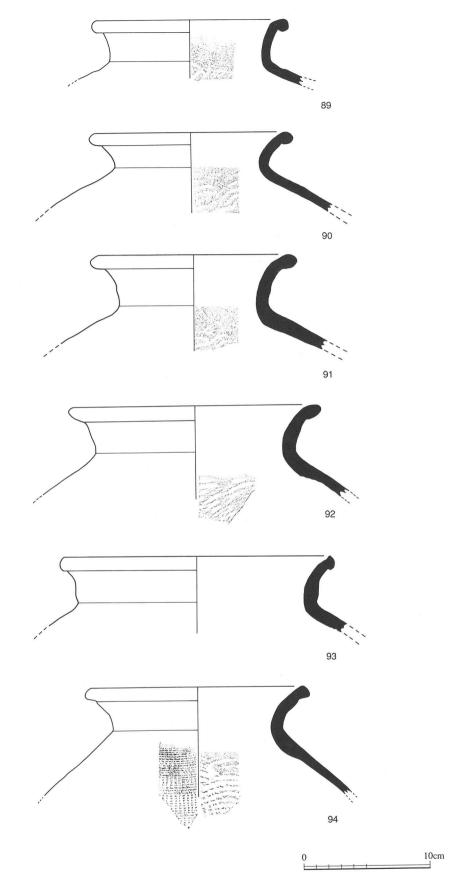


図 202 狭山池 2 号窯灰原出土遺物 (7) (下層灰原)

	1 -		(T はたちあがりを示す)		
器種	図面 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
 杯 蓋	196- 1	口径14.0 残存高3.5	体部・口縁部はやや下外方に下り、 端部は丸くおさめる。天井部は低く やや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転へラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/2。一部反転復元。
杯 蓋 	196- 2	口径13.8 器高3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面8/9回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰青 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/5。反転復元。
杯蓋	196- 3 88- 3		体部・口縁部は内彎して下外方に下ったのち、下方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 内一 淡灰紫色、外一淡灰青色。胎土: 密。 4mm 以下の長石を若干含 む。焼成:良好。残存: 1/4。反 転復元。
杯蓋	196- 4	口径15.4 残存高3.6	体部は下外方に下り、口縁部はほぼ 垂直に下る。端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。天井部中 央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面不明。他は回転ナデ調 整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一淡灰色。胎土:密。 2mm 以下の長石をわずかに含む。焼成:良好。残存:1/5。反転 復元。
杯蓋	196- 5	器高3.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや低く 平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰褐 色。胎士: 密。3mm 以下の長石 を含む。焼成:良好。残存: 1/4。 反転復元。
杯蓋	196- 6 88- 6	口径15.8 器高3.2	体部・口縁部は下外方に直線的に下 り、端部は丸くおさめる。天井部は 低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:明灰 青色。胎土:密。1mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。残 存:1/5。反転復元。
杯蓋	196- 7	口径12.6 残存高4.5	体部口縁部は下方に下り、端部は丸 くおさめる。天井部は高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。
壺蓋	196- 8	口径11.6 器高3.6	体部・口縁部は内彎して下ったのち 外反する。端部は内傾する平面を成 す。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/6回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成:良好。
杯身	196- 9	口径11.0 受部径14.0 残存高4.3 T高0.9 T角度42°30′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は やや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面6/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。
杯身	196- 10 88- 10		たちあがりは内傾したのち、中位で 上方にのび、端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くお さめる。たちあがり基部内面で段を 成す。底体部はやや深く、底部は丸 い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1~2mm の長石・石英 を多く含む。焼成: 良好。残存: 1/2。一部反転復元。
杯身	196- 11	口径12.0 受部径14.6 残存高3.8 T高1.1 T角度30°45′	たちあがりは内傾したのち、端部付 近で直立し、端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部はやや丸 くおさめる。たちあがり基部内面で ややあまい段を成す。底体部はやや 浅い。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰青色。胎土:密。1~2mm の長石を含む。チャートを含む。焼成:良好。残存:1/8。反転復元。
杯身	196- 12 88- 12	口径12.8 受部径15.2 器高3.2 T高1.1 T角度33°30′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや丸くおさめる。受部はやや外上 方にのび端部はやや丸くおさめる。 たちあがり基部内面で非常にあまい 段を成す。底体部は浅く、底部は平 ち。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 内一 灰青色、外一灰色。 胎土: 密。 1mm の長石をわずかに含む。焼 成: 良好。残存: 1/3。合成復元。 底体部外面に窯壁片熔着。底体部 外面灰かぶり。
高杯脚部	196- 13	脚底径10.8 残存高5.2	脚部上方欠損。脚部は下外方に開いて下る。裾端部はやや内傾する凹面を成して接地。裾部上方に1条の沈線をめぐらす。2段3方向に長方形スカシを有すると思われる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右同り。色調:淡灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。
高杯脚部	196- 14	脚底径13.8 残存高6.9	脚部上方欠損。脚部は下外方に開いて下り、裾部上方で段を成して凸帯をめぐらし、下外方に下り端部付近でやや外反して外下方に下る。裾端部は内傾する凹面を成して外側で接地する。3方向に長方形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。1~2mm の長石を含 む。焼成: 良好。残存: 脚部の1/2。 反転復元。

<sup>\*</sup>たちあがり角度は、たちあがり基部外面を中心に鉛直方向を $0^\circ$ としてたちあがり基部外面と口縁端部を結んだ直線までの角度を計測したもの。

器種	図面 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		残存高6.1	脚部上方1/2以上欠損。脚部は下外 方に開いて下り、裾端部は外傾する 平面を成して接地し、裾部内面でも 一部接地する。裾部上方に1条の沈 線をめぐらす。2段3方向に長方形 スカシを有すると思われる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰青色、外一淡灰青色。胎土: 密。 焼成:良好、堅緻。残存:1/4。 反転復元。
不	i		体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや高く 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/6回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一灰青色。胎土:密。 2mm 以下の長石を含む。焼成: 良好。残存:1/3。合成復元。内 面・口縁部外面灰かぶり。
<b></b> 茶	196- 17	口径11.4 器高4.2	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/3。一部反転復元。
<b>添蓋</b>	196- 18	口径15.0 器高3.7	体部は下外方に下り、口縁部は垂直 に下る。端部は丸くおさめる。天井 部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面7/9回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。3mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。
杯蓋		□径14.4 残存高4.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや高く やや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 暗灰褐色、外一暗灰青色。胎土: 密。2mm 以下の石英を含む。焼 成:良好。残存:1/3。
杯蓋	196- 20	口径14.2 残存高4.1	体部は下外方に下り、口縁部はやや 下方に下る。端部は丸くおさめる。 天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 黄色。胎土:密。1~2mmの長 石を若干含む。チャートを若干含 む。焼成:良好。残存:1/4。反 転復元。
杯蓋	196- 21	口径14.2 器高3.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平ら に近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/8回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰青色、外一暗灰青色。胎土: 密。3mm 以下の長石を若干含 む。焼成:良好。残存:1/3。反 転復元。ヘラ記号:天井部外面に 「=」あり。
杯蓋	196- 22	口径14.4 器高3.5	体部・口縁部は内彎して下方に下 り、端部は丸くおさめる。天井部は 低く平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/4回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰褐色、外一灰青色。胎土:密。 2mm 以下の長石をわずかに含 む。焼成:良好、堅緻。残存: 1/4。反転復元。
杯蓋		口径13.6 器高3.6	体部・口縁部は下外方に下ったのち 下方に下る。端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。
杯蓋	197- 24	口径12.6 器高4.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや高く 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。
杯蓋	197- 25	口径13.8 器高3.4	体部・口縁部は下外方に下ったのち 端部付近で下方に下る。端部は丸く おさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面9/10回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。
杯蓋	197- 26	口径13.5 器高3.9	体部・口縁部は下外方に下ったのち はば垂直に下る。端部はやや鋭い。 天井部はやや高く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色 胎土: 密。焼成: 良好。
杯身	197- 27	口径11.6 受部径13.8 器高3.4 T高0.9 T角度30°45′	たちあがりは内傾したのち端部付近 でほぼ直立する。端部は丸くおさめ る。受部はほぼ水平にのび、端部は 丸くおさめる。底体部は浅く、底部 は丸い。		色。胎土:密。焼成:良好。
杯身		日径12.6 受部径15.3 残存高3.0 T高1.0 T角度33°30′	たちあがりは内傾したのち端部付近で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は鋭い。底体部はやや浅い。	外面2/3回転ヘラ削り調整。他	胎土:密。焼成:良好。
杯身		□径12.4 受部径14.8 残存高3.7 T高1.0 T角度32°15′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部はほぼ水平に短 くのび、端部は丸くおさめる。底体 部はやや浅く、底部は平らに近い。	外面2/3回転ヘラ削り調整。他	
杯身		回径11.0 受部径13.2 残存高4.2 T高1.1 T角度35°00′	たちあがりは内傾したのち中位でほぼ直立する。端部は丸くおさめる。 受部はほぼ水平に短くのび、端部は やや鋭い。底体部はやや深く、底部 はやや丸い。	外面1/4回転へラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	1

杯身	197- 31	受部径15.5 残存高4.2	たちあがりは内傾したのち端部付近 で上方にのびる。端部は丸くおさめ る。受部は外上方にのび、端部は丸	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面4/5回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。
3		T 高1.0 T 角度35°15′	くおさめる。底体部はやや深く、底 部は平らに近い。		
不	197- 32 87- 32	, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	たちあがりは内傾したのち上方にの び、端部は丸くおさめる。受部はほ ほ水平にのび、端部は丸くおさめ	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。焼成:良好。
争		T 高1.0 T 角度35°00′	る。底体部はやや深く、底部は丸い。	『あた』年ムノノ前刊筆で。	
不	198- 33	口径13.2 受部径16.2 残存高3.7	たちあがりは内傾してのび、端部は やや丸くおさめる。受部は外上方に のび、端部は丸くおさめる。たちあ	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面4/5回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡褐 色。胎土:密。1mm の長石をわ ずかに含む。焼成:やや不良。残
<b>}</b>		T 高1.0 T 角度39°00′	がり基部内面で段を成す。底体部は 浅く、底部はやや丸い。	では日本ムノノが印在。	京がに含む。焼成・ヤマが良。残 存:1/4。反転復元。受部上面に 杯蓋口縁部片が付着。
不	198- 34	口径12.2 受部径14.4	たちあがりは内傾したのち、中位で 上方にのび、端部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐 色。胎土:密。4mm 以下の長石
ł		器高4.1 T高1.0 T角度28°30′	受部は外上方にのび、端部は丸くお さめる。底体部はやや浅く、底部は やや丸い。	転ナデ調整。	を若干含む。焼成:良好。残存: 1/6。反転復元。
<i>r</i>	198- 35	口径11.5 受部径13.0	たちあがりは内傾したのち、端部で やや上内方にのび、端部は丸くおさ	マキアゲ・ミズビキ成形。底部	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰
不身		残存高2.9 T高0.7 T角度46°15′	める。受部はやや外上方にのび、端 部は丸くおさめる。底体部は浅い。 底部欠損。	外面2/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	青色。胎土:密。1mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。残存: 1/3。合成復元。
	198- 36	口径12.5 受部径14.7	たちあがりは内傾してのび、端部は	マキアゲ・ミズビキ成形。底部	ロクロ回転:右回り。色調:内一
不		残存高3.8 T 高0.9	丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅く、底部はやや丸い。	外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	暗灰色、外一淡灰青色。胎土: 密。3mm 以下の長石を若干含 む。焼成:良好。残存:1/4。反
	198- 37	,	たちあがりは内傾したのち、端部で	マキアゲ・ミズビキ成形。底部	転復元。 ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。
不		受部径14.0 残存高3.8	上方にのび、端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸	外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	胎土:密。3mm 以下の長石をわ   ずかに含む。焼成:良好。残存:
争		T 高1.0   T 角度39°45′	くおさめる。底体部はやや浅く、底 部はやや丸い。		1/4。反転復元。
不	198- 38	口径12.0 受部径14.4 残存高3.0	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部はやや外上方に のび、端部は丸くおさめる。たちあ	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面4/5回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。 胎土:密。1mm の長石をわずか に含む。1mm の石英をわずかに
<b>}</b>		T 高0.9 T 角度36°45′	がり基部内面で非常にあまい段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。	(本四年) / 両宝。	含む。焼成:良好。残存:1/4。 反転復元。ヘラ記号:底部外面に 「一」あり。
不	198- 39 88- 39	2 4 · 1 · 1 · 1 · 1	たちあがりは内傾したのち、端部で 直立し、端部は丸くおさめる。受部	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面6/7回転ヘラ削り調整。他	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰青色、外一淡灰紫色。胎土:
· }		残存高3.7 T高1.0 T角度35°15′	はやや外上方にのび、その上面はや や凸面を成し、端部は丸くおさめ る。底体部は浅く、底部はやや丸 い。	は回転ナデ調整。	密。2mm 以下の長石を若干含 む。焼成:良好。残存:2/3。一 部反転復元。
<b>不</b>	198- 40		たちあがりは内傾したのち、中位で	マキアゲ・ミズビキ成形。底部	ロクロ回転:左回り。色調:暗灰
い 計 —		受部径16.0 器高3.3 T高0.8 T角度28°15′	は球直立し、端部は丸くおさめる。 受部は水平にのび、端部は丸くおさ める。底体部は浅く、底部は平ら。	外面5/8回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	色。胎土:密。3mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。
是瓦	198- 41	口径7.0 基部径4.2 残存高6.7	口頸部は上方にのびたのち、やや内 彎しながら上外方にのび、端部は丸 くおさめる。 肩部・体部・底部欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰青 色。胎土:密。1mm の長石をわ ずかに含む。焼成:良好。残存: 口頸部の1/8。反転復元。
E M	198- 42	口径12.2 残存高3.6	体部はやや下外方に下り、口縁部は 外反し、端部は内傾する平面を成 し、外側で接地する。天井部は低く 平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰青 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存:
ž	198- 43	口径7.0 基部径7.8	口縁部は基部から内傾して上内方に のびたのち、中位で直立する。端部	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	1/4。反転復元。 ロクロ回転 : 右回り。色調 : 灰色。 胎土 : 1mm の長石をわずかに含
Į.		残存高4.1	はやや丸くおさめる。 肩部は外下 方に緩く張り出す。体部・底部欠 損。	1 1744 7 7 1976 MCC 0	む。焼成:良好。残存:口縁部・肩部の1/8。反転復元。
ž	198- 44	口径8.2 基部径8.6	口縁部は基部から直立し、端部は丸 くおさめる。肩部は外下方に張り出	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回	ロクロ回転:右回り。色調:灰青 色。胎土:密。1~2mm の長石
TO STATE STATE		体部最大径16.0 残存高8.2	し、体部は下内方に下る。底部は下 半を欠損。体部最大径は上位に位置 する。	転ナデ調整。	を若干含む。焼成:良好。残存: 1/12。反転復元。 内外面一部灰 かぶり。
Lan.	200- 79	口径17.2 基部径14.8 残存高5.2	口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部下で短く外下方にのび、 口縁部で内彎しながら外上方にの び、上外方にのび、内上方にのび	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面青海波タ タキ。他は回転ナデ調整。	色調:内一口頸部は淡灰色、肩部 は暗灰色、外一口縁部は淡灰色、 頸部は暗灰色、肩部は灰色。胎 土:密。焼成:良好。残存:口頸
			る。端部は丸くおさめる。肩部は外 下方に下る。肩部下半以下欠損。		部1/4。反転復元。外面に自然和付着。

甕	200- 80	口径22.8 基部径10.0 残存高5.8	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下で短く下方にのび、口縁部で 内彎しながら上外方にのび、内上方 にのび、口縁部内面に至る。肩部は 外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面タタキのち回転ナデ調整。 肩部外面タタキ。 肩部内面不明。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。1~2mm の長石を 若干含む。焼成:良。残存:口頸部 1/4以下。 反転復元。 へラ記号: 頸部外面にあり。 口頸部内面灰か ぶり。 口頸部外面に自然釉付着。
獲	200- 81	口径25.6 基部径16.8 残存高7.5	口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部は口縁部下でほぼ水平に のびたのち、上外方にのび、やや内 上方に内傾する平面を成す。端部は 丸くおさめる。肩部は外下方に下 る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面同心円タ タキ。他は回転ナデ調整。	色調: 内一口頸部は淡灰色、肩部は淡灰褐色、外一頸部は暗灰色、口縁部・肩部は淡灰色。胎土: 密。 2mm 以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存: 口頸部1/3。反転復元。口頸部内外面に自然釉付着。
獲	200- 82	口径37.4 残存高7.8	口頸部下半以下欠損。口頸部は上外 方にのび、口縁部下で短く外下方に のびたのち、凹面を成して上外方に のび、上内方に内傾してのびる。端部 は丸くおさめる。口縁部下方に2条、 頸部中位に2条の沈線をめぐらし、そ の間に櫛描き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰色。胎土:密。1~2mm の長石を若干含む。焼成:良好。残存:口頸部1/16以下。反転復元。口頸部内面灰かぶり。
獲	200- 83	口径52.4 残存高9.3	口頸部下方1/3以下欠損。口頸部は やや外彎して外上方にのび、口縁部 下で短く下外方にのびたのち短く上 外方にのび、あまい段を成したのち 上内方に内傾してのびる。端部は丸 くおさめる。口縁部直下に1条、頸 部上方1/3に2条、頸部下方1/3に 2条の鈍い沈線をめぐらし、頸部上 方1/3の沈線の上下に櫛描き斜行沈 線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:内:灰色、外一淡灰青色。 胎土:密。2mm 以下の長石を若 干含む。焼成:良好。残存:口頸 部の1/12以下。反転復元。

# 表 18 狭山池 2 号窯下層灰原出土遺物観察表

			表 18 狭山池 2 号葉下層		(T はたちあがりを示す)
器種	図面 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	198- 45	口径14.2 残存高3.7	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低くやや 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一灰色。胎土:密。 3mm以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:1/5。反転復元。
杯蓋	1 1	口径13.6 器高4.0	体部は下外方に下り、口縁部はやや 下方に下る。端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。2mm 以下の長 石を若干含む。焼成: 良好。残 存:1/4。反転復元。
杯蓋	198- 47	口径13.5 器高3.4	体部・口縁部はやや内彎して下外方 に下り、端部は丸くおさめる。天井 部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一暗灰色。胎土:密。 5mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:1/4。反転復元。
杯蓋	1 1	口径13.2 残存高3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部 はやや丸くおさめる。天井部は低く やや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 褐色。胎土:密。1mm の長石を 若干含む。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。
杯蓋	198- 49	口径14.8 器高3.3	体部は下外方に下り、口縁部はやや 外反する。端部は丸くおさめる。天 井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一暗灰色。胎土:密。 2mm 以下の長石を含む。焼成: 良好。残存:1/6。反転復元。
杯蓋	198- 50	口径15.6 残存高2.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部 はやや丸くおさめる。天井部は低 い。天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。1mm の長石をわずか に含む。焼成:良好。残存: 1/8。 反転復元。
杯蓋	198- 51	口径13.8 器高3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/6回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰青色、外一明灰青色。胎土:密。 1~3mm の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:1/4。反転復元。
杯蓋	198- 52	口径13.2 器高3.5	体部口縁部は下外方に下ったのち、 下方に下る。端部はやや鋭い。天井 部はやや低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面6/7回転へラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。
杯蓋		口径13.8 器高4.4	体部口縁部は下外方に下ったのち、 内彎し、口縁端部は丸くおさめる。 天井部は高く、やや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/7回転へラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。
杯蓋	198- 54	口径14.5 器高3.5	体部口縁部は下外方に下り、口縁端 部はやや鋭い。天井部はやや低く平 らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/6回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。
杯蓋	198- 55	口径14.4 器高3.5	体部口縁部は下方に下ったのち、端 部付近でやや下外方に下る。口縁端 部は丸くおさめる。天井部はやや低 く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面6/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎士:密。焼成:良好。

杯身	198- 56	口径12.0 受部径14.6 器高3.7 T高1.0 T角度39°00′	たちあがりは内傾したのち、端部付近で上方にのび、端部は鋭い。受部は外上方にのび、端部はやや鋭い。底体部はやや浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。
杯身	198- 57	口径11.6 受部径14.8 残存高4.0 T高0.7 T角度43°30′	たちあがりは内傾したのち、やや上 方にのびる。端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸 くおさめる。底体部はやや深く、や や丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面9/10回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転 : 右回り。色調 : 灰色。 胎土 : 密。焼成:良好。
杯身		口径12.8 受部径15.5 器高3.4 T高1.1 T角度32°45′	たちあがりは内傾して上方にのび、 端部はやや鋭い。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は やや浅い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗青 灰色。胎土:密。焼成:良好。
杯身	198- 59	口径10.8 受部径10.5 器高3.8 T高1.1 T角度30°30′	たちあがりは内傾して上方にのび、 端部は丸くおさめる。受部はほぼ水 平にのび、端部は丸くおさめる。底 体部はやや浅く、底部は平ち。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。
 杯 身	199- 60	口径12.0 受部径14.2 器高3.6 T高1.2 T角度23°45′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部はほぼ水平にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。
杯身		口径11.2 受部径13.2 器高4.1 T高0.8 T角度31°15′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/4回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:明灰 青色。胎土:密。焼成:良好、堅 緻。残存:1/4。反転復元。
杯身	199- 62	口径12.2 受部径14.5 器高3.5 T高0.9	たちあがりは内傾したのち、中位で 直立する。端部は丸くおさめる。受部 はやや外上方にのび、その上面はわ ずかに凸面を成し、端部は丸くおば	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面6/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一暗灰色。胎土:密。 1~2mm の長石を含む。焼成: 良好。残存:1/4。反転復元。
		T 角度31°45′	める。たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	Day of the last	The Arm Mark
杯	199- 63	口径12.4 受部径15.0 残存高4.1	たちあがりは内傾したのち、中位で 上内方にのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くお	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面6/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰青色。胎土:密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成:良好。残
身	!	T 高0.8 T 角度43°15′	さめる。たちあがり基部内面であま   い段を成す。底体部はやや深く、底   部はやや丸い。		存:1/4。反転復元。
杯身	199- 64	口径12.0 受部径14.6 残存高3.6 T高0.9 T角度38°00′	たちあがりは内傾したのち、端部付 近で直立し、端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くお さめる。底体部はやや浅く、底部は ほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。3mm 以下の長 石をわずかに含む。焼成:良好。 残存:1/4。反転復元。
	199- 65	口径12.4 受部径15.0 残存高3.6 T高0.8	たちあがりは内傾したのち、端部で 上方にのび、端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くお さめる。底体部はやや浅い。底部下	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転へラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰青色。胎土:密。3mm以下の長石をやや多く含む。焼成:良好。残存:1/4以下。反転復元。
	199- 66	T 角度44°30′ 口径12.0	半欠損。 たちあがりは内傾してのび、端部は	マキアゲ・ミズビキ成形。底部	ロクロ回転:右回り。色調:内一
杯身		受部径14.6 残存高3.2 T 高0.8 T 角度32°00′	丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅い。底部下半欠損。	外面回転ヘラ削り調整。他は回   転ナデ調整。	灰色、外一暗灰色。胎土:密。 2mm 以下の長石を含む。チャートをやや多く含む。焼成:良好。 残存:1/6。反転復元。
杯	199- 67	口径12.4 受部径15.4	たちあがりは内彎しながら内傾した のち、端部で上方にのびる。端部は	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/7回転ヘラ削り調整。他	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石
身		残存高3.3 T高1.1 T角度38°45′	丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅い。底部下半欠損。	は回転ナデ調整。	を若干含む。焼成:良好。残存: 1/6。 反転復元。
杯身	199- 68	口径15.0 受部径17.1 器高2.6 T高1.0 T角度20°00′	たちあがりは基部からほぼ直立し、 端部は丸くおさめる。受部はやや外 上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面4/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。2mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。
高杯蓋	1	口径16.8 つまみ径3.4 器高4.4 つまみ高0.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平ら に近い。天井部外面中央に、中央部 が凹む扁平なつまみを付す。天井部 と体部の境界に凹線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一暗灰色。胎土:密。 3mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:1/3。一部反転 復元。
高杯蓋	199- 70	口径16.2 つまみ径3.4 器高4.9 つまみ高0.9	体部・口縁部はやや下外方に下り、 端部はやや丸くおさめる。天井部外 面中央に、中央部が凹む扁平なつま みを付す。天井部と体部の境界に凹 線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/8回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1~3mm の長石を含む。1mm の石英を含む。焼成: 良好。残存: 1/4。合成復元。
高杯蓋	1	口径14.5 つまみ径2.6 器高4.7 つまみ高0.9	体部は下外方に下り、口縁部はほぼ 垂直に下る。端部は丸くおさめる。 天井部外面中央に、中央部が凹む扁 平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面7/8回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一灰 褐色、外一淡灰褐色。胎土:密。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。へ ラ記号:天井部外面に「一」あり。

郞	199- 72	口径10.0 残存高7.2	頸部はやや外彎しながら上外方にの び、口縁部は上外方にのびたのち、 端部でやや外反する。端部は丸くお さめる。頸部基部付近・肩部・体部 ・底部欠損。口縁部と頸部の境界に 1条の沈線をめぐらし、頸部中位に も1条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐色。胎土:密。1mm の長石をわずかに含む。焼成:良好。残存:口頸部の1/4。反転復元。
高杯	199- 73	脚底径12.2 残存高3.4	脚部上方欠損。脚部は下外方に下ったのち、外下方に開き、下外方に下り、裾端部で外反する。端部はやや内傾する凹面を成す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。1mm の長石をわずか に含む。焼成: 良好。残存: 脚部 1/7以下。反転復元。
獲	201- 84	口径21.6 基部径17.5 残存高5.2	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下で短く下方にのびたのち、ほ ば水平にのび、口縁部で内彎しなが ら上方にのび、上内方にのび、口縁 部内面に至る。肩部は外下方に下 る。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面青海波タ タキ。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一口頸部は暗灰色、肩部は灰色、外一頸部は灰色、口縁部・肩部は暗灰色。胎土:密。1~2mm の長石を含む。1mm の石英を含む。焼成:良好。残存:口頸部1/4。反転復元。口縁部・肩部外面自然釉付着。口頸部内面灰かぶり。
甕	201- 85	口径28. 8残存高10.2	口頸部下半以下欠損。口頸部は上外 方にのび、口縁部下で下方にのびた のち、上方に短くのび、段を成した のちやや内上方に内傾してのびる。 端部は丸くおさめる。口縁部下方に 2条、頸部中位に1条以上の鈍い沈 線をめぐらし、その間に櫛描き斜行 沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整のち一部回転ナ デ調整。他は回転ナデ調整。	色調:灰色。胎土:密。4mm 以下の長石を含む。焼成:良好。残存:口頸部1/8以下。反転復元。
甕	201- 86	口径23.4 基部径19.8 残存高9.4	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下で下外方にのびたのち、内彎 して上外方にのび、口縁部内面に至 る。肩部は外下方に下る。肩部一部 ・体部・底部欠損	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:内一口頸部は灰色、肩部は暗灰色、外一口縁部・肩部は灰色、類部は暗灰色。胎土:密。1~2mmの長石を含む。1mmの石英を含む。焼成:良好。残存:口頸部1/4。反転復元。口頸部外面・肩部内面に自然釉付着。肩部外面灰かぶり。
甕	201- 87	口径45.4 残存高7.9	口頸部下半欠損。口頸部は外彎して 外上方にのび、口縁部下でやや外下 方にのびたのち、やや上外方にのび、 段を成したのち内彎して上方にのび る。端部は丸くおさめる。頸部上方 1/3に2条の沈線をめぐらし、その 上下に櫛描き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。(頸部内面にナ デ調整時の布か革の使用痕があ る。)	色調:灰色。胎土:密。2mm の 長石を若干含む。焼成:良好。残 存:口頸部1/8以下。反転復元。
簉	201- 88	口径42.0 残存高13.0	口頸部下方1/3以下欠損。口頸部は 外彎して上外方にのび、口縁部下で 下内方にのびたのち、上外方にの び、内彎して上内方にのび、口縁部 内面に至る。口縁部直下に2条、頸 部上方1/3に2条の沈線を、頸部下 方1/3に3条の鈍い沈線をめぐら し、上方1/3の沈線の上下に櫛描き 斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調: 淡灰青色。胎土: 密。 3mm 以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:口頸部の1/4以下。反転復元。
甕	202- 89	口径15.2 基部径13.0 残存高5.5	口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部下で短く下外方にのびた のち、外上方にのび、内彎して上内方 にのび、口縁部内面に至る。 肩部は 外下方に下る。 肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面青海波タ タキ。他は回転ナデ調整。(頸 部外面にナデ調整時の布か革の 使用痕がある。)	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。5mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。残 存:口頸部1/3以下。反転復元。
甕	202- 90	口径15.6 基部径12.4 残存高6.4	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下でわずかに下方にのびたの ち、やや外上方にのび、内彎して上 外方にのび、上内方にのび、口縁部 内面に至る。肩部は外下方に下る。 肩部一部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面青海波タ タキ。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。1~2mm の長石 を含む。焼成:良好。残存:口頸 部1/9以下。反転復元。肩部内面 灰かぶり。
獲	202- 91	口径15.0 基部径12.0 残存高7.7	口頸部は外彎して上外方にのび、口 緑部はやや外上方にのび上外方にの びたのち、やや内彎して内上方にの び、口縁部内面に至る。肩部は外下 方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 口頸部は淡灰色、肩部は灰褐色、 外一灰褐色。胎土:密。1~3mm の長石を若干含む。焼成:良好。 残存:口頸部1/8。反転復元。口 頸部外面・肩部内面自然釉付着。 口縁部内面・肩部外面灰かぶり。
甕	202- 92	口径19.4 基部径16.0 残存高7.4	口頸部は外彎して上外方にのび、口 緑部はやや内彎して外上方にのび、 上方にのび口縁部内面に至る。肩部 は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:淡灰色。胎土:密。6mm 以下の長石をやや多く含む。焼 成:良好。残存:口頸部1/8。反 転復元。

甕	202- 93	口径21.6 基部径19.2 残存高6.2	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下でわずかに外下方にのびたの ち、上外方にのび上方にのび上内方 にのびる。端部は丸くおさめる。肩 部は外下方に下る。肩部下半以下欠 損。	外面タタキ。肩部内面青海波タ	ロクロ回転:右回り。色調:内一 口頸部は淡灰色、肩部は暗灰色、 外一口縁部・肩部は淡灰色、頸部 は暗灰色。胎土:密。1~2mm の長石を若干含む。焼成:良好。 残存:口頸部1/8。反転復元。外 面自然釉付着
甕	202- 94	口径16.9 基部径13.7 残存高8.8	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部は外上方にのびやや内彎して上 内方にのび、口縁部内面に至る。肩 部は外下方に下る。肩部一部・体部 ・底部欠損。	外面タタキ。肩部内面青海波タ	色調:淡灰青色。胎土:密。焼成:良好。残存:口頸部1/4。反 転復元。

# 表 19 狭山池 2 号窯灰原表面採集遺物観察表

(T はたちあがりを示す)

			<del></del>		(112/2000-72/17)
器種	図面 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	199- 74	口径12.2 器高3.7	体部は下外方に下り、口縁部は垂直 に下る。端部は丸くおさめる。天井 部低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面6/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰褐色。胎土:密。3mm 以下の長石をわずかに含む。焼成:良。残存:1/4。反転復元。
杯蓋	199- 75	口径15.2 残存高3.4	体部・口縁部は下外方に下る。端部 は丸くおさめる。天井部は低く平ら に近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 明灰橙色、外一明灰青色。胎土: 密。焼成:やや不良。残存:1/5。 反転復元。
杯身	199- 76 89- 76	口径14.0 受部径16.1 器高2.7 T高0.9 T角度31°30′	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのびる。端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くお さめる。底体部は浅く、底部は平 ち。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。3mm の長石を若 干含む。焼成:良好。残存:1/3。 反転復元。
杯身	199- 77	口径11.7 受部径13.9 器高3.8 T高0.9 T角度27°00′	たちあがりは内傾してのび端部は丸 くおさめる。受部は外上方にのび、 端部はやや丸くおさめる。底体部は やや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/8回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。3mm の長石を若 干含む。焼成:良好。残存:1/4。 反転復元。
杯身	199- 78	口径12.4 受部径14.9 器高3.5 T高0.9 T角度45°45′	たちあがりは内傾してのび端部は丸 くおさめる。受部は外上方にのび、 端部は丸くおさめる。たちあがり基 部内面で段を成す。底体部は浅く、 底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。 胎土:密。 2mm の長石を若干含 む。焼成: 良好。残存: ほぼ完形。

# Ⅲ 狭山池3号窯

#### 1 調査の経過

1990年に実施した狭山池 2 号窯灰原発掘調査の際、その南端部分において、2 号窯灰原とは明らかに異なる黒色の灰土層を確認した。この灰土層は、2 号窯下層灰原の下層約 25cm に所在していた。2 号窯灰原が灰土中に砂質土を含むのに対して、この灰土層は砂質土を含まず、分布域もまったく異なることから、2 号窯とは別の窯体の操業に伴う灰原であると判断し発掘調査を行うこととなった。この新規に確認した須恵器窯を狭山池 3 号窯と呼称する。発掘調査は1992年 1 月21日から同年 3 月 4 日まで実施した。

狭山池 2 号窯灰原の発掘調査の際に試掘溝内で確認した狭山池 3 号窯灰原の規模は、東西約 7m、南北約 6m であった。この時に出土した須恵器の器種には、杯蓋・杯身・高杯・提瓶・短頸壺・甕等が認められ、狭いトレンチにもかかわらず、その数量はコンテナ12箱分にも及んだ。

灰原の分布状況から、窯本体が近い場所に遺存する可能性が強いと判断し、灰原の完掘はもとより、 窯体部分の検出も念頭において発掘調査を開始した。このため狭山池東堤コンクリート擁壁の除去と 堤体盛土の掘削を行い、窯体の遺存が想定される中位段丘崖の検出を試みた。堤体盛土をバックホー で掘削したが、盛土は東側の宅地部分にまで及んでおり、中位段丘崖を検出することはできなかった。 灰原から遠くない箇所に窯の構築が可能な段丘崖があり、そこに窯体が遺存する可能性はきわめて高 いと想定されるが、住宅などが存在しており、窯体の検出は断念することとなった。また当初の予想 よりも東側に中位段丘崖が位置することは、後述する狭山池東岸の微地形の状況から納得できる。以 上の通り、窯体部分の検出は果たせなかったので、調査の目的を灰原の全容を把握することに限定し た。

## 2 遺構と層序

#### ①層 序

3号窯灰原は、2号窯灰原に南接して存在し、狭山池東岸に所在する狭山遊園とその北側にある住宅地との境界の西側にあたる。3号窯灰原の北端の一部は2号窯灰原によって間層を介して被覆される。3号窯灰原は堤体盛土最下層の直下で、堤体西端から約2m東方の地点よりその堆積がみられる。堤体付近では一部露出する箇所が認められるほど浅いところに灰原が遺存するが、池の堆積物と思われる褐色砂質土・青灰色シルト等がみられる箇所では、最深部で地表面から約80cmの深さのところ

に遺存する。調査区内における灰原上面の標高は 76.75 m~78.0m を測る。

灰原を最も細かく分層する場合、作業者が運搬した1 回分の炭灰を最小単位として検出することが理論的には 可能である。しかし、これを断面のみでなく平面および 立体的に検出する作業は現実的にはきわめて困難である。 今回の調査では、土質の似通った最小単位の灰土層を一 括する層をもって1層の灰原とみなした。

3号窯灰原は大別して上下2層に明瞭に分層される。 上層は暗灰橙色の灰土層で、最も厚い箇所で約20cmを



写真83 狭山池3号窯灰原断面

測る。これを上層灰原と呼称する。下層は黒色の灰土層で、最も厚い箇所で約 40cm の堆積がみられる。これを下層灰原と呼称する。なお、土層断面における灰原の西端は掘り込みによってカットされている。この掘り込みの埋土は近世末期以降の遺物を包含する。なお、下層灰原は地山面に堆積しているのではなく、段丘崖上部より流入したと考えられる灰青色砂質土・淡黄色砂質土の上面に堆積している。® この崩土層の厚さは堤体直下で約 1m、灰原西端直下で約 60cm を測る。

この崩土層を削除すると地山面があらわれる。この層が中位段丘礫層である。中位段丘礫層は、堤体直下および灰原西端直下において約1.2mの厚さを有するが、調査区の西側に設定した試掘溝では確認できないことから、調査区東端より西へ約15mの地点で中位段丘礫層は消滅しているものと思われる。

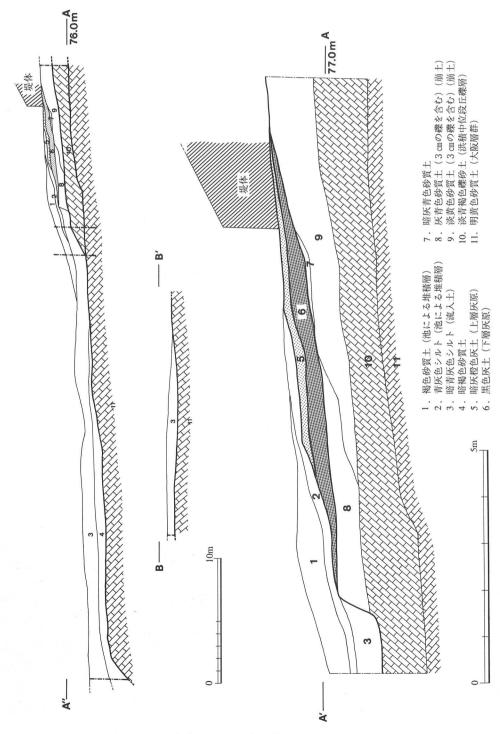


図 203 狭山池 3 号窯灰原土層断面図 (S=1/300·1/80)

さらに、この中位段丘礫層の直下には、極めて堅い明黄色砂質土層が確認された。この層の上面は緩やかに西方へ下っていき、調査区東端で標高 76.0m を測り、調査区東端から 49m 地点で標高 72.0m を測る。49m 地点に傾斜変換点があり、きつい傾斜でさらに西方へ落ち込む。なお、西側試掘溝内において、明黄色砂質土層上面にみられる暗青灰色シルトおよび暗褐色砂質土は、水流や池による堆積土ではなく、何らかの作用によって流入した層であろう。この暗青灰色シルト層は、3号窯灰原をカットする落ち込み内の埋土と同層であり、近世末期以降の流入土である。

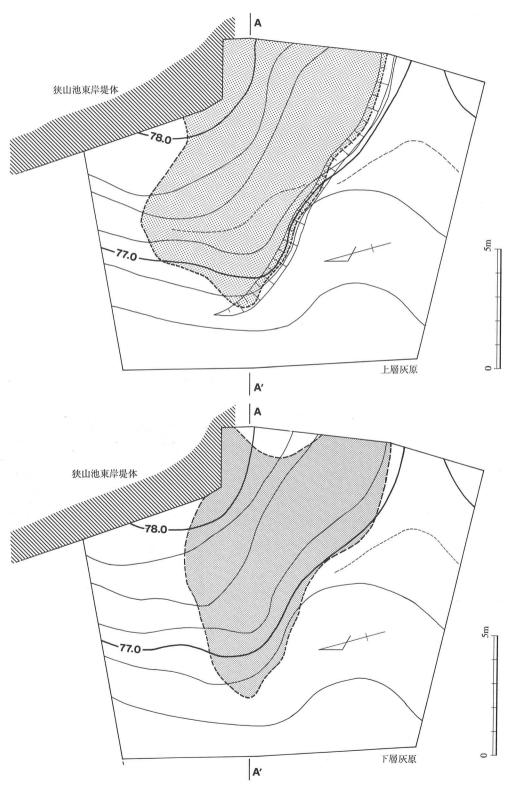


図 204 狭山池 3 号窯灰原平面図 (S=1/150)

### ②上層灰原

暗灰橙色灰土より形成される上層灰原は、東西約 10.5m、南北約 7m の東西方向に長い形状を呈しており、最も厚いところで約 20cm の堆積がみられた。しかし、厚さが約 20cm に達するのは中央部付近(横断土層図作成箇所より南北に幅 3m 程度)のみで、その他の箇所での厚さは 10cm 以下であった。

灰原南端から西端にかけての箇所は、後世の掘り込みによってカットされており、掘り込みの埋土中からは近世末期以降の陶器片等が検出された。3号窯のある狭山池東岸は狭山遊園と宅地の境界を中心に緩く東方へえぐれ込んでいるが、昭和初期の狭山池改修以前は、当該地は谷地形であったようで、東側と南側に斜面があり、現在よりもかなり奥まった地形であったようである(図207)。灰原をカットする掘り込みがこの谷地形の北端に相当するのであろうか。また、図207に記されているようなコンターラインであったならば、現在の東堤より西を掘削しても中位段丘崖に届くはずがなく、今回の調査で窯体を確認できないことも当然であろう。

上層灰原の上面では、狭山池 2 号窯側から続く南北方向のコンターラインが中央部付近で南東方向 へ向きを変えている。また、中央部南側でやや平坦な面が形成されている。

包含する須恵器は細片が多く、灰原の中央付近に集中する傾向が認められた。

### ③下層灰原

黒色灰土層からなる下層灰原は、東西約 11m、南北長は東側で約 7m を西側で 3~4m を測り、東西に長く西側でやや狭くなる形状を呈している。厚さは最大約 40cm であるが、堤体盛土直下および南側の調査区東端付近では厚さ 10cm もなく、やはり上層灰原と同様に、中央部付近が非常に厚く堆積している。灰原南端から西端にかけては、上面からの掘り込みによって削平を受けており、窯体操業時の灰原の端をおさえることはできない。

下層灰原の上面では、上層灰原上面でみられた南北方向のコンターラインが中央部付近で南東方向に向きを変える傾向がより強くみられる。これは、中央部付近における灰土の堆積が、南側のそれに

比して非常に厚いものであることによるためで、77.0m 付近のコンターラインは中央部付近で急角度に屈曲し ている。またこのことによって、中央部南側ではやや 平坦な面が形成されている。

下層灰原を掘削する過程において、本窯操業時の作業者が運搬・廃棄した1回分の炭灰に相当すると思われる灰土の集まりが、その上面および下面に橙色焼土を含むことにより、部分的ながらも確認できた。しかし、この単位を個別に検出する作業を灰原の全域にわたって行うことができなったため、このため、黒色灰土層を単一層と認識することとした。



写真 84 下層灰原遺物出土状況

包含する須恵器は、上層灰原では細片が多いのに比べて、完形もしくはそれに近い残存を示すものが多く、その出土量も上層灰原と比較して多い。先に述べた灰土塊がいくつか集まって土器溜まりのような出土状態をみせる箇所が、不明確ながらも中央部付近においてみることができた。

# ④灰原形成以前の遺構

下層灰原を完全に掘削すると、灰青色砂質土・淡黄色砂質土からなる土層の上面が現れる。この客 土層上面においては、傾斜面は南西に向いている。このため、コンターラインは南東方向へ走ってお り、調査区北端付近で緩やかに南北方向へ向かう。下層灰原と上層灰原の上面における中央部付近の コンターラインの張り出しは、傾斜面において土層断面 軸方向に沿って最も厚く堆積したことに起因するもので ある。

標高 77.0m~77.25m 付近は、中央より南側でやや平 坦な面を有するが、ここで径約 20cm、深さ 10cm~20 cm のピットを 5ヶ所を検出した。ピットの埋土はいず れも下層灰原の黒色灰土であり、これらのピットは灰原 が形成される以前の遺構であることが確認できた。遺構 に伴う遺物は確認できなかった。ピットは 3 つと 2 つが 斜面に沿って直線的に並んでいる。これらの遺構の上部



写真 85 灰原層以前のピット列

構造として、柵列のようなものを想定できるが、これが灰原形成直前に機能していたことを考えると 窯の操業に伴う何らかの施設であろう。

# 3 出土遺物

1990年・1991年の調査において、狭山池 3 号窯灰原から出土した須恵器の総量は、コンテナ約90箱に達した。本項には、実測が可能であった遺物をすべて掲載した。

以下、各灰原層ごとに出土した須恵器の概要を述べる。なお、各個別の遺物観察結果については表 20~22の遺物観察表を参照されたい。

①上層灰原出土遺物(図208・216~217、図版91、表20)

上層灰原中に包含されていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は20点である。図化 をおこなった器種別の個体数は次の通り。

杯 日 身 6 点・杯 日 蓋 4 点・提瓶 2 点・甕 8 点

杯 H 身の口径平均値は 11.8cm、杯 H 蓋の口径平均値は 13.5cm である。杯 H 身の法量は、図313のような数値分布を示している。

提瓶12は肩部に下方へ屈曲する一対の把手を付す。

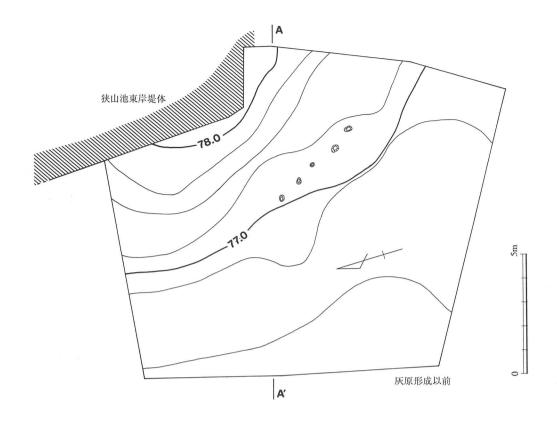
口頸部が大型の甕、121・122・123は頸部沈線の間に櫛描き斜行沈線文を施文する。口頸部が小型のもの116・117・118・119・120の頸部外面は無文である。

②下層灰原出土遺物(図208~212・217~226、図版89~99、表21)

下層灰原中に包含されていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は126点を数える。 図化をおこなった器種別の個体数は次の通り。

杯 H 身の口径平均値は 12.6cm、杯 H 蓋の口径平均値は 14.2cm である。杯 H 身の法量は、図313 のような数値分布を示している。口径は 11.0cm~14.0cm の範囲に、器高は 3.5cm~4.5cm の範囲に集中しているが、口径が 11.0cm 未満のものと 14.5cm 以上のものを含んでいる。上層灰原のそれがこの分布範囲を超えた数値を示す個体を含んでいないのと対照的である。杯 H 身のたちあがり高・たちあがり角度は、図315のような数値分布を示している。

長脚無蓋高杯は、47・58・59・60が脚部に2段2方向の長方形スカシを、48が脚部に2段3方向の 長方形スカシを有している。



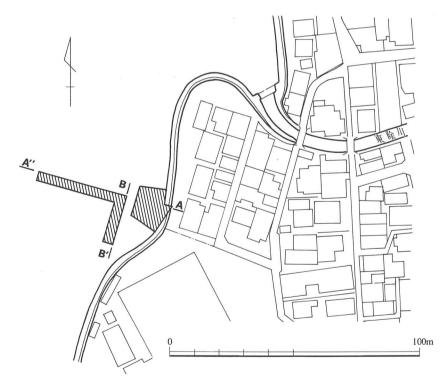


図 205 狭山池 3 号窯灰原形成前原地形図 (S=1/150) (上)

図 206 調査区位置図 (S=1/1500) (下)

短頸壺は50・51・63の 体部最大径は13.6cm と 小ぶりで、53・54・64・ 65の体部最大径は17.2 cm~21.0cm とやや大 きい。

広口壺55は頸部外面に カキ目調整を施し、66は 肩部と体部外面にカキ目 調整を施している。

提瓶は、肩部が遺存している67・69・72には、下方に屈曲する左右一対の把手が付されている。

口頸部が大型の甕、 125・144・145・146・ 149・150・151は頸部沈 線の間に櫛描き斜行沈線 文を施文する。口頸部が 小型のもの126・127・

128 · 129 · 130 · 131 ·

132 · 133 · 134 · 135 ·

136 · 137 · 141 · 142 ·

143 · 147 · 148 · 152 ·

153 · 154 · 155 · 157 ·

158・159・161・162の頸

部外面は無文である。

138は頸部外面に 2条の

鈍い沈線をめぐらす。

156は頸部外面に櫛描き

斜行沈線文を施文する。 口頸部が直口の139・140 狭 Ш 池 池・水路 低湿地 400m

図 207 狭山池東岸の旧地形(昭和改修以前) (「狭山池法下耕地整理地区及ビ之ニ隣接スル土地現形幷予定図」等を参照)

の頸部外面は無文である。大甕160は頸部外面の沈線の間に櫛描き斜行沈線文を施文する。

③灰原トレンチ内出土遺物(図213~215・227~229、図版94~95、表22)

下層灰原中に包含されていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は58点を数える。図 化をおこなった器種別の個体数は次の通り。

杯 H 身13点・杯 H 蓋14点・短脚高杯(脚部のみ) 2点・長脚高杯(脚部のみ) 1点・長脚無蓋高杯 1点・有蓋高杯 1点・短頸壺 2点・壺 3点・提瓶 1点・提瓶(口頸部のみ) 2点・甕17点・器台 1点 杯 H 身の口径平均値は 12.6cm、杯 H 蓋の口径平均値は 13.6cm である。

長脚無蓋高杯106は、2段1方向の長方形スカシを有している。

短頸壺は104の体部最大径は15.3cm、114の体部最大径は23.5cmを測る。

提瓶105には、下方に屈曲する左右一対の把手が付されている。

口頸部が大型の甕178は頸部沈線の間に櫛描き斜行沈線文を施文する。口頸部が小型のもの110・127・128・129・130・131・132・133・134・135・136・137・141・142・143・147・148・152・153・163・164・165・166・167・168・169・170・171・172・173・174・175・176・177の頸部外面は無文である。

### 4 小 結

狭山池 3 号窯上層灰原から出土した須恵器は細片のものが多く、その総量も下層灰原の出土量の 3 分の 1 程度にとどまる。これは下層灰原が黒色灰土から成るのに対して、上層灰原は暗灰橙色灰土で形成されており、上層灰原は炭灰層というよりも、むしろ焼土混じりの灰土層と表現するほうが的確であるということと関係している。下層灰原は窯体で焼成を行った後に搔き出した純粋な炭灰層で、上層灰原は床面の還元層の下、および壁面の還元層の外側にみられる酸化層をも含んで形成されたものであると思われる。上層灰原は、窯体から炭灰等の廃棄物を除去した後の床・壁の補修を予想した清掃、もしくは窯の廃絶後の破壊によって形成された層であるために、下層灰原とはまったく異なった堆積および遺物の残存状態を示しているのである。

第3章で述べているように、狭山池3号窯の杯身の法量はおおむねTK43集中域の範囲内におさまる数値を示しているが、たちあがりの角度がTK43号窯のそれよりも内傾気味である。よって、本窯で生産された須恵器はTK43型式~TK209型式の範疇に含まれるものと考えられよう。

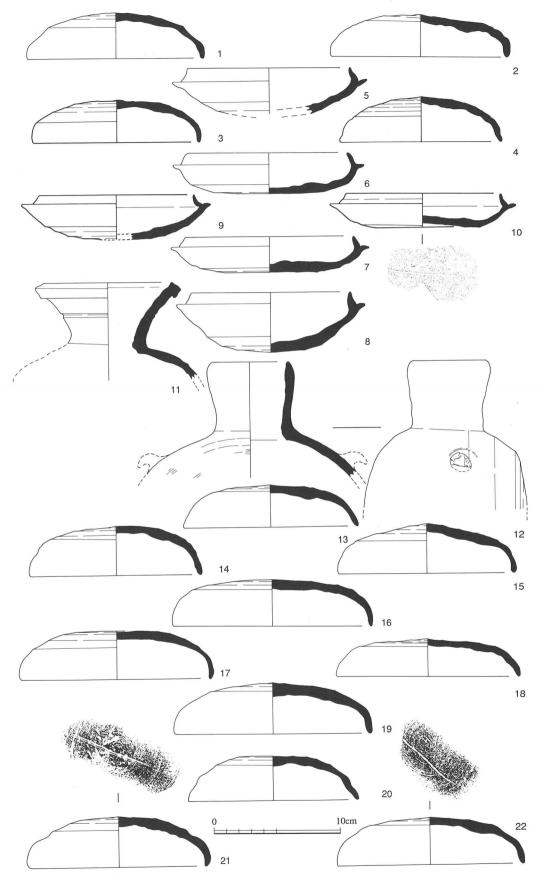


図 208 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (1) (1~12:上層灰原、15~22:下層灰原)

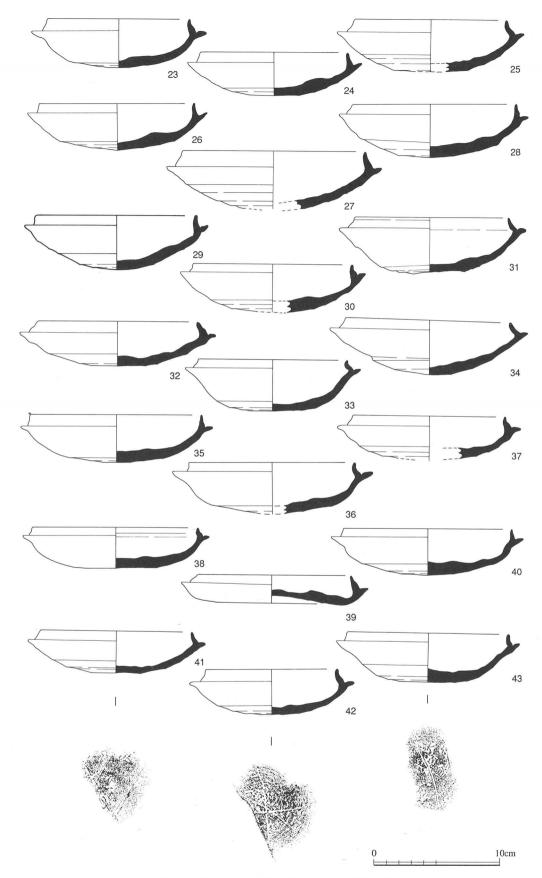


図 209 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (2) (下層灰原)

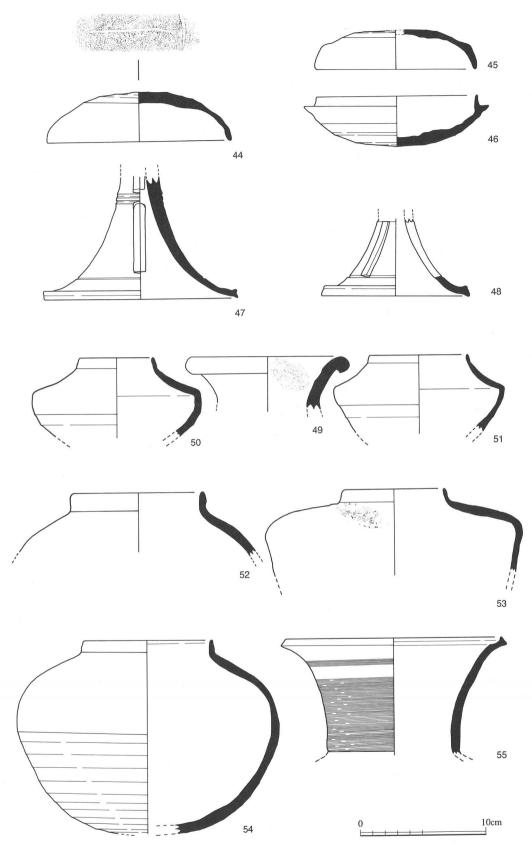


図 210 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (3) (下層灰原)

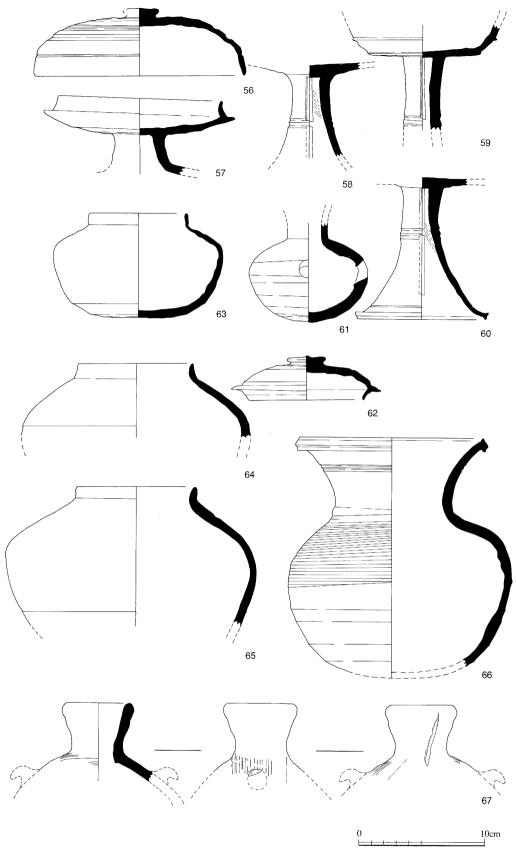


図 211 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 ⑷ (下層灰原)

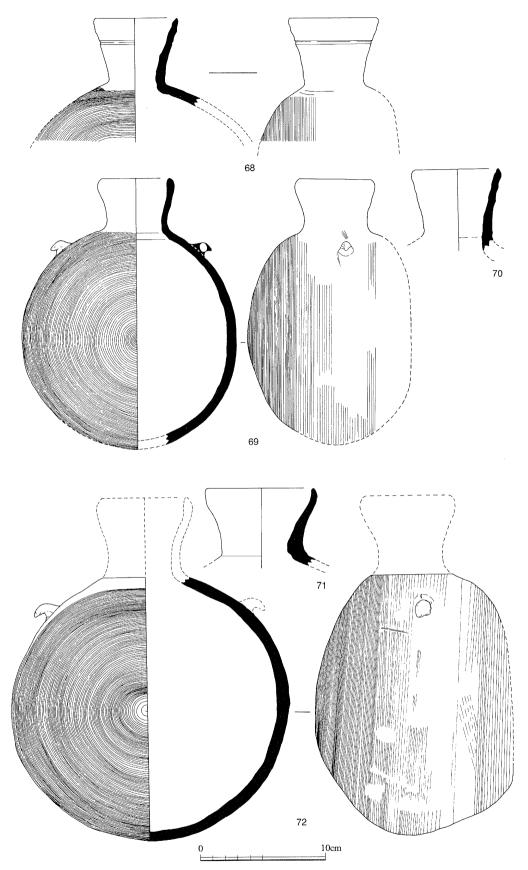


図 212 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (5) (下層灰原)

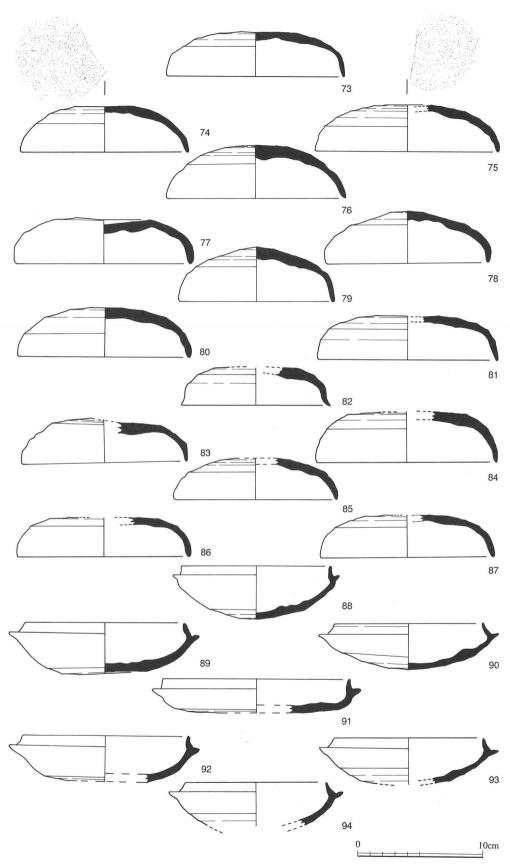


図 213 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (6) (トレンチ内)

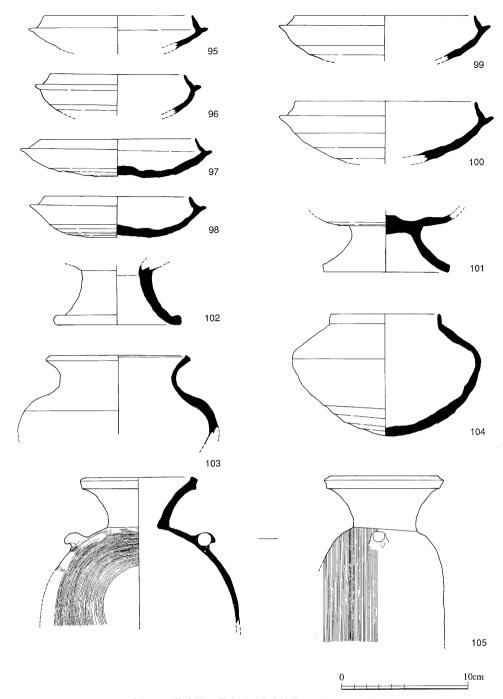


図 214 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (7) (トレンチ内)

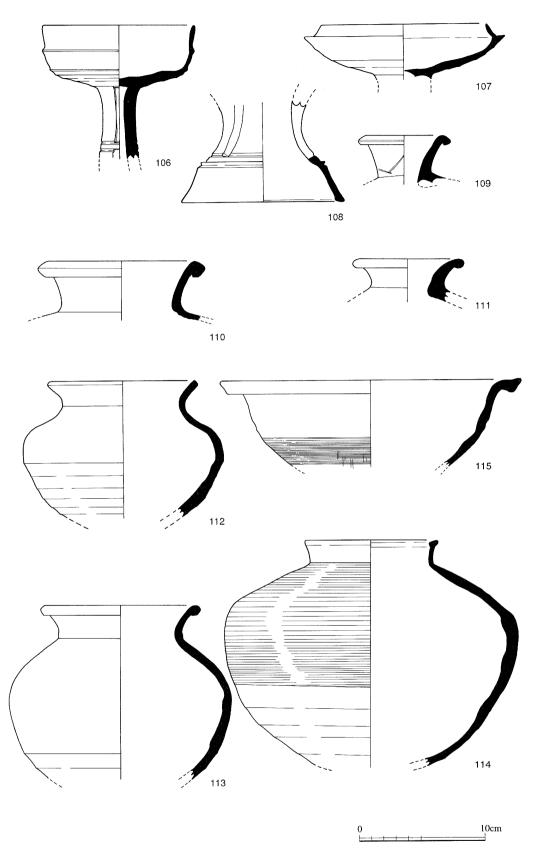


図 215 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (8) (トレンチ内)

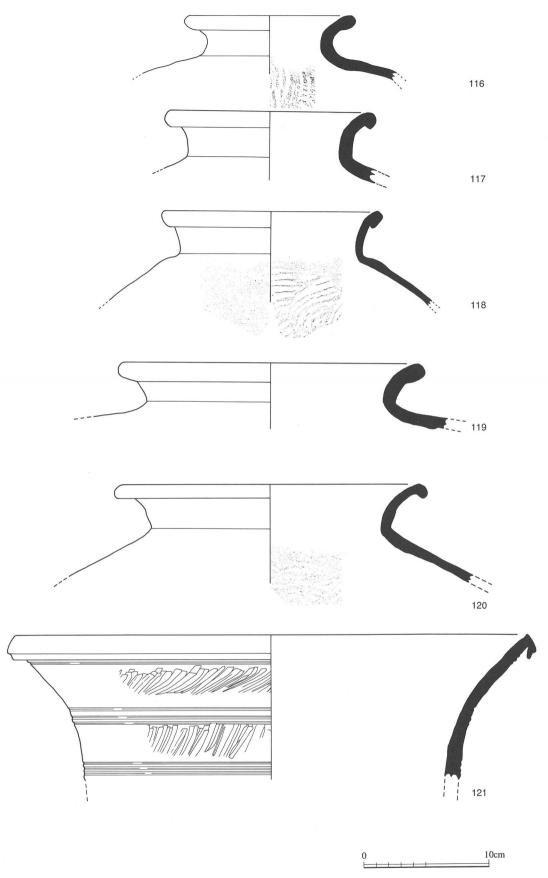


図 216 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (9) (上層灰原)

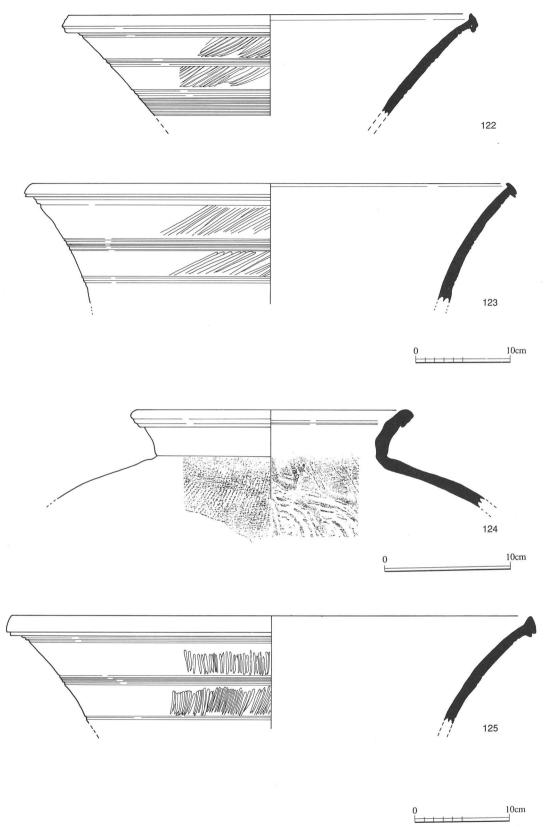


図 217 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (10) (122~123:上層灰原、124:表面採集、125:下層灰原)

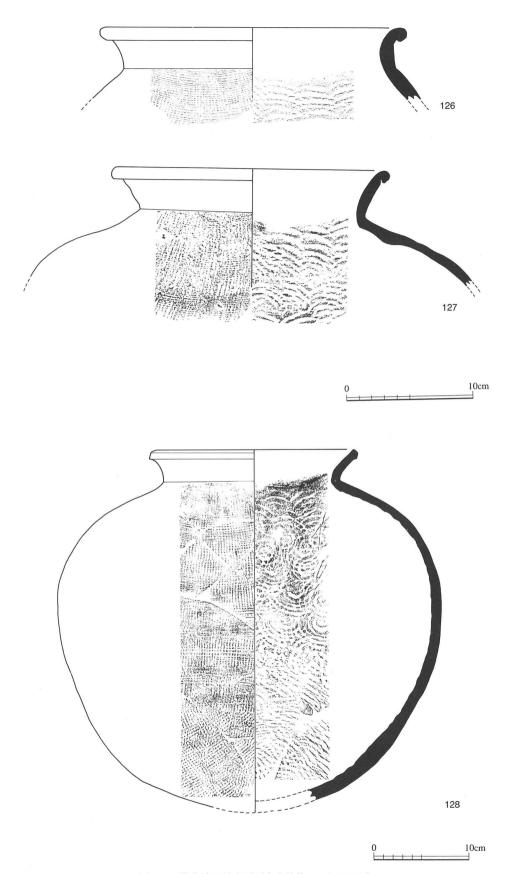


図 218 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (11) (下層灰原)

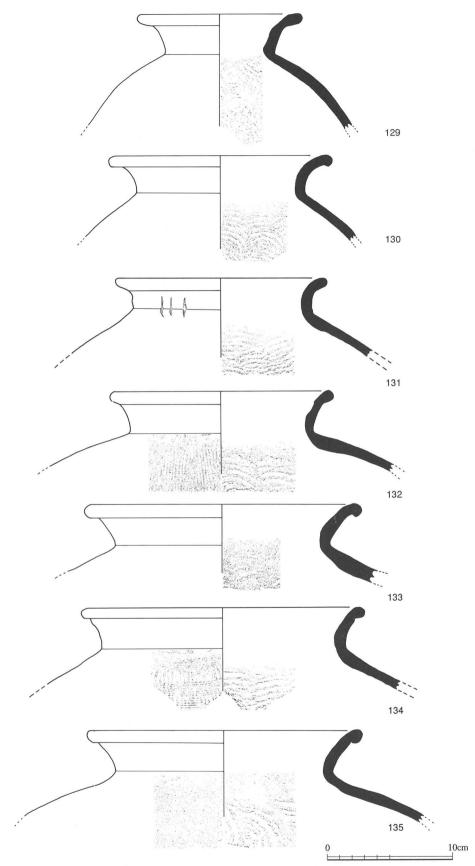


図 219 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (12) (下層灰原)

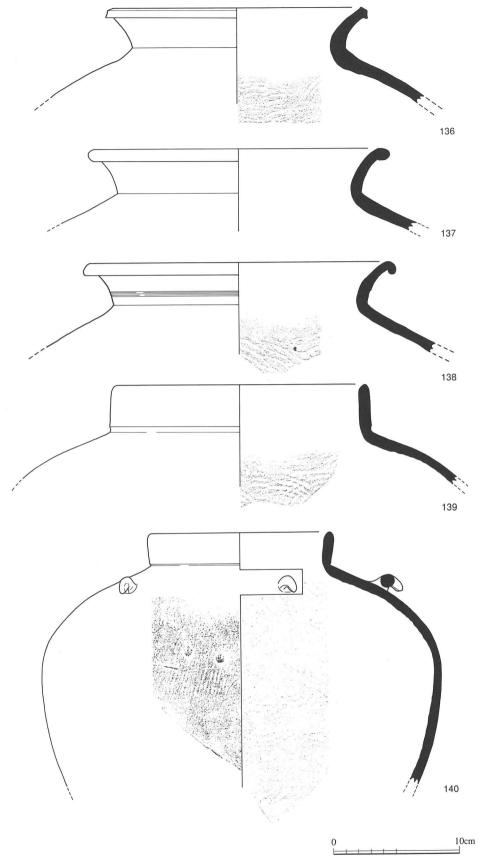


図 220 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (13) (下層灰原)

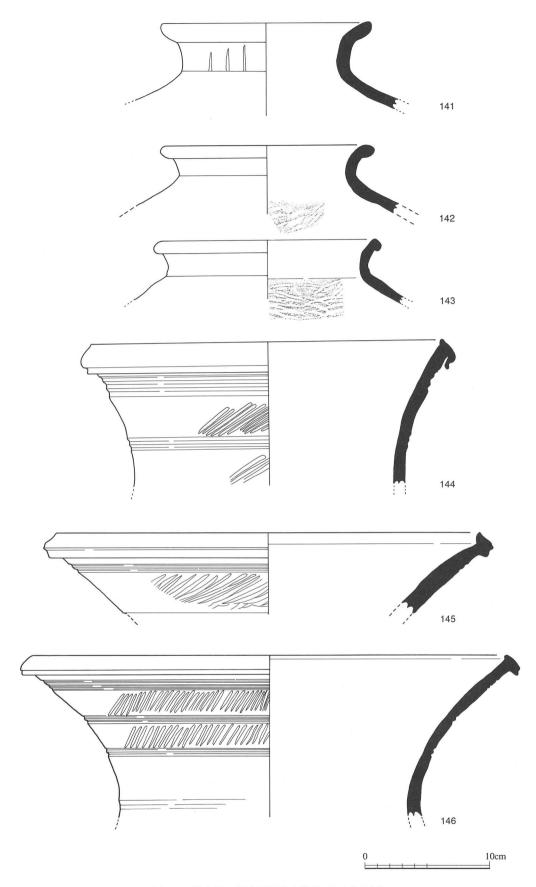


図 221 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (14)(下層灰原)

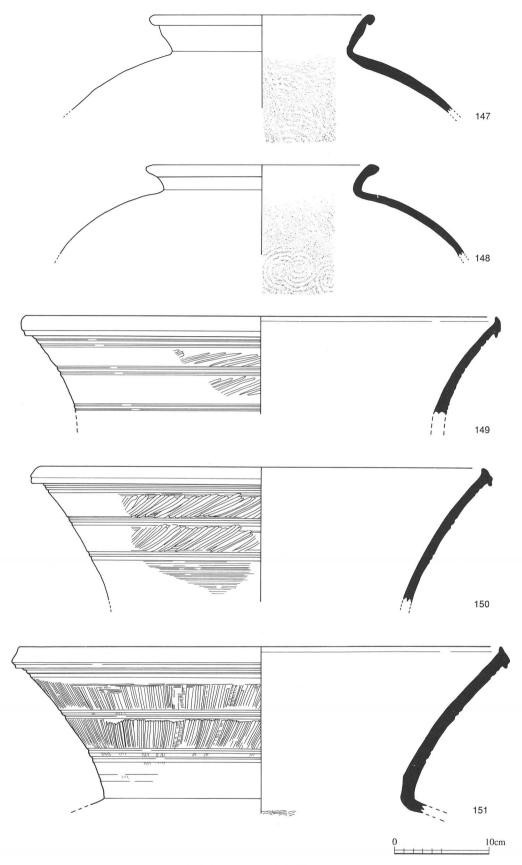


図 222 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (15) (下層灰原)

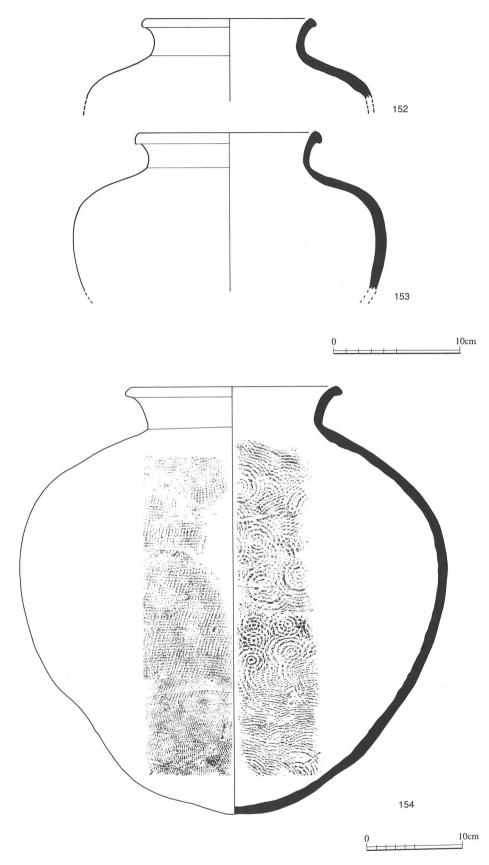


図 223 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (16) (下層灰原)

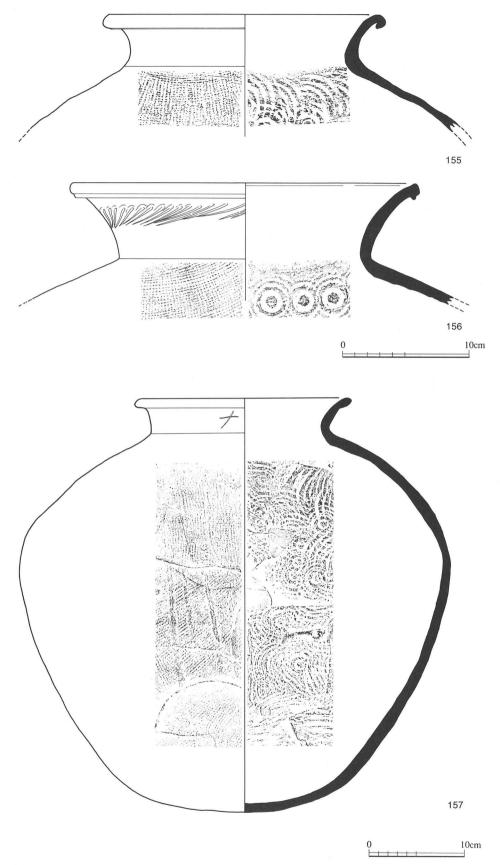


図 224 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (17)(下層灰原)

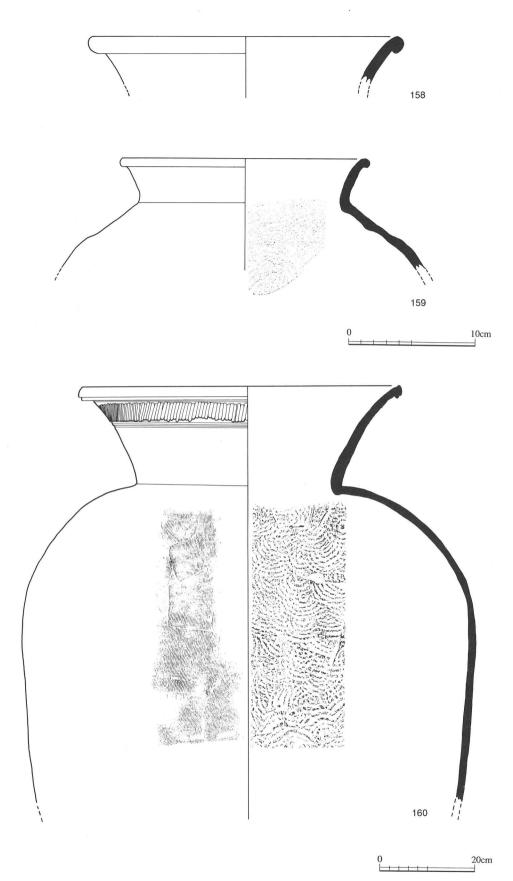
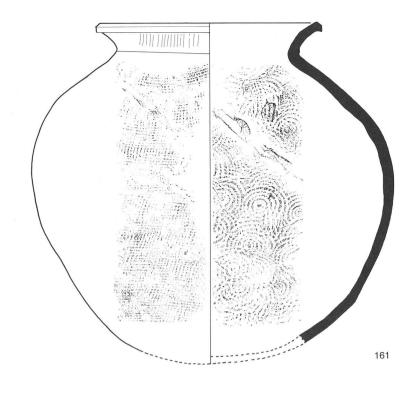


図 225 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (18) (下層灰原)



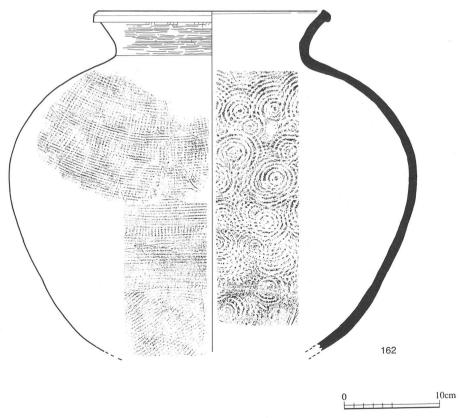


図 226 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (19) (下層灰原)

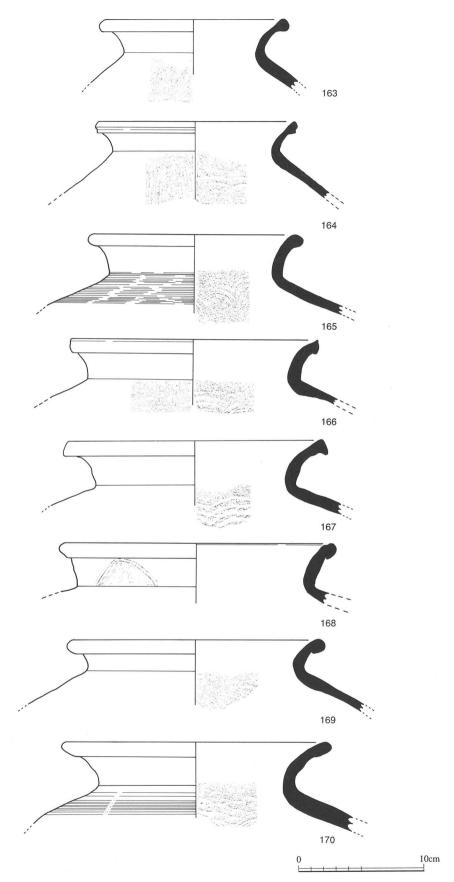


図 227 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 200 (トレンチ内)

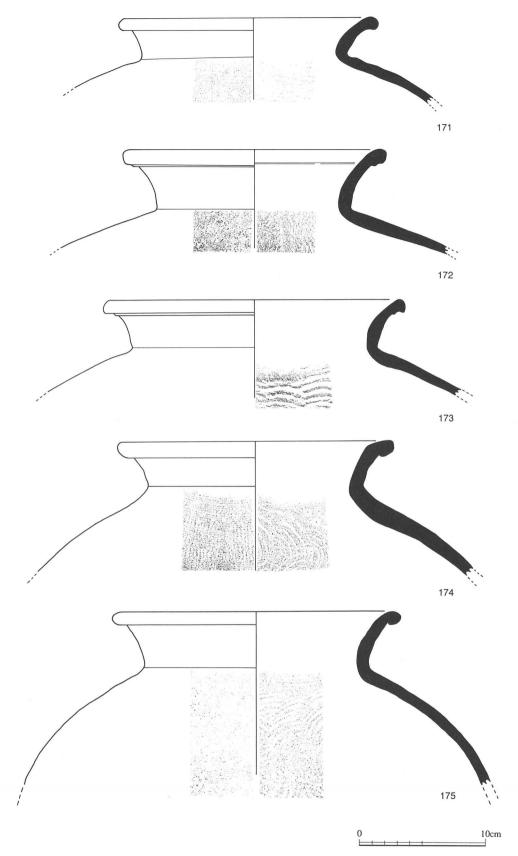
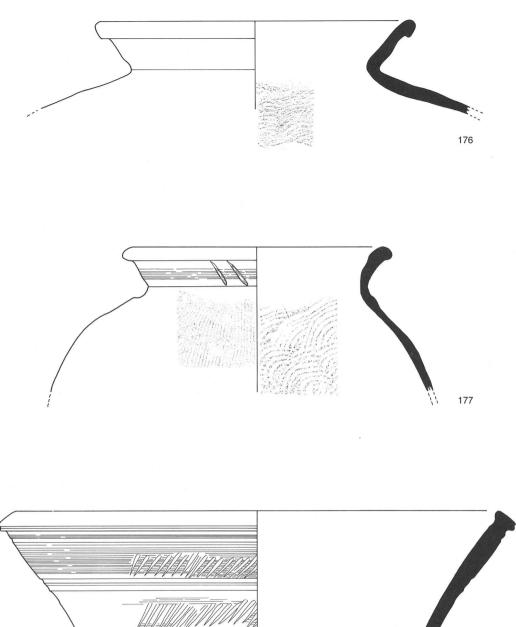


図 228 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 (21) (トレンチ内)



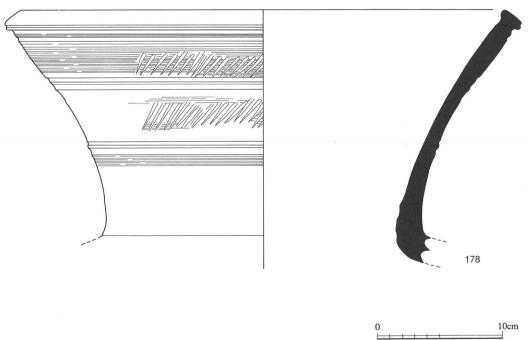


図 229 狭山池 3 号窯灰原出土遺物 22 (トレンチ内)

20	[छा क्रम		表 20 狭山池 3 号窯上層 ————————————————————————————————————		(T はたちあがりを示す)
器種	図面 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋 —	208- 1 91- 1	口径13.9 器高3.9	体部は下外方に下り、口縁部はやや 内彎して下方に下る。端部は丸くお さめる。天井部はやや低くやや丸 い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/6回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 青灰色、外一灰色。胎土:密。 3mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存:1/2。反転復元。
杯蓋	91- 2		体部は外下方に下り、口縁部は垂直 に下る。端部は丸くおさめる。天井 部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/4回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 明青灰色、外一灰色。胎土:密。 3mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存:2/3。
杯蓋	208- 3	口径13.2 残存高3.5	体部は下外方に下り、口縁部は垂直 に下る。端部は丸くおさめる。天井 部は低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色。外一淡灰色。胎土:密。 1~2mmの長石を多く含む。1mm の石英を含む。焼成:良好。残存: 1/2。一部反転復元。
杯蓋	208- 4	口径12.8 器高3.6	体部は下外方に下り、口縁部でやや 外反する。端部は丸くおさめる。天 井部はやや低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。
杯身	208- 5 91- 5	口径13.0 受部径15.4 残存高3.7 T高1.1 T角度32°00′	たちあがりは内傾したのち、端部付 近でほぼ直立する。端部は丸くおさ める。受部は外上方にのび端部はや や鋭い。底体部はやや深い。底部一 部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 内一 灰色、外一暗灰色。胎土: 密。 3mm 以下の長石を多く含む。焼成:良好。残存: 3/4。一部反転 復元。
杯身	208- 6	口径12.2 受部径15.3 器高3.4 T高1.0 T角度35°15′	たちあがりは内傾したのち端部付近で上内方にのびる。端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面9/10回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 灰色、外一灰褐色。胎土:密。焼成:良好。残存:1/2。一部反転 復元。
杯身	208- 7	口径13.4 受部15.8 器高2.9 T高0.8 T角度31°30′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は水平にのび、 端部はやや丸くおさめる。底体部は 浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内- 灰青色、外一灰色。胎土:密。2mm 以下の長石を若干含む。焼成:良 好。残存:1/2。反転復元。
杯身	208- 8	口径12.6 受部径15.0 器高4.9 T高1.0 T角度28°00′	たちあがりは内傾したのち中位では ば直立する。端部はやや丸くおさめ る。端部はやや外上方にのび、端部 は丸くおさめる。底体部は深く、底 部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面4/5回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内- 灰青色、外一暗灰青色。胎土: 密。3mm 以下の長石を若干含 む。焼成: 良好。残存: 2/3。一部 反転復元。
杯身	208- 9	口径12.4 受部径15.2 残存高3.5 T高0.8 T角度43°00′	たちあがりは内傾したのち低位でやや上方にのび端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 たちあがり基部内面で 段を成す。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。1~3mm の長石を多 く含む。焼成:良好。残存: 1/4。 反転復元。外面一部灰かぶり。
杯身	208- 10	口径12.4 受部径14.5 器高2.7 T高1.0 T角度31°00′	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのびる。端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くお さめる。たちあがり基部内面でやや あまい段を成す。底体部は浅く、底 部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐色。胎土:密。1~4mm の長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/4。合成復元。ヘラ記号:底部外面に「一」あり。外面一部灰かぶり。
提瓶	208- 11	口径7.2 基部径6.3 残存高8.0	口頸部は外反しながら上外方へ開き、口縁部下で下外方にややのび、口縁部は上外方にのびたのも内傾し、端部は丸くおさめ、内面にあまい段を成す。肩部・体部・底部欠損。口頸部1/2下方に鈍い1条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。背面 側側面カキ目調整。背面回転へ ラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰青色、外一暗灰色。胎土:密。 3mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:口頸部完形。
提瓶	208- 12	口径6.0 基部径6.2 残存高12.1	口頸部はやや外反しながらやや上外 方にのび、口縁部はやや内彎して上 方にのび、端部は丸くおさめる。肩 部一部・体部一部・底部前面、同側 面、背面一部欠損。肩部に左右一対 の把手を付すが欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 ・体部前面同側面カキ目調整。 背面背面側側面開転ヘラ削り調 整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一暗灰色。胎土:密。 1mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存:1/4。一部反転復元。 全面自然釉付着。
甕	216-116	口径12.8 基部径11.1 残存高4.7	口頸部は外彎して上外方にのび、口 緑部は内彎して外上方にのびたのち 上内方にのび、口縁部内面に至る。 肩部は外下方に張り出す。肩部下半 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面青海波タ タキ。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。 別 存:口頸部の1/2以下。合成復元。 外面・口頸部内面に自然釉付着。
难区	216-117	口径16.0 基部径13.2 残存高4.7	口頸部はやや上外方にのびたのち外上方にのび、口縁部下で外下方にのび、口縁部下で外下方にのびたのち内彎して上外方にのび、端部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:明灰 色胎土:密。3mm以下の長石を 若干含む。焼成:良好。残存:口 頸部の1/4。反転復元。色調:暗 灰色。胎土:密。3mm以下の長 石を若干含む。焼成:良好。好 存:口頸部の1/8。反転復元。肩 部内面に自然釉付着。

甕	216-118	口径16.9 基部径14.7 残存高7.3	口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部下でやや下外方にのびた のち上外方にのび、上内方にのび、 口縁部内面に至る。肩部は外下方に 下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:暗灰色。胎土:密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成:良 好。残存:口頸部の1/8。反転復 元。肩部内面に自然釉付着。
魙	216-119	口径23.4 基部径19.8 残存高5.3	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部は外上方にのびたのも内彎して 上外方にのび、内上方にのび、口縁 部内面に至る。肩部は外下方に張り 出す。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:内一口頸部は灰白色、肩部は灰褐色、外一灰白色。胎土: 密。1~3mm の長石を含む。焼成:やや良。残存:口頸部1/6。 反転復元。口頸部内面に自然釉付着。
甕	216-120	口径23.6 基部径19.2 残存高7.9	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下でやや外下方にのびたのち上 外方にのび、上方にのび、内上方に のび、口縁部内面に至る。肩部は外 下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面青海波タ タキ。他は回転ナデ調整。	色調:内一暗灰色、外一淡灰色。 胎土:密。1mm の長石を若干含 む。焼成:良好。残存:口頸部の 1/4。反転復元。内外面に自然釉 付着。
選	216-121	口径41.2 残存高11.7	口頸部下方1/3以下欠損。口頸部は 外彎して上外方にのび、口縁部下で 下内方にのびたのち上外方にのび、 あまい段を成したのちやや内彎して 上内方にのびる。端部は丸くおさめ る。口縁部直下に2条、頸部上方 1/3に3条、頸部下方1/3に3条の 沈線をめぐらし、上方1/3の沈線の 上下に櫛描き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:内一淡灰色、外一灰色。胎 土:密。1mm の長石を若干含む。 焼成:良好。残存:口頸部の1/5。 反転復元。一部灰かぶり。
斑	217-122	口径42.4 残存高10.8	口頸部基部付近欠損。口頸部はやや外彎して外上方にのび、口縁部下で下外方にのびたのち上外方にのび、あまい段を成したのち上内方にのび、さらに内傾して上内方にのびる。端部は丸くおさめる。口縁部内面にあまい段を成す。口縁部部に2条の沈線をめぐらし、頸部上方1/3の位置に2条のやや鈍い沈線をめぐす。上方1/3の沈線の上下に櫛描き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面下方1/3以下カキ目調整。 他は回転ナデ調整。	色調:淡灰色。胎土:密。2mm の長石を若干含む。焼成:良好。 残存:口頸部の1/9。反転復元。 内外面一部灰かぶり。
獲	217-123	口径52.0 残存高12.8	口頸部下方1/3以下欠損。口頸部は 外彎して上外方にのび、口縁部下で 外下方にのびたのち段を成し、内彎 してやや内上方にのびる。端部は丸 くおさめる。口縁部内面に段を成 す。口縁部直下に2条の鈍い沈線を めぐらし、頸部上方1/3に3条の沈 線をめぐらし、頸部下方1/3に2条 の鈍い沈線をめぐらす。上方1/3の 沈線の上下に櫛描き斜行沈線文を有 する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:内一暗灰色、外一明灰肯色。胎土:密。2mm の長石を若干含む。焼成:良好。残存:口頸部1/5以下。反転復元。

### 表 21 狭山池 3 号窯下層灰原出土遺物観察表

**(T はたちあがりを示す)** 

				(1 はたらめかりを小り)	
器種	図面 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手 法 の 特 徴	備考
杯蓋	208- 13	口径13.8 器高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平ら に近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗青灰色、外一灰色。胎土:密。 3mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:1/2。一部反転 復元。
杯蓋	208- 14 91- 14	口径13.5 器高4.1	体部は下外方に下り、口縁部はやや 内彎して下外方に下る。端部はやや 丸くおさめる。天井部はやや高くや や丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 内一 青灰色、外一灰色。 胎土: 密。 3mm 以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存: 2/3。
杯蓋	208- 15	口径13.9 器高4.1	体部は下外方に下り、口縁部は下方 に下る。端部は丸くおさめる。天井 部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/6回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 内一 灰色、外一暗灰色。 胎土: 密。 4mm 以下の長石を若干含む。焼 成: 良好。 残存: 1/2。 反転復 元。
杯蓋	208- 16	口径15.8 器高3.8	体部は下外方に下り、口縁部はほぼ 垂直に下る。端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/6回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 青灰色、外一灰色。 胎土:密。 3mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:1/2。 反転復元。
杯蓋	208- 17	口径15.0 器高3.9	体部・口縁部は内彎して下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面9/10回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 灰紫色、外一淡灰色。胎土:密。 3mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:2/3。一部反転 復元。

杯蓋	208- 1		口径14.1 器高3.2	体部は下外方に下り、口縁部はやや 下方に下る。端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面6/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 淡灰色、外一紫灰色。胎士:密。焼 成:良。残存:2/3。一部反転復元。
杯蓋	208- 1		口径15.4 器高4.2	体部は下外方に下り、口縁部は下方 に下る。端部は丸くおさめる。天井 部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:淡黄 色。胎土:密。焼成:不良。残存: 1/2。反転復元。
杯蓋	208- 2		口径13.4 器高3.7	体部は外反して下外方に下り、口縁 部は下外方に下る。端部は丸くおさ める。 天井部はやや低く平らに近 い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/4回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。残存: 2/3。 反転復元。
杯蓋	208- 2	-	口径14.1 器高4.2	体部・口縁部は内彎して下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/4回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 橙色。 胎土: 密。4mm 以下の長石を若 干含む。焼成: 不良。残存: 2/3。 反転復元。ヘラ記号: 天井部外面 に「-」あり。
杯蓋	208- 2		口径14.2 器高3.9	体部は下外方に下り、口縁部は下方 に下る。端部は丸くおさめる。天井 部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 淡灰色、外一灰色。胎土:密。焼 成:良好。残存:2/3。反転復元。 ヘラ記号:天井部外面に「一」あ り。
杯身	209- 2		口径11.3 受部径13.9 器高4.0 T高1.0 T角度28°45′	たちあがりは内傾したのち端部付近 で直立する。端部はやや丸くおさめ る。受部はほぼ水平にのび、端部は 丸くおさめる。底体部はやや深く、 底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/9回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰褐色、外一暗青灰色。胎土: 密。2mm 以下の長石を若干含 む。焼成:良好。残存:2/3。反 転復元。
杯身	209- 2		口径11.8 受部径13.9 器高3.6 T高0.9 T角度32°00′	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのびる。端部はやや丸くおさめ る。受部は外上方にのび、端部はや や丸くおさめる。底体部はやや浅 く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。 胎土:密。3mm 以下の長石を多 く含む。焼成: 良好。残存: 1/2。 反転復元。
杯身	209- 2		口径12.0 受部径14.8 残存高4.2 T高1.0 T角度32°00′	たちあがりは内傾したのち中位で上方にのびる。端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 になさめる。底体部はやや深く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面9/10回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 黄色。胎土:密。焼成:不良。残 存:1/2。反転復元。
杯身	209- 2		口径11.2 受部径14.3 残存高3.9 T 高0.8 T 角度21°45′	たちあがりは上方にのびたのち端部 付近で直立する。端部はやや鋭い。 受部はやや外上方にのび、端部はや や鋭い。底体部はやや浅く、底部は やや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 灰色、外一淡灰色。胎土:密。 3mm以下の長石を多く含む。焼 成:良好。残存:1/2。反転復元。
杯身	209- 2		口径14.8 受部径17.6 存高4.7 T高1.4 T角度26°30′	たちあがりは内傾したのち端部付近 でほぼ直立する。端部はやや丸くお さめる。受部はやや外上方にのび、 端部は丸くおさめる。底体部はやや 深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 黄色。胎土:密。3mm 以下の長 石をわずかに含む。焼成:不良。 残存:1/6。反転復元。
 杯 身	209- 2		口径13.4 受部径15.5 器高4.3 T高0.9 T角度17°45′	たちあがりは内傾したのち端部付近 でほぼ直立する。端部はやや丸くお さめる。受部はやや外上方にのび、 端部はやや鋭い。底体部はやや浅 く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面6/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡橙 色。胎土:密。4mm 以下の長石 を若干含む。焼成:不良。残存: 9/10。
杯身	209- 2 91- 2	9	口径13.3 受部径15.1 器高4.5 T高0.8 T角度14°45′	たちあがりは内傾したのち中位で直立する。端部はやや丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部はやや丸 くおさめる。底体部はやや深く、底 部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:ほぼ完形。
杯身	209- 3	30	口径12.7 受部径14.8 器高4.0 T高0.7 T角度25°45′	たちあがりは内傾したのち中位で直 立する。端部は丸くおさめる。受部 はやや外上方にのび、端部は丸くお さめる。底体部はやや浅く、底部は やや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:青灰 色。胎土:密。 焼成:良好。 残 存:1/2。 反転復元。
杯身	209- 3 91- 3	- 1	口径12.5 受部径15.3 存高4.5 T高1.0 T角度36°00′	たちあがりは内傾したのち端部付近でやや上方にのびる。端部はやや丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面4/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一灰青色。胎土:密。 3mm 以下の長石を多く含む。焼 成:良好。残存:3/4。一部反転 復元。
杯 身	1		口径12.1 受部径15.6 高3.7 T高1.0 T角度39°30′	たちあがりは内傾したのち中位で上 内方にのびる。端部は丸くおさめ る。受部は水平にのび、端部は丸く おさめる。底体部は浅く、底部は平 らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/4回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一暗橙灰色。胎土:密。 3mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:1/3。反転復元。
杯身	1	- 1	口径12.0 受部径14.0 高4.2 T高0.7 T角度35°00′	たちあがりは内傾したのち端部付近 で直立する。端部はやや鋭い。受部 は外上方にのび、端部はやや丸くお さめる。底体部は深く、底部はほぼ 平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/4回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一淡灰褐色。胎土:密。 3mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:ほぼ完形。

			-		
杯身	209- 34	口径13.2 受部径15.8 高4.5 T高0.9 T角度45°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部はほぼ水平にの び、端部は丸くおさめる。底体部は やや深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 青灰色。胎土: 密。5mm 以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。
杯身	209- 35 91- 35	口径13.6 受部径15.2 高3.9 T高1.0 T角度14°00′	たちあがりは上方にのびたのち中位 で直立する。端部はやや鋭い。受部 はやや外上方にのび、端部はやや丸 くおさめる。底体部はやや浅く、底 部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/8回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗灰色、外一灰色。胎土:密。焼 成:良好。残存:1/2。反転復元。
杯身	209- 36	口径13.3 受部径16.0 残存高4.2 T高0.8 T角度29°00′	たちあがりは内傾したのち端部付近 で直立する。端部はやや丸くおさめ る。受部は外上方にのび、端部は丸 くおさめる。底体部はやや浅く、底 部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 明灰黄色、外一淡灰黄色。胎土: 密。焼成:不良。残存:1/2。反 転復元。
杯身	209- 37	口径12.1 受部径14.5 高3.5 T高0.8 T角度30°45′	たちあがりは内傾したのち端部付近で直立する。端部はやや鋭い。 受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅い。底部一部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面9/10回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 灰褐色、外一青灰色。胎土:密。 焼成:やや良。残存:1/2。反転 復元。
杯身	209- 38	口径13.2 受部径14.8 器高3.4 T高0.7 T角度31°00′	たちあがりは内傾したのち中位で直立する。端部はやや丸くおさめる。 受部はやや外上方に短くのび、端部 は丸くおさめる。底体部は浅く、底 部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:青灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 2/3。一部反転復元。
杯身	209- 39 92- 39		たちあがりは内傾してのび、端部は やや鋭い。 受部はやや外上方にの び、端部はやや丸くおさめる。 底体 部は浅く平ら。 底部は焼け歪みが著 しい。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一暗青灰色。胎土:密。 2mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:3/4。
杯身	209- 40 92- 40	口径13.5	たちあがりは上方にのびたのち、端 部付近で直立する。端部はやや丸く おさめる。受部は外上方にのび、端 部はやや鋭い。底体部はやや浅く、 底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面6/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。 胎土: 密。3mm 以下の長石を若 干含む。焼成: 良好。残存: 2/3。 反転復元。
杯身		口径12.1 受部径13.7 器高3.5 T高0.8 T角度33°30′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや丸くおさめる。受部はほぼ水平 に短くのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面9/10回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。 胎土:密。焼成:良好。残存:1/2。 反転復元。ヘラ記号:底部外面に 「-」あり。
杯身	209- 42 92- 42		たちあがりは内傾したのち端部付近 で直立する。端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸 くおさめる。底体部はやや深く、底 部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/2。 反転復元。ヘラ記号: 底部外面に 「∀」あり。
杯身		口径12.8 受部径14.6 器高4.0 T高0.8 T角度23°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部はやや上外方に のび、端部はやや鋭い。底体部はや や深く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/2。 反転復元。 ヘラ記号: 底部外面に 「-」あり。
杯蓋	210- 44	口径14.8 器高4.0	体部は外下方に下り、口縁部は下外 方に下る。端部は丸くおさめる。天 井部はやや低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 褐色。胎土:密。2mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。残 存:5/7。一部反転復元。ヘラ記 号:天井部外面に「-」あり。
杯蓋	210- 45	口径12.8 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り端部は 丸くおさめる。天井部は低く平らに 近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。
杯身	210- 46	口径12.9 受部径14.8 器高4.1 T高0.9 T角度15°30′	たちあがりは内傾したのち低位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は 外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部はやや 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/4回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 明灰青色、外一淡灰色。胎土:密。 焼成:良好、堅緻。残存:1/2。 一部反転復元。
高杯	210- 47	脚底径15.6 残存高10.0	脚部上方1/2程度欠損。脚部は下方に下ったのち下外方に開いて下り、裾部で外下方にのびる。裾端部はやや内傾する凹面を成して接地する。中位に2条、裾部上方に1条の鈍い沈線をめぐらす。2段2方向に、上端が円い長方形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 脚部の1/6。反転復元。
高杯		脚底径11.8 残存高6.2	脚部上方1/2以上欠損。脚部は下外 方に開いて下り、裾部で外下方にの び、外方に短くのびる。裾端部は内 傾する平面を成して接地し、その上 端にあまい段を成す。裾部上方に1 条の沈線をめぐらす。2段3方向に 長方形スカシを有すると思われる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:脚部の2/5。一部反転復元。

壺	1	口径12.4 残存高4.3	口頸部下半以下欠損。口頸部はやや 外彎して上外方にのび、口縁部下で 下外方に下り、内彎しながら外上方 にのびて上内方にのび、口縁部内面 に至る。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎士:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 口頸部の3/5。ヘラ記号:頸部内 面に「\」あり。
短頸壺	210- 50	口径5.8 基部径6.4 体部最大径13.6 残存高6.3	口縁部は基部から内傾して上内方に のび、端部は丸くおさめる。肩部は 外彎して外下方に張り出し、体部は やや下内方に下り、底部は下内方に 下る。底部3/4下方欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面・体部外面1/2回転ヘラ削 り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm の長石を若干含 む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転 復元。内面・肩部外面灰かぶり。
短頸壺	210- 51	口径7.8 基部径8.4 体部最大径13.6 残存高5.2	口縁部は基部から内傾して上内方に のび、端部は丸くおさめる。肩部は 外彎して外下方に張り出し、体部・ 底部は下内方に下る。底部4/5下方 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面・体部外面1/2回転ヘラ削 り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰青色。胎土:密。1~3mm 程度の 長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/4以下。反転復元。
短頸壺	210- 52	口径10.3 基部径11.0 残存高4.8	口縁部は基部から直立し、端部は丸 くおさめる。肩部は外下方に緩く張 り出す。体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:明灰 青色。胎土:密。4mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。残存: 1/10。反転復元。
短頸壺	210- 53	口径8.0 基部径9.0 体部最大径20.8 残存高6.8	口縁部は基部から内傾して上内方に のび、端部は丸くおさめる。肩部は 外下方に強く張り出し、体部は下内 方に下る。体部一部・底部欠損。体 部最大径は上位に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。(肩部外面にナデ調整時の布か革の使用痕が認められる。)	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一口縁部・肩部は灰色、 肩部・体部は暗灰色。胎土:密。 Imm の長石を含む。チャートを 含む。焼成:良好。残存:1/8。 反転復元。ヘラ記号:肩部外面に 「、」あり。肩部外面に土器片熔 着。肩部~体部外面に自然釉付 着。肩部外面一部灰かぶり。
短頸壺	210- 54 89- 54		口縁部は基部から上方にのび端部は 丸くおさめる。肩部は外下方にやや 緩く張り出し、体部は下方に下り、 下内方に下る。底部は丸い。底部中 央欠損。体部最大径はやや上位に位 置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面・体部外面3/4回転ヘラ削 り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。1mm の長石を含む。 焼成: 良好。残存: 1/2。一部反 転復元。外面一部灰かぶり。
広口壺	1	口径17.2 基部径10.8 残存高9.4	口頸部は基部から上方にのびたのち、上外方にのび、口縁部下で外上方に開く。口縁部は内傾する。平面を成して上内方にのび、端部は丸くおさめ、内面にあまい段を成す。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整。他は回転ナデ 調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 灰色、外一暗灰色。胎土:密。 1mm の長石を含む。焼成:良 好。残存:口頸部2/3。一部反転 復元。内面一部灰かぶり。外面一 部自然釉付着。
高杯蓋	211- 56	口径16.8 つまみ径2.8 器高5.5 つまみ高0.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや高く やや丸く、外面中央に中央部が平ら なつまみを付す。体部に1条の沈線 をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面7/8回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 灰白色、外一灰色。胎土:密。 1mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存:1/3。一部反転復元。
高杯	211- 57	口径13.1 受部径15.4 基部径4.5 残存高5.7 T高1.3	たちあがりは内傾したのち中位でほぼ直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。底体部は浅く平らに近い。脚部は下外方に下ったのち脚部1/3より下位で外下方に開いて裾部とする。裾部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。1mmの長石を含 む。焼成:良好。残存:4/5。全 面に自然釉付着。全体に焼き歪 み。
高杯	211- 58	基部径4.1 残存高7.4	脚部は下内方に下って下方に下った のち、下外方に下る。1/2上方に2 条の沈線をめぐらす。2段2方向に 長方形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転 ナデ調整。脚部内面にしぼり目 あり。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 青灰色、外一紫灰色。胎土:密。 2mm の長石をわずかに含む。焼 成:良好。残存:1/4。一部反転 復元。
高杯	211- 59	基部径3.7 残存高8.5	口縁部は欠損。底体部はやや浅く平 ら。底部・体部境界、底部1/4の位 置にやや鈍い稜をめぐらす。 脚部は やや下内方に下ったのち下方に下 る。1/2上方に2条の沈線をめぐら す。2段2方向の長方形スカシを有 する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/4回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。1mm の長石をわずか に含む。焼成: 良好。残存: 1/4。 一部反転復元。
高杯	211- 60	脚底径10.2 基部径3.5 残存高11.8 脚高11.0	脚部はやや下内方に下ったのち、外 反しつつ下外方に下り、裾部で外下 方に短くのび、端部は外傾する凹面 を成し、内面に段を成す。上方1/3 の位置に鈍い2条の沈線、裾部上方 に1条の沈線をめぐらす。2段2方 向に長方形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転 ナデ調整。脚部内面にしぼり目 あり。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一暗灰色。胎土:密。 3mm 以下の長石をわずかに含む。焼成:良好。残存: 脚部の 1/2。杯部一部。一部反転復元。
踉	1	基部径3.4 体部最大径9.8 残存高8.0	口頸部は上方にのび、欠損。肩部は 外下方に下り、体部最大径は上方 3/7に位置し、その位置に円孔を穿 つ。底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体 部外面回転へラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm の長石をわずか に含む。焼成:良好。残存: 1/2。

	211- 62	口(双0 9	天井部は外下方に下り、体部は外下	マキアゲ・ミズビキ成形。天井	ロクロ回転:右回り。色調:内一
壺	211- 62	ロ径9.2 つまみ径3.1 器高3.7 つまみ高0.8	大井市はハトカにトリ、体部はハト 方に下り受部で段を成す。端部はや や鋭い。内面端部に内傾するかえり を有する。かえりで接地し、端部は	部外面5/8回転へラ削り調整。 他は回転ナデ調整。つまみ中央部未調整。	ログロ回転:石回り。巴嗣:ペー   暗灰色、外一青灰色。胎土:密。   2mm 以下の長石をわずかに含   む。焼成:良好。残存:1/2。
蓋	,	フェみ同0.0	やや丸くおさめる。天井部外面中央 に扁平なつまみを付す。		也。粉似,尺灯。发行,1/2。
短頸壺	211- 63 93- 63	口径7.8 基部径8.0 体部最大径13.6 器高8.6	口縁部は基部より上方にのび、端部 は丸くおさめる。肩部は外下方に張 り出し、底体部は下内方に下り、内 方にのびる。体部最大径は上位に位 置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。3mm 以下の長石を若 干含む。焼成:良好。残存: 1/2。 反転復元。
短頸壺	211- 64	口径9.4 基部径10.2 体部最大径17.2 残存高5.9	口縁部は基部よりやや内傾して上方 にのび、端部はやや丸くおさめる。 肩部は外下方に張り出す。底部、体 部一部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部 外面回転ヘラ削り調整のち回転 ナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:明灰 青色。胎土:密。1mm の長石を 若干含む。焼成:良好。残存:1/8。 反転復元。
短頸壺	211- 65	口径9.8 基部径10.1 体部最大径20.5 残存高11.2	口縁部は基部より垂直にのび、端部 は丸くおさめる。肩部は外下方に張 り出し、体部は下内方に下る。底部 欠損。体部最大径は上位に位置す る。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。2mm の長石をわずか に含む。焼成:良好。残存: 1/3。 一部反転復元。
広 口 壺	211- 66 92- 66	口径14.6 基部径9.6 体部最大径17.9 残存高19.3	口頸部は基部より上内方にのびたのち外反して外上方へ大きく開く。口縁部下で下外方へのび、口縁部は強く内彎して上外方にのびたのち内傾し、端部はやや丸くおさめ、内面にあまい段を成す。肩部は外下方ったのち内方にのびる。体部最大径は上方3/7に位置する。口頸部1/2上方に鈍い2条の沈線をめぐらすが全周しない。底部一部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 ・体部外面カキ目調整。のち底 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 内一 灰色、外一黒色。 胎土: 密。 5mm 以下の長石を若干含む。 焼成: 良好。残存: 2/3。一部反転 復元。肩部焼き歪み。
提瓶	211- 67	口径5.1 基部径4.5 残存高6.3	口頸部は上外方にのび、口縁部に至 り、端部は丸くおさめる。肩部一部 ・体部・底部欠損。肩部に左右一対 の把手を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 ・体部前面同側面カキ目調整。 肩部・体部背面同側面カキ目調 整のち回転へラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰色。胎土:密。1mm の長石をわずかに含む。焼成:良好。残存:口頸部完形。ヘラ記号:口頸部背面に「/」あり。
提瓶	212- 68	口径6.8 基部径4.5 残存高10.1	口頸部はやや外反しながら上外方に のび、口縁部でやや上外方にのび、 端部は丸くおさめる。 肩部一部・ 体部一部・底部前面、 同側面、 背 面欠損。 肩部の把手は不明。 口頸 部1/2上方に鈍い 1 条の沈線をめぐ らす。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 ・体部前面カキ目調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰青色。胎土:密。1mm の長石・石 英をわずかに含む。焼成:良好。 残存:1/8。一部反転復元。
提瓶	212- 69 93- 69	口径5.6 基部径5.3 体部最大径17.6 器高21.7	口頸部は外反しながら上外方にのび、口縁部は内彎して上方にのび、端部は丸くおさめる。肩部・体部・底部は正面で球形を成し、側面で若干角張った楕円形を成す。肩部に先端が扁平な下外方へ屈曲する左右一対の把手を付す。背面欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 ・体部・底部前面同側面1/2カ キ目調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:明青 灰色。胎土:密。1mm の長石を 若干含む。焼成:良好。 残存: 1/2。
提瓶	212- 70	口径6.7 基部径6.1 残存高6.6	口頸部は外反しながら上外方にの び、口縁端部でやや内彎し、端部は やや丸くおさめる。肩部・体部・底 部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰青色、外一淡灰色。胎士: 密。Imm の長石をわずかに含む。 焼成:良好。残存:口頸部ほぼ完 形。
提瓶	212- 71	口径8.5 基部径7.0 残存高6.5	口頸部は外反しながら上外方にの び、口縁部は内彎して上方にのび、 端部は丸くおさめる。肩部・体部・ 底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 口頸部完形。
提瓶	I	基部径7.0 体部最大径22.2 残存高21.6	口頸部欠損。肩部・体部・底部は正 面で球形を成し、側面でやや角張っ た楕円形を成す。肩部に先端がやや 扁平な下外方へ屈曲する左右一対の 把手を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 ・体部・底部前面背面側面3/5 カキ目調整。他は回転ナデ調 整。側面に数箇所の指頭圧痕あ り。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一灰青色。胎土:密。 1mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存:2/3。
獲	217-125	口径55.0 残存高11.5	口頸部下方1/3以下欠損。口頸部は 外彎して上外方にのび、口縁部下で 外下方にのびたのち上方にのび、段 を成したのちやや内彎して上内方に のびる。端部は丸くおさめる。口縁 部内面に非常にあまい段を成す。口 縁部直下に2条の沈線を、頸部上方 1/3に3条のやや鈍い沈線を、頸部 下方1/3に1条の対線の上下に櫛描き 斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。	色調:暗灰色。胎土:密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成:良 好。残存:口頸部の2/5以下。反 転復元。

甕	218-126	口径23.5 基部径21.3 残存高5.8	口頸部はやや外彎して上外方にのび、口縁部下で外下方にのびたのち、やや外上方にのび内彎して上内方にのび口縁部内面に至る。 肩部は下外方に下る。 肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰青色。胎土:密。3mmの長石を若干含む。焼成:良好、堅緻。残存:口頸部9/10。一部反転復元。
甕	218-127	口径21.4 基部径18.2 残存高13.0	口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部下で下外方にのびたのち 上外方にのび、内彎して上外方にの び内上方にのび、口縁部内面に至 る。肩部は外下方に内彎して下る。 体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。他 は回転ナデ調整。	色調:暗灰色。胎土:密。4mm 以下の長石を若干含む。焼成:良 好。残存:口頸部の1/6。反転復 元。
甕	218–128 97–128	口径20.9 基部径18.7 体部最大径40.4 残存高38.5	口頸部は上外方にのび、口縁部は 上外方にのびたのちあまい段を成 し、内傾する平面を成して内上方 にのびる。 肩部は外下方に内彎し て下り、 体部は下方・下内方に内 彎して下る。 底部は丸い。 底部中 央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 ・体部外面タタキのちカキ目調 整。底部外面タタキ。肩部・体 部内面同心円タタキ。底部内面 青海波タタキ。他は回転ナデ調 整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 淡灰青色、外一淡灰色。胎土:密。 1mm の長石をわずかに含む。焼 成:良好。残存:7/10。
獲	219-129	口径12.8 基部径9.0 残存高9.0	口頸部は上外方にのびたのち外上方 にのび、口縁部は内彎してやや上外 方にのび口縁部内面に至る。肩部は やや下外方に内彎して下る。体部以 下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面同心円タタキ。他は回転 ナデ調整。	不良。残存:口頸部・肩部の1/3。
甕	219-130	口径16.9 基部径13.6 残存高6.5	口頸部は外彎して上外方にのび外上 方にのびる。口縁部下で外下方にの びたのち、やや内彎して上外方にの び口縁部内面に至る。肩部は外下方 に下る。肩部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面同心円タタキ。他は回転 ナデ調整。	良好。残存:口頸部の1/3。反転
獲	219-131 96-131	口径15.6 基部径14.2 残存高6.4	口頸部は外彎して上方にのびたのち 外上方にのび、口縁部は内彎して上 外方にのび口縁部内面に至る。肩部 は外下方に下る。肩部下方1/3以下 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。他 は回転ナデ調整。	色調:灰褐色。胎土:密。1~ 2mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存:口頸部の2/3。一部 反転復元。ヘラ記号:頸部外面に 「川」あり。
甕	219-132	口径17.2 基部径15.0 残存高6.0	口頸部は上外方にのび、口縁部は外上方にのびたのも内彎して上内方にのび、口縁部内面に至る。肩部は外下方にやや張り出す。肩部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:内一暗灰色、外一明灰青 色。胎土:密。4mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 口頸部の1/8。反転復元。
甕	219-133	口径21.0 基部径17.2 残存高6.4	口頸部は上外方にのび、口縁部下で 外下方にのびたのち外上方にのび、 内彎して上内方にのび、口縁部内面 に至る。肩部は外下方に下る。肩部 下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:淡灰青色。胎土:密。焼成: 良好、堅緻。残存:口頸部の1/4。 反転復元。
甕	219-134	口径21.6 基部径19.6 残存高6.7	口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部はやや外方にのびたのち 上外方にのび、内上方にのび、て口 縁部内面に至る。肩部は外下方に下 る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:内一灰色、外一淡灰色。胎土:密。1~2mm の長石を若干含む。焼成:良好。残存:口頸部の1/5。反転復元。
甕	219-135 96-135	口径21.5 基部径17.5 残存高6.9	口頸部は上外方にのび、口縁部下で下内方に巻き込んで下り頸部外面にほぼ接したのち、内彎して外方にのび、上外方にのび、上外方にのび、口縁部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下方2/5以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのち基部付近カキ目 調整。肩部内面青海波タタキ。 他は回転ナデ調整。	色調:内一暗灰青色、外一暗灰色。胎土:密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:口頸部の1/4。反転復元。口頸部外面・肩部内面自然釉付着。
甕	220-136	口径19.6 基部径17.0 残存高7.7	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下で外下方にのびたのち、内傾 する平面を成して内上方にのびる。 口縁端部は丸くおさめる。肩部は外 下方にやや内彎して下る。肩部下方 1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整。肩部外面タタ キのちカキ目調整。肩部内面青 海波タタキ。他は回転ナデ調 整。	色調:灰色。胎土:密。1~2mm の長石を若干含む。焼成:良好。 残存:口頸部の1/3。合成復元。
甕	220-137	口径22.4 基部径19.6 残存高6.6	口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部下で下外方に短くのび、 口縁部は外方にのびたのち、内彎し て上外方にのび、内上方にのび、口 縁部内面に至る。肩部は外下方に下 る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面不明。他 は回転ナデ調整。	色調:内一明灰褐色、外一暗灰色。 胎土:密。 焼成:良好。残存:口頸部の1/4。 反転復元。肩部外面灰かぶり。口頸部内面自然釉付着。
甕	220-138	口径23.8 基部径20.2 残存高7.4	口頸部は外彎して上外方にのび、口 緑部下で下方にのびたのち外方にの び、やや内彎して上方にのび、やや 内上方にのび、口縁部内面に至る。 肩部は外下方に下る。肩部下半以下 欠損。頸部下方1/3に2条の鈍い沈 線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面青海波タ タキ。他は回転ナデ調整。	色調:内一灰色、外一口頸部は暗灰色、肩部は灰色。胎土:密。 I~2mm の長石を含む。チャートを含む。焼成:良好。残存:口 頸部1/4。反転復元。肩部外面灰かぶり。口頸部内外面自然釉付着。

		Sind -	write the first to be seen as		色調:暗灰色。胎土:密。2mm
甕		口径20.0 基部径20.8 残存高8.0	口頸部は基部外面にあまい段を成し、基部からやや上内方にのびる。 端部は丸くおさめる。肩部は外下方 に内彎して下る。肩部下半以下欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。	以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:口頸部1/2。一部反転復元。
甕	1	口径14.4 基部径14.4 体部最大径32.0 残存高20.3	口頸部は基部外面にややあまい段を成し、基部からやや上外方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部は外下方にやや内彎して下り、体部は下内方にやや内彎して下る。体部下方1/3以下欠損。肩部4方向に先端がやや扁平な外下方へ屈曲する把手を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 ・体部外面タタキ。肩部内面同 心円タタキ。体部内面青海波タ タキ。他は回転ナデ調整。	色調:淡灰色。胎土:密。焼成: 良好。残存:1/15。反転復元。口 頸部内面、肩部・体部外面に自然 釉付着。
甕	221-141	口径16.5 基部径13.5 残存高7.0	口頸部は上外方にのびたのち口縁部で外上方にのびる。口縁部は内彎して外上方にのびたのち上方にのび、口縁部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下方2/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調: 暗灰青色。胎士: 密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成: 良 好。残存: 口頸部の1/5。合成復 元。ヘラ記号: 頸部外面に「   」 あり。 口頸部内外面に自然釉付 着。
甕	221-142	口径16.2 基部径14.0 残存高5.5	口頸部は外彎して上外方にのび、 口縁部は内彎して外上方にのび内上 方にのび口縁部内面に至る。 肩部 は外下方に下る。 肩部下半以下欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:淡灰色。胎土:密。1mm の長石を含む。チャートを含む。 焼成:良好。焼成:良好。残存: 口頸部の1/9。反転復元。
甕	221-143	口径17.0 基部径16.3 残存高5.2	口頸部は外彎して上外方にのび、口 緑部下で外下方にのびたのち、やや 内彎して上外方にのび、内上方にの び、口縁部内面に至る。肩部は外下 方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調: 暗灰青色。胎士: 密。焼成: 良好、堅緻。残存: 口頸部の1/4。 反転復元。
獲	221-144	口径28.3 残存高11.5	口頸部下方1/3以下欠損。口頸部はやや外彎して上方にのびたのち上外方にのび、口縁部下で下内方にのび下外方にのびたのち上内方にのび、あまい段を成したのち、内彎して外上方にのび、上内方にのびる。端部は丸くおさめる。口縁部直下に3条、頸部上方は3の位置に2条の沈線をめ方。上方1/3の位置に2条の沈線をめようよが3の位置に2条の沈線をめようよが3の位置に2条の沈線をあけた線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。	色調: 暗灰青色。胎士: 密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成: 良 好。残存: 口頸部の1/4。 反転復 元。
獲	221-145	口径34.0 残存高6.4	口頸部下半欠損。口頸部はやや外上 方にのび、口縁部下で外下方にのび たのち上外方にのび、ややあまい段 を成したのち上内方にのび、やや外 彎して上内方にのびる。端部は丸く おさめる。口縁部内面に段を成す。 口縁部直下に2条の沈線をめぐら し、頸部中位に幾条かの沈線をめぐ らすようである。口縁部直下と頸部 中位の沈線の間に櫛描き斜行沈線文 を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。	色調:内一灰褐色、外一淡灰色。 胎土:密。1mm の長石をわずか に含む。焼成:良好。残存:口頸 部の1/24以下。 反転復元。口頸 部外面一部灰かぶり。口頸部内面 に自然釉付着。
獲	221-146	口径37.8 残存高13.0	回頸部基部付近欠損。口頸部は上方にのびたのち外彎して上外方にのび、口縁部下でやや外下方にのび、 口縁部して上内方にのび、のも内彎して上内方にのび、あまい段を成したのちやや内彎して内上方にのびる。端部は丸くおさめる。口縁部内面にあまい段を成す。口縁部内面にあまい段を成す。口縁部直下に3条の沈線を、頸部上方1/3の位置に2条、頸部下方1/3の位置に2条、のやや鈍い沈線をめぐらす。上方1/3の沈線の上下に櫛描き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整のち回転ナデ調 整。他は回転ナデ調整。(頸部 外面基部付近は強いナデ。)	ロクロ回転: 左回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。4mm 以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 口頸部の1/6以下。反転復元。
獲	222-147	口径22.8 基部径19.0 残存高10.5	口頸部は上外方にのび、口縁部下で下外方にのびたのち上外方にのび、やや内彎して内上方にのび口縁部内面に至る。肩部は外下方にやや内彎して下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面青海波タ タキ。	色調:暗灰色。胎土:密。焼成: 良好。残存:1/8以下。口頸部外 面に自然釉付着。
甕		口径23.0 基部径21.0 残存高9.7	口頸部は外彎して上外方にのび、口 緑部はやや内彎して外上方にのびた のち内上方にのび、口縁部内面に至 る。肩部は外下方に内彎して下る。 体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面上半は青海波タタキ下半 は同心円タタキ。他は回転ナデ 調整。	以下の長石を若干含む。焼成:良

郊区	222-149	口径49.6 残存高10.4	口頸部下方1/3以下欠損。口頸部は 外彎して上外方にのび、口縁部下で ほぼ垂直に下ったのち上方にのび、 段を成したのち垂直にのび上内方に のびる。端部は丸くおさめる。口縁 部内面にややあまい段を成す。口縁 部直下に2条、頸部上方1/3に2 条、頸部下方1/3に2条の沈線をめ ぐらし、上方1/3の沈線の上下に櫛 描き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:灰色。胎士:密。1~4mmの長石を含む。焼成:良好。残存:口頸部の1/18。反転復元。口頸部外面一部に自然釉付着。
獲	222-150	口径46.6 残存高14.3	口頸部基部付近欠損。口頸部はやや外彎して上外方にのび、口縁部下で内彎して下外方にのびたのち内彎して上方にのび、ややあまい段を成したのちやや外彎して上内方にのび、内彎して内上方にのびる。端部は大きめる。口縁部直下に2条のや鈍い沈線をめぐらし、頸部上方1/3に2条、頸部下方1/3に2条の沈線をめぐらす。上方1/3の沈線の上下に櫛描き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整のち回転ナデ調整。他は回転ナデ調整。	色調: 灰色。胎土: 密。4mm 以下の長石を含む。焼成: 良好。残存: 口頸部1/6以下。反転復元。
獲	222-151	口径50.8 基部径32.7 残存高16.9	口頸部は基部から上方にのびたのち外彎して上外方にのび、口縁部下でやや外下方にのびたのち上方にのび、段を成したのち上内方にのび、段を成したのち上内方にのびる。端部は丸くおさめる。口縁部内面にあまい段を成す。肩部以下欠損。口縁の証外下方に下る。肩部以下欠損。口縁の正線・2条、頸部十方1/3に2条の沈線をめぐらす。上方1/3の沈線の上下に幡描き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整のち回転ナデ調整。他は回転ナデ調整。施文の 順序は口縁部直下と上方1/3の 沈線をめぐらしたのちに上下の 櫛描き斜行沈線文を施し最後に 下方1/3の沈線をめぐらしてい ると観察される。	ロクロ回転: 左回り。色調: 内一 淡灰色、外一灰色、一部暗灰色。 胎土: 密。1mm の長石を若干含 む。チャートを若干含む。焼成: 良好。残存: 口類部の1/4以下。 合成復元。
壺	223-152	口径13.3 基部径12.1 残存高6.5	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部は外上方にのびたのち内彎して 上内方にのび、口縁部内面に至る。 肩部は外下方に下る。体部以下欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:灰色。胎土:密。2mm~ 4mmの長石を含む。焼成:良好。 残存:1/9。反転復元。外面灰か ぶり。口頸部内外面自然釉付着。
壺	1	口径14.0 基部径13.0 体部最大径24.8 残存高12.7	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下で外下方にのびたのち内彎し て上内方にのび、口縁部内面に至 る。肩部は外下方に下り、体部は下 内方に下る。体部一部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部 外面カキ目調整のち回転ナデ調 整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一暗灰色。胎土:密。 3mm以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成:良好。残存: 1/6。反転復元。口頸部内外面・ 肩部外面灰かぶり。口頸部内外面 ・肩部内面に自然釉付着。
獲		口径21.5 基部径18.4 体部最大径45.1 器高45.8	口頸部はやや外彎して上外方にのび、口縁部はやや外上方にのびたのち上外方にのび、内上方にのび、口線部内面に至る。肩部は外下方に下り、体部は内彎して下内方に下る。底部は丸い。	外面・体部上半外面タタキのち	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存:2/3。底部外面2箇 所に杯蓋片が熔着する。肩部外面 一部窯壁片付着。口頸部内外面・ 肩部外面氏部内面一部灰かぶり。 肩部外面・体部外面・底部外面に 自然釉付着。
獲品	224-155	口径21.2 基部径19.2 残存高9.5	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下で下内方にのびたのち短く上 外方にのび、非常にあまい段を成し たのち上外方にのび、内彎して上内 方にのび、口縁部内面に至る。肩部 は外下方に下る。肩部下方1/3以下 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面上半青海 波タタキ。肩部内面下半同心円 タタキ。他は回転ナデ調整。	色調: 明灰青色。胎土: 密。3mm の長石を若干含む。焼成: 良好、 堅緻。残存: 口頸部の1/4。反転復 元。
獲	1	口径27.4 基部径20.1 残存高9.7	口頸部は外彎して上外方にのび、口 緑部下で外下方にのびたのち上外方 にのび、あまい段を成したのちやや 上内方にのびる。口縁端部は丸くお さめる。肩部は外下方に下る。肩部 下半以下欠損。頸部上半に櫛描き斜 行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部基部付近内面1列のみ同心円 タタキ。肩部内面下半青海波タ タキ。他は回転ナデ調整。	色調:内一灰色、外一淡灰色。胎 土:密。焼成:良好。残存:口頸 部の1/2。
甕	224-157 98-157	1 '	口頸部は上外方にのび、口縁部は内 彎して外上方にのびたのち内上方に のび、口縁部内面に至る。肩部はや や内彎して外下方に下り、体部は内 彎して下内方に下り、底部はやや丸 い。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。体 部外面・底部外面タタキ。肩部 基部付近内面・底部内面青海波 タタキ。肩部内面下半・体部内 面同心円タタキ。他は回転ナデ 調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一淡 灰色、外一淡灰青色。胎土:密。 2mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存:3/5。一部反転復元。 ヘラ記号: 頸部外面に「ナ」。 り。底部外面に杯蓋口縁部片熔着 口頸部外面・頸部外面があり。 口頸部内外面・肩部内外面・体部 外面・底部外面、自然軸付着。

甕	225-158	□径24.5 残存高3.8	口頸部下半以下欠損。口頸部は上外 方にのび、口縁部下で下外方にのび たのち内彎して上外方にのび、上内 方にのび、口縁部内面に至る。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:明灰青色。胎土:密。5mm 以下の長石を若干含む。焼成:良 好。残存:口頸部の2/3。口頸部 外面に自然釉付着。
甕	225-159 96-159	,	口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部下でやや外下方にのびた のちやや内彎して上外方にのび、上 内方にのび、口縁部内面に至る。肩 部はやや内彎して外下方に下る。体 部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面上半青海 波タタキ。下半同心円タタキ。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一暗灰色、外一淡灰青色。胎土:密。焼成:良好。残存:1/12以下。反転復元。外面灰かぶり。
雍氏	225-160 98-160	_	口頸部はやや外彎して上外方にのび、口縁部下で下外方にのびたのち上外方にのび、段を成したのち上方にのび、上内方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。肩部はやや外下方に張り出したのち内彎して下外方に下り、体部はやや下内方に下る。体部下方1/3以下欠損。口縁部直下に3条(部分的に2条)のやや鈍い沈線を、頸部上方1/3に2条の鈍い沈線をめぐらし、その間に櫛描き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面・体部外面タタキ。肩部内 面同心円タタキ・青海波タタ キ。体部内面同心円タタキ。他 は回転ナデ調整。(頸部外面下 方2/3・口頸部内面では回転ナ デ調整後に不整方向のナデを施 す。その双方のナデには布・革 の使用痕が認められる。)	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰青色、外一暗灰青色。胎土:密。 2 mm 以下の長石を含む。チャートを含む。焼成:良好。残存: 1/3。一部反転復元。ヘラ記号: 肩部外面に「一」あり。口頸部外面一部灰かぶり。
簉	226–161 99–161		口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下でやや外下方にのびたのち、 やや外彎して垂直にのび、内傾して 内上方にのびる。端部は丸くおさめ る。肩部は下外方に下り、体部は内 彎して下内方に下る。底部下半以下 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面タタキのも回転ナデ調整。 肩部外面・体部外面タタキのち カキ目調整。底部外面タタキ。 肩部内面基部付近・底部内面青 海波タタキ。肩部内面・体部内 面同心円タタキ。他は回転ナデ 調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰 青色、外面一部は淡灰褐色。 胎 土:密。2mm 以下の長石・石英 をわずかに含む。焼成:良好。残 存:4/5。ヘラ記号: 肩部・体部 外面に「-」あり。
獲	226-162 99-162		口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部下で外下方にのびたのち 垂直にのび、内傾して内上方にのび る。口縁端部は丸くおさめる。口縁 部内面に非常にあまい段を成す。肩 部は内彎してやや外下方に下り、体 部はやや内彎して下内方に下る。底 部下方3/4以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面タタキのもカキ目調整のち 回転ナデ調整。肩部外面・体部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面基部付近・底部内面青海 波タタキ。肩部内面・体部内面 同心円タタキ。他は回転ナデ調 整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 内一 淡灰青色、外一淡灰色。胎土: 密。2mm 以下の長石を若干含 む。1mm の石英をわずかに含 む。チャートを若干含む。焼成: 良好。残存: 2/5。一部反転復元。 ヘラ記号: 肩部外面にあり。

# 表 22 狭山池 3 号窯灰原トレンチ内出土遺物・表面採集遺物観察表

(T はたちあがりを示す)

表 22 狭山池 3 号窯灰原トレンチ内出土遺物・表面採集遺物観祭表 (T はたちを					
器種	図面 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手 法 の 特 徴	備    考
杯蓋	213- 73	口径14.2 器高3.6	体部・口縁部は下外方に下り端部は 丸くおさめる。天井部は低く平らに 近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 内一灰 褐色、外一灰色。胎土: 密。 1~ 3mm の長石·石英を含む。焼成: 良好。残存: 1/3。 合成復元。内面 ・天井部外面一部に自然釉付着。
杯蓋	213- 74	口径13.4 器高3.7	体部は外下方に下り、口縁部は下外 方に下る。端部は丸くおさめる。天 井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面9/10回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰褐色、外一灰色。胎土:密。 1~2mm の長石を若干含む。チャートを含む。焼成:良好。残存: 1/5。反転復元。ヘラ記号:天井 部外面に「=」あり。外面一部灰かぶり。
杯蓋	213- 75	口径14.8 器高3.8	体部・口縁部は下外方に下り端部は 丸くおさめる。天井部は低くやや丸 い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色鸛:淡灰 青色。胎土:密。2mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。残存: 1/3。反転復元。ヘラ記号:天井 部外面に「-」あり。
杯蓋	213- 76	口径14.2 器高4.2	体部・口縁部はやや内彎して下外方 に下り、端部は丸くおさめる。天井 部はやや高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。
杯蓋	213- 77	口径13.9 器高3.7	体部はやや外下方に下り、口縁部は 下方に下る。端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。天井部中央は焼 け歪み凹む。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。1mm の長石を 若干含む。焼成:良好。 残存: 1/3。合成復元。
杯蓋	213- 78	口径12.9 器高4.2	体部は下外方に下り、口縁部は垂直 に下る。端部は丸くおさめる。天井 部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一暗灰青色、外一暗灰褐色。胎土:密。2mm 以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。
杯蓋	213- 79	口径12.2 器高4.4	体部・口縁部はやや内彎して下外方 に下り、端部は丸くおさめる。天井 部はやや高く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/6回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:暗灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。

				2.3. DT/ II	
杯蓋	213- 80	口径13.8 器高4.0	体部は下外方に下り、口縁部は下方 に下る。端部は丸くおさめる。天井 部はやや低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 淡灰 色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/3。合成復元。
杯蓋	213- 81	口径14.4 器高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部 はやや丸くおさめる。天井部は低く 平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰色。胎土:密。1~2mm の長石 ・石英を含む。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。
壺蓋	213- 82	口径12.0 器高3.1	体部は下外方に下り、口縁部は外反 し、端部はやや鋭く、端部内面は内 傾する。天井部は低く平らに近い。 天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/4回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1~2mm の長石を若 下含む。焼成: 良好。残存: 1/5。 反転復元。
杯蓋	213- 83	口径13.1 器高3.6	体部は下外方に下り、口縁部はほぼ 垂直に下る。端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。天井部や や焼け歪む。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一淡灰青色。胎土:や や粗。3mm 以下の長石を多く含 む。焼成:良好。残存:1/2。合 成復元。
杯蓋	213- 84	口径14.4 残存高4.1	体部は下外方に下り、口縁部はほぼ 垂直に下る。端部は丸くおさめる。 天井部はやや高く平らに近い。天井 部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面6/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。1~3mm の長石を 若干含む。焼成:良好。残存:1/4。 反転復元。外面に自然釉付着。
杯蓋	213- 85	口径13.0 残存高3.3	体部は下外方に下り、口縁部はやや 下方に下る。端部は丸くおさめる。 天井部は低くやや丸い。天井部中央 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面7/8回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。
杯蓋	213- 86	口径13.8 残存高3.2	体部は下外方に下り、口縁部はほぼ 垂直に下る。端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。天井部中央欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/6回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/5。反転復元。
杯蓋	213- 87	口径13.8 残存高3.4	体部・口縁部は下外方に下る。端部 は丸くおさめる。天井部は低く平ら に近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/6回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:明灰 青色。胎土:密。焼成:良好、堅 緻。残存:1/4。反転復元。
杯身	213- 88	口径11.9 受部径13.4 残存高4.3 T高0.9 T角度19°30′	たちあがりは基部より直立し端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰色。胎土:密。3mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/4。一部反転復元。
杯身	213- 89 94- 89	口径12.8 受部径15.4 器高4.2 T高1.1 T角度26°15′	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、その上面は凸面を成し、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。焼成: 良好。残存: 1/4。合成復元。
杯身	213- 90 94- 90	口径11.8 受部径14.5 器高3.7 T高0.9 T角度36°45′	たちあがりは内傾したのち、端部で 上内方にのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部はやや丸 くおさめる。底体部は浅く、底部は やや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面6/7回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一灰青色。胎土:密。 1~2mm の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:1/3。合成復元。 底部内外面灰かぶり。たちあがり 外面・受部上面に自然釉付着。
杯身	213- 91	口径14.9 受部径16.7 残存高2.7 T高0.9 T角度15°00′	たちあがりは基部より直立し端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面9/10回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗灰青色、外一暗灰色。胎土: 密。3mm 以下の長石を若干含 む。焼成:良好。残存:1/4。反 転復元。
杯身	213- 92	口径13.2 受部径15.2 残存高3.8 T高0.9 T角度21°00′	たちあがりは内傾したのち、中位で 直立する。端部は丸くおさめる。受 部はやや外上方にのび、端部は丸く おさめる。底体部はやや浅い。底部 中央欠損。	は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 黄色。胎土:密。焼成:不良。残 存:1/2。合成復元。
杯身	213- 93	口径11.9 受部径14.5 残存高3.7 T高1.0 T角度30°15′	たちあがりは内傾したのち、中位で やや上内方にのび、端部は丸くおさ める。受部はやや外上方にのび端部 はやや丸くおさめる。底体部は浅 く、底部はやや丸い。底部中央欠損。	外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm の長石をわずか に含む。焼成: 良好。残存: 1/5。 合成復元。底体部外面に自然釉付 着。
杯身	213- 94	口径11.4 受部径14.0 残存高3.4 T高0.9 T角度40°30′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや丸くおさめる。受部は外上方に のび、その上面は凸面を成し、端部 はやや丸くおさめる。底体部はやや 深い。底部下半欠損。	外面回転ヘラ削り調整。他は回	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。1mm の長石を含む。 焼成:良好。残存:1/8。反転復 元。
杯身	214- 95	□径11.8 受部径14.2 残存高2.8 T高1.1 T角度32°30′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや鋭い。 受部はやや外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅い。		ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。
杯身	214- 96	5 口径10.8 受部径13.4 残存高3.2 T高0.9 T角度41°15′	たちあがりは内傾したのち端部付近 でやや上方にのびる。端部は丸くお さめる。受部はほぼ水平に短くの び、端部は丸くおさめる。底体部は やや深い。	外面1/2回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	

杯身	214- 97 95- 97	口径12.3 受部径15.3 器高3.3 T高1.1 T角度38°00′	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのびる。端部は丸くおさめる。 受部はほぼ水平にのび、端部は丸く おさめる。底体部は浅く、底部はほ ぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面6/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。
杯身	214- 98 95- 98	口径11.6 受部径14.0 器高3.4 T高0.8 T角度45°30′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部はやや外上方に のび、端部は丸くおさめる。底体部 はやや浅く、ほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。
杯身	214- 99	口径14.6 受部径17.1 器高3.6 T高0.9 T角度30°30′	たちあがりは内傾したのち端部付近 でやや上方にのびる。端部は丸くお さめる。受部は外上方にのび、端部 は丸くおさめる。底体部はやや深い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面7/8回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。
杯身	214-100	口径14.6 受部径17.4 残存高4.9 T高1.3 T角度30°00′	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのびる。端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くお さめる。底体部は深く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。
高 杯	214-101 95-101	脚底径9.8 基部径5.8 残存高4.7 脚高3.8	杯底部は平ら。脚部は下外方に開い て下り、中位でさらに外下方へ開 く。裾端部はやや外傾する平面を成 して、裾部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰青 色。胎土:密。焼成:良好。
高杯	214-102 95-102	脚底径9.8 基部径5.7 残存高4.9 脚高4.4	脚部は下方に下ったのち中位で下外 方に下り、裾部で外下方に開く。裾 端部は外方にやや肥厚して丸くおさ める。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。
甕	214-103 95-103	口径11.0 基部径9.5 残存高7.0	ロ頸部はやや内傾気味に上方へのび たのち外反して上外方にのび、端部 付近で内傾して上内方にのびる。口 縁端部内面にあまい段を成す。肩部 は下外方へ下る。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。他は回転ナデ調 整。	色調:灰白色。胎土:密。焼成: やや不良。
短頸壺	214-104 95-104	口径8.6 基部径9.0 体部最大径15.3 器高9.8	口縁部は基部よりはぼ直立したのち 端部付近でやや内傾する。口縁端部 は丸くおさめる。肩部は下外方へ張 り出し、体部は内彎して下内方へ下 る。底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。
提瓶	1	口径8.6 基部径5.1 残存高13.4	口頸部は外反して上外方にのびたの ち外上方にのびる。口縁部で段を成 し、緩い凹面を成してやや上外方へ のびる。口縁端部は内傾したのち内 面に緩い凹面を成す。肩部・体部は 外下方・下外方へ内彎して下る。肩 部に外下方へ屈曲する左右一対の把 手を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部 前面・体部側面3/7・肩部外面 カキ目調整。他は回転ナデ調 整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。
高杯		口径12.1 基部径3.4 残存高10.3	体部・口縁部はやや上外方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は深く、底部はやや丸い。底部・体部境界に稜を、底部上方1/2の位置にやや鈍い稜をめぐらす。脚部は下内方に下ったのち、やや下外方に下る。脚部中位に鈍い2条の沈線をめぐらす。2段1方向のみに長方形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。脚部内面にし ぼり目あり。	
高杯	215-107	口径13.2 受部径16.0 基部径4.6 疾存高4.5 T高1.0 T角度37°00′	たちあがりは内傾してのび、端部はやや鋭い。受部は外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。たちあがり 番	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/4回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1~2mm の長石を若 干含む。焼成:良好。残存: 杯部 の1/3。反転復元。外面一部灰か ぶり。
高杯	215-108		脚部基部付近欠損。脚部は外彎して下内方に下ったのち下外方に下り、 裾部上方で段を成して凸帯をめぐらし、下外方に下る。裾端部はやや内傾する平面を成して外側で接地する。裾端沿帯の上方にやや鈍い1条の沈線をめぐらす。3方向に長方形	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一暗灰色。胎土:密。 1mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存:脚部の1/4以下。反 転復元。内外面灰かぶり。外面に 自然軸付着。
提瓶	215-109 94-109	口径6.1 基部径4.3 残存高3.7	スカシを有する。 口頸部は上外方にのび、口縁部下で 短く下外方にのびたのち外上方にの び、内上方にのび、口縁部内面に至 る。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。残存: 口 頸部の3/4。口頸部内面灰かぶり。 ヘラ記号: 頸部外面に「V」あり。
甕	215-110	口径11.6 基部径10.4 残存高4.8	口頸部は上外方にのび、口縁部下で 短く下外方にのびたのち外方にの び、上外方にのび、内傾して内上方 にのび、口縁部内面に至る。肩部は	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面青海波タ タキ。他は回転ナデ調整。	色調:口縁部一淡灰青色、他一暗 灰色。胎土:密。焼成:良好。残 存:口頸部の1/3。反転復元。

提瓶		口径8.1 基部径6.0 残存高3.4	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部は内彎して外上方にのび、上内 方にのび、口縁部内面に至る。肩部 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一暗灰色。胎土:密。 1~3mm の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:口頸部完形。内外 面灰かぶり。内外面に自然釉付着。
蓜		口径11.6 基部径9.9 体部最大径16.0 残存高11.0	口頸部は上外方にのび、口縁端部の 断面は方形で端部は丸くおさめる。 肩部は外彎したのち内彎して下外方 に下り、体部は内彎して下内方に下 る。底部は内下方に下るが下半を欠 損する。体部最大径は上位に位置す る。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面・体部外面2/3回転ヘラ削 り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 淡灰 黄色。胎土: 密。1mm の長石を 若干含む。チャートを含む。焼 成: 不良、軟質。残存: 1/4。一部 反転復元。
壺	94-113	口径12.2 基部径10.0 体部最大径17.8 残存高13.9	口頸部は上内方にのびたのち上内方 にのび、口縁部下で外方にのびたの ち上外方にのび、内彎してやや内上 方にのび、口縁部内面に至る。肩部 は下外方に下り、体部は下内方に下 る。底部は内下方に下るが下半を欠 損する。体部最大径はやや上位に位 置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 淡灰褐色、外一暗灰色。 胎土: 密。焼成:良好。残存:1/4以下。 反転復元。内外面に自然釉付着。
短頸壺	l 1	口径10.6 基部径9.9 体部最大径23.5 残存高18.1	口縁部は基部からやや上外方にの び、口縁端部下で非常にあまい設を 成して上方にのびる。端部はほぼ平 面を成して内下方に内傾する。肩部 は外下方に張り出し、体部はやや内 彎して下内方に下る。底部は内彎し て内下方に下る。底部中央欠損。体 部最大径は上位に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面・体部外面カキ目調整。の ち底部外面・体部外面1/3回転 ヘラ削り調整。他は回転ナデ調 整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎士:やや密。3mm 以下の 長石を多く含む。チャートを含 む。焼成:良好、堅緻。残存: 5/6。肩部外面・体部外面一部・ 底部内面に自然釉付着。口縁端部 ・肩部外面・底部外面に自然釉付
器台	215-115	口径23.6 同内径21.2 残存高7.0	体部は上外方にのび、口縁部下で外下方にのびたのち内彎して外上方に のび、外彎して上外方にのび、端部 は丸くおさめる。底部はやや内下方 に下るが、下半以下を欠損する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面タタキのちカキ目調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰青色、外一暗灰色。胎土: 密。焼成:良好。残存:台部の 1/6。反転復元。体部・口縁部外 面に自然軸付着。
甕	217-124	口径21.3 基部径18.5 残存高8.0	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下でやや下外方にのびたのち上 外方にのび、2箇所で非常にあまい 段を成し、やや内彎して内上方にの び、口縁部内面に至る。口縁部・頸 部境界内面に非常にあまい段を成 す。肩部はやや内彎して外下方に下 る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:淡灰色。胎土:密。焼成: 良好。残存:口頸部の1/7。反転 復元。口頸部内面に自然釉付着。
甕	227-163	口径14.2 基部径11.2 残存高5.7	口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部下で外方にのびたのち内 彎してやや内上方にのび、口縁部内 面に至る。肩部は外下方に下る。肩 部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面不明。他は回転ナデ調 整。	色調:淡灰黄色。胎土:密。焼成: やや不良。残存:口頸部の1/3。 反転復元。
甕	227-164	口径15.6 基部径13.4 残存高6.2	口頸部は上外方にのび、口縁部下で やや外上方にのびたのち上内方にの び、ややあまい段を成したのち上内 方にのび、端部は丸くおさめる。肩 部は外下方に下る。肩部下方1/3以 下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:内一口頸部は淡灰色、肩部は暗灰色。外一灰色。胎土:密。1mm の長石をわずかに含む。焼成:良好。残存:1/8以下。残存:口頸部の1/4。反転復元。口頸部内外面灰かぶり。肩部内面に自然軸付着。
獲	227-165	口径16.4 基部径13.9 残存高6.4	口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部はやや外彎して外上方に のび、上外方にのび、口縁部内面に 至る。肩部は外下方に下る。肩部下 方1/4以下欠損。	部内面基部付近は青海波タタキ	色調:淡灰色。胎土:密。2mm 以下の長石を若干含む。焼成:良 好。残存:口頸部の1/4。反転復 元。
甕	227-166	口径19.6 基部径17.2 残存高5.2	口頸部は外彎して上外方にのび、口 緑部下で外下方にのびたのち内彎し て上外方にのび、非常にあまい段を 成して口縁端部は上方にのび、丸く おさめる。肩部は外下方に下る。肩 部下半以下欠損。	外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:内一口頸部は灰色、肩部は 暗灰色。外一淡灰色。胎土:密。 1~2mm の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:口頸部の1/4。 反転復元。外面・口頸部内面灰か ぶり。外面・肩部内面に自然釉付 着。
甕		口径20.2 基部径16.1 残存高6.0	口頸部は外彎して上外方にのび、口 緑部下で外下方にのびたのち上外方 にのび、上内方にのび、口縁部内面 に至る。肩部は外下方に下る。肩部 下半以下欠損。	外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。	色調:暗灰色。胎土:密。4mm 以下の長石を若干含む。焼成:良 好。残存:口頸部の1/4。反転復 元。外面に自然釉付着。
甕		口径21.4 基部径19.1 残存高4.8	口頸部は上外方にのび、口縁部下で 短く下内方にのびたのち上外方にの び、内彎してやや内上方にのび、口 縁部内面に至る。口縁部内面にあま い段を成す。肩部は外下方に下る。 肩部はぼ欠損。	回転ナデ調整。	色調:淡灰色。胎土:密。1~2mm の長石を若干含む。焼成:良好。 残存:口頸部の1/3。合成復元。 ヘラ記号:口頸部外面に「△」を る。

甕	227-169	基部径17.4 残存高5.9	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下で短く下外方にのびたのち外 上方にのび、内彎して上内方にの び、口縁部内面に至る。肩部は外下 方に下る。肩部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調: 内一暗灰色、外一暗灰青色。胎土: 密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:口頸部の1/3。反転復元。外面・口頸部内面に自然釉付着。
獲	227-170	口径20.8 基部径16.4 残存高7.3	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部は外上方にのびたのち内彎して 上内方にのび、口縁部内面に至る。 肩部は外下方に下る。肩部下半以下 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調: 暗灰青色。胎士: 密。4mm 以下の長石を若干含む。焼成: 良 好。残存: 口頸部の1/4。反転復 元。
甕	228-171	口径19.7 基部径16.7 残存高7.1	口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部下でやや外下方にのびた のち上外方にのび、内上方にのび、 口縁部内面に至る。肩部はやや内彎 して外下方に下る。肩部下方1/4以 下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:内一暗灰色、外一暗灰青色。胎土:密。5mm 以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:口頸部の3/4。
甕	228-172	口径20.0 基部径15.6 残存高8.5	口頸部はやや上外方にのびたのちやや内彎して上外方にのび、口縁部下で外上方にのびたのち上外方にのび、あまい段を成したのち上外方にのび、内上方にのび、口縁部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下方1/4以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:暗灰色。胎土:密。焼成: 良好。残存:口頸部の1/3。反転 復元。内外面に自然釉付着。
簉	228-173	口径23.2 基部径19.6 残存高7.8	口頸部はやや外彎して上外方にのび、口縁部下で短く外下方にのびたのち上外方にのび、段を成して外下方にのび、上方にのび、やや内彎して上内方にのび、口縁部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:暗灰色。胎土:密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成:良 好。残存:口頸部の1/4。合成復 元。
甕	228-174	口径21.5 基部径17.2 残存高11.0	口頸部は上外方にのびたのちやや外 彎して外上方にのび、口縁部下で短 く下外方にのびたのち外上方にの び、上方にのび、口縁部内面に至 る。肩部は内彎して外下方に下る。 肩部下方1/4以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:内一暗灰色、外一暗灰青色。胎土:密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:口頸部の1/4。合成復元。口頸部内外面に自然釉付着。
甕	228-175	口径21.6 基部径18.2 残存高14.1	口頸部はやや外彎して上外方にの び、口縁部下で下内方にのびたのち 外上方にのび、内彎して上外方にの び、内上方にのび、口縁部内面に至 る。肩部は内彎してやや外下方に下 る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ日調整。肩 部内面上半は青海波タタキ下半 は同心円タタキ。他は回転ナデ 調整。	色調:内一口頸部は淡灰色、肩部は暗灰色、外一口縁部・肩部は淡灰色。口頸部は暗灰色。胎土:密。1~2mmの長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/12。反転復元。外面・肩部内面に自然釉付着。
甕	229-176	口径24.6 基部径19.8 残存高7.7	口頸部は上外方にのび、口縁部下で 外下方にのびたのち上外方にのび、 内彎して上内方にのび、口縁部内面 に至る。肩部は外下方に張り出す。 肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキ。肩部内面青海波タ タキ。他は回転ナデ調整。	色調:暗灰青色。胎土:密。焼成: 良好。残存:口頸部の1/3。 反転 復元。
甕	229-177	口径20.0 基部径17.5 残存高11.7	口頸部は上外方にのび、口縁部は外 上方にのびたのち内彎して内上方に のび、口縁部内面に至る。肩部は下 外方に内彎して下る。体部以下欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整のち回転ナデ調整。肩部外面タタキのちカキ目 調整。肩部内面上半は青海波タ タキ。下半は同心円タタキ。他 は回転ナデ調整。	色調:内一暗灰色、外一明灰青色。胎土:密。3mm 以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/3。ヘラ記号:頸部外面に「〜」あり。
甕	229-178	口径38.7 基部径26.0 残存高20.4	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下で外下方にのびたのち上外方 にのび、あまい段を成したのち内傾 して内上方にのびる。端部は丸くお さめる。口縁部内面にあまい段を成 す。口縁部直下に 1 条、頸部上方 1/3の位置に 2 条の鈍い沈線をめぐ らし、頸部下方1/3の位置に 2 条の やや鈍い沈線をめぐらす。上方1/3 の沈線の上下に櫛描き斜行沈線文を 有する。なお、斜行沈線文は沈線を めぐらしたのちに施文する。肩部以 下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部外面カキ目調整。頸部外面1/4カキ目調整のち回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。(頸部内面基部付近はやや強いナデ。)	ロクロ回転: 左回り。色調: 内一 灰色、外一暗灰色、口縁部、明灰 色。胎土: 密。2mm 以下の長石 を若干含む。1mm の石英をわず かに含む。チャートを若干含む。 焼成:良好。残存: 口頸部の1/5。 反転復元。内外面一部灰かぶり。 内外面に自然釉付着。

#### IV 狭山池 4 号窯

### 1調査経過

狭山池調査事務所では、狭山池東岸部分において実施した一連の発掘調査によって、過去の分布調査で確認されていた5~6ヶ所の須恵器散布地は、®2基の須恵器窯灰原と東岸部の遺構群に伴うものと判断していた。ところが1997年1月に、東岸の南端から北端へ向けて、工事用簡易道路の盛土作業が開始された際、工事担当者が狭山遊園プールの西側にあたる部分で須恵器片の大量散布を確認した。報告を受けて現場へ急行すると、狭山遊園敷地内からの雨水管から流出した水流によって、東岸の地表面が溝状にえぐられ、その周囲に須恵器の蓋杯や甕の破片が散乱している状況が確認された。そこで当該地点においてバックホーにより、南北方向に長さ約10mの試掘溝を掘削し、土層断面を観察した。その結果、地表下約60cm~100cmの箇所に、厚さ10cm以下の灰層がほぼ全域において確認された。最初に実施したトレンチ調査においては、この灰層が遺存する箇所は分厚い池の堆積土に覆われており、調査不可能であった。その時に設定したトレンチは窯本体の検出を目的としていたため、狭山遊園敷地寄りの高い箇所に設定しており、この灰層の遺存を確認することができなかった。この新規に検出された窯を狭山池4号窯と呼称する。発掘調査は1997年1月~2月まで実施した。

## 2 遺構と層序

狭山池 4 号窯の灰層は、斜面上から流入してきたと考えられる暗灰色砂礫土の上面を被覆するように広がっている。段丘面に相当する地山面は、調査区東端で標高 77.25m を測り、池側の調査区西端では標高 72.75m まで落ち込んでいる。暗灰色砂礫土層は 30cm~80cm の厚みで調査区内ほぼ全域の地山面を覆う。土層を観察する限りでは、自然に崩落した土層ではなく、何らかの人為的要因による土層である可能性が高いように思われる。その上面を被覆する灰土層は非常に薄く、その厚みは10cm 以下である。黒色もしくは暗灰色のこの灰土層内とその上面から出土した遺物は須恵器のみであり、他の時代の遺物の混入はみられなかった。

灰土層が広がる範囲は、南北 20m、東西 12m に及ぶが、標高 75.0m 付近の調査区西端における灰土層の厚みはわずか 1cm 程度であり、部分的に灰土層が途切れる箇所も多いために斑状の広がりを呈している。最も厚く灰土層が堆積しているのは、標高 76.0m~76.75m 付近である。局部的には15cm 程度の厚みがあり、須恵器の包含量もこの付近が最も多い。灰土層の上には、20cm~70cm の厚さで灰褐色砂質土層がある。この土層もまた、締まりが悪い。その上には部位によっては10cm~60cm 程度の厚みの灰色系砂質土があり、さらにその上層は褐色砂礫土の表土層となる。

#### 3 出土遺物

狭山池 4 号窯の灰層内もしくは灰層直上から出土した遺物の総量はコンテナ20箱分である。窯壁片は数点出土しているが、他の灰原における窯壁片の出土量と比べると少量である。

以下、本窯の灰土層から出土した須恵器の概要を述べる。なお、各個別の遺物観察結果については 表23の遺物観察表を参照されたい。

上層灰原中に包含されていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は70点である。その 器種別の個体数は次の通り。

杯 H 身16点・杯 H 蓋14点・杯 G 身 3 点・杯 G 蓋10点・短脚高杯(脚部のみ) 5 点・長脚無蓋高杯(脚

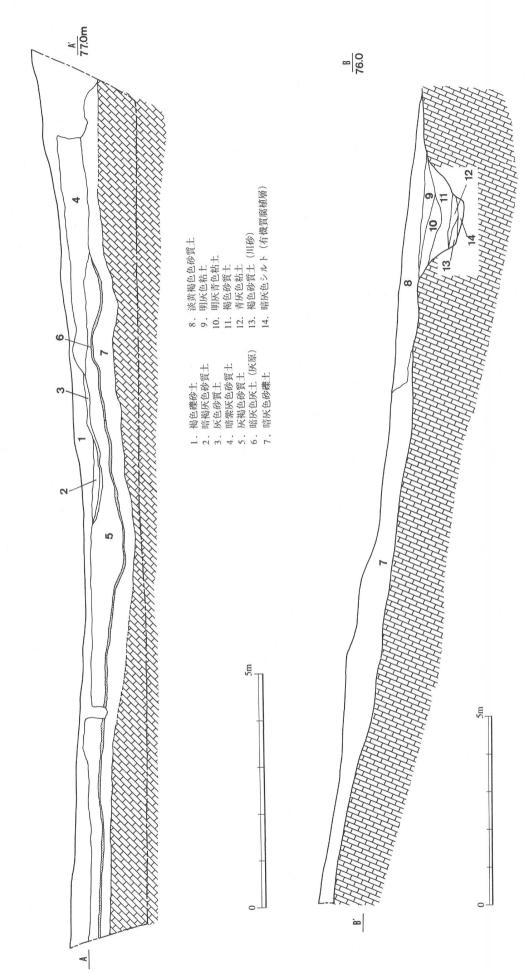


図 230 狭山池 4 号窯灰原土層断面図 (1/80・1/100)

部のみ) 2点・提瓶 2点・ 甕8点・壺蓋4点・短頸壺 1点・長頸壺3点・長頸壺 (口頸部のみ) 3点・平瓶 5 点・平瓶(口頸部のみ) 4点

杯 H 身の口径平均値は 10.2cm、杯 H 蓋の口径平 均値は11.0cm である。杯 H 身の法量は、図317のよ うな数値分布を示している。

杯 G 身の口径平均値は 9.5cm、杯 G 蓋の口径平均 値は外径が 11.3cm・内径 が 9.3cm である。杯 G 蓋 は、天井部外面中央に擬宝 珠様つまみを付すものと乳 首形つまみを付すものとが ある。

長脚2段の無蓋高杯47は、 脚部にスカシをもたないタ イプのものである。

平瓶は、69・70をみるかぎり、体部が下外方に比較

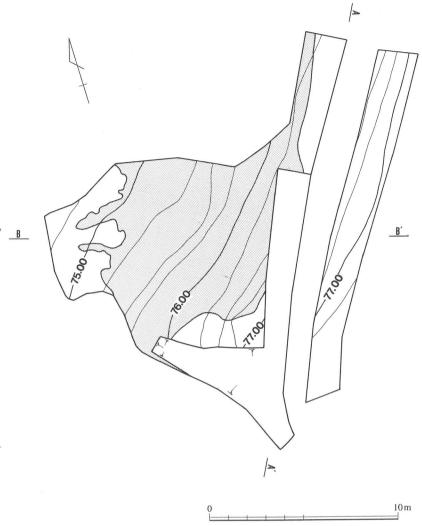


図 231 狭山池 4 号窯灰原平面図

的緩やかに張り出して肩部が丸みをもつタイプのようである。

4号窯灰土層から出土する中で多い器種は杯であるが、その他の器種でとくに多く出土するのが平瓶と長頸壺である。図示した個体の他にも図化不可能な小片をも含めると、かなりの数量が破棄されており、これは本窯の生産傾向とすることができよう。また、平瓶の形態も TK217 型式の定型化したものだけでなく、TK209 型式の提瓶体部を横倒しにし、上面に頸部を取り付けたようなものも含まれている。

#### 4 小 結

狭山池 4 号窯の灰土層は、多くの箇所では 1cm 程度の厚みしかなく、灰土層が途切れる箇所も多いために斑状の広がりを呈している。こうした検出状況から、不確定な要素は多いが、当該調査区で検出した灰土層は、中位段丘崖裾に堆積していた灰原が何らかの理由によって 2 次堆積したものである可能性が高いと考えられる。

包含される須恵器には、明確な型式幅を示す資料は含まれておらず、単一の窯によって形成された 灰原の遺物組成を反映しているように思われる。

杯では、杯Hと杯Gの両器種が生産されていた。杯Hと杯Gの生産比率は、1:1まではいかないが、それに近い比率で生産されていたと思われる。杯H身の法量は、図317で明らかなように、その数値分布の中心が、狭山池 1 号窯や東池尻 1 号窯よりも低い数値にあり、TG10-I 集中域と TG11-I

 $\Pi$  集中域の双方にまたがる分布を示している。また、長脚 2 段無蓋高杯の脚部には、長方形やスリット状のスカシがみられない。ただし、杯 G 蓋のツマミ形状は、擬宝珠様つまみと乳首形つまみがある。

これらのことから、本窯で生産された須恵器は、狭山池 1 号窯とひつ池西窯の間、TK217 型式第 1 類から第 2 類の移行期に位置づけられる資料であると考える。

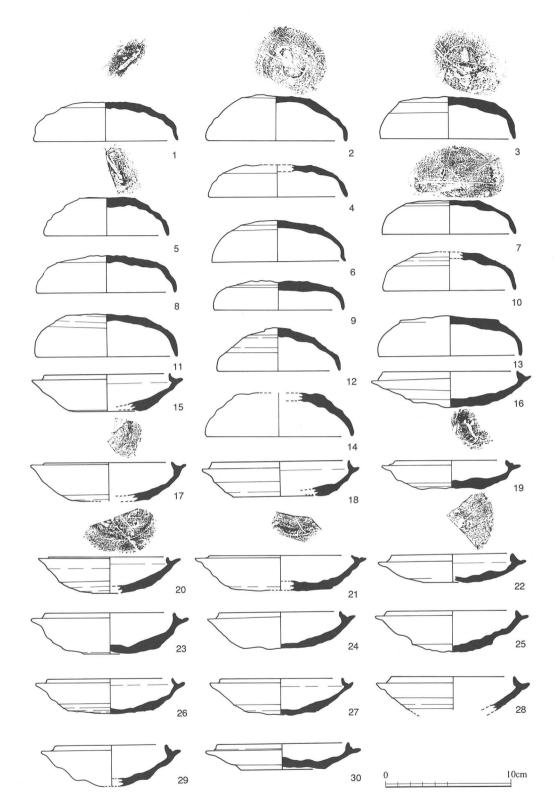


図 232 狭山池 4 号窯灰原出土遺物 (1)

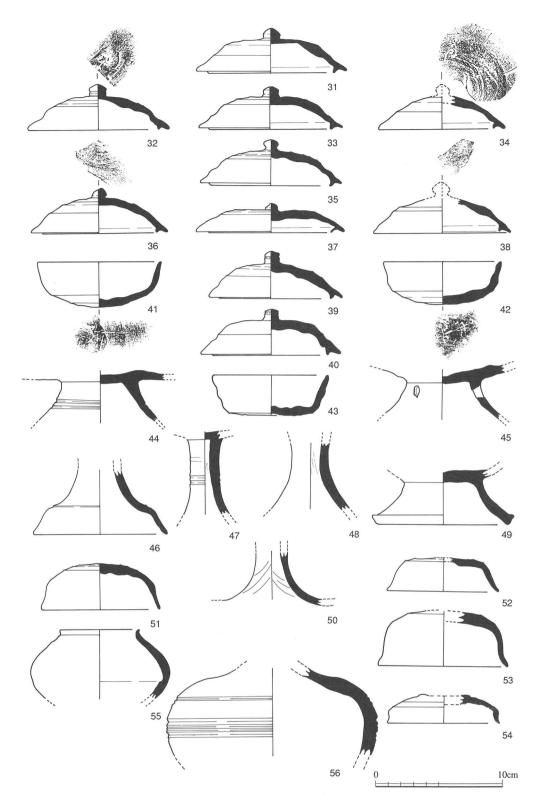


図 233 狭山池 4 号窯灰原出土遺物 (2)

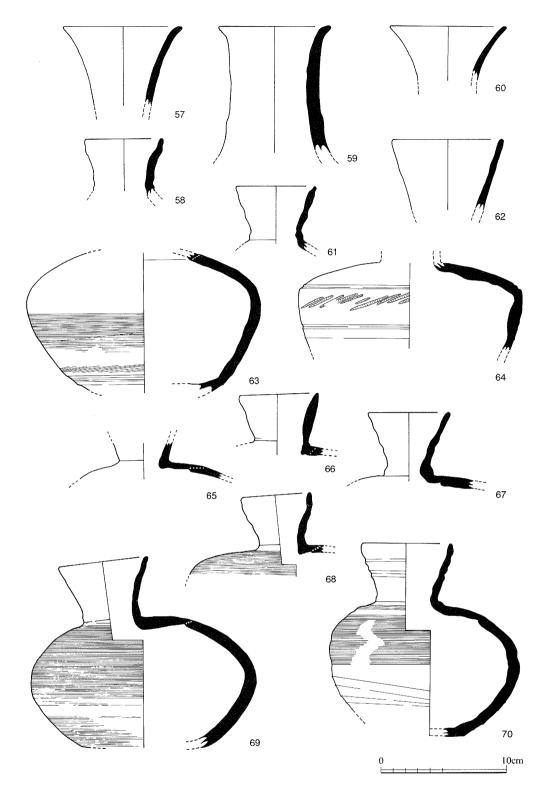


図 234 狭山池 4 号窯灰原出土遺物 (3)

			表 23		(T はたちあがりを示す)
器種	図面 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手 法 の 特 徴	備考
杯蓋	232- 1 101- 1		体部・口縁部は下外方に下り、口縁端部は丸くおさめる。天井部は低く 平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/7回転ヘラ削り調整。 天井部外面3/7(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 白色。胎土:密。1mm の長石を 若干含む。焼成:良好。残存:1/4。 反転復元。ヘラ記号:天井部外面 に「-」あり。
杯蓋	101- 2		体部は外下方に下り、口縁部は下方に下る。口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。3mm 以下の長石をや や多く含む。焼成: 良好。残存: 1/2。合成復元。ヘラ記号: 天井 部外面に「-」あり。
杯蓋	232- 3 101- 3	口径11.0 器高3.4	体部・口縁部は下外方に下る。口縁端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/4回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/2(頂部)ヘラ切り 未調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。3mm の長石をわずか に含む。焼成: 良好。残存: 3/4。 歪みのため合成復元。ヘラ記号: 天井部外面に「一」あり。
杯蓋	232- 4	口径11.2 器高2.6	体部・口縁部は下外方に下り、口縁 端部は丸くおさめる。天井部は低く 平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/5回転ヘラ削り調整。 天井部外面2/5(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎士:密。2mm以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。
杯蓋	232- 5 101- 5		体部・口縁部は下外方に下り、口縁端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/10回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/4(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰緑色。胎土:密。3mm以下の長石をやや多く含む。焼成:良好。残存:1/5。反転復元。 ヘラ記号:天井部外面に「\」あり。
杯蓋	232- 6 101- 6	口径10.8 器高3.3	体部は下方に下り、口縁部はやや外 反して下外方に下る。口縁端部はや や丸くおさめる。天井部は低くやや 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/5回転ヘラ削り調整。 天井部外面3/5(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。2mm 以下の長石を若 干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。 合成復元。外面に自然釉付着。
杯蓋	232- 7 101- 7	口径10.6 器高2.7	体部・口縁部は下外方に下り、口縁端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/5回転ヘラ削り調整。 天井部外面3/5(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一階灰色。胎上:密。 2mm の長石を若干含む。焼成: 良好。疾存:1/3。一部反転復元。 外面に自然釉付着。ヘラ記号:天 井部外面に「一」あり。
杯蓋	232- 8	口径11.2 器高3.0	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/9回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/2(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。3mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。残 存:1/3。一部反転復元。外面に 自然釉付着。
杯蓋	232- 9 101- 9		体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。 天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/7回転ヘラ削り調整。 天井部外面4/7(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。2mm 以下の長 石をやや多く含む。焼成:良好。 残存:1/3。
杯 蓋 ———	232- 10	口径10.8 器高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/3回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/3(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。3mm 以下の長 石を若干含む。 焼成:良好。 残 存:1/5。反転復元。
杯蓋	232- 11 101- 11		体部・口縁部は下外方に下る。口縁 端部は丸くおさめる。天井部は低く 平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/2。合成復元。天井部外面に窯 壁片付着。
杯蓋	232- 12 101- 12	1	体部・口縁部は下外方に下る。口縁 端部は丸くおさめる。天井部はやや 低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/3回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/3(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 緑色。胎土:密。3mm 以下の長 石をやや多く含む。焼成:良好。 残存:1/8。反転復元。
杯蓋	232- 13 101- 13	1	体部・口縁部はやや内彎して下方に 下る。口縁端部は丸くおさめる。天 井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/4(頂部)未調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を含む。焼成:良好。残存:1/3。 一部反転復元。
杯蓋	232- 14	口径12.0 残存高3.5	体部は下外方に下り、口縁部は下方 に下る。口縁端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/3(頂部)未調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰緑色。胎土:密。2mm 以下の長石をわずかに含む。焼成:良好。残存:1/5。反転復元。
杯身	232- 15	受部径12.1 器高3.0 T高0.5 T角度47°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/5回転ヘラ削り調整。底 部外面1/5(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm の長石を若干含 む。チャートを含む。焼成: 良好。 残存: 1/8。反転復元。 ヘラ記号: 底部外面に「-」あり。
杯身	232- 16 101- 16		たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/3回転ヘラ削り調整。底 部外面2/3(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡紫 灰色。胎土:密。5mm の長石を 多く含む。1mm の石英を含む。 焼成:良好。残存:3/4。歪みの ため合成復元。ヘラ記号:底部外 面に「-」あり。

杯 身 	232- 17 101- 17	口径10.2 受部径12.6 器高3.1 T高0.3 T角度66°15′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰色。胎土: 密。1mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 2/5。合成復元。ヘラ記号: 底部外面に「=」あり。内外面に自然釉付着。
杯身	232- 18	口径11.0 受部径12.6 器高2.8 T高0.6 T角度31°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや丸くおさめる。受部は外上方に のび、端部は丸くおさめる。底体部 は浅く、底部は平ら。底部中央欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。底 部外面1/3(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm の長石をわずか に含む。焼成: 良好。残存: 1/8。 反転復元。ヘラ記号: 底部外面に 「×」あり。
杯身	232- 19	口径9.0 受部径11.2 器高2.2 T高0.4 T角度55°45′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部はやや外上方に のび、端部は丸くおさめる。底体部 は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/9回転ヘラ削り調整。底 部外面1/2(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。2mm の長石をやや多く含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。ヘラ記号:底部外面に「/」あり。
杯身	232- 20	口径11.4 受部径12.4 器高2.9 T高0.3 T角度36°15′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部はやや外上方に のび、端部は丸くおさめる。底体部 は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面4/5回転ヘラ削り調整。底 部内面一部静止ナデ調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。3mm の長石をわずか に含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/2。合成復元。ヘラ 記号: 底部外面にあり。
杯身	232- 21	口径11.8 受部径13.8 残存高2.8 T高0.3 T角度61°45′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部はやや外上方に のび、端部は丸くおさめる。底体部 は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2(底部中央)未調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:明灰 紫色。胎土:密。2mm 以下の長 石を若下含む。 焼成: 良好。 残 存:1/4。
杯身	232- 22	口径9.8 受部径12.0 器高2.3 T高0.6 T角度46°30′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/4(底部中央)未調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。1mm の長石をわずか に含む。焼成: 良好。残存: 1/2。 反転復元。内外面灰かぶり。
杯身	232- 23 102- 23		たちあがりは内傾したのち上方にの びる。端部は丸くおさめる。受部は 外上方にのび、端部は丸くおさめ る。底体部はやや浅く、底部は平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。5mm 以下の長石 をやや多く含む。チャートを含 む。焼成:不良。残存:1/2。
杯身	232- 24 101- 24	口径9.7 受部径12.0 器高3.0 T高0.5 T角度49°45′	たちあがりは内傾したのち端部付近で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ち。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面中央未調整。他は回転ナデ 調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm 以下の長石を含 む。チャートを含む。焼成: 良好。 残存: 1/2。 合成復元。外面灰か ぶり。
杯身	232- 25	口径10.6 受部径12.4 器高3.3 T高0.4 T角度36°45′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部はほぼ水平にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2(底部中央)未調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 をわずかに含む。焼成:良好。残 存:1/5。反転復元。外面に自然 釉付着。
杯身	I	口径10.0 受部径11.0 器高2.8 T高0.5 T角度43°15′	たちあがりは内傾したのち端部で上 方にのびる。端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くお さめる。たちあがり基部内面で段を 成す。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面9/10回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。3mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。底部外面に土器 片熔着。
杯身	232- 27 102- 27	口径9.8 受部径11.6 器高2.9 T高0.5 T角度44°15′	たちあがりは内傾したのち中位で上、 内方にのび、端部は丸くおさめる。 受部は上外方にのび、端部は丸くお さめる。たちあがり基部内面で段を 成す。底体部は浅く、底部はほぼ平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/5回転ヘラ削り調整。底 部外面中央未調整。他は回転ナ デ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を含む。焼成:良好。残存:1/4。 反転復元。
杯身	232- 28	口径9.8 受部径12.4 残存高2.7 T高0.6 T角度49°30′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡黄 色。胎土:密。焼成:やや不良。 残存:1/8。反転復元。
杯身	232- 29	口径8.8 受部径11.2 器高3.3 T高0.6 T角度40°45′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅く、底部はやや丸い。底部中央欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。3mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。
杯身	232- 30	口径10.6 受部径12.6 器高2.1 T高0.5 T角度32°30′	たちあがりは基部から上方にのび、 端部は丸くおさめる。受部はほぼ水 平にのび、端部は丸くおさめる。底 体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/5回転ヘラ削り調整。底 部外面3/5(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm 以下の長石を含 む。チャートを含む。焼成: 良好。 残存: 1/3。 反転復元。外面灰か ぶり。
杯蓋	233- 31	口径(外)12.2 口径(内)10.0 器高3.6 つまみ径1.4 つまみ高0.8 かえり高0.3 かえり角度48°00′	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面 に内傾するかえりを付し、その端部 はやや鋭い。かえりは口縁端部以下 に突出し、かえり端部で接地する。 天井部は低く平らに近い。天井部外 面中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。 lmm 以下の長石を若 干含む。焼成: 良好。一部反転復 元。

	1	口径(外)11.5 口径(内)9.6 器高3.7 つまみ径1.4 つまみ高1.0 かえり高0.2 かえり角度47°00′	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面 に内傾するかえりを付し、その端部 はやや鋭い。かえりは口縁端部以下 に突出せず、口縁端部とかえり端部 で接地する。天井部は低くやや丸 い。天井部外面中央に擬宝珠様つま みを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。2mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。ヘラ 記号:天井部外面に「∕」あり。
	233- 33 102- 33	□径(外)11.6 □径(内)9.8 器高3.4 つまみ径1.2 つまみ高0.8 かえり高0.2 かえり角度57°45′	□縁端部は丸くおさめ、□縁部内面 に内傾するかえりを付し、その端部 は丸い。かえりは□縁端部以下に突 出し、かえり端部で接地する。天井 部は低く平らに近い。天井部外面中 央に乳首形つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/4回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm 以下の長石を含 む。焼成: 良好。残存: 1/4。一部 反転復元。焼き歪み大。
杯蓋	233- 34		口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面 に内傾するかえりを付し、その端部 は鋭い。かえりは口縁端部以下に突 出せず、口縁端部で接地する。天井 部は低く丸い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 褐色。胎土:密。1mm の長石を 含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存:1/3。反転復元。へ ラ記号:天井部外面に「-」あ り。
	233- 35 102- 35	口径(外)11.4 口径(内)9.4 器高3.7 つまみ径1.2 つまみ高0.8 かえり高0.2 かえり角度64°30′	□縁端部は丸くおさめ、□縁部内面 に内傾するかえりを付し、その端部 は丸い。かえりは□縁端部以下に突 出し、かえり端部で接地する。天井 部はやや低くやや丸い。天井部外面 中央に擬宝珠形に近い乳首形つまみ を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。2mm 以下の長 石をやや多く含む。焼成:良好。 残存:1/4。反転復元。
杯蓋	233- 36		口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面 に内傾するかえりを付し、その端部 はやや丸い。かえりは口縁端部以下 に突出し、かえり端部で接地する。 天井部は低く丸い。天井部外面中央 に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/2。合成復元。天井部外面 に窯壁片熔着。
杯蓋	233- 37	口径(外)12.0 口径(内)9.8 器高2.4 つまみ径1.1 つまみ高0.7 かえり高0.3 かえり角度59°30′	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面 に内傾するかえりを付し、その端部 はやや鋭い。かえりは口縁端部以下 に突出し、かえり端部で接地する。 天井部は低く平ら。天井部外面中央 に乳首形つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。3mm 以下の長石を多 く含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/3。一部反転復元。
杯蓋	233- 38	口径(外)11.0 口径(内)9.0 残存高2.7 つまみ径1.4 つまみ高1.0 かえり高0.2 かえり角度42°30′	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面 に内傾するかえりを付し、その端部 はやや丸い。かえりは口縁端部以下 に突出せず、口縁端部で接地する。 天井部は低くやや丸い。天井部中央 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/3回転ヘラ削り調整。 天井部外面2/3(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm 以下の長石を若 下含む。焼成: 良好。残存: 1/3。 反転復元。外面灰かぶり。 ヘラ記 号: 天井部外面に「-」あり。
杯蓋	233- 39 102- 39	tout C 1 N m m	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面 に内傾するかえりを付し、その端部 は丸い。かえりは口縁端部以下に突 出し、かえり端部で接地する。天井 部は低くやや丸い。天井部外面中央 に乳首形つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。3mm以下の長石をやや多く含む。焼成:良好。残存:ほぼ完形。
杯蓋	233- 40	口径(外)11.1 口径(内)9.2 器高3.8 つまみ径1.4 つまみ高0.9 かえり高0.3 かえり角度31°15′	口縁端部は丸くおさめ、口縁部内面 に内傾するかえりを付し、その端部 は丸い。かえりは口縁端部以下に突 出し、かえり端部で接地する。 天井 部は低く平ら。 天井部外面中央に乳 首形つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/6回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/2(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 暗灰青色。胎土: 密。3mm 以下の長石を若下含む。焼成: 良好。反転復元。
杯身	233- 41 102- 41	口径10.0	体部・口縁部は上外方にのび、端部 は丸くおさめる。底部は浅くやや丸 い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/5回転ヘラ削り調整。底 部外面2/5(底部中央)ヘラ切り 未調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を多く含む。チャートを含む。焼 成:良好。反転復元。へラ記号: 底部外面に「-」あり。
杯身	233- 42 102- 42		体部・口縁部は上外方にのび、端部 は丸くおさめる。底部は浅くほぼ平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/5回転ヘラ削り調整。底 部外面2/5(底部中央)ヘラ切り 未調整。底部内面中央静止ナデ 調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。1mm の長石を若 干含む。焼成:良好。反転復元。 ヘラ記号:底部外面に「-」あ り。
杯身		3 口径9.0 器高3.2	体部・口縁部は上外方にのび、端部 は丸くおさめる。底部は浅く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/3回転ヘラ削り調整。底 部外面1/6(底部中央)ヘラ切り 未調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。2mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。反転 復元。
高杯		1 基部径6.2 残存高4.0	杯底部は平ら。脚部は下外方へ下る。脚部中位に鈍い2条の沈線をめぐらす。杯底部以上・脚裾部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm の長石を多く含む。焼成: 良好。一部反転復元。 外面灰かぶり。
高杯		5 基部径6.0 残存高4.4	脚部は下外方へ下る。脚部上方に3 方向の円孔スカシを有する。杯底部 以上・脚裾部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。3mm の長石を含む。 焼成: 良好。合成復元。内外面に 自然釉付着。

高杯	233- 46	脚底径10.8 残存高5.2	脚部は外反して下外方へ下り、裾部 上方で角度を変えて下外方へ下る。 裾端部は丸くおさめる。脚部上半以 上欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 脚部の1/10。反転復元。
高杯	233- 47	残存高6.7	脚部は外反して下外方へ下る。脚部 中位に鈍い2条の沈線をめぐらす。 杯底部以上・脚裾部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転 ナデ調整。脚部内面にしぼり目 を有する。	色調:灰色。胎土:密。2mm の 長石を若干含む。焼成:良好。一 部反転復元。
高杯	233- 48	残存高5.3	脚部は外反して下外方へ下る。 杯底 部以上・脚裾部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転 ナデ調整。脚部内面にしぼり目 を有する。	色調: 淡灰白色。胎土: 密。1mm の長石を含む。焼成: 良好。一部 反転復元。
高杯	233- 49	脚底径10.4 基部径6.4 残存高4.4 脚高3.6	脚部は下外方へ下り、裾端部は外傾 する平面を成し、端部内面で接地す る。杯底部以上欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底 部外面未調整。他は回転ナデ調 整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。7mm 以下の石英をわ ずかに含む。焼成: 良好。残存: 脚部は完形。杯部は底部のみ一部 残存。
高杯	233- 50	残存高3.8	脚部は外反して下外方へ開いて下る。 杯底部以上・脚裾部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転 ナデ調整。脚部内面にしぼり目 を有する。	色調:淡灰白色。胎土:密。焼成: やや不良。反転復元。
壺蓋	233- 51 102- 51	·	体部・口縁部は下外方に下り、口縁 端部は丸くおさめる。天井部はやや 低くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2(頂部)回転ヘラ削り 調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 黄色。胎土:密。3mm 以下の長 石をやや多く含む。焼成:やや不 良。残存:1/2。反転復元。
壺蓋	233- 52	口径9.0 残存高2.7	体部は下外方に下り、口縁部でやや 外反する。口縁端部は丸くおさめ る。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2(頂部)回転ヘラ削り 調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/5。反転復元。
壺蓋	233- 53	口径10.4 残存高4.4	体部は下方に下り、口縁部は外反して下外方に下る。口縁端部は丸くおさめる。 天井部は高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/4(頂部)回転ヘラ削り 調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。3mm 以下の長石を若 干含む。焼成: 良好。残存: 1/8。 反転復元。
壺蓋	233- 54	口径9.0 残存高2.2	体部は下方に下り、口縁部は外反して下外方に下る。口縁端部はやや鋭い。天井部は低く平ら。天井部中央 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天 井部外面1/6(頂部)回転ヘラ 削り調整。天井部外面1/6 (頂部)未調整。他は回転ナデ調 整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/2。反転復元。
短頸壺	233- 55	口径6.4 基部径6.4 体部最大径11.2 残存高5.5	口縁部は基部よりやや外反して上方 に短くのびる。肩部は外下方に下 り、体部は下内方へ下る。底部欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。4mm以下の長石 をわずかに含む。焼成:良好。残 存:1/5。反転復元。
長頸壺	233- 56	体部最大径17.0 残存高7.0	肩部は外下方に張り出し、体部は下 方に内彎して下る。口頸部・底部欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。3mm以下の長石 を多く含む。焼成:良好。反転復 元。
長頸壺	234- 57	口径9.6 残存高6.4	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁端部は丸くおさめる。基部以下欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎士:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。反転復 元。
平瓶	234- 58	口径6.4 残存高4.6	口頸部は外反して上外方にのびたの ち、内彎して上外方にのびる。口縁 端部は丸くおさめる。基部以下欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。 反転復元。
長頸壺	234- 59	口径9.0 残存高10.2	口頸部はやや外反して上方にのびた のも口縁部で外反して外上方にのび る。口縁端部は丸くおさめる。 基部 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 橙色。胎土:密。焼成:やや不 良。反転復元。
平瓶	234- 60	口径9.4 残存高4.4	口頸部は外反して上方にのび、口縁 端部は丸くおさめる。基部以下欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。反 転復元。
平瓶	234- 61	口径6.4 基部径4.4 残存高4.6	口頸部は外反して上外方にのび、口 緑端部は丸くおさめる。体部以下欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。反転 復元。内面灰かぶり。外面に自然 釉付着。
長頸壺	234- 62	口径9.0 残存高5.7	口頸部は上方にのび、口縁端部は丸 くおさめる。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一暗灰色。胎土:密。 焼成:良好。残存:口頸部の1/7。 反転復元。
長頸壺	234- 63	体部最大径18.8 残存高11.2	肩部は外下方に張り出し、体部は下 内方に下る。口頸部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。体部外 面カキ目調整。他は回転ナデ調 整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 褐色。胎土:密。Imm の長石を 含む。チャートを含む。焼成:良 好。残存:胴部の1/3。一部反転 復元。肩部外面灰かぶり。体部外 面に自然釉付着。外面に土器片熔 着。

長頸壺	234- 64	体部最大径18.0 残存高7.0	肩部は外下方に強く張り出し、体部 は下内方に下る。肩部・体部境界に 1条の鈍い沈線をめぐらし、体部に 非常に鈍い1条の沈線をめぐらす。 その間に刺突文を有する。口頸部・ 底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。反転 復元。肩部外面に窯壁片熔着。
平瓶	234- 65	基部径4.0 残存高3.0	口頸部は上外方にのびる。体部上面 は外下方へのびる。口頸部上半・体 部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm 以下の長石を多 く含む。焼成:良好。一部反転復 元。外面灰かぶり。外面に自然釉 付着。外面に窯壁片熔着。
平瓶	234- 66	口径6.3 基部径4.4 残存高5.0	ロ頸部は上外方にのび、口縁端部は 丸くおさめる。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:灰色。胎土:密。1mm の 長石を含む。焼成:良好。残存: 口頸部の3/4。
平瓶	234- 67	口径7.0 基部径4.2 残存高5.5	口頸部は上外方にのび、口縁端部は 丸くおさめる。体部上面は外下方へ のびる。体部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:淡灰紫色。 胎土:密。 5mm以下の長石を若干含む。焼成:やや不良。 残存:口頸部の 1/3。合成復元。
平瓶	234- 68	口径5.4 基部径3.7 残存高6.8	口頸部は外反して上外方にのびたのち、内彎して上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。体部は外下方へのびる。体部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部 外面カキ目調整。他は回転ナデ 調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm 以下の長石を含 む。焼成: 良好。残存: 口頸部の 1/4。一部反転復元。
平瓶	234- 69 103- 69		口頸部は外彎しながら上外方にの び、口縁端部は丸くおさめる。体部 上面は丸みをもって外下方へ張り出 し、胴部は下内方に下る。全体的に 扁平な形で、提瓶体部に近い形状。 頸部接合箇所は、体部上面粘土板の 内側に位置する。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部 ・胴部外面カキ目調整。底部外 面回転ヘラ削り調整のちカキ目 調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:頸部 内外面・体部外面一暗灰色、他一 淡灰色・浅橙灰色。胎土:密。 4mm 以下の長石を多く含む。チャートを含む。焼成:やや不良。 残存:1/2。合成復元。
平瓶		口径7.0 基部径5.2 体部最大径15.3 残存高15.3	口頸部は上外方にのび、口縁端部は 丸くおさめる。頸部中位に鈍い2条 の沈線をめぐらす。体部上面は丸み をもって外下方へ緩やかに張り出 し、胴部は内彎しながら下内方に下 る。底部は内彎しながら下内方に下 る。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部 ・胴部外面カキ目調整。底部外 面回転ヘラ削り調整。他は回転 ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 褐色、断面-青灰色。胎土:密。 1mm 以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成:やや不良。 残存:7/10。

# V 東池尻1号窯

## 1調査の経過

旧天野川右岸の中位段丘崖には、狭山池 2 号窯・狭山池 3 号窯・狭山池 4 号窯・太満池南窯®・太満池北窯®などの TK43 型式・TK209 型式・TK217 型式の須恵器を産出した窯跡が多くみられる。 遺物の散布などから、この崖面では狭山池北堤から下池までの範囲で 2 基の窯跡の存在が想定されていた。®

『狭山町史』第1巻本文編<sup>®</sup>(以後、『町史』と略記)では、下池の南西の1基は「狭山池北方の窯」と記述され、「大規模な灰原」が遺存していたとされる。現在、当該地点は完全に宅地化し、段丘崖もコンクリート擁壁で覆われている。灰原の遺存が想定される崖下の平坦面にも盛土がなされており、須恵器片すら採集できない状態である。『町史』では森編年Ⅲ期に分類されている。また、狭山池北堤の北側の1基は「狭山池北方の窯」と『町史』に記述され、「窯壁片、土器片散乱」とある。これが今回発掘調査を実施した窯跡であると考えられる。『町史』編纂時には露出していた作土面も、調査前には青少年グラウンドの盛土によって厚く覆われていたため、須恵器片の散布は確認できない状態であった。

今回の調査では、窯体および灰原が遺存すると考えられる箇所、大阪狭山市青少年グラウンドの東端部分および、里道を含むグラウンド東側の竹林内の崖面の約1,600㎡で発掘調査を実施した。なお、前述の通り本調査区内にその遺存が想定される窯跡は『町史』で「狭山池北方の窯」と呼称されているが、下池の南西に位置する窯との混同が予想されるため、本窯の灰原部分が位置している箇所の住居表示「東池尻」を採って、東池尻1号窯と呼称する。

事前発掘調査は、1992年9月14日から同年10月16日まで実施した。この事前発掘で、灰原の散布域を特定し、発掘調査区の設定を行った。窯体部分の範囲確認調査を含めた本発掘調査は、1992年10月19日から1993年2月5日まで実施した。

調査にあたっては中位段丘崖の裾に相当するグラウンド東端において、南北約 42m、東西 2.6m~ 2.8m の試掘溝(中央トレンチ)を設定した。この試掘溝内における土層断面観察の結果、南北約 29m の範囲で厚さ 10cm~40cm の灰土層と厚さ 10cm~20cm の有機質層を検出した。この結果をもとに、今回の開発工事によって影響の及ぶ範囲内で、南北約 40m、東西約 9m の調査区を設定し、バックホーでグラウンドの整地層と旧作土を掘削した。この後、主として人力掘削を行い、2次堆積によると思われる灰土層直上で平面図を作成、写真撮影を行い、これを掘削した。つぎに、中央トレンチ西

側では灰土層が検出されなかったため、直に有機物層上面を検出し、中央トレンチ東側では灰土層上面と調査区南端箇所で有機物層上面を検出した。これを精査の後、平面図および土層断面図を作成し、写真撮影を行った。この調査範囲を第1調査区と呼称する。この段階で、青少年グラウンド部分で行われていた池尻遺跡(2)の発掘調査とあわせて、12月12日に現地説明会を実施した。現地説明会終了の後、灰原および有機質層の掘削を行って遺物を取り上げ、地山面の直上まで完掘した。

つぎに、里道部分のフェンスとコンクリート舗装を撤



写真86 東池尻1号窯の位置(南上空から)

去し、里道東側の崖下までの平坦面において東西方向に長さ約 13m、幅約 0.8m の試掘溝を設定して、灰土層の東端を確認した。この範囲確認の成果に基づいて、里道部分で約 100m²、南北約 24m、東西約 4m の拡張調査区を設定した。この調査区では、バックホーと人力で 2 次堆積灰土層直上まで掘削を行い、平面図を作成、写真撮影を行った。引き続き、灰土層と有機物層の直上まで人力掘削を行い、平面図および土層断面図を作成、写真撮影を行った後、遺物取り上げと並行して同層の掘削を行い、地山面を検出した。

また、これらの作業と同時に、東側の崖部分では、斜面下と斜面中腹および段丘上に南北方向の試掘溝を設定して人力掘削を行い、窯体の確認に努めた。その結果、斜面上方と段丘上で窯体の一部と赤変箇所を確認したため、当該地点で南北約10m、東西約11mの第2調査区を設けて竹林を伐採し、バックホーで表土層と斜面の流出土を掘削、人力で窯体と赤変箇所を検出した。全体の平面図を作成し、写真撮影の後、窯体の焼成床面毎に掘削、図面作成、写真撮影、遺物取り上げを行った。この調査範囲を第2次調査区と呼称する。調査完了後は、安全のために、バックホーで復旧作業を行った。

## 2 遺 構

## ①窯 体

東池尻1号窯の窯体部分は、ごく一部の焼成床面を残す以外は、削平を受けて消滅していた。

第2調査区の西端の箇所、標高74.75mより下の段丘斜面は、本来は灰原の東端付近である第1調査区拡張区の東端付近へ向けて下っていたものと推測される。調査時点における崖の下端から里道までの間の平坦部分は、本窯廃棄後のある時期における開発によって形成されたもののようである。崖下で地山直上に堆積している黄褐色砂質土・暗黄褐色砂質土は上方からの崩落土であり、調査前の斜面をこれと同質の土が被覆しており、これを除去するとほぼ垂直に切り立った地山面が現れた。また、第2調査区内でも、窯体の上部構造は失われて床面も一部残存するのみであり、この段丘上および段丘崖上部も後世の開発に伴ってかなりの削平を受けている。当該調査区は、近世の狭山藩陣屋跡上屋敷の西端に位置し、第2調査区内の地山面直上の明黄褐色砂質土および暗褐色砂礫土中に平瓦の破片の包含が認められることから、近世に地形が改変された可能性が高い。

窯体は第2調査区西端で検出され、焼成部床面と両側壁の基底部がわずかに遺存する。焚口方向は前述の通り斜面が切断されているために崖になっており、奥側と両側壁外側も削られ、各々外側に向けて落ち込んでいる。窯体の幅は床面で1.80mを測り、現存長は主軸で1.04mを、最大部分で1.41mを計測する。窯体の主軸方向はN-78°30′-Wである。焼成床面は3枚を確認できる。最下層の第1次焼成床面と、最終床面の第3次焼成床面の上面で、遺棄された須恵器片を検出した。各々の

床面中に大量の須恵器の包含が確認できないことから、 この部位は焼成部と判断できる。

第1次焼成床面は、暗赤黄色に酸化赤変した地山の直上に貼られている(図236)。地山面には窯体の主軸から約10度南へ振った方向に、上端幅約0.90m、下端幅約0.45m、深さ約0.11mの断面V字状の溝を掘り込んでいる。床面の貼土は暗灰青色の砂質土で、還元焼成されているために上面は硬質であるが、内部はそれほど堅くない。床の厚さは4cm~10cmである。床面には杯蓋・杯身・甕が破砕された状態で残存していた。南側壁付近

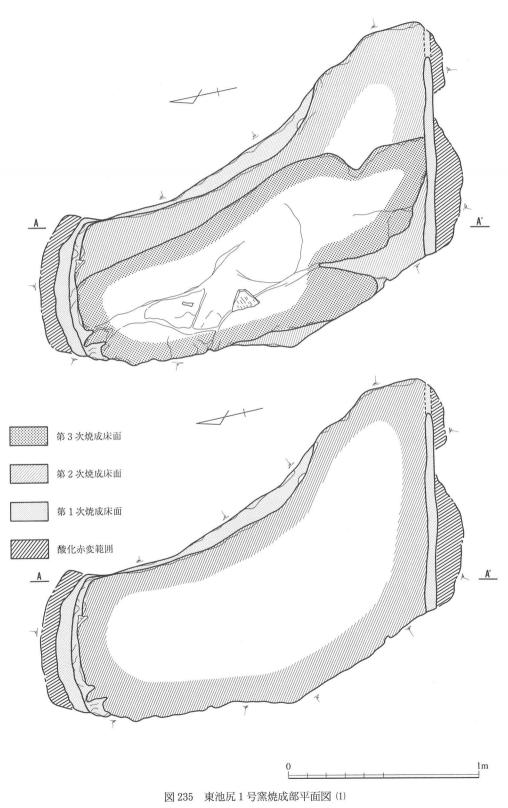


写真87 窯体遠景(西から)

の奥側の第1次焼成床面は、第2次焼成床面の貼り付け前に除去されている。

第2次焼成床面は、第1次焼成床面の大部分を残したまま、その直上に貼られている(図235下段)。 貼土は、やや礫を含んだ暗灰褐色砂質土で、上面のみ硬質である。床の厚さは最も厚い箇所で4cm である。床面上で杯蓋・杯身・短頸壺を検出した。

第3次焼成床面は、第2次焼成床面の部分補修的な貼り床であったのか、主軸方向の長さは0.78 m にとどまり、第2次焼成床面上で島状に遺存していた。貼土は、やや礫を含んだ淡灰青色砂質土



で、上面のみ硬質で内部はやや軟質である。床の厚さは 3 cm 以下である。床面上には杯蓋と杯身と 甕の小片が残存していた。

焼成部床面が遺存していた箇所のすぐ東側は削平が著しく、地山の赤変も確認できないが、床面東端から主軸方向で 4.4m の所の東側に地山が赤変した箇所を確認した。その範囲は南北 6.8m、東西 3.2m に及ぶ。この範囲内に奥壁・煙道部が存在していたと推定する。削平をどの程度受けているか分からないが、主軸方向における床面と赤変範囲の東端との比高差および距離から、床面傾斜角度は

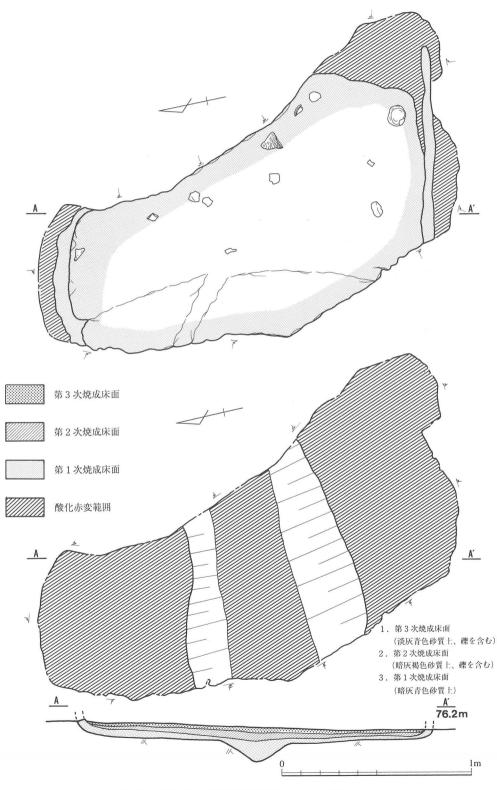


図 236 東池尻 1 号窯焼成部平面図 (2)・土層断面図 (1)

8度~10度であったと思われる。なお、本窯の全長は、焚口・燃焼部・焼成部の下方が完全に欠失しているために明かではない。ただ残存する床面の西端から赤変範囲の東端までで水平距離が 8.80mであり、床面西端から灰原東端までの水平距離が 10.00m~12.00m であるので、現在の灰原東端から約 5m 離れた所に焚口があったとすれば、窯体の全長は 13m~16m 程度と思われる。

## ②灰 原

東池尻1号窯灰原は、大別して灰土層と有機質層の2 層からなる。

有機物層は、第1調査区中央トレンチ東側の南端で灰土層の上層約25cmに間層を挟んで堆積するもの(図238中段土層36・38・41・43)があり、後者は中央トレンチ西側にも広く堆積し、最長箇所で南北約32m、東西約15mを測り、南側は調査区外へ非常に薄くなりながらも続いている。この有機物層は木質などの植物遺体が腐植した土の堆積で、須恵器片の他に多量の自然木・葉片と、少量の加工木材、炭を包含する。特に中央トレンチ東側



写真88 灰原遠景(南から)

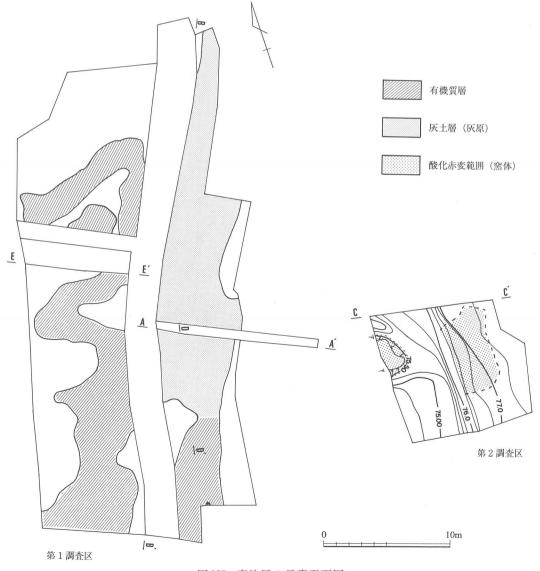
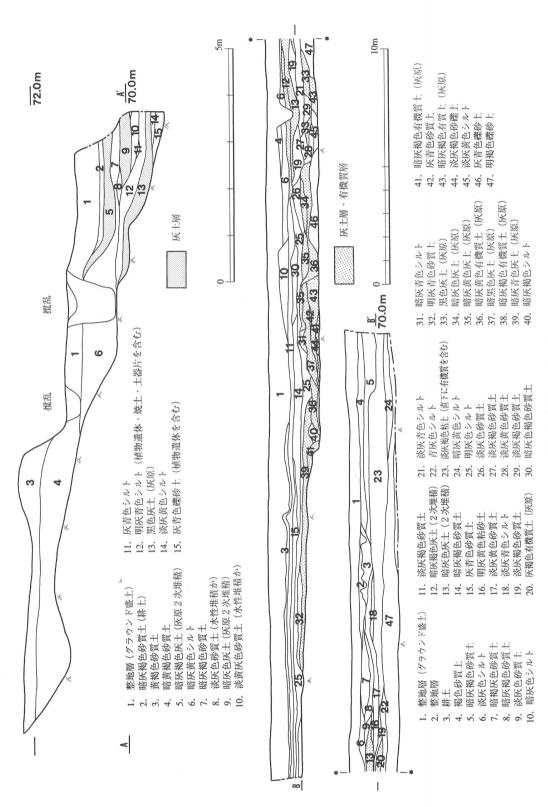
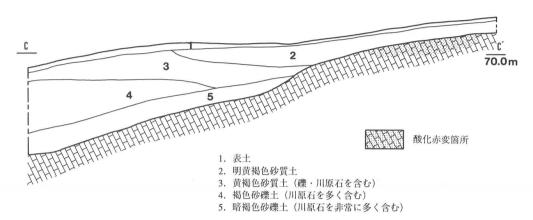


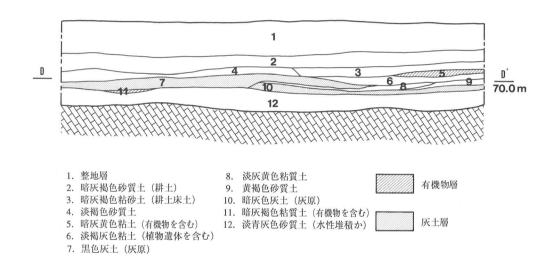
図237 東池尻1号窯平面図

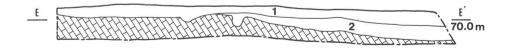


の中央より北側で、これらの出土数が多く、長さ89cm、幅27cm、厚さ10cmの建築材の一部とみられる木材も検出された(図253)。角材を断面の対角線に沿って半裁したような状態で残存し、正面と側面は平滑で加工痕らしきものも観察できる。裏面は破断面で、彎曲してえぐれ込み、裏面全体が黒色に炭化している。これ以外の自然木や木材にも、部分および全体が炭化したものが多くみられ、これが灰土層と部分的に混じるため、この有機物層が東池尻1号窯の操業に伴い、薪の燃え残りや、薪として不要な枝葉を廃棄したため形成された層である可能性が強い。

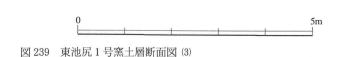
ただし、この東池尻 1 号窯の発掘調査後に新規発見された狭山池東樋下層遺構の放水口が、本調査区の南側に位置していることから、A.D.616 年以後に機能していたこの樋管から配水された水流がど







- 1. 黄褐色砂質土
- 2. 暗灰褐色有機質土



の位置を通過して、本窯の灰原にどのような影響を与えたのかについては慎重な検討を要する。図 238中段に示したように、土層 7・10の灰土層の下層には土層11の有機質層が存在し、上層には土層 5 の有機質層が存在している。東樋下層遺構が据え付けられている箇所の沖積層上面の標高は 71.0 m 前後であり、本窯の灰原と有機質層が堆積している箇所の沖積層上面の標高は 70.0 m 前後である。 樋管から流出した水は調査区内の沖積層上面を通過していた可能性も十分考えられよう。

灰土層は、中央トレンチ東側の南端で近世の平瓦片が混じった 2 次堆積層を検出したが(図238上段 土層12・13)、それ以外の箇所では特に顕著な攪乱や 2 次堆積は認められなかった。灰土層を細かく分 層すると、各小単位ごとの灰土塊に分層され、その間に有機質層も存在する。しかし、このせいぜい 数 10cm 四方の大きさの灰土塊をそれぞれ 1 層として層毎に平面掘削を行うことは実際には不可能で ある。よって、今回の調査ではこれらの灰土塊の集合をもって、 1 層の灰原と認識するにとどめた。

灰土層の広がりは南北約 31m、東西 8m 以下の規模を有する。南北端は厚さ 10cm 以下となって終わり、最も厚い箇所である A-A' 断面付近では 40cm の厚みをもつ。この箇所を中心として須恵器の包含がみられ、杯蓋・杯身・脇・高杯・脚付長頸壺・平瓶・短頸壺・甕などが検出された。

## 3 遺 物

東池尻1号窯の焼成部と灰原および、灰原の2次堆積層から出土した須恵器の総量は、コンテナ約70箱に達した。本稿では、焼成部(第1次焼成床面・第2次焼成床面・第3次焼成床面)・灰原・灰原2次堆積層の各層ごとに報告を行なう。なお、各個別の遺物観察結果については表25~28の遺物観察表を参照されたい。

#### ①焼成部出土遺物

(a) 第1次焼成床面出土遺物(図240、図版106、表25)

第1次焼成床面上面に遺存していた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は23点である。 器種別の個体数は次のとおり。

杯н身11点・杯н蓋9点・杯с身2点・短脚無蓋高杯1点

杯 H 身の口径平均値は 10.6cm、杯 H 蓋の口径平均値は 11.2cm である。第3章で述べるように、第1次焼成床面出土の杯 H 身の法量は、図314のような数値分布を示し、杯 H 身のたちあがり高・たちあがり角度は、図316のような数値分布を示している。杯 H 身の外面調整は、2点が底部中央から回転へラ削り調整を施し、4点は底部に回転へラ削り調整を施すものの底部中央を削り残して未調整とし、5点は底部を欠損するため不明。杯 H 蓋の外面調整は、9点が天井部頂部から回転へラ削り調整を施し、3点は天井部に回転へラ削り調整を施するのの頂部を削り残して未調整とする。

杯 G 身の口径は12が11.1cm、13が8.7cmを測る。外面調整は、12が底部外面をヘラ切り未調整とし、13が底部外面に回転ヘラ削り調整を施す。

短脚無蓋高杯23は、脚部にスカシを有さないタイプである。

(b) 第2次焼成床面出土遺物(図240、図版106、表26)

第2次焼成床面上面に遺存していた須恵器は、杯 H 身 3 点・杯 H 蓋 2 点・短頸壺 1 点の 6 個体である。

杯 H 身の口径平均値は 11.2cm、杯 H 蓋の口径平均値は 10.9cm である。第 2 次焼成床面出土の杯 H 身の法量は、図314のような数値分布を示し、杯 H 身のたちあがり高・たちあがり角度は、図316のような数値分布を示している。杯 H 身の外面調整は、26・29が底部中央から回転へラ削り調整を施し、28が底部に回転へラ削り調整を施すものの底部中央を削り残して未調整とする。

短頸壺27は体部最大径 10.8cm の小ぶりなもので、肩部が下外方へ緩やかに下る形態である。

(c) 第3次燒成床面出土遺物(図241、図版241、表25)

第3次焼成床面上面に遺存していた須恵器は、杯 н 身 4 点・杯 н 蓋 2 点の 6 個体である。

杯 H 身の口径平均値は 10.1cm、杯 H 蓋の口径平均値は 12.1cm である。第 3 次焼成床面出土の杯 H 身の法量は、図314のような数値分布を示し、杯 H 身のたちあがり高・たちあがり角度は、図316のような数値分布を示している。杯 H 身の外面調整は、34・35が底部中央から回転へラ削り調整を施し、33は底部を欠損するため不明である。

②灰原出土遺物(図241~250、図版3·106~112、表26)

灰原層中に包含されていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は138点を数える。その器種別の個体数は次の通り。

杯 H 身41点・杯 H 蓋29点・杯 G 身 3 点・腿 1 点・長脚無蓋高杯(脚部) 7 点・短脚無蓋高杯10点・短頸壺 5 点・短頸壺蓋 2 点・壺 2 点・長頸壺 2 点・平瓶 1 点・提瓶 3 点・甕30点・器台 1 点

杯 H 身の口径平均値は 10.0cm、杯 H 蓋の口径平均値は 11.6cm である。灰原出土の杯 H 身の法量は、図314のような数値分布を示し、杯 H 身のたちあがり高・たちあがり角度は、図316のような数値分布を示している。杯 H 身の外面調整は、13点が底部中央から回転へラ削り調整を施し、26点は底部に回転へラ削り調整を施すものの底部中央を削り残して未調整とし、5点が底部全域を未調整とする。杯 H 蓋の外面調整は、16点が天井部頂部から回転へラ削り調整を施し、13点は天井部に回転へラ削り調整を施すものの頂部を削り残して未調整とする。

杯 G 身の口径平均値は 10.5cm である。83・85は底部外面に回転へラ削り調整を施すが、底部中央 を削り残してヘラ切り未調整としている。84は底部外面中央をヘラ切り未調整とする。

長脚無蓋高杯は、130が脚部に 2 段 2 方向の長方形スカシを有している。112・113・129が脚部に 2 段 2 方向のスリット状スカシを有している。131・132は脚部にスカシを有していない。

短頸壺は体部最大径が 16cm 以下の比較的小ぶりなものが多く、肩部が下外方へ緩やかに下る形態のものと、肩部が外下方へ強く張り出す形態のものの両者が存在する。

長頸壺115・128の体部外面にめぐらされている沈線はいずれも鈍いもので、その沈線の間に刺突文を有している。

甕は、口頸部が大型のもの148・149・150・156・161・162・163・166・169・171・173は口縁部直下の沈線の下方に櫛描き斜行沈線文を施文する。154・157・158・159・165・168・170は口縁部直下の沈線の下方に波状文を施文する。152・153・155・164・167・172は沈線のみを頸部外面にめぐらす。口頸部が小型のもの143・144・145・146・147の頸部外面は無文である。

③灰原 2 次堆積層出土遺物 (図251~252、表27)

灰原層中に包含されていた須恵器のうち、図化が可能であったものの個体数は36点である。その器種別の個体数は次の通り。

杯 H 身15点・杯 H 蓋10点・杯 1 点・長脚無蓋高杯(脚部) 1 点・短脚無蓋高杯 2 点・短頸壺 1 点・提 瓶 1 点・甕 5 点

杯 H 身の口径平均値は 9.9cm、杯 H 蓋の口径平均値は 10.9cm である。灰原出土の杯 H 身の法量

は、図314のような数値分布を示し、杯 H 身のたちあがり高・たちあがり角度は、図316のような数値分布を示している。杯 H 身の外面調整は、11点が底部中央から回転へラ削り調整を施し、1点は底部に回転へラ削り調整を施すものの底部中央を削り残して未調整とし、3点が底部欠損のために不明である。杯 H 蓋の外面調整は、6点が天井部頂部から回転へラ削り調整を施し、3点は天井部に回転へラ削り調整を施すものの頂部を削り残して未調整とし、1点が天井部中央を欠損するために不明である。

長脚無蓋高杯202は、脚部にスカシを有していない。

甕は、口頸部が大型のものに208・209があるが、頸部沈線の上下に波状文を施文する。口頸部が小型のもの205・206・207の頸部外面は無文である。

杯198は、底部に八の字形の高台を付す。形態からみて、平城宮Ⅱ<sup>®</sup>・中村編年<sup>®</sup>Ⅳ型式 2 段階に比 定されるものであろう。

## 4 小 結

東樋下層遺構の発見が、東池尻1号窯の調査完了後のことであったため、東池尻1号窯と、東樋下 層遺構の樋管の延長線上にあったと推定される水路との位置関係が、調査で確認できなかったのは残 念である。しかしいくつかの調査成果は、その痕跡と思える箇所を示している。そのひとつが、窯体 の大半を削平している崖部の地形改変箇所であり、もうひとつが、沖積層上面に広がる有機物層の広 がりであろう。

崖下部分の地山上面には、近世の遺物を包含した土層が堆積していたため、調査時には崖部の地形 改変は、調査区の東隣の中位段丘上に占地している狭山藩陣屋跡に関連した土工事によるものと理解 していた。しかし東樋下層遺構の検出によって、東池尻1号窯の窯体が廃棄された直後、7世紀前半 に窯体が構築されていた段丘斜面裾を削平して、東樋からの水路をこの箇所に通していた可能性が生 じた。また近世初頭に設置された東樋上層樋管からの水路を再びこの場所に設定した可能性もある。

また、中位段丘崖から離れた場所に、東樋下層・上層遺構の樋管からの水路を想定する場合は、沖積層上面に堆積している有機物層をどのように理解するかが重要であろう。沖積層上面を蛇行するように検出された有機物層の広がりは、水路の範囲を示すようなものとは考えられず、狭山池築造前の河川による堆積と理解するほうが自然である。この想定では、有機物層の上面に設けられた水路は、後世の工事によって完全に破壊されたものと考えざるを得ない。

また灰原中から検出された木製遺物の存在も興味深い。あきらかに柱などの建築部材と思われる木製遺物が含まれている。灰原の形成時期が、東樋下層樋管の埋設と並行するものであるならば、樋管設置に関係する転用材を、本窯で燃料としていた可能性も考えられる。しかし、東樋下層遺構の放水部枡形において窯壁片が使用されていたことや、窯に関わる遺構と東樋の水路が併存していた状況が確認できないことから、東池尻1号窯は東樋下層樋管設置よりもわずかに先行していたと考えられる。その場合、灰原中に含まれていた木製遺物は、薪として建築部材等を使用していたと理解できる。

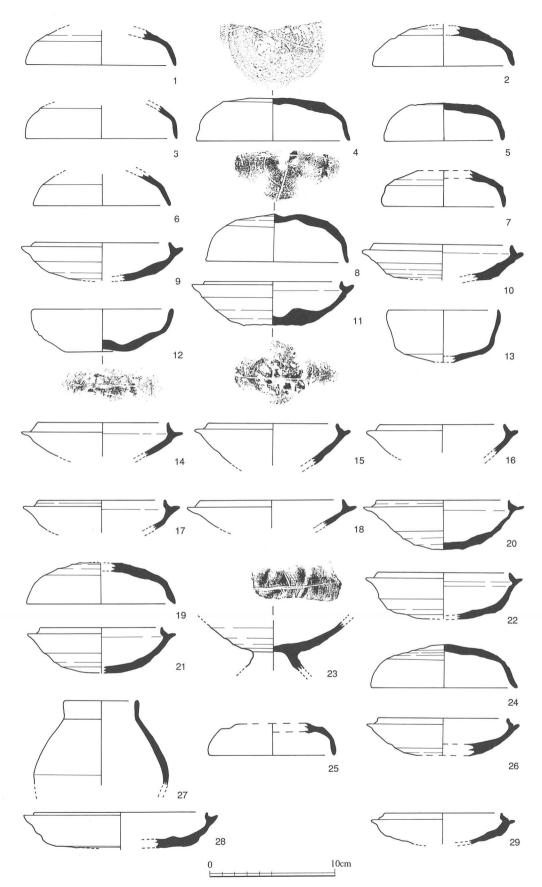
また、灰原 2 次堆積層から出土した杯は、平城宮 II 期のものと考えられる。なんらかの理由で、本 窯の灰原が 2 次移動を受けたのは、この遺物から 8 世紀前期のことと思われる。行基の狭山池改修に 伴う遺物か、東樋下層樋管の延長や北堤第10層堤体盛土などの天平宝字の改修に伴う遺物であるかは 判然としないが、奈良時代の人々の活動が、狭山池北堤の改修工事にとどまらず、狭山池北側におい てみられたことは確実であろう。

表 24 東池尻 1 号窯と東樋下層樋管との関係

	東樋下層遺構樋管の埋設時に東池尻1号窯が廃棄 されていた場合	東樋下層遺構樋管の埋設時に東池尻1号窯が操業 していた場合
東樋からの水路	東池尻1号窯の窯体や灰原を削平して水路が開削 された。	東池尻1号窯の灰原を避けて水路が開削された か、水路を避けて灰原が形成された。
東池尻1号窯灰原の 木製遺物	窯の薪に用いられた建築部材などの転用材	東樋下層樋管の部材との関連も考えられる転用 材。
東樋下層遺構の桝形 に用いられた窯壁	桝形では TK217 型式の杯 H 身が出土しているため、破壊した東池尻 1 号窯の窯壁の破片を転用。	東池尻1号窯より入手した窯壁片を石のかわりに 使用。
東池尻1号窯の操業 時期	A.D.616 年以前に廃棄	A.D.616 年を含む操業時期

#### 注)

- ①本報告書第3章第1節参照
- ②奈良国立文化財研究所光谷拓実氏の鑑定による。
- ③田辺昭三 「陶邑古窯址群 I 」『平安学園考古学クラブ研究論集』10、1968
- ④植田隆司 「ひつ池西窯出土須恵器の編年的位置付け」(「ひつ池西窯」『大阪狭山市文化財報告書』10、 1993)
- ⑤前出注③報告書
- ⑥森浩一 「土器の生産」『狭山町史』第1巻、本文編、1967
- ⑦大阪狭山市教育委員会 『大阪狭山市埋蔵文化財分布図』 1992
- ⑧以下、地質・地形については外山秀一氏(皇学館大学)、三田村宗樹氏(大阪市立大学)、豊田兼典氏(府立 富田林高校)の三氏に観察、ご教示いただいた。
- ⑨大阪狭山市教育委員会 『太満池南窯・北窯発掘調査報告書』 1991
- ⑩前出注⑨報告書
- ⑪大阪狭山市教育委員会 『大阪狭山市埋蔵文化財分布図』 1992
- ⑫『狭山町史』本文編 1967
- ⑬西弘海 「七世紀の土器の区分と型式変化」「奈良時代の食器類の器名とその用途」(『土器様式の成立と その背景』 1986)
- ⑭中村浩 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」(大阪府教育委員会『陶邑Ⅲ』 1978)



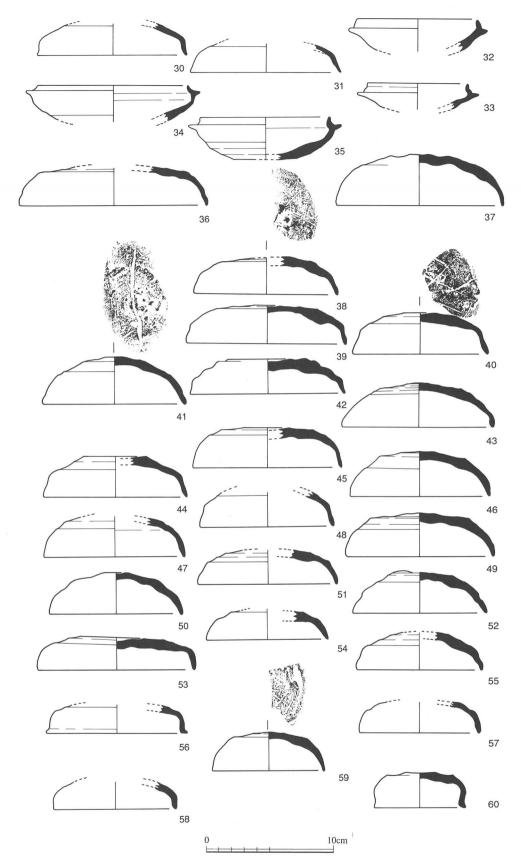


図 241 東池尻 1 号窯出土遺物 (2) (30~35:第3次焼成床面、36~60:灰原)

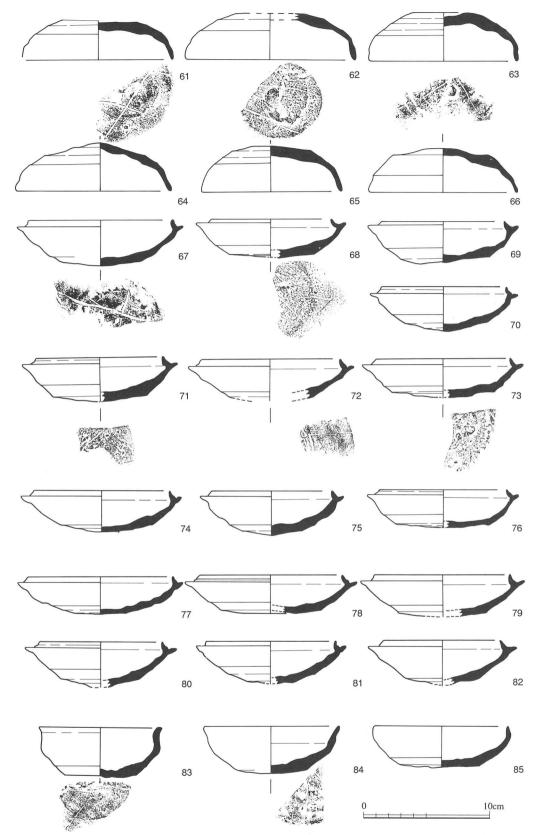


図 242 東池尻 1 号窯出土遺物 (3) (灰原出土遺物)

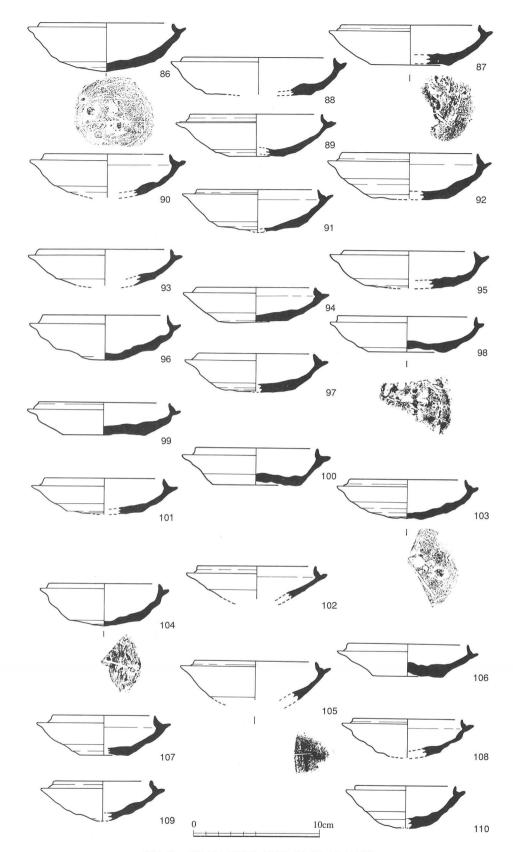


図 243 東池尻 1 号窯出土遺物 (4) (灰原出土遺物)

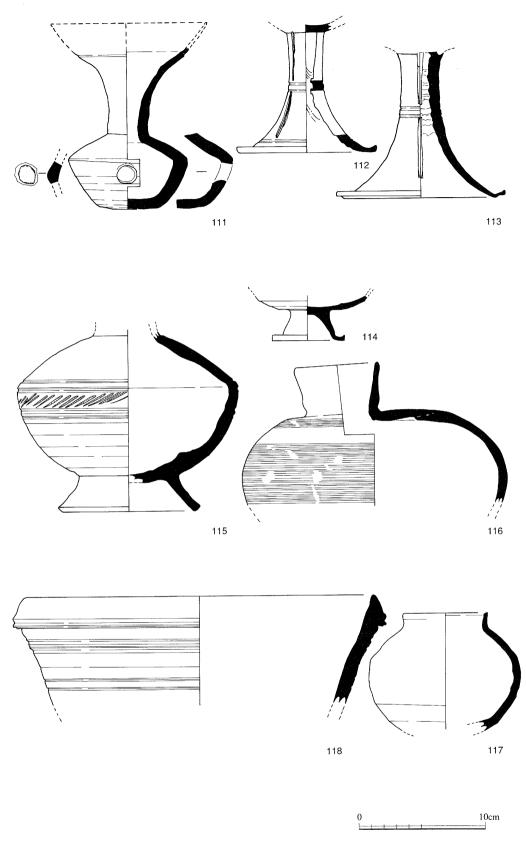


図 244 東池尻 1 号窯出土遺物 (5) (灰原出土遺物)

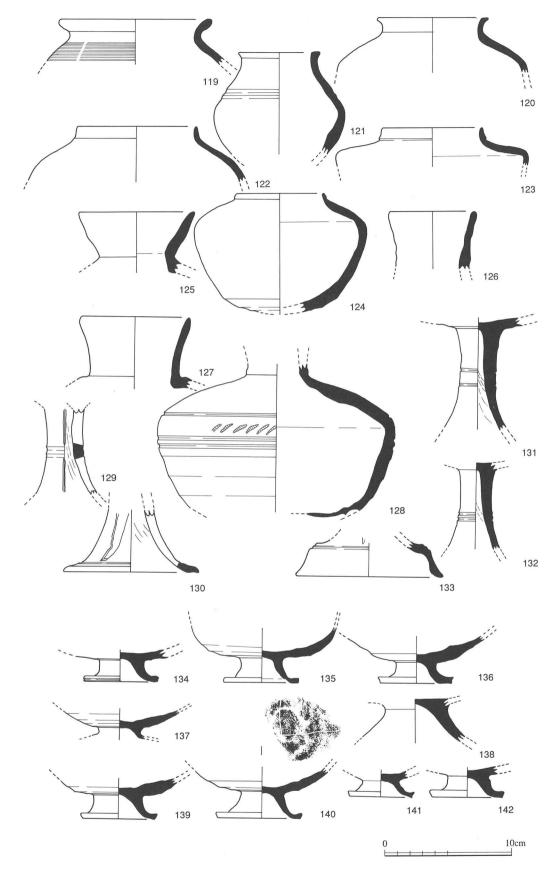


図 245 東池尻 1 号窯出土遺物 (6) (灰原出土遺物)

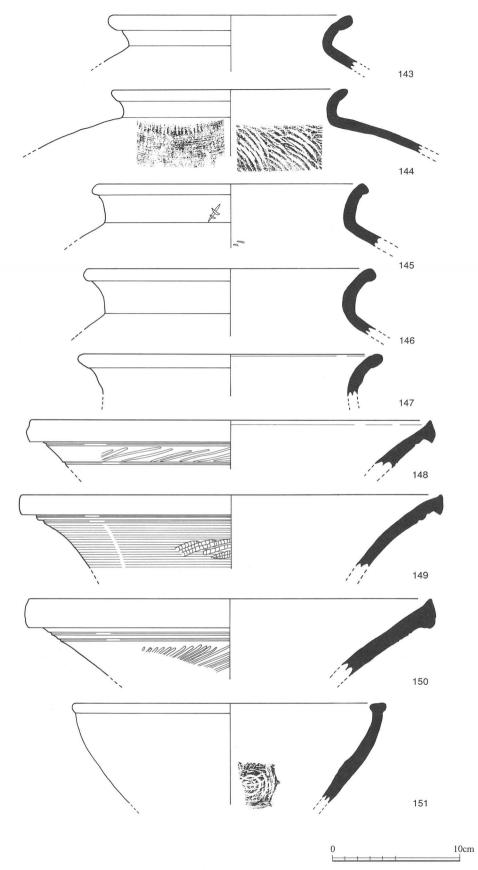


図 246 東池尻 1 号窯出土遺物 (7) (灰原出土遺物)

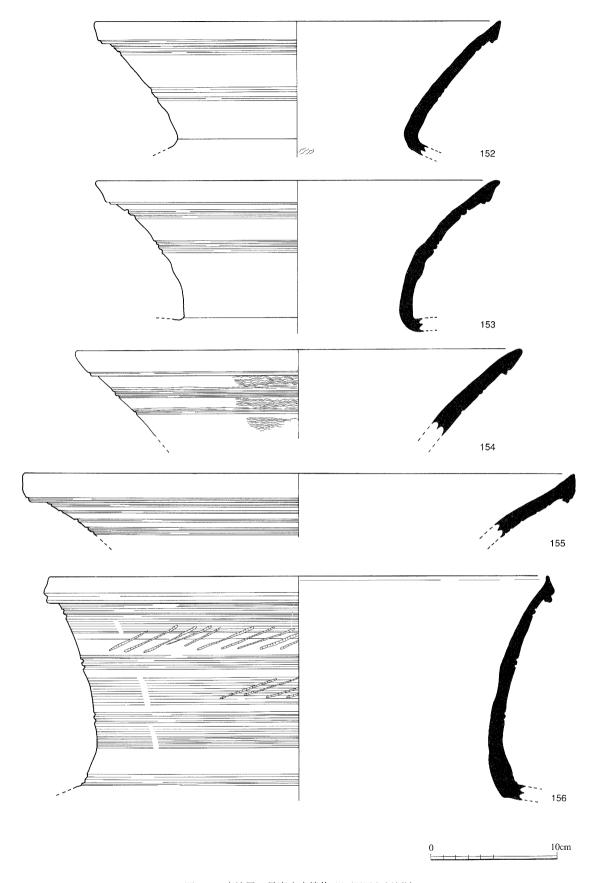


図 247 東池尻 1 号窯出土遺物(8)(灰原出土遺物)

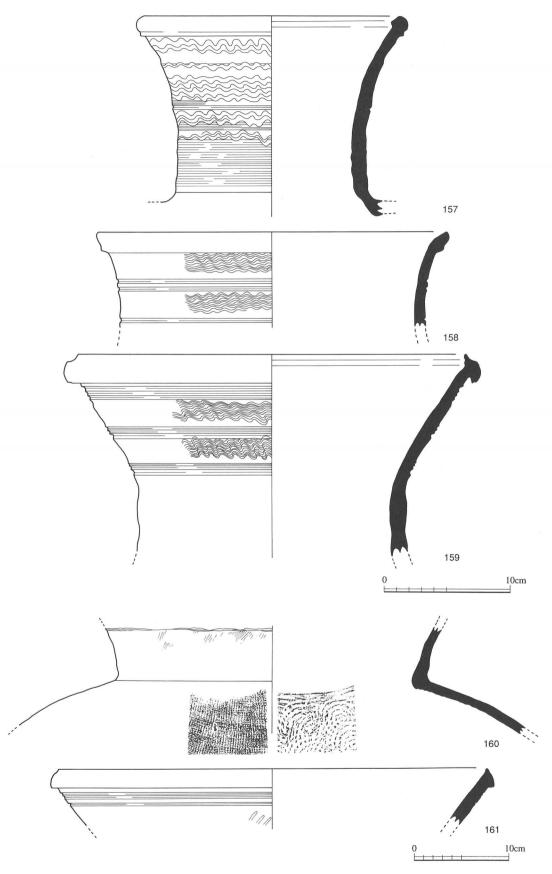


図 248 東池尻 1 号窯出土遺物 (9) (灰原出土遺物)

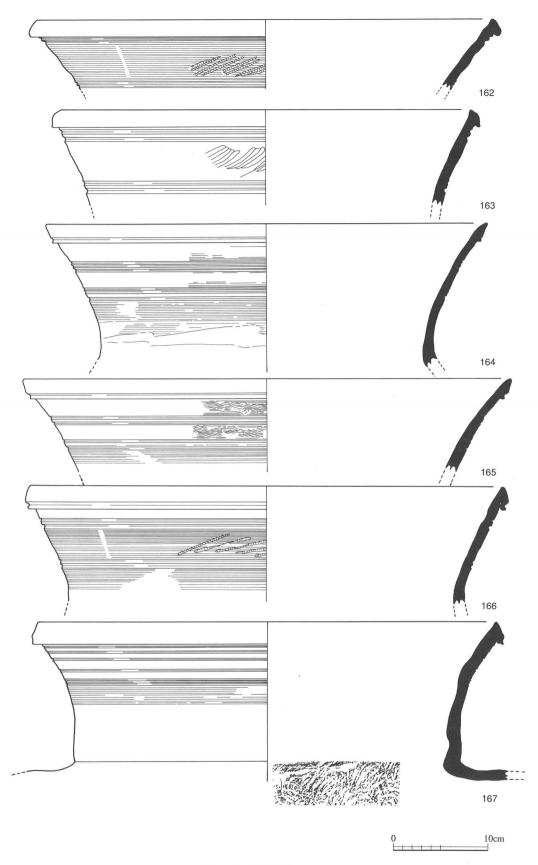


図 249 東池尻 1 号窯出土遺物 (10) (灰原出土遺物)

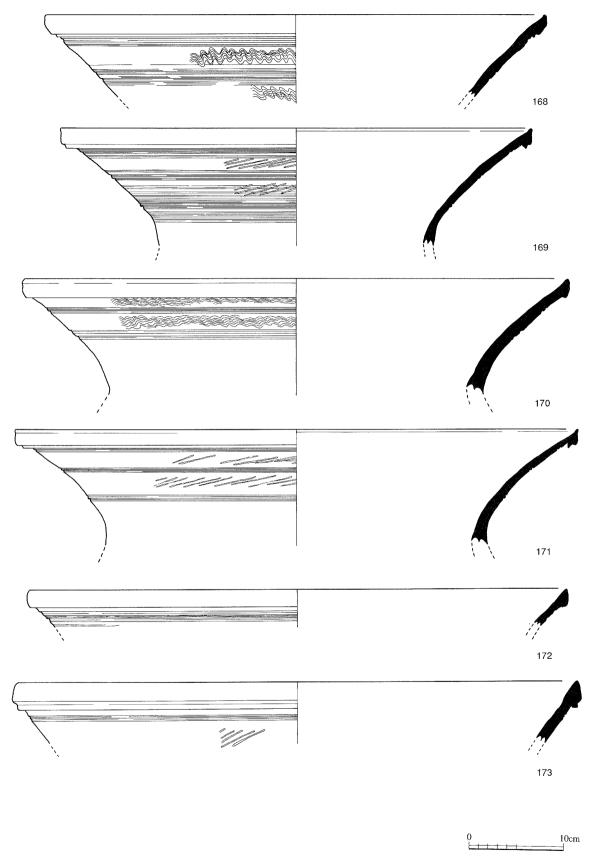


図 250 東池尻 1 号窯出土遺物 (11) (灰原出土遺物)

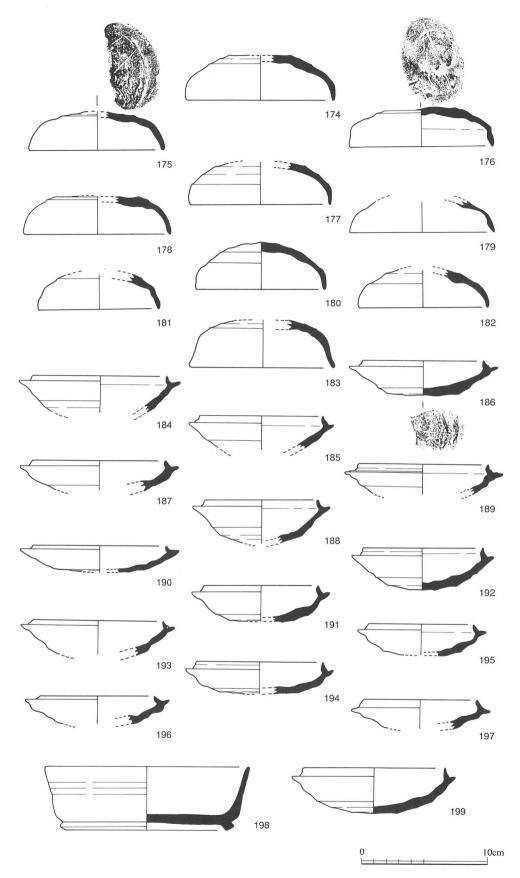


図 251 東池尻 1 号窯出土遺物 (12) (灰原 2 次堆積層出土遺物)

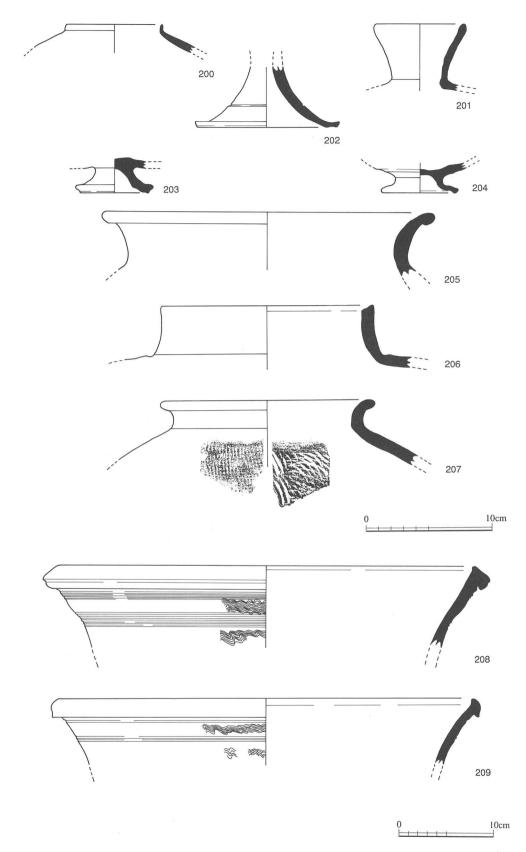


図 252 東池尻 1 号窯出土遺物 (13) (灰原 2 次堆積層出土遺物)

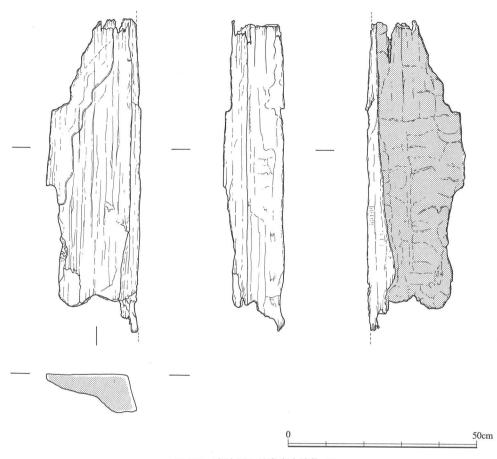


図 253 東池尻 1 号窯出土遺物 (14)

	Т ———		表 25 東池尻 1 号窯第 1 次約	光灰外围山上退初観祭衣	(T はたちあがりを示す)
器種	図面図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	240- 1	口径12.0 残存高2.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低い。天 井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面7/8回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。 胎土: 密。チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/16。 反転復元。 内外面灰かぶり。
杯蓋	110- 2	口径11.2 残存高3.2	体部はやや下外方に下り、口縁部は やや外反して下外方に下る。端部は 丸くおさめる。天井部は低く丸い。 天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐 色。胎土:密。1~2mm の長石 を含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存:1/16。反転復元。
杯蓋	240- 3	口径12.0 残存高2.6	体部・口縁部はやや下方に下り、端 部はやや丸くおさめる。天井部はや や低い。天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/4回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 石回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1~2mm の長石を含 む。チャートを含む。焼成: 良好。 残存: 1/16。 反転復元。
杯蓋	240- 4 106- 4	口径12.3 器高3.4	体部はやや下方に下り、口縁部はや や外反して下外方に下る。端部は丸 くおさめる。天井部は低く平らに近 い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡黄 褐色。胎土:密。1mm の長石を 若干含む。焼成:不良、軟質。残 存:1/2。合成復元。ヘラ記号: 天井部外面に「一」あり。
杯蓋		口径9.4 器高3.0	体部は下外方に下り、口縁部は下方 に下る。端部は丸くおさめる。天井 部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。
杯蓋	240- 6	口径11.0 残存高2.4	体部・口縁部は下外方に直線的に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低い。天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面9/10回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐色。胎土:密。1mm の長石をわずかに含む。焼成:良好。残存:1/16。反転復元。内面灰かぶり。
杯蓋	240- 7	口径9.6 残存高2.9	体部は下外方に下り口縁部はほぼ垂 直に下る。端部は丸くおさめる。天 井部は低い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/5。反転復元。
杯蓋	240- 8 106- 8	口径11.3 器高3.9	体部はやや下方に下り、口縁部はや や外反して下外方に下る。端部は丸 くおさめる。天井部はやや高くやや 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/5回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/5(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一暗灰青色。胎土:密。 1mm の長石を含む。チャートを 含む。焼成:良好。残存:1/3。 一部反転復元。ヘラ記号:天井部 外面に「+」あり。
杯身	240- 9	口径10.8 受部径13.0 残存高3.0 T高0.4 T角度51°30′	たちあがりは内傾してのび端部は丸 くおさめる。受部は外上方にのび、 端部は丸くおさめる。底体部は浅 く、底部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。底 部外面1/3(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm の長石をわずか に含む。焼成: 良好。残存: 1/5。 反転復元。外面灰かぶり。
杯身	240- 10 106- 10	口径11.0 受部径13.0 残存高2.9 T高0.7 T角度33°00′	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、 上面でやや凸面を成し、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で非常にあまい段を成す。底体部はやや浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面9/10回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰褐色。胎土:密。1mmの長石を含む。チャートを含む。焼成:良好。残存:1/5。反転復元。外面に自然釉付着。
杯身	240- 11 106- 11	口径11.0 受部径13.0 器高3.5 T高0.4 T角度45°15′	たちあがりは内傾したのち、低位で 直立し、端部はやや鋭い。受部はや や外上方にのび端部は丸くおさめ る。たちあがり基部内面で段を成 す。底体部はやや浅く、底部は平 ら。底部内面の一部が焼け歪み、膨 ちんでいる。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。底 部外面1/3(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/2。一部反転復元。ヘラ記号: 底部外面に「+」あり。
杯身	240- 12 106- 12	l '	体部・口縁部はやや内彎して上外方 にのび、端部は丸くおさめる。底体 部は浅く、底部は平らに近い。底部 中央がやや焼け歪む。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/5(底部中央)ヘラ切り未 調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 3/4。ヘラ記号:底部外面に「-」 あり。
杯身	240- 13	口径8.7 残存高4.2	体部は上外方にのび、口縁部はやや 内彎して上外方にのびる。端部は丸 くおさめる。底体部は深く、底部は やや丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。1mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。外面一部に自然釉付着。
杯身	240- 14	受部径13.0 残存高2.7 T高0.8 T角度34°30′	たちあがりは内傾したのち端部付近 でやや上方にのびる。端部はやや丸 くおさめる。受部はほぼ水平にの び、端部は丸くおさめる。たちあが り基部内面で非常にあまい段を成 す。底体部は浅い。底部下半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面下半不明。他は回転ナデ調 整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一灰褐色。胎土:密。 1~2mm の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:1/16。反転復 元。外面灰かぶり。
杯身	240- 15	口径10.2 受部径12.6 残存高3.3 T高0.6 T角度45°30′	たちあがりは内傾したのち中位で上 内方にのびる。端部は丸くおさめ る。受部は外上方にのび、端部は丸 くおさめる。受部は外上方にのび、 端部は丸くおさめる。底体部はやや 深い。底部下半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面下半不明。他は回転ナデ調 整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰橙 黄色。胎土:密。チャートを若干 含む。焼成:やや不良。残存: 1/12。反転復元。

 杯 身		口径10.0 受部径12.2 残存高2.4 T高0.6 T角度37°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや丸くおさめる。受部は外上方に のび、端部は丸くおさめる。体部は やや内下方に下る。底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面不明。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰黄 褐色。胎土:密。1mm の長石を 若干含む。チャートを若干含む。 焼成:やや良。残存:1/12。反転 復元。
杯身	240- 17	口径10.1 受部径12.6 残存高2.4 T高0.6 T角度41°30′	たちあがりは内傾したのち、端部付近でほぼ直立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、上面でやや凸面を成し、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で非常にあまい段を成す。底体部は浅い。底部はぼ欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面不明。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm の長石をわずか に含む。焼成: 良好。残存: 1/20。 反転復元。内外面一部灰かぶり。
杯身	240- 18	口径11.6 受部径13.6 残存高2.2 T高0.6 T角度35°30′	たちあがりは内傾してのび端部は丸 くおさめる。受部は外上方にのび、 端部は丸くおさめる。底体部は浅 い。底部ほぼ欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面不明。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。'色調:灰褐 色。胎土:密。1mm の長石・石 英をわずかに含む。焼成:良好。 残存:1/10。反転復元。内面灰か ぶり。外面に自然釉付着。
杯蓋	240- 19	口径12.0 残存高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低くやや 丸い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰 色。胎土:密。1mm の長石をわ ずかに含む。焼成:良好。残存: 1/10。反転復元。内外面灰かぶ り。
杯身	240- 20	口径10.7 受部径13.0 器高3.9 T高0.6 T角度53°15′	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのび、端部はやや丸くおさめ る。受部は外上方にのび、端部は丸 くおさめる。底体部はやや深く、底 部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面4/5回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm の長石を若干含 む。チャートを含む。焼成: 良好。 残存: 1/4。合成復元。外面に自 然釉付着。
杯身	240- 21	口径9.8 受部径12.0 器高3.7 T高0.6 T角度44°00′	たちあがりは内傾したのち端部付近で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/5回転ヘラ削り調整。底 部外面2/5(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一暗灰色、外一灰褐色。胎土:密。 1mm の長石をわずかに含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。 内面に自然釉付着。外面灰かぶり。
杯身	240- 22	口径10.6 受部径12.6 残存高3.8 T高0.5 T角度43°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。たちあが り基部内面であまい段を成す。底体 部はやや深く、底部はほぼ平ら。底 部中央欠損。やや焼き歪む。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。底 部外面1/2(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。1mm の長石をわずかに含む。焼成:良好。残存:1/5。反転復元。内外面に自然釉付着。一部灰かぶり。
高杯	240- 23	基部径3.8 残存高4.1	体部は外上方にのびる。口縁部欠 損。底部は浅く平ら。脚部は基部か ら下外方に下る。脚部下半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯部 底部外面回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 橙色。胎土:密。1mm の長石を わずかに含む。焼成:良好。残存: 2/3。一部反転復元。ヘラ記号: 杯部底部内面に「-」あり。

# 表 26 東池居 1 号室第 2 次·第 3 次炔成床面出土遺物観察表

			表 26 東池尻 1 号窯第 2 次・第	3次焼成床面出土遺物観察表	(T はたちあがりを示す)
 器 種	図面 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手 法 の 特 徴	備考
杯蓋	240- 24	口径11.8 器高3.5	体部は下外方に下り、口縁部はやや 外反して下外方に下る。端部は丸く おさめる。天井部は低く丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/3回転ヘラ削り調整。 天井部外面4/9(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗灰色、外一灰色。胎土:密。 1mm の長石を含む。チャートを 含む。焼成:良好。残存:4/5。 内外面灰かぶり。
杯蓋	240- 25	口径9.9 残存高2.6	体部・口縁部はやや下方に下り、端 部は丸くおさめる。天井部は低い。 天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面上半不明。他は回転ナデ 調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎士:密。焼成:良好。残存: 1/5。反転復元。
杯身	240- 26 106- 26	口径10.4 受部径12.2 残存高3.0 T高0.6 T角度35°45′	たちあがりは内彎したのち中位で直 立する。端部は丸くおさめる。受部 は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。底体部は浅い。底部下半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 明灰青色、外一暗灰色。胎土:密。 3mm以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存: 1/4。反転復 元。
短頸壺	240- 27	口径5.8 基部径6.1 体部最大径10.8	口縁部は基部からはほ直立し、端部 は丸くおさめる。肩部は下外方に下 り、体部は下内方に下る。体部・底 部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部 外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm の長石をわずか に含む。チャートを若干含む。 焼成:良好。残存: 1/8以下。反 転復元。
杯身	240- 28	口径13.8 受部径15.6 残存高2.8 T高0.4 T角度46°30′	たちあがりは内傾したのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/3回転ヘラ削り調整。底 部外面1/3(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/5。反転復元。
杯身	240- 29	口径9.4 受部径11.6 残存高2.5 T高0.6 T角度44°45′	たちあがりは内傾したのち端部で上 方にのび、端部は丸くおさめる。受 部は外上方に短くのび、端部は丸く おさめる。底体部は浅く、底部は平 らに近い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2以下回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 暗灰色。 胎土: 密。焼成: 良好。 残存: 1/4。反転復元。

	,				
	240- 30	口径12.0	体部は下方に下り、口縁部は外反し	マキアゲ・ミズビキ成形。天井	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。
杯		残存高2.5	て下外方に下る。端部は丸くおさめ	部外面2/3回転ヘラ削り調整。	胎土:密。1mm の長石を若干含
蓋			る。天井部は低い。天井部上半欠	他は回転ナデ調整。	む。チャートを含む。焼成:良好。
.lini.			損。		残存:1/16。反転復元。内面灰か
					ぶり。
1-	241- 31	口径12.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部	マキアゲ・ミズビキ成形。天井	ロクロ回転:左回り。色調:灰褐
杯		残存高2.3	はやや丸くおさめる。天井部は低	部外面7/9回転ヘラ削り調整。	色。胎土:密。1mm の長石を若
蓋			い。天井部上方2/3欠損。	他は回転ナデ調整。	干含む。チャートを若干含む。焼
					成:良好。残存:1/16。反転復元。
	241- 32	口径9.7	たちあがりは内傾してのび端部は丸	マキアゲ・ミズビキ成形。底部	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰
杯		受部径11.0	くおさめる。受部はやや外上方にの	下方2/3外面不明。他は回転ナ	色。胎土:密。焼成:良好。 残
身		残存高2.6 T 高0.7	び端部は丸くおさめる。底体部は浅	<b>デ調整。</b>	存:1/7。反転復元。
		T 角度24°30′	い。底部下方2/3欠損。		
	241- 33		たちあがりは内彎したのち、中位で	マキアゲ・ミズビキ成形。底部	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰
杯		受部径9.8	直立する。端部は丸くおさめる。受	下方3/4外面不明。他は回転ナ	色。胎土:密。4mm 以下の長石
身		残存高2.1	部はほぼ水平にのび端部はやや丸く	デ調整。	を若干含む。焼成:良好。残存:
7		T 高0.8	おさめる。底体部は浅い。底部下方		1/8。反転復元。
-		T 角度26°00′	3/4欠損。		
	241- 34	口径12.0	たちあがりは内傾したのち、端部で	マキアゲ・ミズビキ成形。底部	ロクロ回転:左回り。色調:灰褐
杯		受部径14.0	やや上内方にのびる。端部はやや丸	外面3/4回転ヘラ削り調整。他	色。胎土:密。1mm の長石を含
4211		残存高2.8	くおさめる。受部は外上方にのび、	は回転ナデ調整。	む。チャートを含む。焼成:良
***		T 高0.4 T 角度49°30′	端部は丸くおさめる。たちあがり基		好。残存:1/8。反転復元。内外
身		1 月及49 30	部内面および体部・底部境界付近内		面灰かぶり。内外面に自然釉付
			面で非常にあまい段を成す。底体部 は浅い。底部下方2/3欠損。		着。
	941 95	D4710 0		l and a second second	
lor*	106- 35	口径10.2 受部径12.2	たちあがりは内傾したのち、中位で	マキアゲ・ミズビキ成形。底部	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰
杯	100 30	支配径12.2 器高3.4	直立する。端部は丸くおさめる。受	外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	青色。胎土:密。焼成:良好。残
身		T 高0.7	める。底体部はやや浅く、底部はほ	半ムノノ 調金。	存:1/4。反転復元。
		T角度27°00′	ぎゃら。底部中央欠損。		
		1 / 1/221 00	141つ0 風中エ八八頂0		

# 表 27 東池尻 1 号窯灰原出土遺物観察表

(T はたちあがりを示す)

					(1 はたちあかりを示す)
器種	図面 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手 法 の 特 徴	備考
杯蓋	241- 36	口径15.2 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや低く 平ち。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/8。反転復元。
杯蓋	241- 37 110- 37	HIN	体部・口縁部は下外方に下り、端部 はやや丸くおさめる。天井部はやや 高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/2(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/2。反転復元。
杯蓋		口径11.6 残存高2.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平 ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/5回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/2(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/2。 ヘラ記号: 天井部外面に 「-」あり。
杯蓋	241- 39 110- 39	口径12.6 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/3回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/6(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一暗灰青色、外一暗灰色。胎土: 密。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。
杯蓋	241- 40	口径10.8 残存高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや低く 平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/5回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/5(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 橙色。胎土:密。1mm の長石を わずかに含む。焼成:良好。残存: 2/3。一部反転復元。
杯蓋	241- 41 110- 41	口径11.4 器高3.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや高く やや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/4回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/3(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一暗灰紫色、外一暗灰色。胎土:密。 3mm 以下の長石多く含む。 焼成:良好。残存:1/3。反転復元。 ヘラ記号:天井部外面に「一」あり。
杯蓋	110- 42		体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。2mm 以下の長 石を若色。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。外面に自然釉付 着。外面灰かぶり。
杯蓋	241- 43	口径12.0 器高3.6	体部・口縁部は内彎して下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/6(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 淡灰色、外一暗灰色。胎土:密。 2mm 以下の長石、石英を多く含む。焼成:良好。残存:1/2。合成 復元。外面に自然釉付着。内面灰 かぶり。受部上面に土器片付着。
杯蓋	241- 44	口径11.6 器高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや低く 平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一灰褐色。胎土:密。 1~2mm の長石、チャートを若 干含む。焼成:良好。残存:1/2。 反転復元。外面に自然釉付着。

 杯 蓋	241- 45	口径11.8 器高3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや低く 平ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰橙色。胎土: 密。1mm の長石を含む。 チャートを含む。焼成: 良好。残存: 1/2。 反転復元。
杯蓋	241- 46 110- 46	口径11.2 器高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部 はやや丸くおさめる。天井部はやや 高くやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/5回転ヘラ削調整。天 井部外面1/5(天井部中央)未調 整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一暗灰色。 胎土:密。 1~3mm の長石を含む。焼成: 良好。残存:1/2。一部反転復元。 外面に自然釉付着。天井部外面に 窯壁片熔着。内面灰かぶり。
杯蓋		口径11.2 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低くやや 丸い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/4回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一灰色。胎土:密。1~ 2mm の長石を含む。チャートを 含む。焼成:良好。残存:1/3。 反転復元。外面に自然釉付着。
杯蓋	241- 48	口径10.6 残存高2.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。 天井部はやや高 い。 天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 1~2mm の長石をわずか に含む。焼成:良好。残存: 1/4。 反転復元。
杯蓋	241- 49 110- 49	口径11.8 器高3.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。 天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。1mm 以下の長 石を若下含む。焼成:良好。残存: 1/3。反転復元。内外面に自然釉 付着。
杯蓋	241- 50 110- 50	口径10.6 器高3.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平ら に近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰紫色、外一淡灰青色。胎土: 密。焼成:良好。残存:1/2。反 転復元。外面灰かぶり。
杯 蓋 	241- 51	口径11.2 残存高2.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。 天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/5。反転復元。
杯蓋	241- 52 110- 52	口径10.8 器高3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや低く 平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/3回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/6(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一暗灰色。胎土:密。 1~2mm の長石、チャートを若 干含む。焼成:良好。残存:ほぼ 完形。一部反転復元。外面に自然 釉付着。
杯蓋	241- 53 111- 53	口径12.8 器高2.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。 天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/4回転ヘラ削り調整。 天井部外面3/8(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一暗灰色、外一暗灰音色。胎士:密。 3mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存:2/3。
杯蓋	241- 54	口径9.8 残存高2.3	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低い。天 井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm 以下の長石・石 英を若干含む。チャートを含む。 焼成: 良好。残存: 1/4。反転復 元。外面に自然釉付着。
杯 蓋 	241- 55	口径10.2 残存高3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平 ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/5。反転復元。
壺 蓋 ———————————————————————————————————	241- 56	口径11.4 残存高2.3	体部は下方に下り、口縁部は外反して下外方に下る。端部はやや内傾する凹面を成す。天井部は低く平ら。 天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗青 灰色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/5。反転復元。
杯蓋	241- 57	口径11.6 残存高2.5	体部・口縁部は下方に下り、端部は 丸くおさめる。天井部は低く平ら。 天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2以下回転ヘラ削り調 整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗青 灰色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/8。反転復元。
杯蓋	241- 58	口径10.0 残存高2.2	体部・口縁部は垂直に下り、端部は やや丸くおさめる。天井部は低く平 ら。天井部上半欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2以下回転ヘラ削り調 整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:外一 暗青灰色、内一暗灰色。胎土:密。 焼成:良好。残存:1/8。 反転復 元。
杯蓋	241- 59	口径8.8 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部 はやや丸くおさめる。天井部は低く 平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。ヘラ記号: 天井部外面に「-」あり。
壺 蓋	241- 60	口径7.4 器高2.8	体部は垂直に下り、口縁部は外反して下外方に下る。端部はやや内傾する平面を成す。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/3回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/3(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。
杯蓋	242- 61 106- 61	口径11.9 器高3.2	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。 天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 明灰青色、外一暗灰色。胎土:密。 2mm 以下の長石を多く含む。焼 成:良好。残存:1/2。
杯蓋	242- 62 106- 62		体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや低く やや丸い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面6/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。

—— 杯 蓋	242- 63 106- 63	器高3.9	体部は垂直に下り、口縁部は外反してやや下外方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はや不3円	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面4/7回転ヘラ削り調整。 天井部外面2/7(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一明灰青色、外一暗灰色。胎土:密。 5mm以下の艮石を若干含む。焼成:良好。残存:1/2。反転復元。
杯	242- 64 107- 64	口径12.2 器高3.8	井部中央はやや焼け歪み凹む。 体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部はやや低く 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/3(頂部)未調整。	四夕口回転: 左回り。色調: 内一 明灰青色、外一暗灰青色胎土: 密。 3mm以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存: 1/2。合成復元。
蓋	242- 65	口径11.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部	他は回転ナデ調整。 マキアゲ・ミズビキ成形。天井	ヘラ記号: 天井部外面に「×」 あり。 ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。
杯 蓋 	107- 65	器高3.7	は丸くおさめる。天井部は低くやや 丸い。	部外面1/3回転ヘラ削り調整。 天井部外面1/2(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	胎土:密。1mm の長石をわずか に含む。焼成:良好。残存:2/5。 一部反転復元。ヘラ記号:天井部 外面に「=」あり。
杯蓋	1	器高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低くやや 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/3回転ヘラ削り調整。 天井部外面2/3(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。6mm 以下の艮 石を若干含む。焼成:良好。残存: 1/2。ヘラ記号: 天井部外面に 「×」あり。
杯身	242- 67 107- 67	口径11.4 受部径13.2 器高3.7 T高0.6 T角度28°00′	たちあがりは内傾したのち端部付近でほぼ直立する。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面2/3(底部中央)未調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。5mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。残存: 1/3。反転復元。ヘラ記号:底部 外面に「±」あり。
杯身	242- 68 107- 68	口径9.6 受部径12.0 残存高3.1 T高0.5 T角度51°00′	たちあがりは内傾したのち中位で上 内方にのびる。端部はやや丸くおさ める。受部は外上方にのび、端部は 丸くおさめる。たちあがり基部内面 で段を成す。底体部は浅く、底部は ほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/5回転ヘラ削り調整。底 部外面1/5(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一淡灰色。胎土:密。 1mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存:1/3。反転復元。へ ラ記号:底部外面に「=」あり。 たちあがり一部に自然釉付着。
杯身	242- 69 107- 69	口径9.8 受部径12.1 器高3.5 T 高0.5 T 角度52°15′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや鋭い。受部は外上方にのび、端 部は丸くおさめる。たちあがり基部 内面で非常にあまい段を成す。底体 部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/9回転ヘラ削り調整。底 部外面1/3(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:内一 灰色、外一淡灰色。胎土:密。 1~4mm の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:1/3。合成復元。 受部上面に杯蓋口縁部片熔着。外 面灰かぶり。外面に自然釉付着。
杯身	242- 70 107- 70	口径10.0 受部径11.9 器高3.6 T高0.6 T角度37°00′	たちあがりは内彎したのち端部付近で直立する。端部はやや丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面であまい段を成す。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 淡灰色。胎土: 密。1~2mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: ほぼ完形。
杯身		口径10.0 受部径12.4 器高3.5 T高0.6 T角度48°00′	たちあがりは内傾したのち端部で上 内方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸 くおさめる。たちあがり基部内面で 段を成す。底体部は浅く、底部はほ ば平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/4回転ヘラ削り調整。底 部外面5/8(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰色。胎土:密。チャートを含む。 焼成:良好。残存:1/4。反転復元。ヘラ記号:底部外面に「=」 あり。
杯身		口径11.0 受部径13.2 残存高3.1 T高0.7 T角度42°00′	たちあがりは内傾してのび端部は丸 くおさめる。受部は外上方にのび、 端部は丸くおさめる。たちあがり基 部内面であまい段を成す。底体部は 浅い。底部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm の長石を若干含 む。チャートを若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。ヘラ 記号: 底部外面に「-」あり。外 面一部灰かぶり。
杯身		口径10.8 受部径13.0 器高3.1 T高0.5 T角度43°30′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや鋭い。受部は外下方にのび端部 はやや丸くおさめる。たちあがり基 部内面で段を成す。底体部は浅く、 底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/3回転ヘラ削り調整。底 部外面1/2(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰色。胎土:密。1mm の長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。ヘラ記号:底部外面に「×」あり。内外面一部灰かぶり。
杯身		口径10.9 受部径12.8 器高3.3 T高0.6 T角度38°30′	たちあがりは内傾したのち、端部でやや上内方にのびる。端部はやや鋭い。受部は外上方にのび、上面で凸面を成し、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で非常にあまい段を成す。底体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/5回転ヘラ削り調整。底 部外面2/5(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm の長石・石英を 若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。 一部合成復元。 外面に自然釉付 着。
杯身		口径9.6 受部径11.4 器高3.6 T高0.5 T角度38°00′	たちあがりは内傾してのび端部は丸 くおさめる。受部は外上方にのび端 部はやや丸くおさめる。たちあがり 基部内面でややあまい段を成す。底 体部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/2。反転復元。
杯身	107- 76	口径10.2 受部径12.2 器高3.0 T高0.5 T角度46°00′	たちあがりは内傾したのち端部で上 内方にのびる。端部はやや丸くおさ める。受部は外上方にのび、端部は 丸くおさめる。たちあがり基部内面 で段を成す。底体部は浅く、底部は ほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面6/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm の長石を若干含 む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転 復元。内外面一部に自然釉付着。

杯身	242- 77 107- 77	口径11.5 受部径12.8 器高3.0 T高0.5 T角度36°00′	たちあがりは内傾したのち端部付近でやや上内方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面で非常にあまい段を成す。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/4回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:明灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/4。合成復元。外面に自然 釉付着。
杯身	242- 78	口径11.4 受部径13.8 器高3.1 T高0.7 T角度40°30′	たちあがりは内傾したのち外面にあまい段を成して上内方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。たちあがり基部内面であまい段を成す。底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/5回転ヘラ削り調整。底 部外面3/5(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。1mm の長石を 若干含む。 焼成:良好。残存: 1/8。 反転復元。外面一部に自然 釉付着。
杯身	242- 79	口径10.8 受部径13.0 残存高3.3 T高0.6 T角度45°00′	たちあがりは内傾したのち中位で上 内方にのびる。端部は丸くおさめ る。受部は外上方にのび、端部は丸 くおさめる。たちあがり基部内面で ややあまい段を成す。底体部は浅く、 底部は平らに近い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/5回転ヘラ削り調整。底 部外面2/3(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1~2mm の長石を若 干含む。焼成: 良好。残存: 1/4。 反転復元。外面灰かぶり。
杯身	242- 80	口径9.8 受部径12.2 残存高3.6 T高0.6 T角度42°30′	たちあがりは内傾したのち中位で上 内方にのびる。端部はやや丸くおさ める。受部は外上方にのび、上面で やや凸面を成し、端部はやや丸くお さめる。たちあがり基部内面であま い段を成す。底体部は浅く、底部は 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。底 部外面1/3(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。1~2mmの長石 を含む。チャートを含む。焼成: 良好。残存:1/4。反転復元。外 面に窯壁片付着。内外面灰かぶり。
杯身	242- 81	口径10.3 受部径12.0 残存高3.4 T高0.5 T角度32°30′	たちあがりは内傾したのち低位で直 立する。端部は丸くおさめる。受部 は外上方にのび、端部は丸くおさめ る。たちあがり基部内面でややあま い段を成す。底体部は浅く、底部は 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面4/7回転ヘラ削り調整。底 部外面2/7(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 明灰青色、外一淡灰色。胎土:密。 焼成:良好。残存:1/4。反転復 元。
杯身	242- 82 107- 82	口径9.4 受部径12.0 残存高3.5 T高0.6 T角度47°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや鋭い。受部は外上方にのび、端 部は丸くおさめる。たちあがり基部 内面で非常にあまい段を成す。底体 部は浅く、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/4回転ヘラ削り調整。底 部外面1/4(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰青色、外一淡灰色。胎土:密。 チャートを若干含む。焼成:良 好。残存:1/2。反転復元。受部 上面に杯蓋口縁部片熔着。外面に 窯壁片付着。外面灰かぶり。
杯身	242- 83 103- 83	口径9.9 口径(内径)9.0 器高4.0	体部はやや上内方にのび、口縁部は 上外方にのびる。端部はほぼ平面を 成す。底体部はやや深く、底部はほ ぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/9回転ヘラ削り調整。底 部外面1/2(底部中央)ヘラ切り 未調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。1mm の長石を若 下含む。チャートを若干含む。焼 成:良好。残存:1/3。一部反転 復元。ヘラ記号: 底部外面に 「一」あり。外面に窯壁片付着。 内外面灰かぶり。
杯身	242- 84 103- 84		体部・口縁部は上外方にのび、端部 は丸くおさめる。のびる。端部は丸 くおさめる。底体部は浅く、底部は 平らに近い。体部・底部境界内面で あまい段を成す。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/5(底部中央)ヘラ切り未 調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。1mm の長石を若干含む。焼成:良好。残存:1/4。 反転復元。ヘラ記号:底部外面に「=」あり。底部外面に窯壁片熔着。外面一部に自然釉付着。
杯身	242- 85 103- 85	,	体部は上外方にのび、口縁部は直立 する。端部はやや丸くおさめる。底 体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/5回転ヘラ削り調整。底 部外面3/5(底部中央)ヘラ切り 未調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: やや密。1~2mm の長石 を多く含む。チャートを多く含 む。焼成:良好。残存:1/2。合 成復元。口縁部外面一部に自然釉 付着。
杯 身	243- 86 111- 86		たちあがりは内傾してのび、端部は やや丸くおさめる。受部は外上方に のび、端部は丸くおさめる。底体部 はやや深く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。3mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存: 2/3。反転復元。ヘラ記号:底部外面に「×」あり。
杯 身 	243- 87 111- 87	受部径12.0 器高3.1 T高0.5 T角度47°30′	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのび、端部はやや鋭い。受部は 水平にのび、端部はやや丸くおさめ る。底体部は浅く、底部は平ら。底 部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/4回転ヘラ削り調整。底 部外面1/2(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗灰青色、外一暗灰褐色。胎土: 密。焼成:良好。残存:1/3。反 転復元。ヘラ記号:底部外面に 「一」あり。
杯身	111- 88	残存高3.0 T高0.4 T角度44°15′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや丸くおさめる。受部は外上方に のび、端部は丸くおさめる。底体部 は浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面1/2以下回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/5。反転復元。外面一部に 自然釉付着。灰かぶり。
杯身	243- 89	口径10.7 受部径13.0 器高3.4 T高0.7 T角度37°45′	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのび、端部はやや鋭い。受部は やや外上方にのび、端部はやや鋭 い。底体部はやや浅く、底部は平 ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面3/5回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一淡灰色。胎土:密。 1mm の長石を若干含む。焼成: 良好。残存:1/2。反転復元。外 面に自然釉付着。灰かぶり。

杯身	243- 90	口径10.2 受部径12.6 残存高3.3 T高0.6 T角度50°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや丸くおさめる。受部は外上方に のび、端部は丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/5以下回転ヘラ削り調 整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一灰色。胎土:密。1~ 2mm の長石を含む。 焼成: 良 好。残存:1/3。 反転復元。外面 に自然釉付着。灰かぶり。
杯身	243- 91	口径9.6 受部径12.2 残存高3.4 T 高0.6 T 角度49°15′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや鋭い。受部は外上方にのび、端 部はやや鋭い。底体部はやや浅く、 底部は平らに近い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。底 部外面1/4(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。1~2mm の長石を含 む。焼成:良好。残存: 1/2。反 転復元。灰かぶり。受部上面に土 器片付着。
		口径10.8 受部径13.2 器高3.7 T高0.7 T角度38°15′	たちあがりは内傾したのち中位で上 内方にのび、端部はやや鋭い。受部 は外上方にのび、端部は鋭い。底体 部はやや深く、底部は平ら。底部中 央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。底 部外面1/2(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 内一暗灰紫色、外一淡灰青色。胎土: 密。 3mm 以下の長石を若干含む。焼成: 良好。残存: 1/2。反転復元。ヘラ記号: あり。
杯身	243- 93	口径10.6 受部径12.5 残存高2.9 T高0.5 T角度36°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや鋭い。受部はやや外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 ・石英を含む。チャートを含む。 焼成:良好。残存:1/5。反転復 元。外面に自然釉付着。灰かぶり。
	243- 94 111- 94		たちあがりは内傾したのち端部で上 方にのび、端部は鋭い。受部はやや 外上方にのび、端部は丸くおさめ る。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/5回転ヘラ削り調整。底 部外面1/5(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/3。灰かぶり。内外面に窯壁片 熔着。
杯身	243- 95	口径10.6 受部径12.8 残存高3.0 T高0.4 T角度50°45′	たちあがりは内傾したのち端部で上 方にのび、端部はやや鋭い。受部は 外上方にのび、端部は丸くおさめ る。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/5以下回転ヘラ削り調 整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 紫色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。
1	243- 96 111- 96	口径10.0 受部径12.2 器高3.6 T高0.7 T角度37°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は 鋭い。受部は外上方にのび、端部は 丸くおさめる。底体部はやや深く、 底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。底 部外面1/4(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗灰紫色、外一暗灰青色。胎土: 密。焼成:良好。残存:1/2。反 転復元。外面に窯壁片熔着。
杯身	243- 97	口径9.3 受部径11.6 器高3.1 T高0.7 T角度46°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸い。受部は外上方にのび、端部は 丸くおさめる。底体部は浅く、底部 は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/3回転ヘラ削り調整。底 部外面1/9(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一暗灰色。胎土:密。 1mm の長石をわずかに含む。焼 成:良好。残存:1/3。 反転復元。 受部上面に土器片熔着。
杯身	243- 98 111- 98	口径11.0 受部径12.4 器高2.9 T高0.5 T角度20°00′	たちあがりは内傾したのち低位で上 方にのび、端部はやや鋭い。受部は ほぼ水平にのび、端部は丸くおさめ る。底体部は浅く、底部は平ら。や や焼き歪む。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/4回転ヘラ削り調整。底 部外面1/2(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/2。反転復元。ヘラ記号: 底部外面に「一」あり。
杯身	243- 99	口径10.6 受部径12.4 器高2.6 T高0.6 T角度39°00′	たちあがりは内傾したのち端部付近で上方にのび、端部は丸くおさめる。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ち。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/5回転ヘラ削り調整。底 部外面2/5(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 紫色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/5。反転復元。
杯身	243-100 111-100		たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのび、端部は丸くおさめる。受 部は水平にのび、端部は丸くおさめ る。底体部は浅く、底部は平ら。や や焼き歪む。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/5回転ヘラ削り調整。底 部外面3/5(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。
杯 身	243-101	口径9.6 受部径11.8 残存高2.8 T高0.7 T角度42°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部はやや外上方に のび、端部は丸くおさめる。底体部 は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/5回転ヘラ削り調整。底 部外面2/5(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰青色。外一灰色。胎土:密。 1mm の長石をわずかに含む。焼 成:良好。残存:1/3。反転復元。 外面に自然釉付着。
杯身	243-102	口径9.6 受部径13.6 残存高2.5 T高0.7 T角度31°30′	たちあがりは内傾したのち端部付近で上方にのび、端部はやや鋭い。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6以下回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm 以下の長石をわ ずかに含む。焼成: 良好。残存: 1/3。反転復元。内面灰かぶり。
杯身	243-103	口径9.2 受部径11.4 器高3.1 T高0.6 T角度45°45′	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのび、端部は丸くおさめる。受 部は上外方にのび、端部は丸くおさ める。底体部は浅く、底部はやや丸 い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面4/7回転ヘラ削り調整。底 部外面2/7(底部中央)ヘラ切り 未調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰紫色。胎土:密。焼成:良好。残存:1/3。反転復元。ヘラ記号:底部外面に「一」あり。
杯身	243-104	口径8.8 受部径10.4 器高3.4 T高0.4 T角度33°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は やや浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/5回転ヘラ削り調整。底 部外面1/5(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一暗灰色。胎土:密。 焼成:良好。残存:1/4。反転復 元。ヘラ記号:底部外面に「一」 あり。
	1		J		

杯身	243-105	口径9.8 受部径12.2 残存高3.1 T高0.6 T角度44°45′	たちあがりは内傾したのち中位で上 内方にのび、端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部はやや丸 くおさめる。底体部は浅い。底部欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/5以下回転ヘラ削り調 整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm 以下の長石をわ ずかに含む。焼成: 良好。残存: 1/4。反転復元。ヘラ記号: 底部 外面に「一」あり。
杯身	243-106	口径9.6 受部径11.4 器高2.2 T高0.6 T角度32°15′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2(底部中央)ヘラ切り未 調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。1mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。残存: 1/5。反転復元。底体部外面灰かぶり。
杯身	243-107	口径8.2 受部径10.8 残存高3.2 T高0.7 T角度44°45′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや鋭い。受部は外上方にのび、端 部はやや鋭い。底体部は浅く、底部 は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/3回転ヘラ削り調整。底 部外面1/3(底部中央)ヘラ切り 未調整。底体部外面にやや強い ナデによる布目痕あり。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm 以下の長石をわ ずかに含む。焼成: 良好。残存: 1/7。反転復元。受部上面灰かぶ り。
杯身	243-108	口径8.6 受部径10.6 器高3.0 T高0.4 T角度30°30′	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのび、端部は丸くおさめる。受 部は外上方にのび、端部はやや丸く おさめる。底体部は浅く、底部は平 ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/3(底部中央)未調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。
杯身	243-109	口径7.0 受部径9.0 残存高3.2 T高0.6 T角度36°00′	たちあがりは内傾したのち中位で直立し、端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/4(底部中央)未調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗灰青色、外一暗灰色。胎土:密。 焼成:良好。残存:1/3。 反転復 元。
杯身	243-110	口径8.0 受部径9.6 残存高3.4 T高0.4 T角度30°30′	たちあがりは内傾したのち中位で直 立し、端部は丸くおさめる。底体部 はやや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/5回転ヘラ削り調整。底 部外面3/5(底部中央)ヘラ切り 未調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/2。反転復元。
踉	244-111 108-111	基部径3.4 体部最大径9.5 残存高13.2	頸部はやや上外方にのびたのち外彎して上外方にのびる。口縁部・頸部境界にやや鈍い沈線をめぐらす。口縁部欠損。肩部は外下方に下り、強く張り出す。体部は下内方に下り、底部は平ら。体部最大径は上方1/3に位置し、ほぼ中位の高さに円孔を穿つ。	マキアゲ・ミズビキ成形。底体 部外面9/10回転ヘラ削り調整。 体部上半のち回転ナデ調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一灰青色。胎土:密。 1~2mm の長石を若干含む。焼成:良好。残存:5/6。一部反転 復元。頸部内面・頸部外面一部・ 肩部外面灰かぶり。器内内に、外厚 1.1cmを測る粘土塊が入っっていた。体部の円孔を穿つ際に器内に 落ち込んだものと思われる。外面 に調整痕が認められ、底体部へ ラ削り調整とナデ調整を施したの ちに穿孔したようである。
高杯	244-112 108-112	脚底径11.1 基部径3.1 残存高10.4 脚高9.7	脚部はやや下内方に下ったのち外反しつつ下外方に下り、裾部で外方にのびる。端部はやや外傾する平面を成し、端部内面および裾部内面で接地する。中位に2条の鈍い沈線を、裾部上方に1条の非常に鈍い沈線を、めぐらす。2段3方向に、粗く切り込だ幅2mm以下のスリット状のスカシを有する。杯底部が一部残存。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。脚部内面にしぼり目あり。杯部と脚部の接合および脚部中位の沈線を施したのちスカシを切り込む。内外面ともスカシを開けたのちその周囲にナデ調整を行っていない。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰青色。胎土: 密。1mm の長石をわずかに含む。焼成: 良好、堅緻。残存: 脚部の3/4。一部反転復元。裾部外面・杯底部内面灰かぶり。
高杯	244-113 108-113	脚底径13.7 脚底径(内径)12.2 基部径3.7 残存高11.8 脚高11.8	脚部は下方に下ったのち下外方に開いて下り、裾部で外上方にのびる。端部はほぼ垂直な平面を成し、裾部下面で非常にあまい段を成し、裾部内面で接地する。中位に2条の非常に鈍い沈線をめぐらす。2段2方向に長方形スカシを有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転 ナデ調整。脚部内面にしぼり目 あり。脚部内面上半でマキアゲ 痕が顕著。杯部と脚部の接合お よび脚部中位の沈線を施したの ちスカシを切り込む。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰青色、外一暗灰青色。胎土: 密。1~2mm の長石を若干含む。 チャートを若干含む。焼成:良 好。残存:脚部の1/2以下。合成 復元。外面一部に自然釉付着。
高杯	244-114	脚底径5.8 基部径3.3 残存高3.6 脚高2.5	杯底部は平ら。体部以上欠損。 脚部 はやや内彎して下外方に下り、裾部 で外方にのびる。端部は垂直な凹面 を成し、端部内面および裾部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/5回転ヘラ削り調整。底 部外面1/2(底部中央)未調整の ち脚部接合時に回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰青 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を若干含む。チャートを若干含 む。焼成:良好。残存:2/3。一 部反転復元。内外面一部灰かぶ り。
長頸壺		頸部基部径5.4 体部最大径17.7 脚部基部径8.0 脚底径10.6 脚底径(外径)11.4 残存高14.4 脚高2.9	口頸部欠損。肩部は外下方に下って 張り出し、体部はやや内彎して下内 方に下り、底部は丸い。体部最大径 は上方2/5に位置する。脚部はやや 外反して下外方に下り、裾端部は外 傾する平面を成し、端部内側で接地 する。肩部・体部境界に2条の鈍い 沈線をめぐらし、その間に刺突文を 有す。なお、肩部・体部境界の沈線 は、刺突文を施したのちにめぐらし ている。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面・体部外面下半回転へラ削 り調整。体部外面下半のち回転 ナデ調整。なお底部外面は脚部 接合時に基部付近のみ回転ナデ 調整。他は回転ナデ調整。	ワクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一暗灰褐色。胎土:密。 1~2mm の長石を含む。1mm の 石英をわずかに含む。チャートを 含む。焼成:良好。残存:2/5。 一部反転復元。肩部外面・体部外 面一部・脚部外面・内面一部灰か ぶり。内外面一部に自然釉付着。

平瓶	244-116 109-116	口径6.6 基部径6.1 体部最大径21.3 残存高11.4	口頸部は上外方にのび、端部は丸く おさめる。体部上面は丸みをもって 外下方へ張り出し、胴部は下内方に 下る。体部上面中央部・胴部下半・ 底部欠損。なお、口頸部は、体部上 面粘土板の周縁が基部の中心点を通 る位置で接合されている。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部 上面・肩部外面3/5・胴部外面 カキ目調整。他は回転ナデ調 整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰青色、外一淡灰青色。胎土: 密。4mm 以下の長石を若下含む。チャートを若干含む。焼成: 良好。残存:1/6。一部反転復元。 口頸部内面・体部上面外面灰か ぶり。体部上面外面に自然釉付 着。
短頸壺	244-117 109-117	口径6.4 基部径7.0 体部最大径12.2 残存高9.5	口縁部は基部からやや上外方にのびる。端部はほぼ平面を成して内下方に内傾する。肩部は下外方に緩く張り出し、体部は内彎して下内方に下る。底部は内下方に下る。底部下半欠損。体部最大径は上方3/7に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面・体部外面1/5回転ヘラ削 り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡青 灰色。胎土:密。2mm 以下の長 石を若干含む。チャートを若干含 む。焼成:良好、堅緻。 残存: 4/5。
獲	244-118	口径27.9 残存高8.7	頸部下方1/3以下欠損。口頸部は上外方にのび、口縁部下で外下方にのびたのち外上方にのび、内上方にのび、ややあまい段を成して上外方にのび、やや内彎して上内方にのび、端部は丸くおさめる。頸部上方1/3に2条、頸部下方1/3に2条の鈍い沈線をめぐらし、その間に1条の非常に鈍い沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm 以下の長石をわ ずかに含む。 チャートを若干含 む。焼成: 良好。残存: 口頸部の 1/7以下。反転復元。
壺	245-119	口径12.0 基部径10.6 残存高3.3	口頸部は外反して上外方にのび、口 緑端部は丸くおさめる。肩部は下外 方に下る。体部以下欠損。	肩部外面カキ目調整。のち他を 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 口頸部の1/5以下。反転復元。口 頸部外面、に自然釉付着。
壺	245-120	口径8.6 基部径8.0 体部最大径15.2 残存高4.2	口頸部は外反して上外方にのびる。 口縁部は内面上端でやや平面を成 し、端部は丸くおさめる。体部下半 以下欠損。	回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗灰色。外一暗灰青色。胎土:密。 1mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:1/20。反転復 元。
短頸壺	245-121	口径4.8 基部径4.2 体部最大径7.2 残存高8.3	口縁部は基部からやや上外方にのびる。端部はほぼ平面を成す。肩部は下外方に下り、体部は下内方に下る。底部はほぼ欠損。肩部中位に非常に鈍い2条の沈線をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。5mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。残存: 1/6。反転復元。
短頸壺	245-122	口径9.4 基部径10.0 残存高4.3	口縁部は基部から上方にのびる。端 部は丸くおさめる。肩部は外下方に 下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗灰色、外一淡灰青色。胎土:密。 2mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:1/10。反転復 元。
短頸壺	245-123	口径7.8 基部径8.4 体部最大径15.4 残存高3.1	口縁部は基部から上方にのびる。端 部は丸くおさめる。肩部はやや外彎 して外下方に強く張り出し、体部は 下内方に下る。体部以下欠損。		ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎上:密。1mm の長石をわずか に含む。焼成: 良好。残存: 1/10。 反転復元。
短頸壺	245-124	口径7.0 体部最大径13.9 残存高9.5	口縁部は基部から上内方にのびる。 端部は丸くおさめる。肩部は外下方 に張り出し、体部は下内方に下り、 底部はやや丸い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色、外一灰褐色。胎土:密。 3mm 以下の長石を含む。1mm の石英をわずかに含む。焼成:良 好。残存:1/3。反転復元。外面 に自然釉付着。外面に土器片付 着。
提瓶	245-125	口径9.2 基部径5.8 残存高4.9	口頸部は上外方にのび、端部は丸く おさめる。肩部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:灰 色。胎土:密。2mm以下の長石 を含む。焼成:良好。残存:口頸 部の1/3。反転復元。自然釉付 着。
提瓶	245-126	口径6.8 残存高4.6	口頸部は上外方にのび、端部は丸く おさめる。基部以下、肩部・体部・ 底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗灰青色、外一暗灰色。胎土: 密。焼成:良好。残存:口頸部の 3/5。
提瓶	245-127	口径9.0 基部径7.2 残存高5.1	口頸部は上外方にのび、端部は丸く おさめる。肩部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。1mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 口頸部の1/3。反転復元。
長頸壺	ł.	基部径5.0 最大径18.8 残存高12.5	口頸部欠損。肩部は外下方に張り出し、体部は下内方に下る。底部・脚部欠損。体部最大径は上方1/3に位置する。肩部・体部境界に2条の鈍い沈線を、体部上方2/5の位置に2条の鈍い沈線をめぐらし、その間に刺突文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色。外一暗灰色。胎土:密。 3mm 以下の長石を多く含む。焼 成:良好。残存:1/7。反転復元。 外面に自然釉付着。

高杯	245-129	残存高6.8	脚部は下方に下ったのち下外方に開いて下る。脚部基部付近から上方と 裾部は欠損する。中位に2条の非常に鈍い沈線をめぐらす。2段2方向 にスリット状スカシを有する。中位 の沈線を施したのちにスカシは切り 込まれている。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転 ナデ調整。脚部内面にしぼり目 あり。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。長径 7mm の長石を1ヶ含む。2mm 以下の長石を若干含む。チャートを若干含む。焼成:良好。残存:1/5。
高杯	245-130	脚底径10.8 残存高5.0	脚部上方1/2以上欠損。脚部は下外方に開いて下り、裾部で外方にのびる。裾端部は丸くおさめ、裾端部と裾部内面で接地する。裾部上方に非常に鈍い1条の沈線をめぐらす。2 段3方向に長方形スカシを有すると思われる。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転 ナデ調整。脚部内面にしぼり目 あり。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰青色、外一淡灰色。胎土:密。 1mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。残存:脚部の1/5。反 転復元。裾部外面に自然釉付着。
高杯	245-131	基部径3.9 残存高9.0	脚部は下方に下ったのち、下外方に 開いて下る。裾部欠損。中位に2条 の鈍い沈線をめぐらす。沈線の間隔 は広い。スカシはない。杯部は底部 中央のみ残存。底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。脚部内面にしぼ り目あり。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。1mm の長石を若干含 む。焼成:良好。残存: 1/3。一部 反転復元。杯部内面・脚部外面一 部灰かぶり。
高杯	245-132	基部径2.9 残存高6.9	脚部は下方に下ったのち、下外方に開いて下る。裾部欠損。中位に2条の鈍い沈線をめぐらす。スカシはない。杯部は底部中央の脚部基部付近のみ残存。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転 ナデ調整。脚部内面にしぼり目 あり。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。チャートを若干含む。 焼成: 良好。残存: 1/4。一部反 転復元。脚部外面灰かぶり。
高杯	245-133	脚底径11.8 残存高2.9	脚部裾部のみ残存。脚部は下外方に 開いて下り裾部上方であまい段を成 して2条の鈍い沈線をめぐらし、下 外方に下ったのち裾端部付近で外反 する。端部は内傾する平面を成して 外側で接地する。長方形スカシを有 する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 淡灰 青色。胎土: 密。1mm の長石を 若干含む。焼成: 良好。残存: 脚 裾部の1/7。反転復元。
高	245-134	脚底径5.7 基部径3.7 残存高2.6	杯底部はほぼ平ら。体部以上欠損。 脚部は下外方に下り、框部で外下方 にのびる。裾端部は外傾する凹面を 成し、端部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰青 色。胎土:密。チャートを含む。 焼成:良好。残存:1/6。合成復 元。
高杯	245-135	脚底径5.9 基部径3.6 残存高4.5	杯底部はほぼ平ら。口縁部欠損。脚部は下外方に下ったのち、内面であまい段を成し、裾部で外下方にのびる。裾端部はやや外傾する平面を成し、内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底 部外面回転へラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm の長石を若干含 む。焼成: 良好。残存: 1/5。へ ラ記号: 杯部内面に「×」あり。 一部灰かぶり。
高杯	245-136	脚底径5.8 基部径3.2 残存高3.8	杯底部はほぼ平ら、杯部上方欠損。 脚部は下外方に下ったのち裾部で外 方にのびる。裾端部は外傾する凹面 を成し、内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯部 底部外面2/3回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色。外一暗灰色。胎土:密。1mm の長石を若干含む。焼成:良好。 残存:2/5。一部反転復元。外面に 自然釉付着。一部灰かぶり。
高杯	245-137	基部径3.7 残存高2.3	杯底部はほぼ平ら、杯部上方欠損。 脚裾部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯部 底部外面回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。1mm 以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成:良好。残存:1/3。一部反転復元。
高杯	245-138	基部径4.8 残存高3.5	杯部欠損。脚部は下外方に開いて下る。脚裾部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内外 一灰橙色、断面一浅橙色。胎土: 密。1mm の長石を含む。チャー トを含む。焼成:不良。残存:脚 部2/3。一部反転復元。
高杯	245-139	基部径4.0 脚底径5.8 残存高3.3	杯底部は平ら。杯部上方欠損。脚部 は下外方に下り、裾部で外下方にの びる。裾端部は外傾する平面を成 し、端部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。 胎土:密。2mm 以下の長石を含む。チャートを含む。焼成:良好。 残存:1/3。合成復元。一部灰か ぶり。
高杯	245-140	基部径3.5 脚底径6.7 残存高4.1	杯底部は平ら。体部・口縁部欠損。 脚部は下外方に下り、裾部で外方に のびる。裾端部は外傾する平面を成 し、内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/4回転へラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 灰色。外一暗灰色。胎土:密。 1mm の長石を若干含む。チャー トを含む。焼成:良好。残存:良 好。一部反転復元。外面に自然釉 付着。
高杯		基部径4.9 脚底径5.0 残存高2.1	杯部欠損。脚部は下外方に下り、裾部で外下方にのびる。裾端部は外傾する凹面を成し、端部内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰 色。胎土:密。1mm の長石をわ ずかに含む。焼成:良好。をわず かに含む。焼成:良好。含む。残 存:1/2。一部反転復元。灰かぶ り。
高杯		基部径3.3 脚底径5.6 残存高2.5	杯部欠損。脚部は下外方に下り、裾 部で外下方に下る。裾端部は外傾す る平面を成し、内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎士: 密。1mm の長石を若干含 む。焼成:良好。残存: 1/2。一部 反転復元。外面灰かぶり。

甕	246-143	口径19.0 基部径16.2 残存高4.4	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部下で外下方に短くのび、口縁部 は外上方にのびたのち内彎して上内 方にのび、口縁部内面に至る。肩部 は外下方に下る。肩部下半以下欠 損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:内一暗灰色、外一淡灰色。 胎土:密。2mm 以下の長石を若 干含む。焼成:良好。残存:口頸 部の1/10。 反転復元。内面一部 自然釉付着。外面灰かぶり。
魙	246-144	口径18.6 基部径4.7 残存高17.4	口頸部は外彎して上外方にのび、口 縁部で外上方にのびたのち上外方に のび、平面を成す。端部は丸くおさ める。肩部は外下方に下る。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:内一暗灰紫色、外一淡灰紫色。胎士:密。焼成:良好。残存: 口頸部の1/4。反転復元。口頸部 外面、灰かぶり。
甕	246-145	口径21.0 残存高5.1 基部径20.2	口頸部は上外方にのび、口縁部下で 外下方に下り、口縁部で内彎しなが ら上外方にのび、内上方にのび、口 縁部内面に至る。肩部は外下方に下 る。肩部一部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 内面同心円タタキ。他は回転ナ デ調整。	色調:内一暗灰色、外一淡灰色。 胎土:密。1mm の長石をわずか に含む。焼成:良好。反転復元。 口頸部外面・肩部内面灰かぶり。 ヘラ記号:口頸部外面に「±」あ り。
甕	246-146	口径22.6 残存高4.9 基部径20.0	口頸部は上外方にのび、口縁部下で 外下方に下り、口縁部で内彎しなが ら上外方にのび、内上方にのび、口 縁部内面に至る。肩部は外下方に下 る。肩部一部・体部・底部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:淡灰青色。胎土:密。焼成: 良好。反転復元。
獲	246-147	口径23.6 残存高3.3	口頸部は上外方にのび、口縁部は外 上方にのび、端部は丸くおさめる。 肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:淡灰色。胎土:密。焼成: 良好。反転復元。
蹇	246-148	口径32.0 残存高3.9	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で外下方にのび、口縁部はや や上外方にのびたのち内傾する凹面 を成す。端部はやや鋭い。口縁部直 下に1条、頸部1/2上方に1条の沈 線をめぐらし、その間に櫛描き斜行 沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:内一灰色。外一暗灰色。胎 土:密。2mm以下の長石を若干 含む。1mm以下の石英を若干含 む。チャートを含む。焼成:良 好。反転復元。外面に自然釉付 着。
蹇	246-149	口径31.6 残存高5.9	口頸部は外反して上外方にのび、口 緑部下で下外方にのび、内傾して上 外方にのび、口縁部内面に至る。1 条の沈線をめぐらし、櫛描き斜行沈 線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。口頸 部外面カキ目調整。他は回転ナ デ調整。	色調:淡灰黄色。胎土:密。 4mm 以下の長石を若干含む。焼成:良好。反転復元。内外面に自 然釉付着。内面灰かぶり。
甕	246-150	口径32.2 残存高6.2	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で下外方にのび、内傾して上 外方にのび、口縁部内面に至る。頸 部直下に2条の沈線をめぐらし、そ の下方に櫛描き斜行沈線文を有す る。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:内一淡灰白色、外一灰色。 胎土:密。1mm の長石を含む。 焼成: 良好。 反転復元。 灰かぶ り。
器台台部	246-151	口径25.0 残存高8.0	体部は上外方にのび、口縁部は上方 にのび、口縁端部は内彎しながら上 方にのびたのち、やや内傾する平面 を成す。底部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。体部 外面タタキのちカキ目調整。体 部内面同心円タタキ。他は回転 ナデ調整。	色調:内一灰色、外一暗灰色。胎 土:密。1mm の長石をわずかに 含む。焼成:良好。反転復元。外 面に自然釉付着。内面灰かぶり。
甕	247-152	口径32.6 基部径19.4 残存高10.8	口頸部は外反して上外方にのび、口 緑部下で下外方にのび、口縁部はや や上外方にのびたのち内傾して口縁 部内面に至る。肩部以下欠損。口縁 部直下および頸部中位に2条の沈線 をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:内一灰褐色、外一暗灰色。 胎土:密。2mm 以下の長石を若 干含む。焼成:良好。反転復元。 灰かぶり。内外面に自然釉付着。
甕	247-153	口径32.6 基部径18.4 残存高11.2	口頸部は外反して上外方にのび、口 緑部下で下外方にのび、口縁部はや や上外方にのびたのち内傾して口縁 部内面に至る。肩部以下欠損。口縁 部直下および頸部中位に2条の沈線 をめぐらす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:暗灰色。胎土:密。焼成: 良好。反転復元。内面灰かぶり。
蹇	247-154	口径55.8 残存高7.2	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で下外方にのびたのち上外方 にのび、口縁部内面に至る。頸部下 方1/3以下欠損。頸部上方に2条、 頸部中位に1条の沈線をめぐらす。 頸部外面、に波状文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整ののちに施文。 他は回転ナデ調整。	色調:灰色。胎土:密。2mm 以 下の長石を若下含む。チャートを 含む。焼成:良好。反転復元。
甕	247-155	口径44.4 残存高5.1	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で下外方にのびたのち内彎し て上外方にのび、口縁部内面に至 る。頸部に1条の沈線を4箇所めぐ らす。頸部中位以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調: 内一灰白色、外一灰色。胎 土: 密。1mm 以下の長石を含 む。1mm 以下の石英をわずかに 含む。焼成:良好。反転復元。外 面に自然釉付着。内面灰かぶり。
甕	247-156	口径42.0 基部径17.0 残存高34.0	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で下外方にのびたのち段を成 して上内方にのび、口縁部内面に至 る。肩部は外下方にのびる。口縁部 直下・頸部1/3上方・頸部1/3下方 に2条の沈線をめぐらし、その間に 櫛描き斜行沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整ののちに施文。 他は回転ナデ調整。	色調:内一暗灰青色、外一暗灰色。胎土:密。4mm以下の長石を若干含む。焼成:良好。反転復元。内面灰かぶり。

獲	248-157	口径20.8 基部径15.4 残存高15.0	口頸部は外反して上外方にのび、口 緑部下で下外方にのび、内彎して上 方にのび口縁部内面に至り、内面で あまい段を成す。頸部中位2箇所に 1条の鈍い沈線をめぐらし、その間 と上下に波状文を有する。肩部以下 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面下方1/3カキ目調整ののち に施文。他は回転ナデ調整。	色調:暗灰色。胎土:密。焼成: 良好。反転復元。内外面一部に自 然釉付着。
甕	248-158	口径28.0 残存高7.7	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で外下方にのびたのち上外方 にのび、口縁部内面に至る。頸部上 方に2条、頸部中位に1条の沈線を めぐらし、その間と口縁部直下に波 状文を有する。頸部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整ののちに施文。 他は回転ナデ調整。	色調:暗灰色。胎土:密。焼成: 良好。反転復元。内外面に自然釉 付着。内外面灰かぶり。
甕	248-159	口径31.2 残存高15.9	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で下外方にのびたのち内彎し て上方にのび、凹面を成して上内方 にのびる。端部は丸くおさめる。頸 部上半の3箇所に3条の沈線をめぐ らし、その間に波状文を有する。基 部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 頸部 外面カキ目調整ののちに施文。 他は回転ナデ調整。	色調:暗灰色。胎土:密。焼成: 良好。反転復元。
甕	248-160	基部径32.8 残存高11.3	口頸部は上外方にのびる。肩部は外下方に下る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面タタキのち回転ナデ調整。 肩部外面タタキ。 肩部内面同 心円タタキ。 他は回転ナデ調 整。	色調:内一灰色、外一暗灰色。胎 土:密。3mm 以下の長石を若干 含む。焼成:良好。合成復元。口 頸部外面自然釉付着。
獲	248-161 112-161	口径45.6 残存高6.3	頸部下半以下欠損。口頸部は上外方 にのび、口縁部下で外方にのびたの ち上内方にのび、端部は丸くおさめ る。口縁部直下に2条の沈線をめぐ らし、その下に1条の沈線をめぐら す。1条の沈線の下方に櫛描き斜行 沈線文を有する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調: 内一淡灰色、外一暗灰青色。胎土: 密。焼成: 良好。反転復元。
甕	249-162	口径48.4 残存高7.5	口頸部は上外方にのび、口縁部下で下外方にのびたのち上内方にのび、端部は丸くおさめる。口縁部直下に2条、頸部に2条の沈線をめぐらし、その間に櫛描き斜行沈線文を有する。頸部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整ののちに施文。 他は回転ナデ調整。	色調:内一淡灰色、外一暗灰色。 胎土:密。焼成:良好。反転復元。
獲	249-163	口径43.6 残存高10.2	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で下方にのびたのち内彎して 上内方にのび、端部は丸くおさめ る。口縁部直下に2条、頸部に2条 の沈線をめぐらし、その間に櫛描き 斜行沈線文を有する。頸部下半以下 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。	色調:内一淡灰黄色、外一暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 口頸部の1/8。反転復元。
甕	249-164	口径52.8 残存高15.4	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で外下方にのび、段を成し、 上外方にのびる。端部は丸くおさめ る。口縁部上方1/3の位置に3条、 頸部中位に3条の沈線をめぐらし、 その間に波状文を有する。基部以下 欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整ののちに施文。 他は回転ナデ調整。	色調:内一淡灰色、外一暗灰色。 胎土:密。2mm の長石を含む。 焼成:良好。反転復元。内面灰か ぶり。外面に自然釉付着。
獲	249-165	口径51.6 残存高10.0	口頸部は上外方にのび、口縁部下で外下方にのび、段を成し、上外方にのび、段を成し、上外方にのびる。端部は丸くおさめる。頸部上方に2条、頸部中位に2条の沈線をめぐらし、その間と口縁部直下に波状文を有する。頸部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整ののちに施文。 他は回転ナデ調整。	色調:内一淡灰色、外一暗灰色。 胎土:密。2mm 以下の長石をわ ずかに含む。焼成:良好。反転復 元。内面灰かぶり。外面に自然釉 付着。
獲	249-166	口径51.6 残存高10.0	口頸部は上外方にのび、口縁部下で下外方にのび、段を成し、上内方にのび、段を成し、上内方にのびる。端部は丸くおさめる。口縁部直下に2条、頸部中位に2条の沈線をめぐらし、その間に櫛描き斜行沈線文を有する。頸部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整ののちに施文。 他は回転ナデ調整。	色調:暗灰褐色。 胎土:密。 2mm 以下の長石をわずかに含 む。焼成:良好。反転復元。
甕	249-167 112-167	口径48.6 基部径16.0 残存高16.0	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で下外方にのび、段を成し、 上内方にのびる。端部は丸くおさめ る。口縁部直下に1条の沈線を4箇 所、頸部上方1/3に3条の沈線をめ ぐらす。肩部は外方に張り出す。肩 部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面タタキのちカキ目調整。頸 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	5mm 以下の長石を若干含む。焼
甕	250-168	口径52.8 基部径51.4 残存高9.4	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で下方に下ったのち、段を成 し、内彎して上外方にのびる。端部 は丸くおさめる。口縁部直下に2 条、頸部に3条の沈線をめぐらす。 3条の沈線の上下に波状文を有する。 頸部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面タタキのちカキ目調整。他 は回転ナデ調整。	色調:淡灰青色。胎土:密。焼成:良好。反転復元。内面一部に 自然釉付着。

难	250-169	口径49.6 残存高12.6	口頸部は外反して上外方にのび、口縁部下で下外方に下ったのち、段を成し、上方にのびる。端部は丸くおさめ、内面であまい段を成す。口縁部直下に2条、頸部上方1/3に2条、頸部中位に2条の沈線をめぐらし、その間に櫛描き斜行沈線文を有する。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整ののちに施文。 他は回転ナデ調整。	色調:内一淡灰色、外一灰色。胎土:密。4mm 以下の長石を含む。1mm の石英を若干含む。チャートを含む。焼成:良好。反転復元。外面に自然釉付着。
獲	250-170	口径49.6 残存高12.6	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で外下方に下ったのち、内彎 して上方にのびる。端部は丸くおさ める。頸部上方1/3に2条、頸部中 位に2条の沈線をめぐらす。頸部上 方1/3の沈線の上下に波状文を有す る。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:内一淡灰色、外一暗灰色。 胎土:密。3mm 以下の長石を含 む。チャートを含む。焼成:良 好。反転復元。外面に自然釉付 着。内外面灰かぶり。
獲	250-171	口径59.8 残存高12.3	口頸部は外反して外上方にのび、口 縁部下で外下方に下ったのち、内彎 して上方にのびる。端部は丸くおさ める。頸部上方1/3に2条、頸部中 位に2条の沈線をめぐらす。頸部上 方1/3の沈線の上下に波状文を有す る。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面タタキ。他は回転ナデ調 整。	色調:内一淡灰色、外一灰色。胎 土:密。3mm 以下の長石を若干 含む。焼成:良好。反転復元。外 面に自然釉付着。内面灰かぶり。
甕	250-172	口径57.0 残存高3.9	口頸部は上外方にのび、口縁部下で 外方にのびたのち、上方にのびる。 端部は丸くおさめる。口縁部直下に 2条の沈線をめぐらす。頸部下半以 下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整。他は回転ナデ 調整。	
甕	250-173	口径59.2 残存高6.6	口頸部は上外方にのび、口縁部下で 下外方にのびたのち、上内方にのび る。端部は丸くおさめる。口縁部直 下に2条の沈線をめぐらし、その下 方に櫛描き斜行沈線文を看する。頸 部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:内一暗灰色、外一暗灰青色。胎土:密。焼成:良好。反転復元。内面灰かぶり。外面一部に自然釉付着。

# 表 28 東池尻 1 号窯灰原 2 次堆積層出土遺物観察表

(T はたちあがりを示す)

器種	図面 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	251-174	口径11.8 残存高3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部 はやや丸くおさめる。天井部はやや 低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面5/9回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 黄色。胎土:密。焼成:不良。残 存:1/5。反転復元。
杯蓋	251-175	口径11.0 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/3。反転復元。ヘラ記号: 天井部外面に「ー」あり。
杯蓋	251-176	口径11.4 残存高3.2	体部・口縁部はやや垂直に下り、端部は丸くおさめる。天井部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/5回転ヘラ削り調整。 天井部外面3/5(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 左回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm 以下の長石を含 む。焼成: 良好。残存: 2/3。 反 転復元。ヘラ記号: 天井部外面に 「-」あり。反転復元。内外面灰 かぶり。
杯蓋	251-177	口径11.4 残存高3.3	体部・口縁部は垂直に下り、端部は 丸くおさめる。天井部はやや低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/7。反転復元。
杯蓋	251-178	口径11.6 残存高3.1	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/3回転ヘラ削り調整。 天井部外面2/3(頂部)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一 灰褐色、外一灰色。 胎土: 密。 2mm 以下の長石をわずかに含 む。焼成: 良好。反転復元。内外 面灰かぶり。
杯蓋	251-179	口径11.6 残存高2.5	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低い。天 井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 淡灰 色。胎土: 密。1mm の長石をわ ずかに含む。焼成: 良好。反転復 元。灰かぶり。
杯蓋	251-180	口径10.4 残存高3.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。天井部はやや高く、やや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2(頂部)未調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/2。反転復元。
 杯 蓋	251-181	口径9.8 残存高2.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平 ら。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/4回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗灰色、外一暗灰青色。胎土:密。 焼成:良好。残存:1/7。反転復 元。
杯蓋	251-182	口径10.6 残存高3.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は低く平 ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面1/2回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/5。反転復元。

杯蓋	251-183	口径9.6 残存高4.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部 は丸くおさめる。天井部は高くやや 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/7回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/6。反転復元。
杯身	251-184	口径10.8 受部径13.0 残存高3.1 T高0.6 T角度29°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや丸くおさめる。受部はほぼ水平 にのび、端部はやや鋭い。底体部は やや深い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/5回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。1mm の長石をわずか に含む。焼成: 良好。反転復元。 内外面一部灰かぶり。
杯身	251-185	受部径11.6 残存高2.6 T 高0.7	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部はほぼ水平にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰褐色。胎土: 密。1mm の長石を若干含む。1mm の石英をわずかに含む。チャートを含む。焼成:良
		T 角度34°00′			好。反転復元。内外面灰かぶり。 内外面に自然釉付着。
杯身	251-186	口径9.7 受部径12.0 器高2.8 T高0.7 T角度40°30′	たちあがりは内傾してのび、端部はやや鋭い。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部は平ち。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/4回転ヘラ削り調整。底 部外面3/4(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土: 密。2mm 以下の長石を含 む。焼成: 良好。一部反転復元。 ヘラ記号: 底部外面に「-」あ り。内外面灰かぶり。
杯身	251-187	口径10.8 受部径12.8 残存高2.4 T高0.5 T角度35°00′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや鋭い。受部はほぼ水平にのび、 端部は丸くおさめる。底体部は浅 く、底部は平り。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ阿転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。反 転復元。
杯身	251-188	口径9.0 受部径11.0 残存高3.5 T高0.6 T角度30°15′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや丸くおさめる。受部は外上方に のび、端部は丸くおさめる。底体部 はやや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面3/5回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 内一 淡灰色、外一灰白色。胎土: 密。 1mm の長石を若干含む。焼成: 良好。 反転復元。 内外面灰かぶり。
杯身	251-189	口径10.4 受部径12.6 残存高2.4 T高0.6 T角度29°30′	たちあがりは内傾したのち中位で上 方にのび、端部は鋭い。受部は水平 にのび、上面でやや凸面を成し、端 部は丸くおさめる。底体部は浅い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。反 転復元。残存:i/8。
杯身	251-190	口径10.8 受部径12.8 残存高2.1 T高0.3 T角度41°45′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや鋭い。受部は水平にのび、端部 は丸くおさめる。底体部は浅く、底 部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/3回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。反 転復元。残存:1/8。
杯身	251-191	口径9.0 受部径11.0 残存高2.9 T高0.5 T角度31°30′	たちあがりは内傾してのび、端部は やや鋭い。受部は外上方にのび、端 部は丸くおさめる。底体部は浅く、 底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面2/5回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/8。 反転復元。
杯身	251-192	口径9.6 受部径11.4 残存高3.3 T高0.6 T角度25°00′	たちあがりは内傾したのち、中位で 直立し、端部は鋭い。受部は外上方 にのび、端部は丸くおさめる。底体 部はやや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面4/7回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一暗灰青色、外一暗灰色。胎土: 密。焼成:良好。残存:1/4。反転復元。外面に自然釉付着。
杯身	251-193	口径10.6 受部径12.4 残存高2.7 T高0.4 T角度44°30′	底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/5。反転復元。
杯身	251-194	口径10.0 受部径11.8 残存高2.6 T高0.6 T角度29°00′	たちあがりは内傾したのち端部付近で上方にのび、端部はやや鋭い。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。底体部は浅く、底部はほぼ平ち。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:暗灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/4。反転復元。
杯身	251-195	口径8.4 受部径10.4 残存高2.5 T高0.5 T角度39°15′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は水平にのび、 端部は丸くおさめる。底体部は浅 く、底部は平ら。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。2mm 以下の長石 を若干含む。焼成:良好。残存: 1/8。反転復元。
杯身	251-196	口径9.2 受部径11.6 残存高2.2 T高0.3 T角度53°30′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は外上方にの び、端部は丸くおさめる。底体部は 浅い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/7。反転復元。
杯身	251-197	口径9.0 受部径11.2 残存高2.3 T高0.7 T角度36°15′	たちあがりは内傾してのび、端部は 丸くおさめる。受部は水平にのび、 端部は丸くおさめる。底体部は浅 い。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 緑色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/8。反転復元。
杯	251-198 109-198		体部・口縁部は上外方(鉛直方向より17°30′)にのび、端部は丸くおさめる。底体部はやや深く、底部は平ち。底部端よりやや内側に八の字型の高台を付し、端部内側で接地する。高台端部は平面を成す。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ切り調整。他は回 転ナデ調整(体部外面はやや強 めの回転ナデ調整)。高台はハ リツケ。	ロクロ回転: 左回り。色調: 淡灰色。胎土: やや密。2mm 以下の 石英をわずかに含む。気泡あり。 焼成: 良好。残存: 2/5。
杯身	251-199	口径11.4 受部径13.1 器高3.6 T高0.8 T角度23°15′	たちあがりは内傾したのち、中位で 直立し、端部はやや鋭い。受部は外 上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面5/6回転へラ削り調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。外面に自然釉付 着。

短頸壺	252-200	口径7.6 基部径7.8 残存高1.9	口縁部は基部から直立する。端部は 丸くおさめる。肩部は外下方に下 る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。反転 復元。
提瓶	252-201	口径7.2 基部径4.5 残存高5.3	ロ頸部は外反して上外方にのびたのち、口縁部でやや内彎する。端部は丸くおさめる。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 淡灰色、外一灰褐色。胎土:密。 1mm の長石を若干含む。焼成: 良好。反転復元。内外面に自然釉 付着。
高杯	252-202	脚底径11.4 残存高4.9	脚部上半以上欠損。脚部は下外方に 開いて下り、裾端部は外傾する平面 を成し、裾部内面と端部内面で接地 する。裾部上方に1条の沈線をめぐ らす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗灰色、外一淡灰青色。胎土:密。 3mm 以下の長石を若干含む。焼 成:良好。反転復元。
高杯	252-203	脚底径5.4 基部径5.0 残存高2.7	杯部欠損。脚部は下外方に下り、裾 端部は外傾する凹面を成し、端部内 面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。2mm 以下の長 石を若干含む。焼成:良好。反転 復元。
高杯	252-204	脚底径5.9 基部径3.8 残存高2.4	杯部体部以上欠損。杯底部はほぼ平 ら。脚部は下外方に下り、裾部で外 方にのびる。裾端部はやや丸い方形 の断面を成し、端部内面で接地す る。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底 部外面回転ヘラ削り調整。他は 回転ナデ調整。	ロクロ回転: 右回り。色調: 灰色。 胎土:密。2mm 以下の長石を含む。焼成: 良好。一部反転復元。 内外面灰かぶり。
甕	252-205	口径26.6 残存高4.6	口頸部は外反して上外方にのび、口 緑部下で下外方に下ったのち、内彎 して上外方にのび、口縁部内面に至 る。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調:暗灰青色。胎土:密。焼成: 良好。反転復元。
甕	252-206	口径16.8 基部径18.2 残存高5.1	口頸部は基部から上方にのびる。端 部は内傾する凹面を成す。肩部は外 方にのびる。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰色。胎土:密。2mm 以下の長石を含む。1mm の石英を含む。チャートを含む。焼成:良好。反転復元。肩部外面灰かぶり。口頸部内外面に自然釉付着。
獲	252-207	口径16.4 基部径15.6 残存高5.4	ロ頸部は外反して上外方にのび、口 緑部は内彎して上外方にのび、口緑 部内面に至る。肩部は外下方に下 る。肩部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。肩部 外面タタキのちカキ目調整。肩 部内面青海波タタキ。他は回転 ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:口頸 部外面・肩部内面一暗灰色、口頸 部内面・肩部外面一淡灰色。 胎 土:密。チャートを含む。焼成: 良好。反転復元。口頸部外面・肩 部内面に自然釉付着。
甕	252-208	口径44.0 残存高8.7	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で下外方に下ったのち、段を 成し、内上方にのびる。端部は丸く おさめ、内面であまい段を成す。口 縁部直下に2条、頸部上方1/3に2 条の沈線をめぐらし、上方1/3の沈 線の上下に波状文を有する。頸部下 半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整ののちに施文。 他は回転ナデ調整。	色調:内一暗灰色、外一淡灰青色。胎土:密。2mm 以下の長石を若干含む。焼成:良好。反転復元。
甕	252-209	口径43.6 残存高7.1	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で下外方に下ったのち、内彎 して上内方にのびる。端部は丸くお さめ、内面であまい段を成す。口縁 部直下に1条、頸部上方1/3に2条 の沈線をめぐらし、上方1/3の沈線 の上下に波状文を有する。頸部下半 以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	色調: 内一暗灰青色、外一暗灰色。胎土: 密。焼成: 良好。反転復元。

# 第5節 下流遺跡の調査

# I 池 尻 遺 跡 (1)

# 1 調査の経過

本調査は大阪府がダム化工事に関連して造成した仮設グランド工事に先立って実施したものである。調査区は狭山池北堤の北方約300mの場所に所在している。調査開始以前には狭山池北東側の段丘面には狭山藩陣屋跡、また西北の段丘面には池尻城跡として周知の埋蔵文化財包蔵地が存在したが、本調査区の所在する谷底平野の部分については遺跡は確認されていなかった。そこで大阪府から造成計画がだされた際、狭山池調査事務所で試掘調査を実施することとなった。グランド予定地は約12,000m²と広大であったため、試掘調査は東西本のトレンチを機械掘削によって入れ、その断面を観察する方法で実施した。その結果、北トレンチ東側において中世の土器を多量に含む包含層が検出され、また北トレンチ西側では須恵器、瓦などを検出した。また南トレンチの西半分においては水田面と考えられる断面が検出された。さらにトレンチのほぼ全体において、洪水砂や旧河道と思われる礫層がみられ、その中には須恵器片が多く含まれていた。結果的にはグランド用地の全域が遺跡であると考えられるに至った。大阪狭山市教育委員会ではこの結果を受けて遺跡発見届を提出し、この新規発見の遺跡は池尻遺跡と命名された。本報告書では池尻遺跡における二つの調査結果を報告してい

るので、本調査区は池尻遺跡(1)と呼ぶことにしたい。このグランドは、ダム工事の関連で仮設的につくられるものであり、盛土によって造成されるため遺構等に対する直接的な影響はない。そのため大阪狭山市教育委員会、狭山池調査事務所は大阪府土木部、大阪府教育委員会と協議し、遺物が多く分布し、また特色的である場所において調査を実施することとなった。具体的な調査方法としては、3箇所において10m四方の調査区を設定し、平面的な発掘を実施するとともに、さらに3本のトレンチを掘削し遺構の広がりや、地形などを観察することとした。以後の記述においては、3箇所の調査区をそれぞれA調査区、B調査区、

C調査区と呼ぶこととする。また調査を進める過



写真89 池尻遺跡(1)調香区

程で A 調査区では特に多くの土器の出土をみたため、A 調査区に南接してあらたに調査区を設けたがこれを D 調査区と呼びたい。試掘調査は1991年 1 月に実施し、本調査は1992年 1 月から 2 月まで実施した。

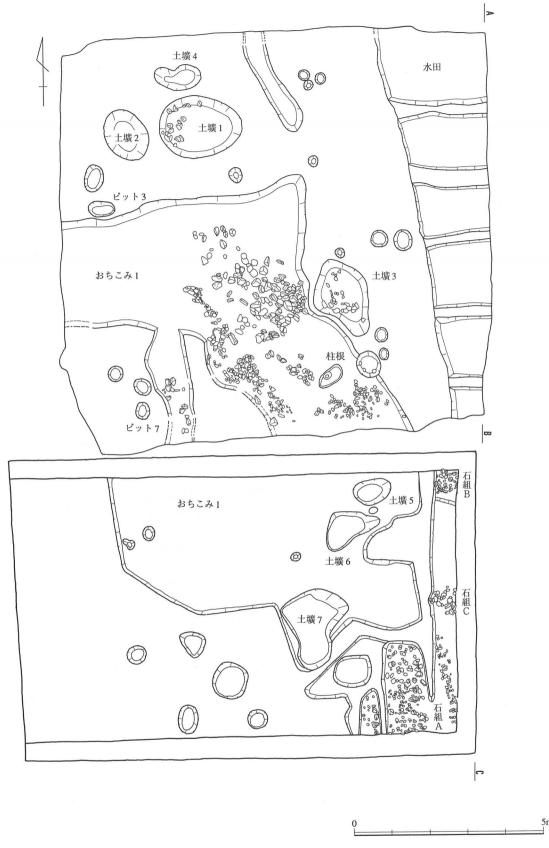
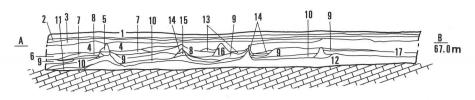


図 254 池尻遺跡 (1) A 調査区・D 調査区遺構平面図 (S=1/100)



- 1 里色色十 (現水田作十)
- 2. 黄茶色粘土 (現水田床土)
- 3. 淡灰色土 (水田面、近世土器含む)
- 4. 茶灰色粗砂
- 5. 灰色土
- 6. 灰色中砂
- 7. 茶褐色粗砂
- 8. 明茶色粗砂
- 9. 灰色中砂 10. 灰色シルト(水田作土)
- 11. 灰色粘土
- 12. 茶灰色粘土
- 13. 褐色粗砂
- 14. 褐色中砂 (有機物を含む)
- 15. 茶灰色粘土 16. 灰色中砂
- 17. 茶灰色砂

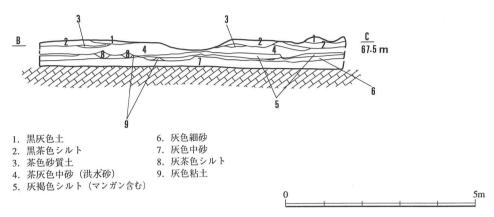


図 255 池尻遺跡 (1) A 調査区・D 調査区 東壁断面図 (S=1/100)

### 2 遺構と遺物

# ①A 調査区 · D 調査区

#### (遺構)

以下、発掘調査の成果を調査区ごとに述べていくこととしたい。

A 調査区は仮設グランド予定地のもっとも東側に所在する。先にも述べたように A 調査区発掘の 結果、土器を大量に含む遺構がさらに南側にむかって広がっていることが明らかになったため、A 区にすぐ南接してさらにD調査区を設けた。この二つの調査区については併せて説明する。この調 査区の層序は次の通りであった。現在の地表面である水田の作土、床土を除去すると、黒褐色シルト からなる遺物包含層に達する。この層の下が遺構面となっており、その下には包含層、遺構面はなか った。また調査区東部からは水田が検出されているが、作土面の上には砂層がみられた。この砂層は 洪水によって堆積したものと考えられる。砂層は細かく見ると4層にわけられる。これらが何度の洪 水による堆積かは不明であるが、少なくとも複数の洪水がこの地を襲ったことは確実であろう。この 砂層は調査区の東半分においてのみ観察でき、洪水による砂の堆積は今日の中樋筋を中心とする局地 的なものであったことを知ることができる。調査区のすぐ南には狭山池北堤が存在しており、その決 壊がなければ、このような洪水砂の堆積は考えにくい。よって A 調査区において遺構が検出された 鎌倉時代以降狭山池の堤は決壊していることが想定される。

以下個々の遺構について説明していきたい。調査区東部において検出された水田の西端のラインは 北から20度西側に振っていた。水田は調査区内において6枚確認され、それぞれは高さ30cm、底幅 40cm の畔で区画されている。畔は調査区内で5本存在し、それぞれの間隔は1.8m $\sim 1.3$ m と今日の 水田から考えると極めて狭い。この水田は屋敷地に隣接するいわゆる門田であると考えられるが、中

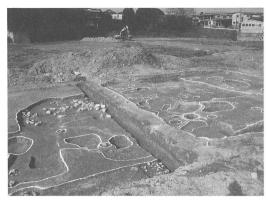






写真 91 石 組 A

世の門田の一般的な機能を考えればこの小区画の水田は苗代田であるとするのが適当であろう。

A・D調査区にまたがって存在する大きな遺構が落ち込み1である。この遺構は全体的に周囲の面から10cm~20cm 掘下げられており、底面はほぼ平坦である。長さ12.0m 幅8.0m の長方形で長辺は真北に対して約30度西に振っている。この遺構の内部には幾つかの柱穴があり、特に柱穴1では柱根と考えられる木が残されていた。以上から考えて落ち込み1の性格は住居に伴う掘り込みであると考えるのが妥当であろう。柱の配列は明確でないため、建物の復元は困難であるが中世に堀り込みをもつ住居が存在したことは注目される。ただ落ち込みの規模から考えて屋敷地の中心的な建物であったとは考えにくい。

落ち込み1の内部には多くの礫が並んでおり、礫に混じって完形の瓦器碗など多量の遺物が出土している。礫は西北一南東方向に3列に並んでいるが、もっとも東側の列の礫は計10cmから20cmの大きなものが多く、他の列の礫はやや小さいものが主体となる。この礫列およびそれに含まれた土器群の性格については現在まだ適当な解答をえていない。

また落ち込み 1 を囲むようにして幾つかの土壙が検出されている。土壙 1 は長径 2.2m、短径 1.8 m の楕円形で、深さは最大で 33cm である。底面から土師質羽釜、東播製こね鉢などの食器が出土している。土壙 2 は長径 1.70m、短径 1.00m の楕円形で最大の深さは 15cm である。土壙 4 は長さ 1.30m、幅 70cm、深さ 30cm でメガネ形をしている。これら 3 つの土壙はいずれも落ち込み 1 の北側に所在している。土壙 3 は落ち込み 1 の東側に位置し、長径 2.20m、短径 1.50m、深さ 15cm、やはり羽釜片が出土している。落ち込み 1 の南側にも四つの土壙がある。土壙 5 は長径 1.0m、短径 70 cm の楕円形で、深さは 23cm。この土壙の埋土には焼土、炭などが多く含まれており、内部で火を使ったことが推定される。ただし土壙内の壁には高熱のための赤化はみられなかった。土壙 6 は長さ 1.8m、幅 1.0m、深さ 15cm。土壙 7 は一辺 1.0m の正方形。土壙 8 は長さ 2.1m、幅 1.9m、形態はひょうたん型で深さは最大 70cm である。D 調査区の東側には南北方向に 3 本の溝があり、それぞれに多量の礫が入っていた。礫は間隙が空かないようにきっちりと詰め込まれた状態であった。落ち込み 1 を建物と考えればこれらの石組はその東南角にあたり、建物の入口の部分を構成していたものと考えられる。石組 3 の上からは完形の土師器小皿、瓦器椀が出土している。

この調査区からは落ち込み1を中心として多くの土器が出土している。器種としては土師器では皿、杯、羽釜があり、瓦器では椀、皿がある。その他ごく少数ではあるが白磁、須恵器ねり鉢がみられた。その他古墳時代の須恵器の細片が非常に多くみられるが、これは付近の須恵器窯の遺物が後世混入したものであろう。また鉄器として馬具の金具1点が出土している。以下、遺物の概要を述べることとする。

(遺物)



写真 92 落ち込み 1 土器出土状況

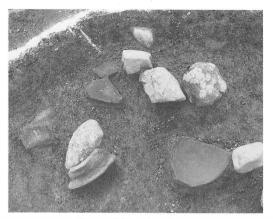


写真 93 土壙 1 土器出土状況

図256~259は落ち込み 1 出土の土器である。 1 は土師質の蓋。同種のものは他に出土しておらず、具体的な用途も不明である。 3 、4 は高台がつく土師器の椀である。 5 ~33は土師皿。33のみが大皿で、他はいずれも小皿に分類されるものである。小皿は外面に指押さえを施し、口縁部はヨコナデを施すものがほとんどであるが指押さえの強弱によって、底部と側面との間に変化点を持つもの(5 ~13)と持たないものに分類できる。34~39は瓦器である。34~36、39~44は皿、それ以外は椀である。皿の5 ち34は底部に高台がつく若干特殊なものである。瓦器椀はすべて和泉型である。全体的に焼成は良好なものが多いが、炭素の吸着が不十分である。時期的には尾上実氏の編年の3-1期を中心とする。0 60~67は土師器の羽釜。口縁がくの字型に屈曲するもの(63~67)とほぼ水平にのびるもの(60~62)に分類が可能である。前者は体部が円柱に近い形態を示すが、後者においては体部が丸みを帯びる。鍔は62がやや下方に下がっているのを除けば、水平に伸びる。

図260は落ち込み1以外の遺構から出土した遺物である。68~70は土師器の小皿。71~73はやはり和泉型の瓦器椀。71は高さが5.7cmと非常に高く、形態的に他のものと差異が大きい。74は東播系のねり鉢である。内部には磨滅痕が残る。75は土師器羽釜である。図261には鉄器を載せた。ともに落ち込み1より出土している。76は先端が環状になった鉄製品である。一方の端は欠損しており、全体を知ることはできないが、残存長9.3cmである。環の形態から轡の銜か引き手の一部かと考えられる。77はやはり鉄製品である。現存長10.1cm。用途不明だがやはり馬具の一部か。遺物の全体的な様相を眺めたとき、落ち込み1と他の遺構はほぼ同時代のものとみることができる。時期は瓦器、羽釜などの年代観からほぼ13世紀初頭とするのが妥当であろう。

# ②B 調査区

B調査区については試掘調査において確認できた水田に伴う畦状の遺構の検出を目的として調査を 実施した。この調査区では現在の水田の下に3面の水田を観察することができた。図にあげたのは第

3面の水田である。この面においては北西―南東方向に並ぶ6本の畦(高さ20cm、幅35cm)、および東北―南西方向の大きな畦(高さ25cm、幅210cm)が検出されたが、両者はほぼ直行している。出土遺物は須恵器の破片のみであったが、それらからこの遺構は7世紀代のものと考えられる。畦は定規で引いたように真っすぐであり、この水田の開発が計画的であったことをうかがわせる。ただ畦の間隔が非常に狭く1区画が長方形であることから、これが水田ではなく畑である可能性も否定できない。こ



写真 94 B 調査区全景

417

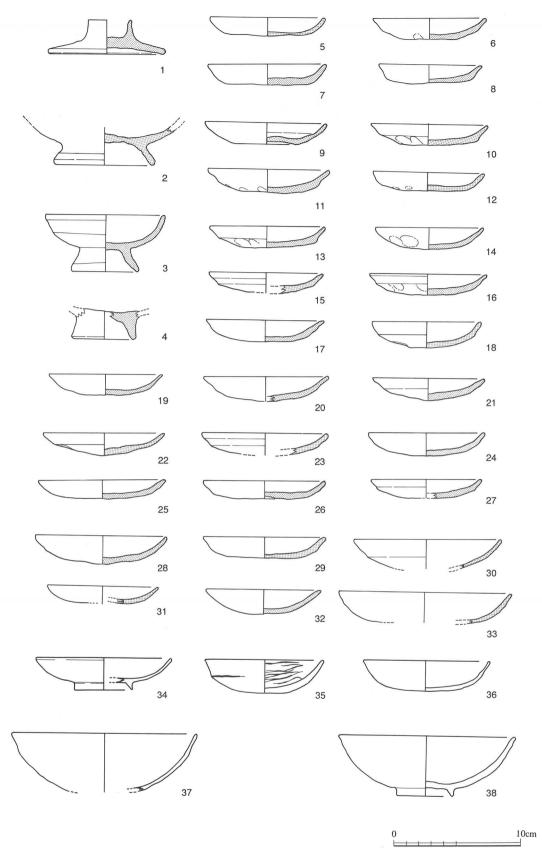


図 256 池尻遺跡 (1) A 区・D 区出土遺物 落ち込み 1 (1)

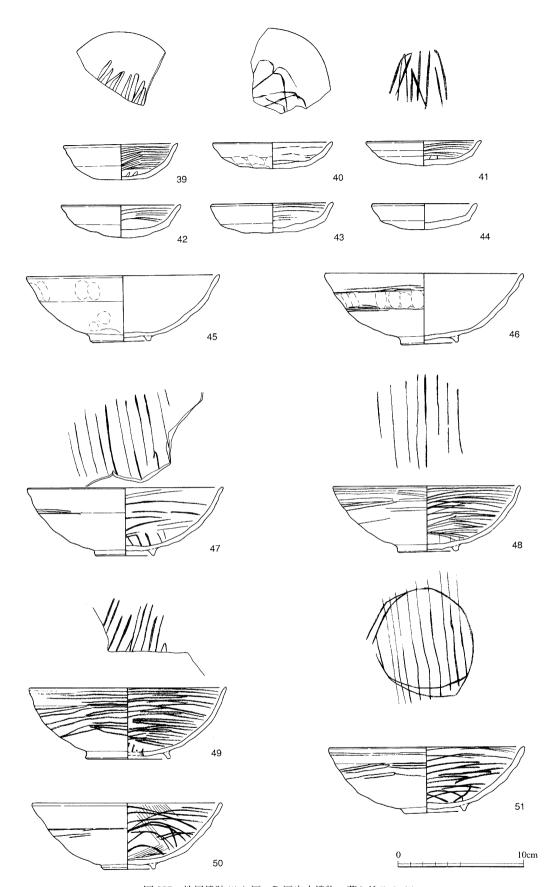


図 257 池尻遺跡 (1) A 区・D 区出土遺物 落ち込み 1 (2)

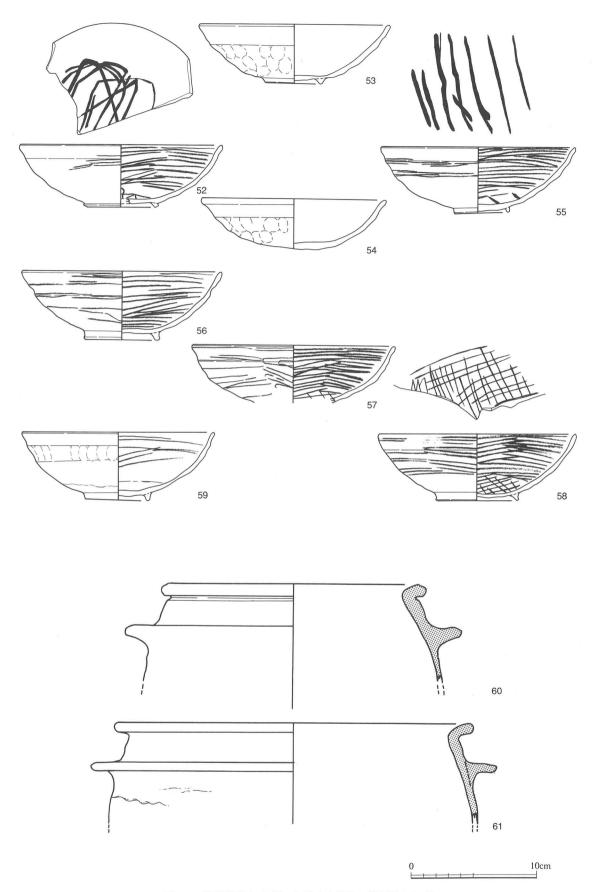


図 258 池尻遺跡 (1) A 区・D 区出土遺物 落ち込み 1 (3)

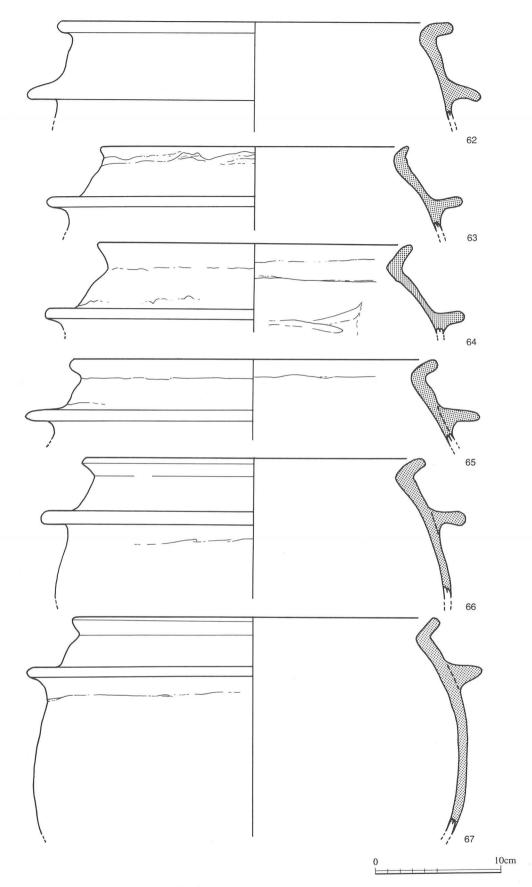


図 259 池尻遺跡 (1) A 区・D 区出土遺物 落ち込み 1 (4)

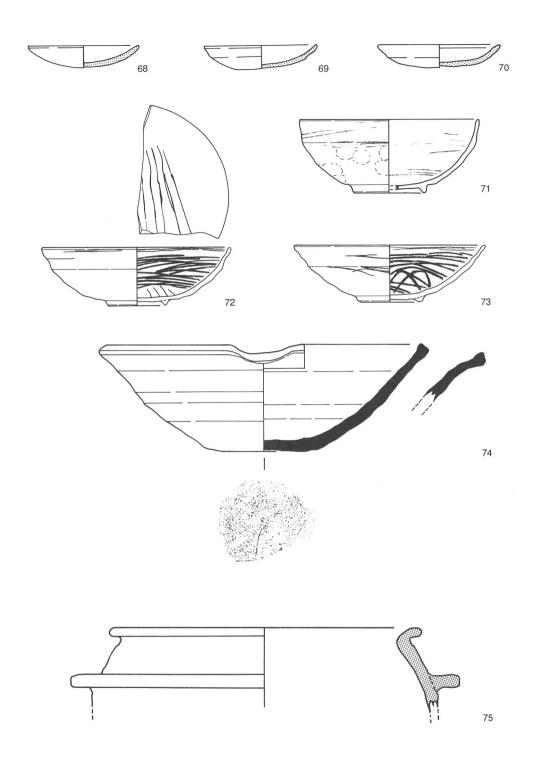
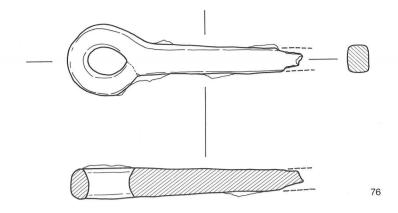
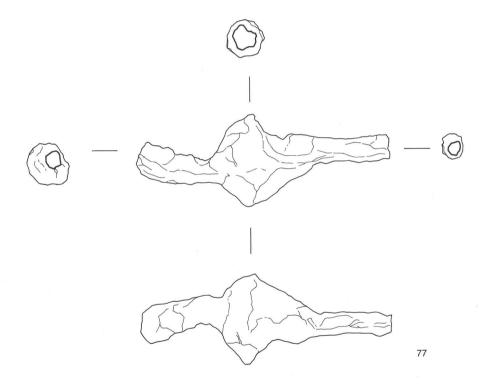




図 260 池尻遺跡 (1) A・D 調査区出土遺物実測図(68、69、70→石組B・71→ビット3・72→ビット7・73→ 土壙3・74・75→土壙 1)





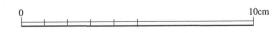


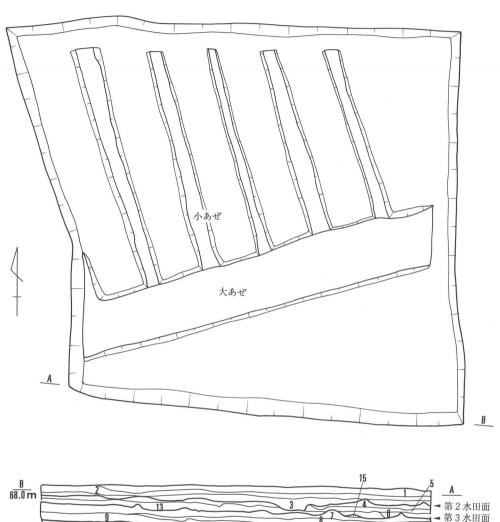
図 261 池尻遺跡 (1) A・D 調査区出土遺物 落ち込み 1 出土鉄製品

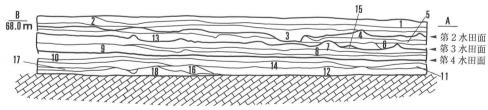
の調査区においては平面的に掘削できたのは第 2 面だけで他の面は断面観察だけを実施した。第 1 面の水田はその遺物から近世のものと考えられる。第 3 の水田は遺物がなく確実なことはいえないが、 C 地区や池尻遺跡(2)との対比でいえば  $6 \sim 7$  世紀代に遡る可能性がある。

# ③C 調査区

#### (第2遺構面)

C調査区については全部で 5 層の遺構面が認められたが、その5 ちもっとも上の第 1 遺構面については平面的な調査ができなかったので、第 2 ~第 5 の 4 枚の遺構面について述べることとする。





- 1. 暗茶色土 (盛土)
- 7. 淡灰色シルト 13. 茶灰色シルト
- 2. 茶灰色シルト
- 8. 茶灰色シルト 14. 淡茶色粗砂
- 3. 茶色シルト
- 9. 茶灰色粗砂 15. 灰色シルト
- 4. 淡灰色シルト
- 10. 淡茶灰色土 16. 灰色シルト
- 5. 茶灰色粘土
- 11. 淡青灰色粗砂 17. 灰茶色シルト
- 6. 淡茶灰色中砂
- 12. 茶色中砂
- 18. 淡緑灰色砂



図 262 池尻遺跡 (1) B 調査区 第 3 遺構面平面図・南壁断面図 (S=1/100)







写真96 第4遺構面の水田

第2遺構面においてはB調査区でも検出された畦によって区画された細長い地割りを検出した。 この地割りの長軸は東北一西南を向き、B調査区の畦の方向に一致する。調査区内において確認され た区画は全部で12であるが、北西部の6つの区画は南北方向の畦によって切られて、他のものより小 さい。また調査区の北東角には水路と考えられる溝が検出されている。やはり畑の可能性があるが、 外山秀一氏によって行われたこの面の土のプラントオパール分析の結果によると畦の部分でも、畦の 間でもイネのプラントオパールが検出されており、水田であるかどうかは別にしても稲作が行われて いた可能性が強い。

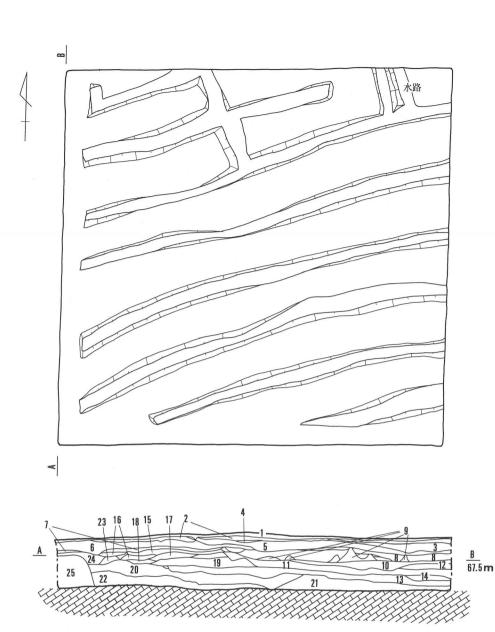
この遺構面からは遺物の出土が無く、時期は決めがたいが、B調査区の第2遺構面の水田に連続するものとみて間違いなさそうである。

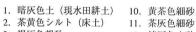
# (第3遺構面)

第2遺構面の畦を除去するとすぐに第3遺構面が現われた。この間に第2遺構面の水田作土と思われる灰色シルトを挟む箇所もあるが、この層は非常に薄い。第3遺構面においては北部において落ち込み箇所と、南東一北西方向に走る2本の溝、その他2本の東西方向の溝、ピット6つを検出した。各遺構の埋土中には須恵器の破片が比較的多くふくまれているが、いづれも須恵器の細片で、図化できたのは図267の1~8のみである。須恵器は田辺昭三氏のいうTK217型式に含まれることから、②この遺構の時期は7世紀前葉とみられる。この面は第3遺構面や、下の第4遺構面とは異なり、水田とは考えられない。遺構の全体的な性格は明確ではないが、第2遺構面との時期的な差が殆どないことから、第2遺構面の時代に展開されたとおもわれる大規模な土地開発に伴う遺構である可能性がある。この遺構面は第2・第4遺構面によって確認された時期と性格の異なった水田をつなぐ性格を持っている。ここでは一応第2遺構面の水田面を造成するための工事の痕跡と考えておきたい。

#### (第4遺構面)

第4遺構面においては8区画の水田を確認することができた。水田はいずれもきわめて小規模なものである。全域が調査区内に収まる水田2を例にとってみると、縦4.7m、横3.2m、面積15.0m²。である。また水田と水田の間には水口と考えられる切り口が4箇所みられる。水口の両端のレベルを比較すると水の流れはおおよそ図265に示した通りに復原できる。調査区内には水路は見当らず灌漑は上の田から下の田へ田越しで行われていたと思われる。また畦は底幅約30cm高さ12cm~20cmで褐色シルトによって築かれていた。水田2水口付近には円弧を描くように7個の直径5cmほどの小ピットが検出された。これは杭穴と考えられる。水口にともなう施設の一部であろうか。また水田1、および水田4の内部には有機物が幅50cmにわたって帯状に堆積していた。この有機物は南側にのみ掘りこまれたL字溝のような溝に堆積している。堆積の厚さはもっとも深い箇所でも8cmであ





- 3. 褐灰色粗砂
- 4. 灰色細砂
- 5. 黄灰色シルト
- 6. 明茶色シルト 7. 灰色シルト (第1水田)
- 8. 褐色細砂
- 9. 灰色シルト (第2水田)
- 11. 茶灰色細砂 (第3面)
- 12. 淡灰色中砂
- 13. 褐色シルト (第4面水田)
- 14. 暗褐色中砂 (有機物を含む) 15. 灰褐色シルト
- 16. 灰褐色粘土 17. 茶色シルト
- 18. 灰色粘土 19. 灰褐色シルト
- 20. 黄褐色シルト 21. 灰色細砂
- 22. 青灰色粘土 23. 灰色シルト
- 24. 茶色シルト
- 25. 青灰色シルト



図 263 池尻遺跡 (1) C 調査区 第 2 遺構面平面図・西壁断面図 (S=1/100)

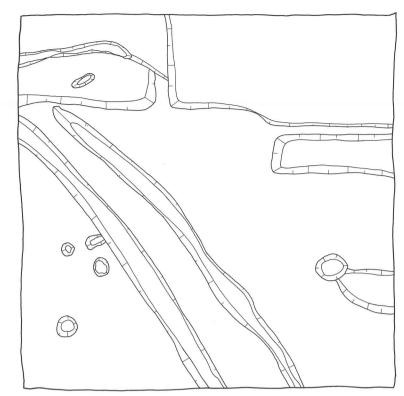


図 264 池尻遺跡 (1) C 調査区 第 3 遺構面平面図 (S=1/50)

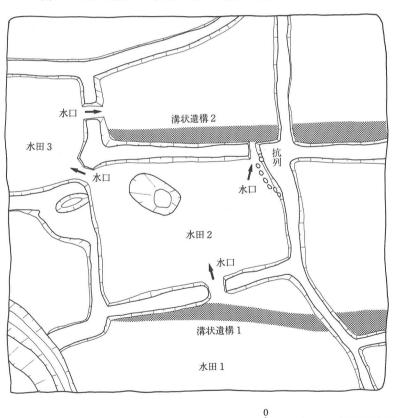


図 265 池尻遺跡 (1) C 調査区 第 4 遺構面平面図 (S=1/100)

る。この溝状遺構は畦を横切って掘られていることから水入れに関する施設とは考えにくい。現在でも水田の排水に関してこのような溝が掘られることがあるが、この場合も排水施設とみるのが妥当と 思われる。

第4遺構面からは図化不可能な土師器細片が多く出土しているが、第3遺構面までは多くみられた 須恵器は全く検出されなかった。狭山池周辺は須恵器窯が多く、古墳時代以後の包含層にはたいてい 須恵器が含まれている。したがって全く須恵器がみられないこの遺構面は狭山池周辺に須恵器窯が多 く築かれる6世紀後半以前のものと考えるのが適当である。狭山池の築造年代はこの調査が終了後、 実施された東樋遺構や狭山池1号窯の発掘調査によってほぼ7世紀初頭であることが確定したが、こ れらの調査の成果を参照すると第3遺構面の経営時期は狭山池築造に先行すると考えられる。またこ の遺構面で検出された面積の小さい水田は一般に小区画水田と呼ばれ、弥生時代から古墳時代にかけ て全国でみられる水田の一般的な形態である。狭山池築造以前において狭山池のすぐ下流にあるこの 地点で水田遺構の存在が確認された意義は極めて大きいといわねばならない。

### (第5遺構面)

この遺構面においては南北方向の溝や土壙、焼土壙などを検出している。溝 1、およびピット 1 の埋土から破片ではあるが土器が出土している。図267-9は布留式甕、10はややそれに先行する庄内式の甕である。ともに外面は摩滅のため調整は観察できない。11は甕の底部であるが、形態的には弥生土器の可能性もある。12は無頸壺でやはり庄内期のものであろう。これらの土器は細片であり、これらから遺構面の時代を決定することは困難であるが、古墳時代の前期から中期に遡る時代の面であることは間違いがない。また焼土坑の存在から住居跡があると思われるが、すでに述べたように後世に

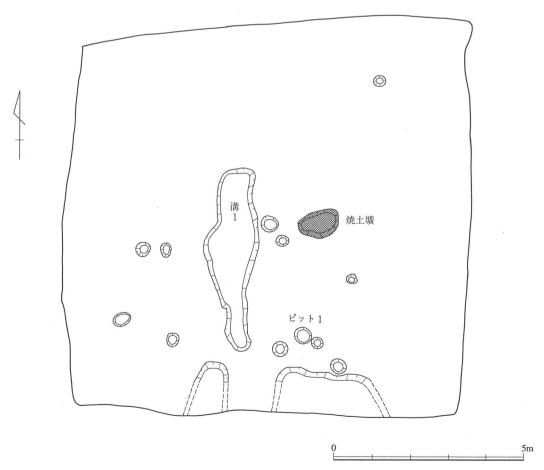


図 266 池尻遺跡 (1) C 調査区 第 5 遺構面平面図 (S=1/100)

水田の開発がなされており、遺構面が削られているためか、それを確認することはできなかった。大阪狭山市内において布留・庄内期の遺構が確認されたのはこれがはじめてであった。また第5遺構面では、地震による液状化現象に伴う噴砂の跡が観察できた。この面においては長さ2.8mにわたって砂の入った割れ目が観察でき、噴砂の痕跡と考えられる。この割れ目は第5遺構面より上の遺構面では見られないため、地震は古墳時代前期~中期に起こったものと考えられる。

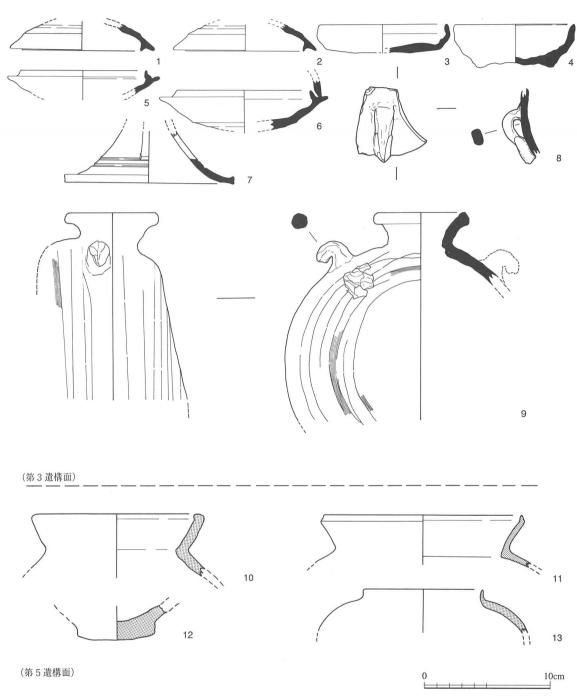


図 267 池尻遺跡 (1) C 調査区出土遺物

#### 3 //\

池尻遺跡(1)は前述の通り狭山池の北側約300mに所在し、狭山池の中樋筋水路にもすぐ西接してい る。発掘調査は面積的には小規模なものであったが、狭山池の築造やその後の改修と深く関連したこ の地域の開発状況を部分的に明らかにすることが可能となった。

C調査区では層序的な調査が可能であったために、狭山 池の築造期をはさむ遺構面を検出することができた。第5 遺構面から出土した土師器や焼土壙は狭山池北方の谷底平 野における集落の展開が古墳時代前~中期にまで遡ること を明らかにした。また第4面で検出された小区画水田は狭 山池の築造以前にも狭山池下流部に水田が存在していたこ とを示している。池尻遺跡(1)の調査の翌年に発掘が行われ た池尻遺跡(2)でも、狭山池に先行する小区画水田が検出さ れており、狭山池の築造以前にも段丘からの谷水を利用し た小規模な水田開発が行われていたことはほぼ明らかにな った。第2面の水田は7世紀以後のものと思われるが畦が 整然と並んでおり、狭山池以前の水田とはやや趣を異にす る。狭山池の築造を契機として下流でも土地区画や水路網 の整備が進められたことが推測できる。B調査区で検出さ れた水田も C 調査区第 2 遺構面の水田に対応するもので あろう。

A調査区では中世の建物址が検出された。遺構の主体 は落ち込み1付近に想定される建物である。その周辺にも 多くの土壙や柱穴が存在していることから複数の建物が存 在したと考えられ、この遺構群は複数の建物から構成され る小規模な屋敷地と考えられる。そのすぐ横には苗代田と 思われる小規模な水田が並んでいたことも注目される。こ の景観からは中世史研究において注目されている門田の景 観が想定できる。図268は調査区付近の小字図であるが、

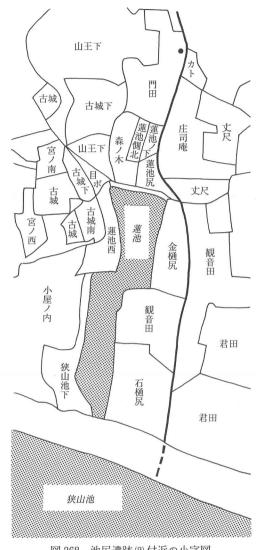


図 268 池尻遺跡 (2) 付近の小字図

A 調査区を含むこの周辺の小字名は門田(かどた)であることも、この遺構の性格を考える上でヒント になるだろう。③ 屋敷地とその門前に広がる水田が対になった景観は中世前期の村落景観のひとつの モデルとされてきた。今回の調査区からは破片ではあるが白磁碗も出土しており、ここではこの遺構 を鎌倉期の小領主の屋敷地および門田であると考えておきたい。また本調査区で今一つ注目すべきも のは水田の上に堆積した砂層である。これを洪水による堆積と考えるならば、この屋敷地が廃絶した 後に狭山池は決壊していたということを考えなければならない。また屋敷地横の水田の存在から考え るとこの遺構の時期には狭山池が機能していたことも推測できる。この遺構の時期と考えられる鎌倉 時代初期は狭山池を東大寺の僧重源が改修した時期に一致する。水田面に堆積した砂層の時期は不明 であるが、狭山池の堆積物を地質学的に調査した三田村宗樹氏などの研究成果によって、狭山池は築 造以来数回地震に襲われており、特に1596年の地震は堤体を崩壊させた可能性があることが明らかに されている。<sup>®</sup> A 調査区で検出された砂層も地震等の災害の被害と関連づけて理解できるだろう。

# Ⅱ 池尻遺跡(2)

#### 1 調査の経過

本調査区は狭山池北堤のすぐ北側に所在しており、ダム工事完成後は堤体の一部あるいは資料館敷地として利用される場所にあたる。狭山池の両岸を構成する段丘崖にはさまれた谷底平野にあたり、狭山池築造以前にはこの付近を旧天野川が北流していたことが予想される場所である。調査箇所は調査以前には周知の遺跡ではなかったが、試掘調査の結果、古墳時代の水田など多くの遺構や須恵器などの遺物を検出したため、トレンチによって遺構、遺物が確認できた範囲 2200m² において全面的な発掘調査を実施することとなった。遺跡発見によりこの調査区は池尻遺跡の一部となった。本報告書では本調査区を池尻遺跡(2)と呼ぶことにしたい。また調査の過程で須恵器窯(狭山池1号窯)の灰原など新たな発見があったため、調査区を若干拡張し、調査につとめた。試掘調査は1992年9月から同年10月まで実施し、それに引き続いて本調査を1993年2月まで実施した。また1992年12月12日には現地説明会を開催した。

# 2 層 序

今回の発掘調査は先述の通り試掘トレンチによって遺構が認められた範囲において南北 46m、東西 35m の長方形の調査区を設定して実施した。調査区内における基本的な層序は以下の通りである。まず最上層には厚い盛土がかぶさっていた。これはグランド造成のため1968年ごろに盛られたもので、もっとも薄い南端で120cm、もっとも厚い北端では220cm 程度の厚さである。盛土の再下層にはグランド排水用の管が縦横にいれられておりその一部は遺構面を破壊していた。それ以外についてはグランド造成時には元の水田には一切手を加えず盛土をしたようで、この盛土の下にはそれ以前の水田がそのまま埋められていた。この水田の作土の厚さは30cmから40cmとこの地方の水田としては厚いほうである。この水田作土の中からはいくつか遺物もみつかっているが、おおむね近世初期以降のものである。つまりこの水田面は近世以降昭和後期までの面である。この水田作土の下には茶色粘土からなる鍬床層が形成されていた。調査区南部ではこの鍬床層の下に砂層、あるいは後述する須恵器窯の灰原層が存在している。これらの層は北へいくほど薄くなり、調査区北部ではほとんどみられなかった。そのため調査区北部においては近世水田作土、鍬床の下に古墳時代の水田面が直接接しており、近世以降の耕作によって古墳時代の水田面が大きく影響を受けている。この砂層、あるいは灰原層の下が古墳時代の水田作土の層である。この層の厚さは平均25cm程度であるが厚い部分では60cmに達しており、水田作土層としては非常に厚い。水田は畔によって区画されていたが、この畔を



写真 97 池尻遺跡(2)と狭山池北堤

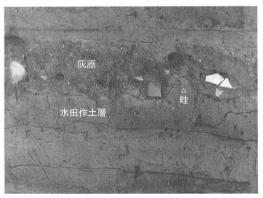
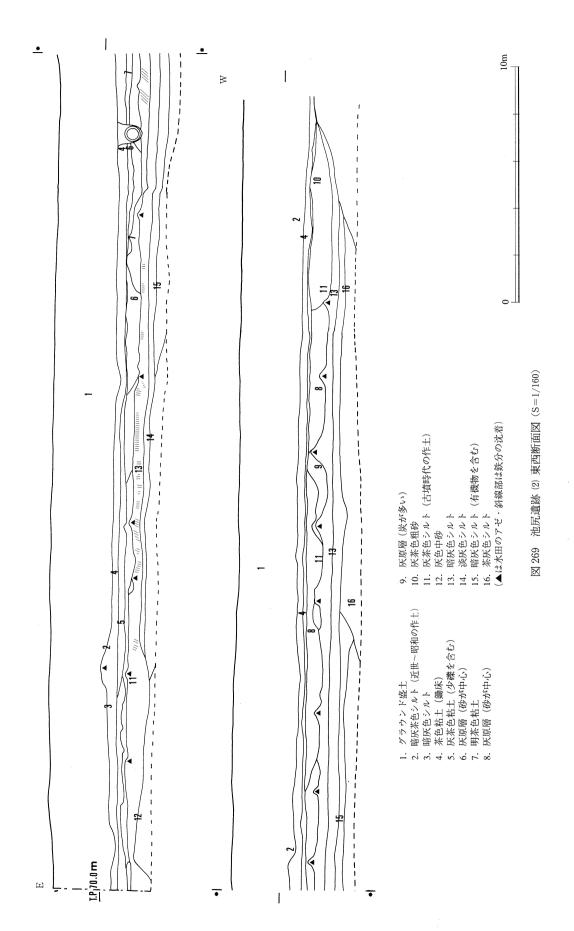


写真 98 灰原層と水田作土層



構成していた土は水田作土と同じものであった。この層の下には暗灰色シルト層が存在する。この層が古墳時代水田の鍬床と考えられる。その下には淡灰色あるいは暗灰色のシルト層が存在する。この層には多くの有機物が含まれている。これは低湿性の環境で堆積した層であり、人為的な水田面ではないようである。その下には灰色の砂層が堆積している。今回の調査ではその上面を確認しただけで、砂層を深く掘削しその厚さを計ることはしなかった。ただしこれまで大阪狭山市教育委員会などがこの付近で実施した発掘調査の結果によれば、この砂層は谷底平野のあらゆる箇所において観察することができ、その厚さは最大で3mに及ぶことが確認されている。これは明らかに河川などによって運搬され堆積した沖積層であり、常識的に考えれば狭山池築造以前この低地を北流していた旧天野川によって形成された層とみることができよう。この層の年代は水田および狭山池の年代を定める上で非常に重要である。今回の調査ではこの層の上面から60cm下がったところから横瓶と思われる須恵器を検出している(図270)。口縁部が欠けているため正確な型式は決めがたいが、横瓶の初現自体が田辺昭三氏の編年でいう TK209 型式あるいは TK217 型式であると考えられ、遺物の年代は6世紀末を遡ることはないだろう。最大で厚さ3mにもおよぶこの砂層の年代については慎重にならざるをえないが、その最後の時期はほぼこの年代に限定してよいと思われる。したがって水田の経営された時期はそれ以後の時代ということになる。

調査区の基本的な層序は以上の通りである。今回の調査では古墳時代の水田面に調査の主眼をおき、まずグランド盛土を重機で掘削し、近世の水田面以下の層を人力で掘削し、古墳時代水田面の検出につとめた。またこの水田作土より深い層についてはトレンチの断面を観察した結果、遺物などはほとんど含まれておらず調査の対象から外した。ただし最下層の砂層には先に述べたように須恵器などの遺物が少量みられたが、これは河川や洪水の運搬によるものと考えられる。これらの遺物は採集するにとどめた。

# 3 遺構と遺物

#### ①遺構面の重なり

今回の発掘調査で確認した遺構面は基本的には1層である。しかしながら調査区の南部においては 3層の異なった遺構の重層がみられた。このことは今回の発掘調査にとって重要な意味を持つので、 まず年代の古い下層の遺構面から順にその概要を述べ、ついで個々の遺構について説明を加えていく

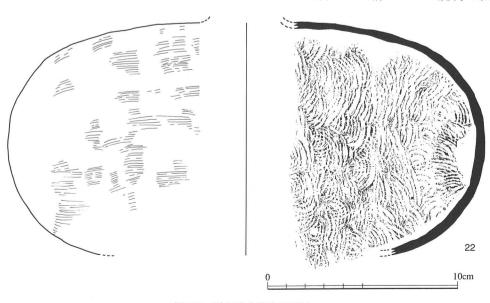


図 270 砂層出土遺物実測図

こととしたい。

本調査区のほぼ全面にわたって水田遺構が検出された。 ただし先述の通り調査区の北側や西側ではこの水田面の直 上に近世の水田面が存在したため、耕作によって攪乱や掘 削がなされ畦の検出は困難であった。また調査区中央部で も畦がまったく検出されない部分があったが、この付近は 水田面が他の部分より高くそのため後世の耕作により畦が 失われてしまったものと思われる。このような後世の遺構 の改変を考慮にいれれば調査区の南西角から北東にのびる 段差を水田の西端とみなすべきであろう。この段差にそっ て杭列とみられるピット列が一部でみられた。ただしこの 段差の西側においても一部では水田がみられる。また調査 区のもっとも北部において狭い間隔で畦が並んでいる部分 があった。これは形態から畑と考えられる。またこの場所 で川崎地質株式会社に委託して実施した花粉分析の結果に よればソバ属、イネ属などの花粉が検出されており、これ らの作物が栽培されていた可能性が高い(第3章参照)。こ れらの水田面のうち南側の部分については作土の上に大量

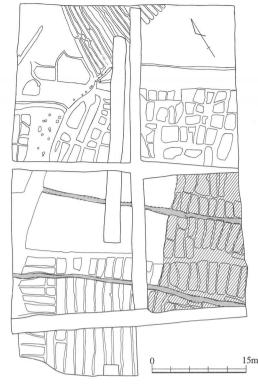


図 271 <u>盛土遺</u>構平面図 (斜線部が盛土部分) (S=1/600)

の須恵器の破片が散布しており、また焼土や窯壁の破片も多くみられた。これは明らかに須恵器窯の 灰原の状況を示すものであった。この場所は狭山池の東岸を構成する段丘崖からは 50m 以上離れて いるため、当初須恵器窯の存在はまったく想定していなかった。この灰原を追い掛けて調査区を南 (堤体側)に拡張したところ、南にいくほど、つまり狭山池の北堤に接近するほど灰原は厚くなり遺物 の量も増加していった。このことから考えてこの窯は狭山池築造後、その堤の斜面を利用して築かれ たものと考えられる。この窯は調査後、狭山池1号窯と命名した。狭山池1号窯の遺構、遺物につい ては本章第4節において別途報告している。この灰原層のさらに上層に厚さ 20cm の砂利を主体とす る盛土がなされていた。この盛土はかなり踏みしめられた状態で盛られており、明らかに水田面を別 の形で利用するための造成と考えられる。ただしこの盛土の面からは明確な遺構は確認されなかった。 またこの盛土に対応する遺構として石が直線的に並べられたものが2列平行して検出されている。こ の石列は盛土の西端ラインに垂直に配置されておりその上に土が盛られていた。遺構の性格としては 盛土部分に通じる道であると考えられる。これらの遺構の重なりは、水田→灰原→盛土という土地利 用の変遷が調査区の南部地域においてみられたことを物語る。また水田作土の上に直接に灰原が堆積 している状況はこの変化が比較的短期間に生じたことを示している。調査区の南部においてはこのよ うな土地利用の変遷を地層の重なりとして読み取ることが可能であるが、逆に北部においては同じ面 に異なった時代の遺構が残されており著しい対照を示している。

#### ②水 田

調査区は南北東西の2本のセクションによって4つに区画されている。南西部がA区、南東部がB区、北西部がC区、北東部がD区である。さらに灰原の範囲を探るため調査区を南に拡張したがこの拡張区をE区とする。今回検出した水田は調査区内において140筆検出されている。ただしC区、D区など北側の水田は後世の攪乱、削平によって畦が相当変化していると考えられる。これに対してA区、B区、E区の水田は灰原、盛土などによっていわば密封された状態で残存しており当初の水田

の形態を探るには南部のものを中心にとりあげるべきであろう。この地区の水田の基本的な形は南北に長い長方形である。正確には水田の長軸は磁北から東に $40\sim45$ 度程度振っている。A区、B区、E区の水田の大きさの平均は長軸の長さが 3.63m、短軸が 1.37m である。長軸の長さは北側の水田が短く、南に行くほど長くなっている。これに対して短軸長は 1.3m にほぼ一定している。もっとも大きい水田の面積は E調査区で検出されたもので 9.1m²、またもっとも小さい水田は A区でみつかったもので面積は 1.8m² である。全体的に非常に小さな区画が多く、典型的な小区画水田といえる。最近全国で弥生時代、古墳時代の水田の出土が増加し、その構造も次第に明らかになってきている。

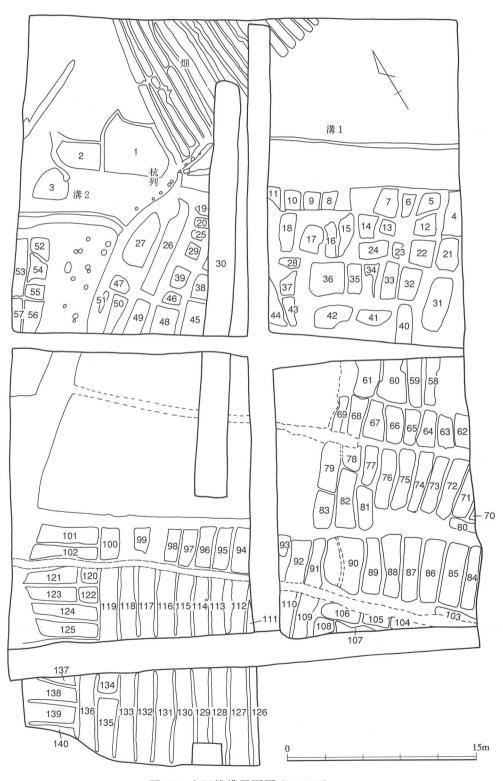


図 272 水田遺構平面図 (S=1/300)

弥生・古墳期の一般的な水田の形態は池尻遺跡にみられるいわゆる小区画の水田である。⑤ これまでの研究によれば、水田はまず大きな畔によって区画され、それを小さな畔によって細かく区画していることが明らかになっている。多くの小区画水田はいわゆる所有の単位ではなく、傾斜地などで水持ちをよくするために区画されたと考えられるようになってきている。池尻遺跡の水田もまず大畔によって区画された後、小畔によって細分されたと考えるべきだろう。水持ちをよくするための小畔は傾斜方向に対して垂直に設けるのが当然であるが、本調査区は東から西にむけて僅かに傾斜しているた



写真 99 一番小さい水田

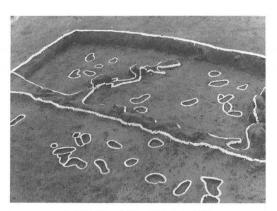


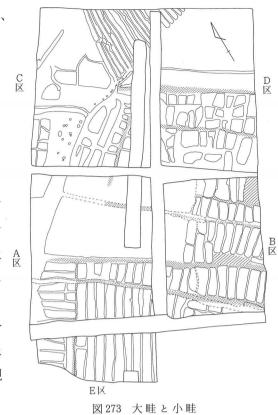
写真 100 水田に残された足跡

表29 水田の規模と方位

	表 20 不 田 9 然 侯 2 万 世														
番号	長軸方向 長さ(m)	短軸方向 長さ(m)	傾き	番号	長軸方向 長さ(m)	短軸方向 長さ (m)	傾き	番号	長軸方向 長さ(m)	短軸方向 長さ(m)	傾き	番号	長軸方向 長さ (m)	短軸方向 長さ (m)	傾き
1				36	2.7	2.7	30° E	71	3.9 以上	1.2	55° E	106	1.35以上	3.15	45° E
2				37	1.95	1.2	40°E	72	4.95	2.7	55° E	107	3.15以上	0.9 以上	35°E
3				38	1.95	1.35以上	40°E	73	4.65	1.2	50°E	108	1.5 以上	1.65以上	45°E
4	3.3	1.65以上	40° E	39	1.8	1.2	45° E	74	4.95	1.2	45° E	109	3.6 以上	1.5 以上	45° E
5	1.8	1.95	40° E	40	3 以上	1.35	35° E	75	4.95	1.35	45°E	110	3.6 以上	1.35以上	45° E
6	1.8	1.05	50°E	41	1.2	3	40° E	76	4.65	1.35	45° E	111	2.7 以上	0.6 以上	35°E
7	2.1	1.8	50°E	42	1.8	3	40° E	77	3.15	1.2	40°E	112	4.2 以上	1.35以上	35° E
8	1.5	1.2	40°E	43	2.4	1.05	25°E	78	2.1 以上	1.5 以上	35°E	113	4.5 以上	1.05	35°E
9	1.5	1.2	40° E	44	4.2 以上	1.65以上	15°E	79	3.9 以上	1.5	40°E	114	4.8 以上	1.2	35°E
10	1.65	1.35	40°E	45	2.7 以上	1.5 以上	45°E	80	0.9 以上	2.25以上	45° E	115	4.95以上	1.2	35°E
11	1.65	1.05以上	30°E	46	1.05	1.5	45° E	81	3.6	1.2	30°E	116	5.4 以上	1.5	35°E
12	1.8	1.8	30°E	47	1.2	1.5	50°E	82	4.65	1.8	40°E	117	5.7 以上	1.2	35°E
13	1.05	1.2	50°E	48	2.1 以上	1.8	40°E	83	3	1.5	40°E	118	5.7 以上	1.35	35°E
14	1.8	1.8	30°E	49	3 以上	1.2	55°E	84	5.1	1.05	40°E	119	5.7 以上	1.5	35°E
15	3.45	1.35	40°E	50	3.15以上	1.2	55°E	85	5.1	1.65	40°E	120	1.2 以上	1.35	35°E
16	2.7	0.9	40°E	51	1.8	0.45	55°E	86	5.1	1.5	40°E	121	1.35以上	4.2	30°E
17	2.1	1.65	50°E	52	1.8	1.5	30°E	87	5.1	1.5	35°E	122	1.35	1.5	30° E
18	3	1.2	40° E	53	4.5 以上	0.9 以上	35°E	88	5.1	1.65	35°E	123	1.2	4.05	35°E
19	0.6 以上	1.05以上	40°E	54	2.25	1.5	40°E	89	4.5	1.5	35°E	124	1.2	5.25	35°E
20	0.9 以上	1.05以上	40° E	55	1.2	1.5	35°E	90	4.5	3	40°E	125	1.35	5.1	35°E
21	2.55	1.8	45° E	56	2.25以上	1.5	35°E	91	3.9 以上	1.5	45°E	126	7.8 以上	0.45以上	30°E
22	2.1	1.8	45° E	57	2.7 以上	0.9 以上	35°E	92	3.45以上	1.5	45° E	127	7.8 以上	1.5	35°E
23	0.8	7.5	45° E	58	3.75以上	1.2 以上	40°E	93	1.65	1.2 以上	50°E	128	7.8 以上	1.2	35°E
24	1.35	2.4	45° E	59	3.9 以上	1.2 以上	30°E	94	3.6	1.5 以上	40° E	129	5.85以上	1.2	30° E
25	7.5	9	50°E	60	3.45以上	2.4	45° E	95	3.45	1.2	45° E	130	7.5 以上	1.5	30°E
26	7.8	1.35	55°E	61	3 以上	2.1 以上	45° E	96	3.3	1.2	45° E	131	7.5 以上	1.5	35°E
27	4.5	1.95	55°E	62	2.7	1.2 以上	45° E	97	2.85	1.2	40°E	132	7.5 以上	1.35	35°E
28	0.9	1.8	35°E	63	2.7	1.5	35°E	98	2.55	1.05	40°E	133	7.05以上	1.2	35°E
29	1.2	1.05	55°E	64	3	1.5	35°E	99	2.1	1.2	35°E	134	1.65以上	1.5	35°E
30	1.05以上	0.6 以上	55°E	65	2.85	1.35	40° E	100	2.4	1.5	35°E	135	4.8 以上	1.5	35°E
31	4.35	1.8	50°E	66	3	1.5	40° E	101	1.35	4.8	35°E	136	6 以上	1.2	35°E
32	2.55	1.65	50°E	67	3	1.8	45°E	102	1.2	5.4	35°E	137	0.9 以上	3 以上	45°E
33	3	1.2	40° E	68	3.3 以上	1.35	45° E	103	0.6 以上	3.3 以上	45°E	138	1.5 以上	4.2 以上	35°E
34	2.7	1.2	40° E	69	2.85以上	0.75	45° E	104	0.9 以上	3 以上	45°E	139	1.5 以上	4.05以上	35°E
35	2.4	1.2	30°E	70	0.9 以上	0.6 以上	55° E	105	0.75以上	2.1	45° E	140	0.6 以上	3.9 以上	40°E
				1											

め南北方向の小畔が多くみられるものと考えられる。A、 B、E区における大畔の区画は図273に記した通りで、 一応調査区内において8つの区画を考えている。この大 畔を設けたのち、南北方向を中心とする小畔を 1.3m 間 隔で設けたのだろう。各水田の間には水路らしいものは まったく観察できず、いわゆる田越灌漑がおこなわれて いたと思われるが、水田には水口などもみられない。こ の程度の大きさの水田区画であれば特に水口がなくても 水入れは可能であったのだろうか。ちなみに調査中、何 度か降雨があり、その度に水田跡にたまった水を排水す る作業を行ったが、その際には板で水を押すように排水 A するのがもっとも効果的であった。かつての農民も同じ 要領で入排水をした可能性があるだろう。どちらにせよ 調査区内において水路がみられないということから、今 回検出された水田群は河川などから水を引いて灌漑した のではなく、天水または段丘崖などから流れてくる小規 模な谷水を利用したものと考えられる。

また水田群のなかには数箇所水田を掘り残した部分が



みられた。B区の東北隅の堀り残し部分は長軸方向(NE-SW)の長さが 4.8m、短軸方向の長さが 2.7m、面積は 12.96m²、また B区の中央の堀り残し部分は長軸方向(NW-SE)の長さが 6.0m、短軸方向の長さが 1.9m、面積は 11.4m² である。ともに水田 1 区画ないしは 2 区画を堀り残したもので、現在の水田と比較してその機能を類推すれば、刈入れの時に稲を仮置きするような作業空間であったとみられる(図273の斜線部分)。

また畔はこれまで述べてきたように大畔と小畔に分類できる。大畔は断面が台形であり、これに対して小畔はかまぼこ形の断面である。小畔の高さは場所によって相違がありもっとも高い所で14cm、もっとも低いところで4cm、平均は7cm程度である。

この水田の作土の中からは遺物の出土はなく、直接的に水田が築造された時期を確定することはできないが、先に述べたようにこの水田の下の砂層から6世紀以降のものと思われる須恵器が検出され、また水田の上に堆積している灰原の遺物が TK217型を中心とするものであることから考えてこの水田は6世紀未に築かれ7世紀の前半にはすでに廃棄されていたとみられる。またこの水田と狭山池の前後関係については現在のところ以下のように考えている。今回検出された水田は狭山池の北堤のすぐ北まで続いており、現在の狭山池北堤の中にさらに連続する可能性がある。また狭山池調査事務所が北堤において実施したボーリングのコアのうち、堤体の基盤にあたる有機物層からはイネのプラントオパールが検出されたことが外山秀一氏によって報告されており、®水田が狭山池に先行する可能性が高い。この水田作土の上に直接須恵器窯の灰原がかぶさっていることから、水田は狭山池築造直後に廃棄されたことが考えられる。水田は北堤のすぐ直下であったために、狭山池から流出する水路よりも標高が高く引水ができず、また狭山池築造以前に依拠していたと思われる東側段丘からの谷水も、北堤によって供給を断たれたことがこの耕作放棄の原因であろう。

調査区の西端で他の水田とは切り離された状態で、水田が6筆検出されている。これらの水田は他の水田とは異なり、砂で埋没していたために足跡が顕著に残っていた。足跡は大部分が人間のものと

考えられるが、なかに楕円形のものがありこれについては家畜のものである可能性がある。人間のものと考えられる足跡は長さが 20cm 程度のものがほとんどで非常に小さい。また砂を掘って深さを計ったがほとんどは 2~3cm の深さであった。

#### ③畑

C区、D区の北部において畔が 30cm~40cm 間隔で並んでいる部分がみられた。これは畑と考えられる。畑はおおむね砂によって埋められていたため検出は比較的容易であった。畑の一本一本の畔の断面は上面が平たく両端が急角度におちこむ台形であった。畑の畔の間隔が 30cm 程度と非常に狭いためそれほど大きな作物が植えられていたとは考えられない。花粉分析の結果ではソバ属、イネ属

の花粉が検出されている(第3章参照)。畑が検出された 面は基本的には水田と同一面であるが、先にものべたよ うに今回の調査区の北側では古墳時代の水田と近世以降 の水田が直接接しているためその時期の判断には慎重な 態度を取りたい。最近では群馬県などで古墳時代の畑も 幾つか報告されているが、関西においては古い時期の畑 の事例は極めて少なく、奈良県広陵町箸尾遺跡や大阪府 藤井寺市西大井遺跡において中世の畑が報告されている にすぎない。かりに今回検出した畑が古墳時代のもので あれば貴重な事例となろう。

# ④須恵器窯灰原

先述の通り調査着手以前には須恵器窯の存在は予想し なかったが調査途中多量の須恵器片が出土し、灰原であ ることが確認された。灰原はA区、B区および拡張区 であるE区において見られた。灰原の厚さはもっとも 厚い部分で35cmであるが、薄い箇所では2cm程度で ある。B地区では灰原は広い範囲に広がっているが大半 は焼土のみの層であり、遺物などが多く含まれているの はA、B地区の南端とE地区である。それ以外の箇所 においては須恵器片はブロック状にかたまって検出され た。灰原中の遺物については第4節において別途報告す る。この灰原層は水田の畝と畝の間を埋めるように堆積 しており、水田作土との間には間層はまったくみられな かった。このことから水田の放棄後、間を置かずに窯が 築造され灰原が形成されたと考えられる。またこの灰原 を堆積させる原因となった窯本体の所在については、東 側の段丘崖までは距離も遠く、北堤そのものの傾斜面を

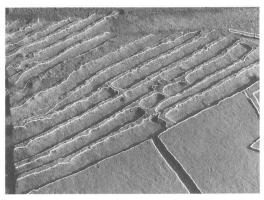


写真 101 畑 全 景

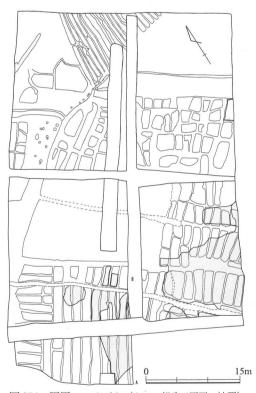


図 274 灰原のひろがり (トーン部分が灰原の被覆)

利用して築いたものと考えられる。この点についても第4節で触れている。これまで我が国の須恵器窯でこのように人工の斜面を利用して築造されたものの発掘例はまったく無く、この窯は非常に特殊なものと考えられる。今日の常識で考えれば池の堤体に窯を築くことは池の決壊を考えれば絶対に考えられない。しかしながら狭山池は我が国でも最古の段階の溜池であり、少なくとも当時我が国でもっとも主要な須恵器生産地域であった陶邑窯跡群一帯においては最初の大土木構築物であったと思わ

れる。そのような状況の中で須恵器を生産する工人達に今日的な意味での土木技術に対する常識が欠落していてもそれほどの不思議はないだろう。狭山池 1 号窯の経営は最初の溜池であるために生じた現象とみることができる。

# ⑤中近世の遺構、遺物

今回の調査区においては先にも述べたように、南側では古墳時代の水田の上に須恵器窯の灰原などの間層があり、その上に水田を中心とする近世遺構が展開していた。溝の中には相当深く掘りこまれたものがあり、その中からはいくつか遺物が出土している。図275に掲載した鎌は調査区外のトレンチ中から出土したものである。この場所は近世の水田面から深く掘りこまれた溝の底の部分にあたる。共伴する遺物がないため正確な時期は不明であるが、やはり近世の遺物と考えられよう。鎌は刃渡り

が 15.2cm、峰の厚さは 2.5 mm である。刃はほぼ直線的に伸びているが、峰は平面形はゆるやかな曲線を示している。柄の部分の先端は内側に曲がっておりこの部分に釘を引っ掛けて木部に着装できるようになっている。柄と刃の角度は112度でこれは草刈鎌の一般的な角度である。

また調査区の北部においては古墳時代の水田面の直上が近世の水田面となっていたため、近世の面からの遺構と思われるものがいくつか残されていた。図272における溝1

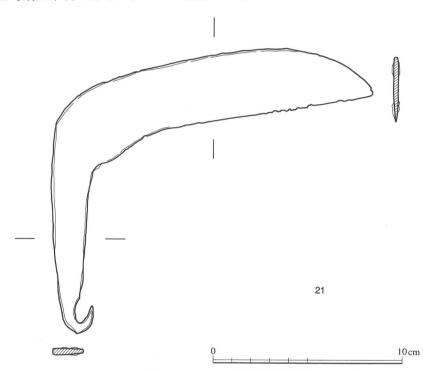


図 275 池尻遺跡 (2) トレンチ内出土遺物実測図 (S=1/2)

は幅 20cm、調査区内における長さは 15.1m、深さは 25cm、断面形はほぼ正方形である。溝の中には直径 5cm 程度の小石がぎっしりとつまっていた。またそれらに混じって近世の土器や瓦片が若干出土している。この溝は排水のために利用されたものと考えられる。溝 2 は幅 60cm、調査区内における長さ 7.9m。流れの方向は東から西である。図276・277はともに包含層出土の遺物である。包含層からは古墳時代の須恵器もみられるがいずれも狭山池 1 号窯から後世移動したものであろう。ただし13のみは奈良時代の須恵器である。また14、17は近世以降の遺物である。これらは近世水田の耕作に伴う遺物であろう。

### 4 小 結

池尻遺跡(2)の発掘調査では、古墳時代後期の水田跡や須恵器窯など多くの遺構を検出した。なかでもっとも特筆すべき点は、狭山池築造の下限を考古学的にほぼ押さえることができたことであろう。この調査の後に行われた東樋下層遺構の調査によって狭山池の築造年代は7世紀初頭にほぼ確定したが、池尻遺跡および狭山池1号窯の調査成果はそれを補完する役割を担っている。さらに狭山池築造に先行すると見られる水田を検出したことも大きな成果であった。狭山池の築造は南河内の開発にとって大きな契機であったことは間違いのないことであろうが、狭山池ができて初めて水田の開発が開

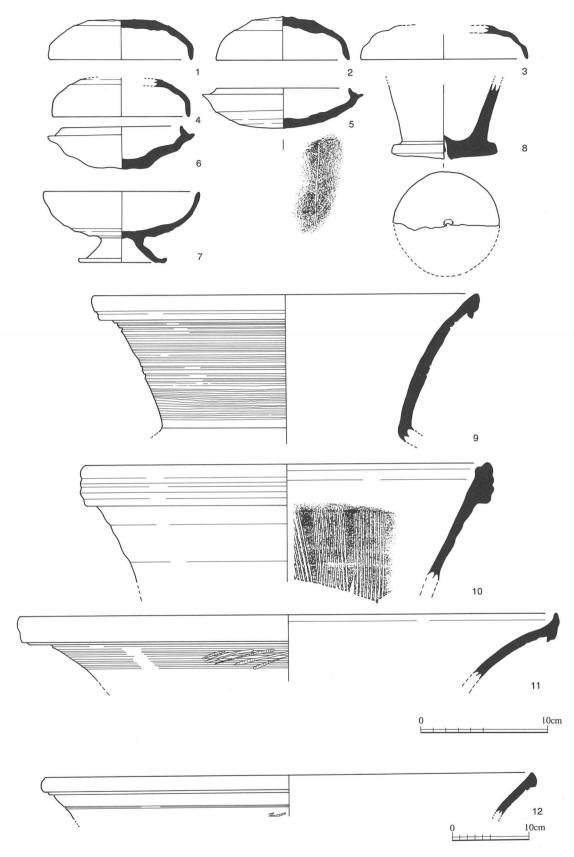


図 276 池尻遺跡 (2) 包含層出土遺物 (1)

器種	図面 図版	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	276- 1 122- 1	口径11.2 器高3.2	体部は下外方に下り、口縁部は下方 に下る。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。焼成:良好。残存: 1/4。反転復元。
杯蓋	276- 2 122- 2	口径10.6 器高3.5	体部口縁部は下外方に下る。端部は 丸くおさめる。天井部はやや高くや や丸くおさめる。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面3/4回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 黄色。胎土:密。焼成: やや不 良。残存:1/3。反転復元。
杯蓋	276- 3	口径13.4 残存高2.8	体部、口縁部は下外方に下る。端部 は丸くおさめる。天井部は低く平ら に近い。天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。1mm の長石をわ ずかに含む。焼成:良好。残存: 1/7。反転復元。
杯蓋	276- 4	口径10.8 残存高3.1	体部は下外方に下り、口縁部は下方 に下る。天井部は低く平らに近い。 天井部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井 部外面2/3回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。3mm 以下の長石を若干含む。チャートを含む。焼成:良好。残存:口縁1/4。反転復元。灰かぶり。
杯身	276- 5 122- 5	口径10.4 受部径12.8 器高3.2 T高0.5 T角度50°45′	たちあがりは内傾して上内方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2回転ヘラ削り調整。底 部外面1/2(底部中央)未調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。焼成:良好。残 存:1/3。ヘラ記号:底部外面に 「一」あり。
杯身	276- 6 122- 6	口径9.6 受部径11.8 器高3.4 T高0.5 T角度40°15′	たちあがりは内傾して上内方にのびる。端部は丸くおさめる。受部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。 たちあがり基部内面で段を成す。底体部は浅く平らに近い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面1/2(底部中央)未調整。他 は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:内一 暗灰青色、外ー淡灰色。胎土:密。 焼成:良好。残存:1/4。
高杯	276- 7	口径12.2 基部径3.4 脚部径6.8 器高5.8	口縁部は内彎しながら上外方にのびる。端部は丸くおさめる。杯底部は 平らに近い。脚部は下外方に下り、 裾部で外方にのびる。裾端部は平面 を成す。	マキアゲ・ミズビキ成形。杯底部外面4/5回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 色。胎土:密。2mm以下の長石 を含む。焼成:良好。残存:脚底 部1/2、口縁1/12。反転復元。外 面灰かぶり。
壺	276- 8 122- 8	底径8.5 基部径6.8 残存高6.1	体部は上外方にのびる。底部はほぼ 平ら。底部中央に円孔を有する。口 縁部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。1mm の長石をわずかに含む。焼成:良好。残存:1/2。自然釉付着。
甕	276- 9	口径30.6 残存高12.0	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で短く下外方にのび、段を成 して外上方にのび、内傾して上外方 にのびる。端部は丸くおさめる。頸 部上方に2条、頸部中位に2条の沈 線をめぐらす。肩部は下外方にのび る。肩部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 頸部 外面カキ目調整。他は回転ナデ 調整。	ロクロ回転:左回り。色調:灰茶 褐色。胎土:密。2mm 以下の長 石、石英を含む。焼成:良好。残 存:口縁1/5。反転復元。内外面 に自然釉付着。
甕	276- 10	口径32.4 残存高9.5	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で短く外方にのび、あまい段 を3箇所で成して上方に至る。端部 は丸くおさめる。内面に段を成す。 口頸部下方1/3以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。チャートを含む。 焼成:良好。残存:口縁1/6。反 転復元。
獲	276- 11 122- 11	口径43.0 残存高5.3	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で短く下方にのびあまい段を 成し、内傾して上外方にのび、端部 は丸くおさめる。口頸部下で鈍い3 条の沈線をめぐらし、その下方に櫛 描き斜行沈線文を有する。口頸部下 半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。頸部 外面カキ目調整。他は回転ナデ 調整。	ロクロ回転:右回り。色調:灰色。胎土:密。1mm の長石を若干含む。焼成:良好。残存:口縁1/14。反転復元。内面灰かぶり。
甕		口径65.4 残存高5.7	口頸部は外反して上外方にのび、口 縁部下で短く下方にのびたのち上方 にのび、段を成し、内傾して上外方 にのびる。頸部上方に1条の沈線を めぐらし、上沈線の下方に刺突文を 有する。口頸部下半以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:暗灰 色。胎土:密。焼成:良好。反転 復元。
杯身	277- 13 122- 13	口径16.6 高台径12 残存高4.3 高台高0.62	体部は上外方にのびる。口縁部欠損。底体部はやや深く、底部は平らに近い。底部端よりやや内側に八の字型の高台を付し、高台端部は平面を成す。底部中央欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部 外面回転ヘラ削り調整。他は回 転ナデ調整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰 青色。胎土:密。1mm の長石を 含む。チャートを含む。焼成:良 好。残存:高台部1/7。反転復元。
陶器中碗	277- 14 123- 14	口径11.4 残存高6.0	体部・口縁部はやや外反しながら上 外方にのび、端部は丸くおさめる。 底部は内下方にのびる。底部中央火 損。	蓮花文様。透明釉を施す。	色調:白色。胎土:密。焼成:良好。残存:1/5。反転復元。
陶器碗	277- 15 123- 15	基部径6.6 脚部径6.0 残存高3.0	体部は外上方にのびる。口縁端部欠 損。底部は平ら。底部端より内側に 八の字型の高台を付し、高台端部は 丸くおさめる。底部中央欠損。	透明釉を施す。	色調:茶色。胎土:密。焼成:良 好。残存:脚底部1/5。反転復元。

陶器小皿	277- 16 122- 16	口径8.2 底径5.2 残存高1.6	体部・口縁部は上外方にのびる。端 部は平面を有し内面で接地する。底 体部は浅く、底部は平ら。底部中央 欠損。	透明釉を施す。口縁部内面無 釉。	色調:淡灰緑色。胎土:密。燒成: 良好。残存:1/5。反転復元。
陶器紅猪口?	277- 17 122- 17	基部径3.2 高台径2.8 残存高1.9	体部は上外方にのびる。口縁部以下 欠損。底部は平らに近い。底部端よ りやや内側に下方におりた高台を付 し高台端部は丸くおさめる。底部中 央欠損。	高台部露胎。外面褐色釉。内面 透明釉。	色調:内-白色。 外-褐色。 胎 土:密。焼成:良好。残存:高台 径1/4。反転復元。
軒平瓦	277- 18 123- 18	瓦当面の幅3.5		瓦当面唐草文様。外区無文。	色調:暗灰色。胎土:密。焼成: 良好。
羽釜	277- 19 123- 19	口径20.2 残存高5.3	口縁部は上内方にのびる。端部は平面を成す。口縁部外面に3条の鈍い 沈線をめぐらす。肩部は外下方にの びる。端部は平面を成す。肩部下に 1条の沈線をめぐらす。体部は下内 方に下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。内面 にカキ目調整。他は回転ナデ調 整。	ロクロ回転:右回り。色調:淡灰色。胎土:密。1mm の長石をわずかに含む。焼成:良好。残存:口縁部1/2。反転復元。
羽釜	277- 20 123- 20	The state of the s	口縁部は上内方にのびる。端部は平 面を成す。口縁部外面に2条の鈍い 沈線をめぐらす。肩部は外方にの び、端部は丸くおさめる。体部は下 方に下る。体部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整。	ロクロ回転:左回り。色調:灰橙 色。胎土:密。2mm以下の長石 を含む。焼成:良好。残存:口縁 部1/5。反転復元。外面に自然釉 付着。

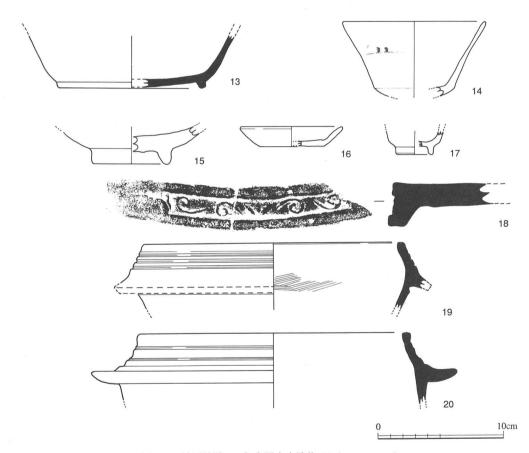


図 277 池尻遺跡 (2) 包含層出土遺物 (2) (S=1/3·1/5)

始されたのではなく、谷水や雨水などを利用した不安定な水田が所々に細々と営まれていた状況のなかで、狭山池が築かれたことが今回確認された。狭山池の築造と下流の大開発は恐らくは国家レベルでのものとみられるが、今回検出された水田は狭山池の築造によって廃棄されたと考えられ、国家的大開発が一面では地域的な小規模開発を飲み込む形で進行したことを示している。

### Ⅲ池尻城跡

### 1 調査の経過

池尻城跡は狭山池の西北側の段丘面に所在する中世城館である。古くから遺物の散布や「古城」 「小屋ノ内」などの小字名の分布から城跡の存在が予測されていたが、1985年に大阪府教育委員会に よって発掘調査が行われ、濠に囲まれた曲輪の存在が確認された。遺物などからみてこの城館は13世 紀末から15世紀前半にかけてのものであることも判明している。®

今回のダム工事の一環として、狭山池北堤上を通っていた市道を池の北側に移動させる工事が行わ れることとなり、この付け替え市道が池尻城跡内を通るために工事に先立って、発掘調査を実施した。 なお調査は用地買収などの関係で3回にわけて実施したが、本書においては個々の調査の結果を総合 して報告する。調査期間は1988年11月、1991年7月、1992年7月~8月であった。

#### 2 遺 構

前述の通り調査は3回に分けて行った。図278のA調査区は1991年に、またB調査区は1992年に 調査を実施した箇所である。両区の真ん中の部分は1988年に発掘調査を実施した箇所であるが、ほと んど無遺構、無遺物であったために、地山の確認調査のみを実施した。

西側に位置するA調査区では溝・ピットを検出した。また調査区の東側半分では溜池1が検出さ

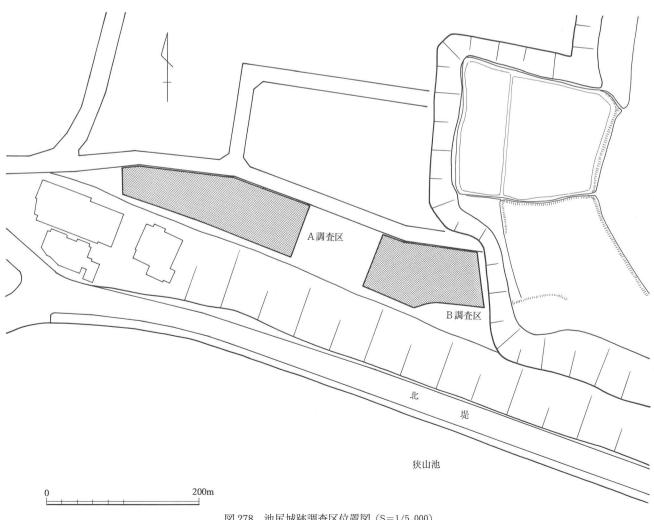


図 278 池尻城跡調査区位置図 (S=1/5,000)

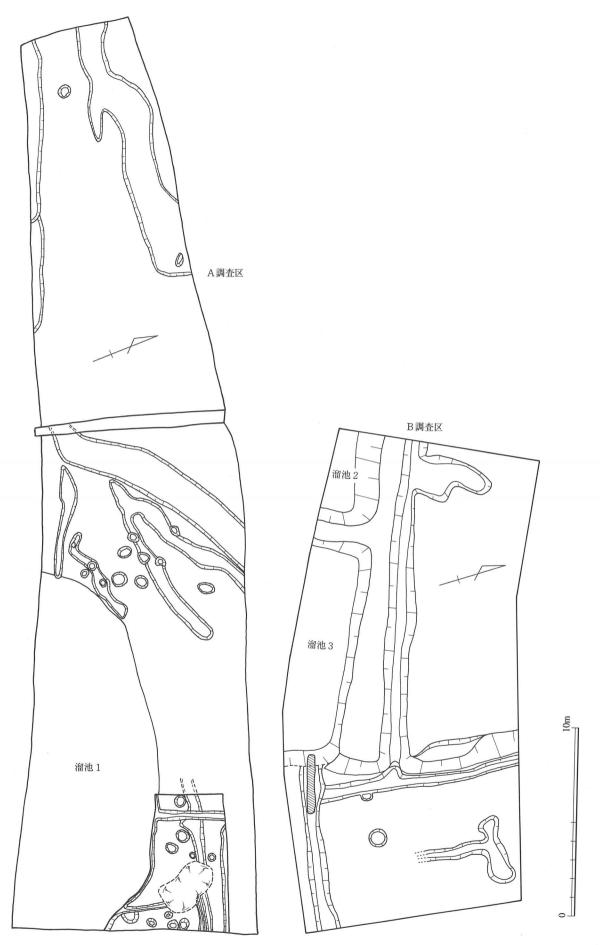


図 279 池尻城跡遺構平面図 (S=1/200)

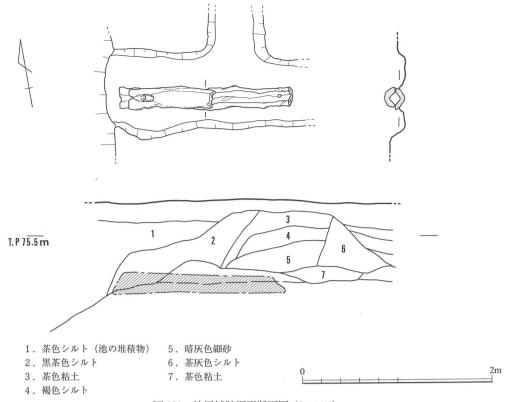


図 280 池尻城跡樋平断面図 (S=1/40)

れている。溜池1は溝など他の遺構よりも後に掘削されており、溝などを断ち切っている。長さは調査区内で18.5m、幅はやはり調査区内で6.8mである。深さは少なくとも3.2m以上あるが、それ以上の掘削は危険であったために行わなかった。溜池1の範囲は調査区よりもさらに東と南に広がっている。溝は溜池1よりも西側においては定まった方向をもたずランダムに配置されている。溜池1付近においては東西、南北方向に直角に交差して流れている。ただしA調査区におけるこれらの溝やピットの意味については遺物もなく不明というしかない。



写真 102 溜池 3 の樋

東側の B 調査区においては二つの溜池(溜池 2・溜池 3)と溝を検出した。溜池 2 は調査区内における長さ、幅がそれぞれ 4.8m・2.7m であり、さらに南側、西側に広がっている。溜池 3 は溜池 2 に連続する小さな溜池で、両者の境界には小規模な堤がみられた。溜池 3 の規模は調査区内において長さ 12.0m・幅 3.4m であった。また溜池 3 の東端には幅 3.1m、高さ 0.7m の堤がありその下には樋管が埋設されていた。堤の中心にはよく締まった粘土、シルトが入れられており、水漏れを防いでいる。現在中ハガネとも呼ばれているコア構造をもつ堤である。樋はマツの丸太を半切にし内部を正方形にくりぬいて再びあわせたもので、検出された長さは 182cm であった。堤防はこれよりも長いので樋の長さも設置当初はさらに長かったと思われる。蓋材は 86cm のみが残存していたが、端部の上面には直径 11cm の穴があけられていた。この部分に男柱を差し入れて水の調整を行っていたと思われる。ただ溜池 3 についても池の堆積物は随分と深いことが予想されたが、湧水が激しく掘削が困難であったため深さは不明である。しかしながら樋で取水できる部分よりもはるかに溜池は深いことだ

けは確実であり、この樋では溜池3に貯まった水のうち、上層のものしか取水できないこととなる。 樋よりも深い部分の水については人力で汲み出し利用したのであろう。狭山池周辺の段丘上においてはこのような掘り込み式の溜池が多く、フチと呼ばれている。フチでは水田の経営は不可能であり、主として畑作に利用されている。今回検出された3個の溜池はいずれもフチであると考えられる。B 調査区では二つの溜池に平行して東西方向の溝が検出されており、さらに溜池3の樋付近ではこれに直行する南北方向の溝も検出されている。いずれもこれらの小規模な溜池の水を最大限利用するための水路であると考えられる。本調査区においては遺物はほとんど検出できなかったため、これらの溜池をはじめとする諸遺構の時期は不明であるが、堤防にハガネ工法をもちいている点や、いわゆる O 型の樋管を利用している点などからみて、溜池の時期は近世であると考えられる(第3章参照)。

### 3 小 結

今回の調査地は池尻城跡に含まれていたが、当初予想していた中世の城館の遺構は検出できなかった。おそらく池尻城の南端はこの調査区よりもさらに北であり、池尻城と狭山池は直接接していなかったことがわかる。今回の調査で検出できたのは池尻城よりもさらに後世の近世の農業関係の遺構であった。特に溜池3においては小規模なものではあったが堤と樋を対で検出でき、樋や堤の歴史の上では新たな資料を手にすることができた。また狭山池の西北の段丘面上の耕地開発の時期が近世であり、小規模な溜池を中心とする開発であったことも明らかになった。

#### 注)

- ①尾上実 「南河内の瓦器椀」(『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』1983)
- ②田辺昭三 『陶邑古窯址群 I 』平安学園考古学クラブ 1966
- ③上田宏範 「東池尻・池尻の〈庄司庵〉〈門田〉」(『狭山の地名五十話』大阪狭山市役所 1992)
- ④吉川周作・三田村宗樹・内山高・長橋良隆・槻木玲美・Edy Sunardi・里口保文・橋本定樹・山本岩雄 ・田中里志・山崎博史・佐藤隆春・市川秀之 「大阪狭山市狭山池堆積物における液状化跡」(『地質学 雑誌』第103巻10号1997)
- ⑤工楽善通 『水田の考古学』東京大学出版 1991
- ⑥外山秀一 「狭山池の形成と植生環境その 1 一堤体ボーリングコアのプラントオパール分析一」(『狭山 池調査事務所平成 2 年度報告書』狭山池調査事務所 1991)
- ⑦『池尻城跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1987

# 第6節 出土遺物・遺構の保存処理

#### 1 はじめに

狭山池からは多くの遺構が出土しているが、ダム工事に伴う池底の掘削や、堤防の盛りたてによって現位置での保存はきわめて困難であり、もちろんダム完成後、貯水が開始されれば遺構を見学することもできないために、遺構については遺物同様、取り上げて保存し、将来的な展示に備えるという方針を採った。調査が進行するうちに大阪府土木部によって(仮称)狭山池ダム資料館の建設計画が具体化してきたため、資料館内での展示を具体的な目標としてさまざまな遺構の保存を進めることとなった。保存処理は遺物が巨大で運搬が困難なこともあり、業者に依頼せず、狭山池の内外において保存処理施設を設け、直接狭山池調査事務所が実施することとなった。以下、遺構ごとに保存処理の方法と成果について報告する。なお保存処理については、奈良国立文化財研究所の沢田昭一氏に全面的にご指導いただいた。記して感謝する次第である。

### 2 木製枠工

木製枠工の発掘調査は1993年4月より調査を開始して、翌年3月に終了した。木製枠工は木材を組み合わせて、中に土を充填し、表面に竹や石を並べた構造であり、この構造を保ったまま取り上げや保存処理を進めることは非常に困難であった。検討の結果遺構の全長28.8mのうち、2区画分、幅8.3m・奥行2.5m・高さ2.5mについて取り上げ、材木と土が一体のまま保存処理を実施することとなった。取り上げのための方法は次の通り。まず木製枠工の背後、側面を機械で掘削して側面、上面をウレタンで梱包した。この際前面についてはもちろん検出面をウレタン梱包したが、側面は外側の柱にそった土の断面を垂直に近い角度で掘削して、それが崩れないようにウレタンを吹き付けた。また背後はなるべく遺構の重量を小さくするため可能なかぎり掘削を行った。したがって一部では内面をえぐるような堀り方をして崩れる前に急いでウレタンを吹き付けるという状況にもなっている。なるべく土の部分を薄くすべく作業を進めたので、遺構の上部では30~50cm程度の土の厚さとなっているが、下部においては土の掘削は困難であり、厚さは80cm程度と思われる。また上面は発掘調査の一過程での任意の面であり、また背後の土を掘削することもあって、柱の部分以外の土は残していない。このようにして土を掘削しながら全体的にウレタン吹き付けの作業を進めた。底部にはオーガーで横方向の穴をあけ日網を差し込み、穴の余白を埋めるために隙間にウレタンを充塡した。次に

日鋼の下部に沿って鉄板を差し込み、遺構と地面を縁切りし、鉄板の下にはさらに径30cmの大きな日鋼を入れた。これは吊り上げ作業を考慮しての措置であった。これによって日鋼の上に鉄板が載り、その上に木製枠工が載る状態となったが、土が残されている前面部や側面部などについては底に鋼管を打ち込んでいる部分もある。また吊り上げ作業などによる全体的なきしみなどを防ぐために3ヶ所で鋼管による補強を行った。このように遺構の地面との縁切りおよびウレタンによる梱包を行った上で、大型のクレーンによって遺構を吊り上げ、狭

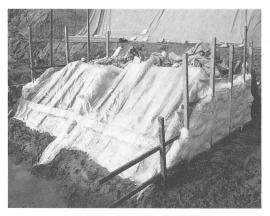
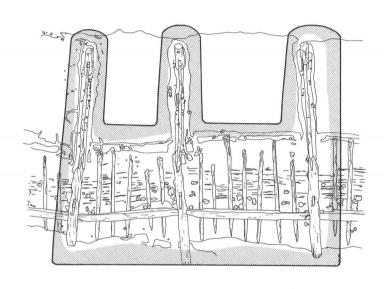
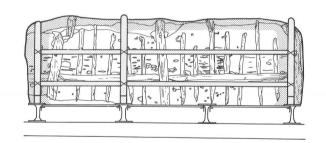


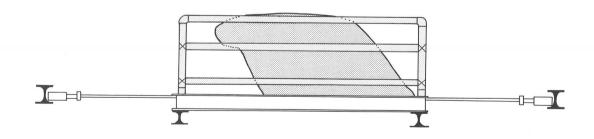
写真 103 木製枠工の梱包作業

山池東北角の旧体育館の敷地内に搬送した。池内の搬送は工事用の通路を利用し大型のトレーラーによって行い、池内部から体育館敷地への移動や、敷地内での移動はクレーンを移動させて、何度か釣りながら少しずつ移動させた。この時点では遺構全体をウレタンで梱包しただけであり、将来の展示にむけてどのような処理の方法を採用するのかは未定であった。取り上げられた木製枠工は、約4年間体育館の敷地内に仮置きをした。

1997年に入って、仮置場の近くでもダム化工事が始まり、またダム資料館の建築も開始されたこともあり、本格的な保存工事を開始した。保存処理の方法については、基本的には PEG 水溶液によって保存をはかるものの、木製枠工は高さ 2m 以上もあり、それを含浸させるプールを作ることは不可







0 5m

図 281 木製枠工ウレタン梱包状況 (スクリーントーン部分がウレタン)

能であるうえ、木や土や竹を一体として保存する必要があるために、シャワー方式による含浸を行う こととなった。ベタ基礎の上に鉄板で深さ 20cm の浅いプールを作り、その上に遺構を設置し、全体 をテントに入れた上で、遺構の上方や側面にパイプを設置し、ノズルによってシャワー状に液を散布 する方法である。この方法によれば漬け込むことによる、土の大規模な溶解や崩壊は防げるものの、 流水が発生するために土が液中に溶けだすことが予想される。そこでプールの横には濾過装置を設置 し、液を濾過した上でポンプによって循環させるシステムを採用した。PEG 水溶液の濃度は当初 39%で開始し、除々に濃度をあげて最終的には45%となった。

含浸施設の基礎およびプールを作り、その上にウレタンで梱包した遺構をクレーンで吊って移動し たが、その際の重量は26トンであった。その後ウレタンを人力除去したが、やはり取り上げ後4年近 い年月を経ていることもあり、前面の一部で直径約1m、深さは最大で25cm ほどの大きなへこみが みられた。その影響を受けて横方向の梁材も下方にずり落ちていた。このへこみの原因は乾燥による 土の収縮であると考えられる。しかしそれ以外は、遺構はほぼ発掘当初の姿を保っていた。そこでへ こみの部分によく似た土を池内で探して入れ、また各所にみられたクラックについてもそれ以上広が ることを避けるために土を詰め込んだ。また PEG 水溶液を散布すると遺構の土の強度が落ちて、遺 構全体が前方に滑りだすのを防ぐために前方の鉄板の上にモルタルを混ぜた改良土を張りつけて、遺 構の滑りを防いだ。土自体が多少下方向に流れだすことは当初より予想していた。また大規模な崩壊 を防ぐためには土を外側から力を加えて押さえる必要があった。そのため土の表面に不織布、メッシ ュ材、クッション材を順に敷設し、そのうえに鉄のアングルを載せた。アングルは横方向の材によっ て押さえる方法を採った。この緩衝材の選定や、敷設する順番、量などは現地で何度か実験をし、土 の表面にある程度 PEG 水溶液が留まり、しかも激しく流れないということを目的として決定した。 シャワー散布は1997年の7月より開始し、1998年の3月初旬で終わった。これは遺構を資料館内部に 搬入する日程が、資料館の建築工程との関係で決定しており、それに向けて一定の乾燥期間を確保す る必要があったからである。乾燥のために表面のアングルをはずし、緩衝材を撤去したが、ただ土の 壁が自立している状態の両側面については急速に乾燥することによってクラックが入ることを恐れて アングル材を外さなかった。約1ケ月の乾燥によって、材木は相当に強度が生じ、また土も表面は固 化した状態となった。1998年の4月には資料館への搬入時期も迫ったために、再度全体をウレタン樹 脂で梱包し、館内に搬入する予定である。資料館の工事が完成した後、遺構の表面部分のウレタン樹 脂は再び撤去され、乾燥および展示に向けた遺構表面の仕上げの作業をすることとなる。

また木製枠工のうち、ウレタン梱包をして取り上げた以外の部分については、同じ敷地内において 鉄の水槽に PEG 水溶液を入れ、そこに漬け込んで保存処理を行った。PEG 水溶液は濃度39%で、



写真 104 木製枠工の吊り上げ作業

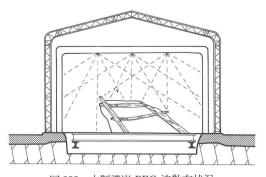


図 282 木製護岸 PEG 液散布状況

1994年4月から含浸を開始し、1997年6月までの約3年間含浸処理を行った。その後現在にいたるまで大阪狭山市立総合体育館駐車場に建てた倉庫において乾燥処理を行っている。

### 3 中樋遺構本体等

中樋遺構の調査は1993年10月より開始し、翌年3月に終了した。調査終了後、石棺や重源狭山池改修碑などを取り上げ、ついで樋本体など木材部分の取り上げ作業を実施した。樋本体については樋管および上部構造を解体せずそのままクレーンで吊り上げ、鉄製水槽に入れ PEG 水溶液によって含浸処理を行った。また両側の扇板、それをとめる杭などについては取り上げ時に1点ずつばらばらに取り上げ同じ水槽に入れた。水槽には屋根をかけたものの、野外での処理であったために PEG 水溶液の濃度は39%とした。処理用水槽は当初狭山池の南側に設置していたが、工事の関係で池の西側に移動した。含浸処理は1994年3月に開始し、1998年3月現在でも実施している。今後資料館への搬入時期を考慮に入れながら、資料館周辺において乾燥処理の過程に移る予定である。

### 4 中樋遺構出土石棺

中樋遺構からは計10点の家形石棺が出土している。これらについては現地よりクレーンによって取り上げ、石材の専門業者によって土台に載せて移動し、大阪狭山市立郷土資料館の駐車場敷地内に屋根をかぶせた状態で仮置した。しかしながら石棺のうち1点のみは内面に朱を施しており、また非常に石が柔らかく痛みやすい状態(二上山牡丹洞付近産凝灰岩)であったため、業者に委託して樹脂による強化処理を実施した。エポキシ樹脂を人力によって塗布し、その後 石棺を真空タンクの中にいれて気圧を下げ、石棺内の水分を飛ばし、代わりに樹脂の浸透をはかるという作業を3回実施した。この作業は1994年度に実施している。

### 5 中桶遺構出土重源狭山池改修碑

中樋遺構より出土した重源改修碑は和泉砂岩製で非常に剝離しやすくまたすでに剝離した痕跡もあったので、取り上げ作業直後に業者に委託し樹脂による保存処理を実施した。処理方法は先の石棺とほぼ同じであるが、樹脂はエポキシ樹脂を使用した。この処理は1994年度に実施している。

#### 6 東樋遺構

東樋遺構は上下 2 本の樋管からなるが、ともに全長約 70m という長大なものであった。下層遺構は材木を組み合わせてとめてあるだけの構造で、複雑な部分でもほぞ穴にもう一方の材を差し込みく

さびで固定したものであるために解体は容易であった。 番号を付して取り上げ作業を実施した。これに対して上 層遺構は釘を打って固定してあり、左右の側板も切れ目 の場所が異なっており、たとえ釘を抜いても解体は困難 な状況であった。そこで墨書や釘のない場所を選んで 10m 程度の長さで切断した。鋸による目減りはそれぞ れ 2mm 程度であった。解体あるいは切断によって上下 とも移動可能な状態となったが、運搬・保存時の補強の ために遺構のまわりに角材で枠を作り、吊り上げ作業は その枠にロープをかけて実施した。遺構はその規模があ



写真 105 東樋遺構のプールへの搬入

まりに大きかったために業者委託は不可能であり、場内にプールを作り、そこで PEG 水溶液による 含浸処理を行うこととした。処理場所は狭山池の南側で、プールの規模は 6m×60m、深さは 1m という大きなものとなった。このプールの中にまず遺構を固定して、その後に深さが 90cm になるまで 39% PEG 水溶液を満たした。浮力を押さえるためにプールの上面にはH鋼を横方向にはり、遺構の 浮上を押さえた。また PEG 水溶液の腐敗や滴出を防止するためにポンプをプールの端に設置して液を循環させた。このプールの上にはビニール製のテントをはって雨水などの侵入を押さえた。遺物が巨大であり、保存に必要な PEG 水溶液の量も膨大であったので、保存処理は中樋遺構同様常温で実施せざるをえなかった。含浸処理は1995年の 6 月より開始し1999年 1 月ごろまで実施する予定である。その後資料館への搬入時期を考慮しながら乾燥処理作業に移ることとなる。

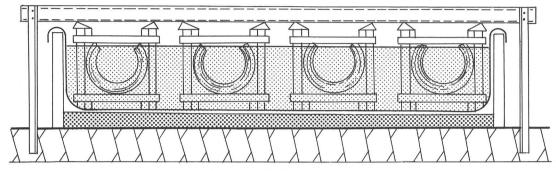


図 283 東樋遺構含浸状況

#### 7 西樋遺構

西樋遺構は1993年にその存在を確認し、翌1994年に本格的な発掘調査を実施した。調査終了後、解体して遺構を構成していた材木を取り上げ、実測や写真撮影などの作業を実施し、翌1995年6月に東樋と同じプールに入れ、PEG 水溶液による含浸処理を開始した。条件などはまったく東樋遺構と同様である。

#### 8 西樋遺構出土鉄製品

西樋遺構からは多くの鉄釘・カスガイなどが出土しているが、そのうち残存状況の良好なもの30点は、1996年に働大阪府文化財調査研究センターに委託して保存処理を実施している。処理方法は最初に X 線検査によって劣化状況を把握したのち、クリーニング作業を行い、アクリル樹脂(パラロイド NAD-10)による含浸補強処理を実施した。最後に防錆処理を実施している。

#### 9 北堤敷葉工法

北堤の断面については大阪府の堤体保存工事に伴って断面調査を実施し、平面的な調査は実施しなかったが、掘削の過程で第10層の敷葉が多くみられた部分において遺構を切り取りウレタン樹脂で梱包して取り上げ作業を実施した。取り上げ後、敷葉を平面的に見せるために雛壇式に掘削、整形をおこない、その後 PEG 水溶液を塗布し、再びウレタンで梱包、上下逆にして裏面を雛型状に掘削した。これは処理する土の量を最小限にするための措置である。裏面の掘削した部分にもウレタンを吹き付けて間隙を充塡し、再び上下を反転して元の位置に戻した。この状態で数年間放置しておりたが、ダム資料館の展示計画も固まってきたので、1998年に再び PEG 水溶液の塗布および乾燥処理を行う予定である。

## 10 小 結

以上述べてきたように狭山池からは多くの貴重な遺物、遺構が出土しており、狭山池調査事務所は その保存処理にも全力をあげて取り組んできた。これらの遺物、遺構は処理完了後、(仮称)狭山池ダ ム資料館内に展示される予定である。



# 第3章 考 察

# 第1節 池尻遺跡(2)における花粉分析

川崎地質株式会社 担当者 渡邉 正 巳

#### 1 はじめに

池尻遺跡(2)は、狭山池(大阪府大阪狭山市)の北側に位置する遺跡である。今回の調査区では、狭山 池の堤体を利用した古墳時代の窯跡(灰原)や、畦畔遺構などが検出されている。今回の花粉分析調査 は、畦畔遺構での栽培植物の推定や、同時代の狭山池周辺の自然環境の推定などを目的として、川崎 地質株式会社が狭山池調査事務所の委託を受けて実施したものである。

### 2 試料について

分析試料は、図284に示す 2 地点で採取した。それぞれの地点での試料採取層準は、図285、286の花粉ダイアグラムに示す。No. 1 地点試料 No. 5、6、No. 2 地点試料 No. 1、2、3 の採取層準が、古墳時代の畦畔あるいは

床土と推定できる層準である。

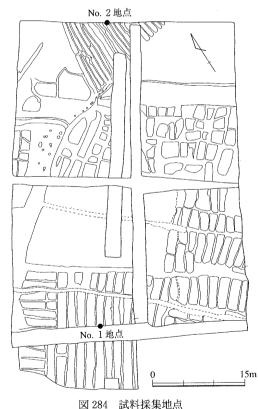
### 3 花粉分析方法および分析結果

分析方法は渡邉(1995)に従った。また分析結果を図285、 286の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは計数した木本花粉を基数にし、検出できた種類をすべて百分率によりスペクトルで表した。

### 4 花粉分带

花粉分析結果から以下のように花粉分帯を行った。 I帯(No.1地点1~4)

マツ属(複維管束亜属)、アカガシ亜属が高い出現率を示すほか、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ亜属を伴う。草本花粉の出現傾向から、ガマ属―ミクリ属が高い出現率を示す a 亜帯(試料 No. 1、2) と、イネ科(40ミクロン以上)が高い出現率を示す b 亜帯(試料 No. 3、4)に細分した。



Ⅱ帯 (No.1 地点 5、6、No.2 地点試料 No.1~5)

マツ属(複維管東亜属)が高い出現率を示すほか、アカガシ亜属を伴う。草本花粉では、I帯に引き続きイネ科(40ミクロン以上)が高い出現率を示す。No. 2 地点試料 No. 3 ではアカガシ亜属がほとんど

出現しないこと、No. 1 地点試料 No. 5、6 と No. 2 地点試料 No. 1、2 が同層準であることから、Ⅱ帯を a 亜帯(No. 1 地点 5、6、No. 2 地点試料 No. 1、2)、b 亜帯(No. 2 地点試料 No. 3)、c 亜帯(No. 1 地点試料 No. 4、5)に細分した。

Ⅲ帯 (No.1 地点試料 No.6)

マツ属(複維管東亜属)が高い出現率を示すほか、スギ属を伴う。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)のほか、アブラナ科が高い出現率を示す。

### 5 堆積年代について

No. 1 地点試料 No. 5、6 層準、No. 2 地点試料 No. 1、2、3 層準は、出土遺物から古墳時代に堆積したと推定されている。

また I 帯の花粉組成は、マツ属(複維管東亜属)、アカガシ亜属が高い出現率を示すほか、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ亜属を伴うなど、泉北丘陵北部に位置する伏尾遺跡での古墳時代の花粉組成(川崎地質株式会社、1992)と類似し、古墳時代に堆積した可能性がある。

No. 2 地点試料 No. 6 層準は、出土遺物から室町時代以降に堆積したと推定されている。一方この層準の花粉組成は、マツ属(複維管束亜属)、スギ属、イネ科(40ミクロン以上)、アブラナ科で特徴付けられ、伏尾遺跡での近代以降の花粉組成(川崎地質株式会社、1992)と類似する。したがって、この層準は室町時代から近代にかけて連続的に堆積した可能性もある。この場合、約0.3mm/年(およそ15cmの層厚をおよそ500年で堆積したと仮定)という堆積速度が推定できる。

#### 6 古環境変換

#### I 帯期(古墳時代)

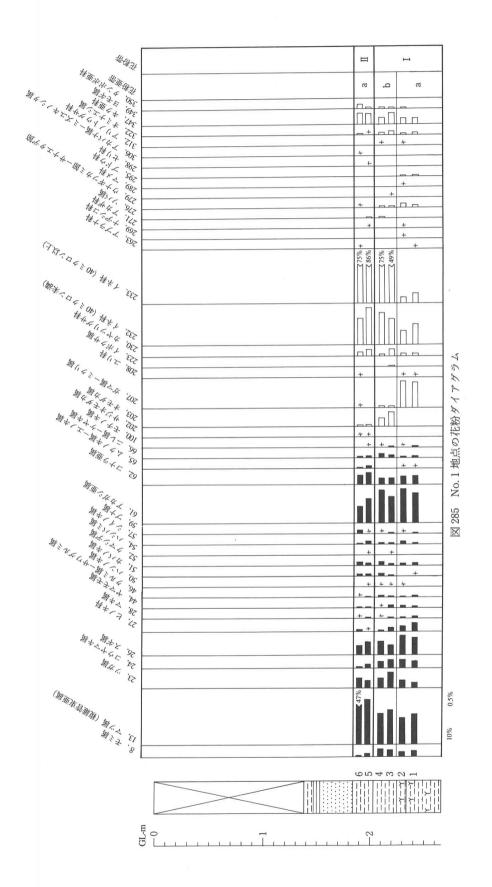
今回調査の池尻遺跡(2)は、三方を泉北、富田林、河内長野丘陵(中世古・中川、1976)に囲まれ、さらに河内長野丘陵の背後には金剛、和泉山地が広がっている。今回の調査により検出された木本花粉化石の多くは、広くこれらの地域からもたらされたと考えられる。

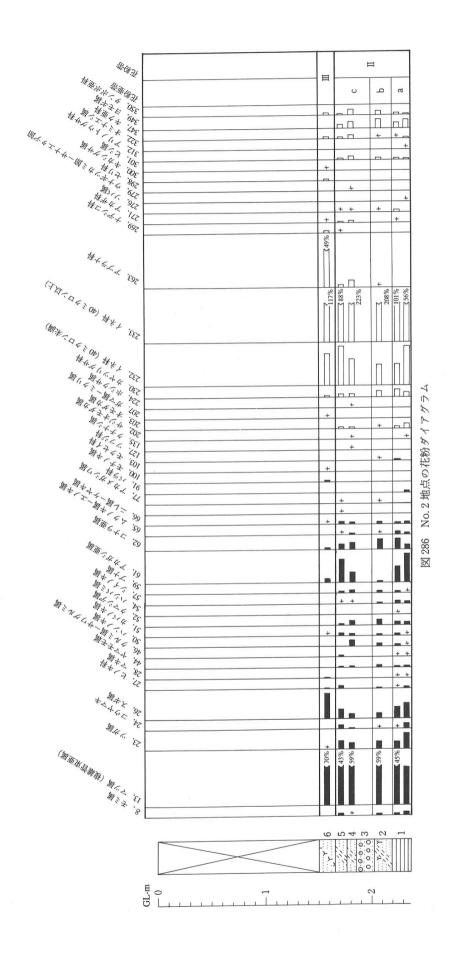
花粉組成を植生の垂直分布に当てはめてみると、各丘陵あるいは山麓、山腹には、アカガシ類を要素とする照葉樹林が分布していたと考えられる。またアカマツ(マツ属(複維管東亜属)には、アカマツ、クロマツ、およびこれらの雑種のアイグロマツがあるが、現在のマツ属の分布から、アカマツと推定できる。)などを要素とする二次林が分布していた可能性もある。一方金剛、和泉山地の山腹から山頂には、アカマツ、モミ、ツガ(モミ属、ツガ属には亜寒帯要素の種も存在するが、現在の調査地周辺の地理環境および分布状況から、中間温帯林要素のモミ、ツガと推定した。)コウヤマキ、スギ(コウヤマキ属、スギ属は本邦産現生種では一属一種であることから、コウヤマキ、スギと推定した。)などを要素とする中間温帯林が、山頂にはブナ(イヌブナの可能性もあるが、現在の分布域からブナと推定した。)、ミズナラ、カシワ(ここでのコナラ亜属には、二次林要素のコナラ、クヌギ、アベマキなどの可能性もある。)などを要素とする冷温帯林が分布していたと考えられる。

また a 亜帯期では、遺跡内にガマ属―ミクリ属などが繁茂する湿地あるいは沼が広がっていた可能性がある。さらに b 亜帯期では、遺跡内で稲作が行われ、ソバやマメ(ソラマメ属類似が検出できた。畑作跡でこのタイプがしばしば出現し、自然堆積物ではほとんど見られないことから栽培に由来すると考えた。)の栽培も行われていたと考えられる。

### Ⅱ帯期(古墳時代)

b 亜帯でのアカガシ亜属の減少、試料 No. 3、4 でのマツ属(複維管東亜属)の増加が、植生の変化によ





第1節 池尻遺跡(2)における花粉分析

るものか、堆積状況の変化によるものか、今回の結果からは判断できなかった。このことは、今後の 遺跡内でのデータの蓄積、および花粉帯の詳細な時期決定、他地域との比較などにより明らかになる。

各丘陵あるいは山麓、山腹の照葉樹林は分布を縮小し、アカマツを要素とする二次林が分布を拡大したと考えられる。一方金剛、和泉山地の山腹から山頂では大きな変化はなく、アカマツ、モミ、ツガ、コウヤマキ、スギなどを要素とする中間温帯林が、山頂にはブナ、ミズナラ、カシワを要素とする冷温帯林が分布していたと考えられる。

遺跡内では稲作が行われていたと考えられる。また畦畔の遺構と直接結びつくもの(畑作作物)として、ソバの栽培が推定できる。

Ⅲ带期(室町時代以降、近代以降?)

各丘陵あるいは山麓、山腹には、アカマツを要素とする二次林が広く分布していたと考えられる。 また金剛、和泉山地の山腹には現在見られるようなスギの植林が行われていたと考えられる。Ⅲ帯で 高率となるアブラナ科花粉は、藤田ほか(1991)の条件を満たすことから、栽培に由来すると考えられ る。したがって遺跡内では、稲作や、アブラナの栽培が行われていたと考えられる。

#### 7 まとめ

今回の調査から以下の事が明らかになった。

- (1)花粉帯として $I \sim III$ 帯を設定した。さらにI帯をa、b 亜帯、II帯をa~c 亜帯に細分した。
- (2)花粉組成から、I帯が古墳時代の植生を表すと推定できた。
- (3)古墳時代以降の植生変還が推定できた。
- (4)出土した畦畔の遺構からは、ソバ属、イネ科(40ミクロン以上)の花粉が検出され、ソバ栽培や稲作が行われていたと推定できる。

#### 参考文献

- ①川崎地質株式会社 「第2節伏尾遺跡発掘調査に伴う花粉・珪藻分析 陶邑・伏尾遺跡ⅡA地区」(『脚大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 No. 72』75-89 1992)
- ②中世古幸次郎・中川要之助 「地形分類図」(『縮尺10万分の1土地分類図大阪府』国土庁土地局 1976)
- ③藤田憲司・古谷正和・渡邉正巳 「大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について」(『日本文化財科学会第8回大会研究発表会要旨』33-34 1991)
- ④渡邉正巳(1995) 「40・花粉分析方法」(『考古学ライブラリー65考古資料分析方法』84-85 ニュー・サイエンス社 1995)

# 第2節 池尻遺跡(1)・狭山池ボーリングの珪藻・花粉分析

### 川崎地質株式会社 担当者 渡 邉 正 巳

#### 1 はじめに

狭山池は大阪府中部に位置する大阪狭山市に位置する。また池尻遺跡(1)は狭山池堤下流部に位置する遺跡である。今回の報告では、発掘調査に伴って露出した地層より採取した試料と、狭山池内でのボーリング試料を対象として珪藻分析・花粉分析を行い、狭山池周辺の古環境復元などを行った。

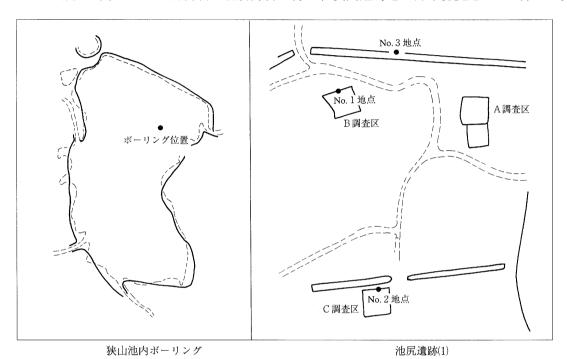


図 287 試料採取位置図

#### 2 試料について

今回分析した試料のうち池尻遺跡(1)の3地点(図287)22試料については、川崎地質株式会社が採取を行った。池内ボーリングの試料は西田(1992)に示されたNo.2地点のもので、採取後細分された試料から川崎地質株式会社が分取した。それぞれの地点の柱状図および試料採取層準は図2~10のダイアグラムに示す通りである。

#### 3 分析方法

珪藻分析、花粉分析は、それぞれ渡辺(1995a・1995b)に従い行った。

### 4 分析結果

#### (1)珪藻分析結果

分析結果を図288~295の珪藻ダイアグラム、珪藻総合ダイアグラムに示す。珪藻ダイアグラム、珪藻総合ダイアグラムは計数した珪藻化石の総数を基数にし、百分率で表した。珪藻含有量が少なく、珪藻検出数が50に満たなかった試料については、検出できた花粉化石の種類のみを※で示した。

### (2)花粉分析結果

分析結果を図296の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムは計数した木本花粉を基数にし、百分率で表した。花粉含有量が少なく、木本花粉検出数が100に満たなかった試料については、検出できた花粉化石の種類のみを※で示した。

### 5 考 察

#### ①珪藻分带

No. 1、2 地点では珪藻化石の検出量が少なかったため、珪藻分帯を行わなかった。No. 3、4 地点(ボーリング No. 2)について、珪藻分析結果をもとに珪藻分帯を行った。

No. 3 地点

### ◎ 3 — I 帯 (試料 No. 12)

海産~汽水産種の Coscinodiscus **spp**., Cyclotella stylorum, Thalassiosira bramputrae などで全体の50%を占める。淡水種ではStephanodiscus astraea などの浮遊性種が淡水種の50%以上を占める。

#### ◎ 3 — II 帯 (試料 No. 11)

海産~汽水産種はほとんど検出されず、淡水・底生種の Cymbella aspera, Eunotia pectinalis, Gomphonema parvulum, Pinnularia 属、Stauroneis phoenicenteron などでほぼ100%を占める。

#### ◎ 3 —Ⅲ带 (試料 No. 10)

Cyclotella stylorum, Thalassiosira **spp**., Coscinodiscus **spp**. などの海産~汽水産種が全体の30%程度を占める。淡水種では Gomphonema gracile, Cymbellaaspera, Pinnularia **spp**. などのなどの底生種で淡水種の80%程度を占める。

#### ◎ 3 —IV带 (試料 No. 9)

海産~汽水産種はほとんど検出されず、淡水・底生種の Pinnularia gibba, Cymbella 属、Eunotia pectinalis, Gomphonema 属、Stauroneis phoenicenteron などで全体のほぼ100%を占める。

### ◎3-V帯(試料 No. 8、7)

Nitzschia cocconeiformis などの海産~汽水産種が全体の10~15%程度を占める。淡水種では、Cymbella aspera, Cymbella cuspidata, Pinnularia viridis, Stauroneis phoenicenteron などの底生種で淡水種の100%近くを占める。

### ◎ 3 —VI帯 (試料 No. 6~3)

検出量が少ないが、淡水・底生の Cymbella 属、Pinnularia 属などが検出される。

### ◎ 3 —VII帯 (試料 No. 2)

海産~汽水産種は全体の10%未満であり、淡水種では Cymbella cuspidata. Neidium cuspidata, Pinnularia 属、Stauroneis 属などの底生種が淡水種の80%程度を占める。

#### ◎ 3 — VIII帯 (試料 No. 1)

検出量が少ないが、汽水産種の Nitzchia cocconeiformis や、淡水・底生種の Cymbella cuspidata などが検出される。

No. 4 地点(ボーリング No. 2)

#### ◎ 4 — I 带 (試料 No. 6)

検出量が少ないが、淡水種が全体の100%を占める。Achnanthes inflata などの底生種や、Eunotiappraerupta, Hantzschia amphioxys などの陸生種で、淡水種のほぼ100%を占める。

### ◎ 4 — II 帯 (試料 No. 4、3)

Coscinodiscus **spp.**, Thalassiosira **spp.**, Thalassiosira bramaputrae, Cyclotella stylorum などの海産~汽水産種が全体の50~20%程度検出される。淡水種では Stephanodiscus astraea, Melosira 属、Surirella 属などの浮遊種が淡水種の80%~50%程度を占める。

#### ◎ 4 —Ⅲ带 (試料 No. 2)

海産~汽水産種はほとんど検出されず、淡水種が全体のほぼ100%を占める。淡水種では Stauroneis phoenicenteron, Neidium iridis, Pinnularia viridis などの底生種が90%程度を占める。

### ◎ 4 -IV帯 (試料 No. 1)

海産~汽水産種はほとんど検出されず、淡水種が全体のほぼ100%を占める。淡水種では Gyrosigma spp.. Cymbella tumida, Nitzshia tryblionella などの底生種が75%を占める。

#### ②花粉分带

花粉分析結果をもとに花粉分帯を行った。

#### ◎ P-I帯(試料 No. 6、5)

検出された花粉の量は少ないが、カラマツ属、トウヒ属、マツ属(単維管東亜属)など、上位の試料

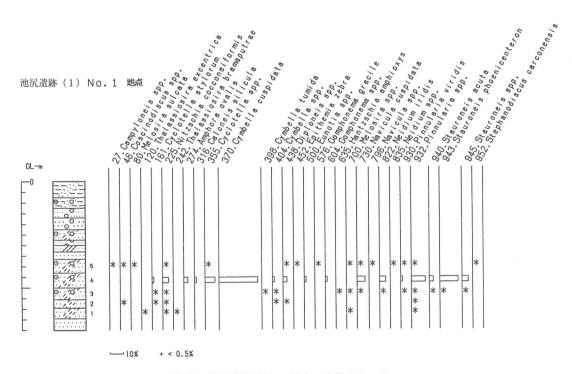


図 288 池尻遺跡(1) No. 1 地点の珪藻ダイアグラム

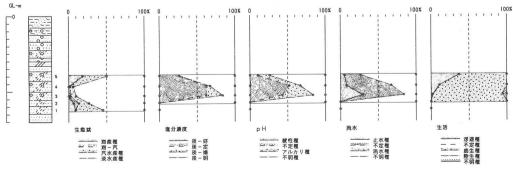


図 289 池尻遺跡(1) No. 1 地点の珪藻総合ダイアグラム

No.4~1とは異なる種類が検出される。

- ◎ P-Ⅱ帯 (試料 No. 4、3)
  - マツ属(複維管束亜属)が優占し、ツガ属、スギ属、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。
- ◎ P-II帯 (試料 No. 2、1)
  - マツ属(複維管束亜属)が優占し、スギ属を伴う。

### ③堆積環境

珪藻分析結果および珪藻分帯をもとに、 $1\sim3$  地点での堆積環境を推定した。No. 4 地点に付いては「④環境変遷」で花粉分析結果および花粉分帯を踏まえて述べる。

#### (No.1 地点)

全ての試料から海産~汽水産種が検出されるが、試料の採取状況から海での堆積であるとは考えられない。このことから、これらの珪藻化石は再堆積による二次化石であると考えられる。全ての試料で、*Cymbella cuspidata* などの底生種が優占することから、浅い沼や湿地での堆積が推定できる。(No. 2 地点)

No. 1 地点同様、海産~汽水産種が検出される。特に試料 No. 3 では海産~汽水産種の検出率が高いが、試料の採取状況から海での堆積であるとは考えられない。このことか、これらの珪藻化石は再堆積による二次化石であると考えられる。試料 No. 3 では淡水種の浮遊種が優占し、やや水深のある

環境が考えられる。しかし後述のように浮遊種の検出量と海産~汽水産種の検出量の関係から、浮遊種にも二次化石の可能性がある。 試料 No.5 では底生種が優占し、 浅い沼や湿地での堆積が推定できる。

#### (No.3 地点)

3-I、Ⅲ、IV帯では、海産~ 汽水産種が優占する傾向にある。 しかし、No.1、2地点同様に、試 料の採取状況から海域での堆積で あるとは考えられない。また海産 ~汽水産種が優占する試料では、 淡水の中で浮遊種が優占する傾向

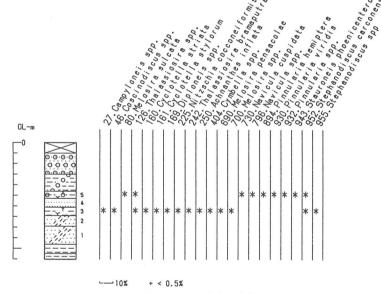


図 290 池尻遺跡(1) No. 2 地点の珪藻ダイアグラム

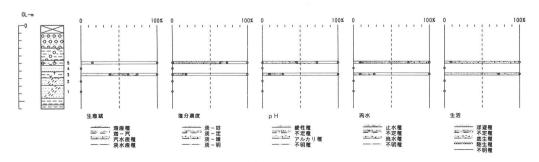
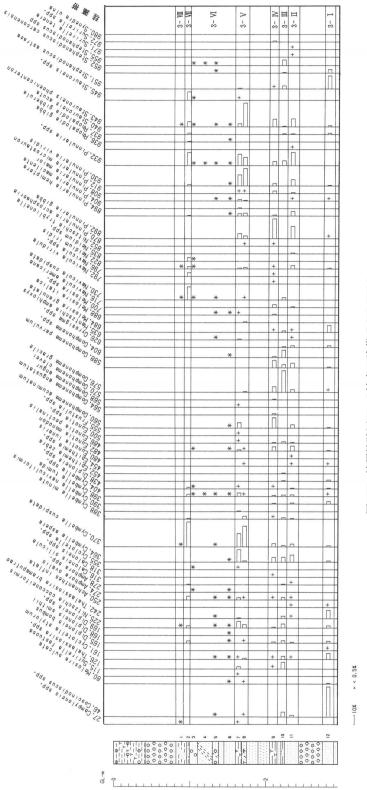


図 291 池尻遺跡(1) No. 2 地点の珪藻総合ダイアグラム



292 池尻遺跡(1) No. 3 地点の珪藻ダイアグラム

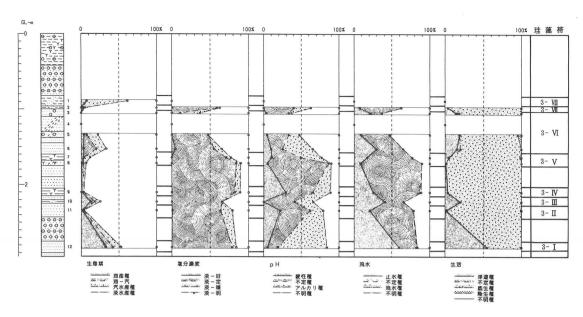


図 293 池尻遺跡(1) No. 3 地点の珪藻総合ダイアグラム

がある。このことは他の3地点にも当てはまり、海産~汽水産種と同様に浮遊種にも二次堆積の可能性がある。

#### ◎ 3 — I 帯 (試料 No. 12)

海産~汽水産種で全体の50%以上を占める。また浮遊種が淡水種の50%以上を占める。これらには 前述のように二次化石の可能性がある。検出された淡水種の珪藻化石を一次的なものと考えると比較 的浅い池・沼であったと推定できる。

### ◎3-Ⅱ帯(試料 No.11)

Cymbella aspera, Eunotia pectinalis, Gomphonema parvulum, Pinnularia 属、Stauroneis phoenicenteron など淡水・底生種が全体のほぼ100%を占めることから、浅い沼や湿地での堆積が推定できる。

#### ◎ 3 — III ~ VIII(試料 No. 10~ 1)

3-Ⅲ、V、Ⅷ帯では二次堆積と考えられる海産~汽水産種が全体の15%以上を占める。しかし、Gomphonema 属、Cymbella 属、Pinnularia 属などの底生種で淡水種の80%以上を占めている。また3-Ⅳ、VI、Ⅷ帯では海産~汽水産種は10%以下の出現率であり、Pinnularia 属、Cymbella 属 Eunotia 属、Gomphonema 属、Stauroneis 属などの底生種で淡水種のほとんどを占めている。こらのことから、Ⅲ~Ⅷ帯は浅い沼や湿地での堆積が推定できる。

#### ④環境変遷

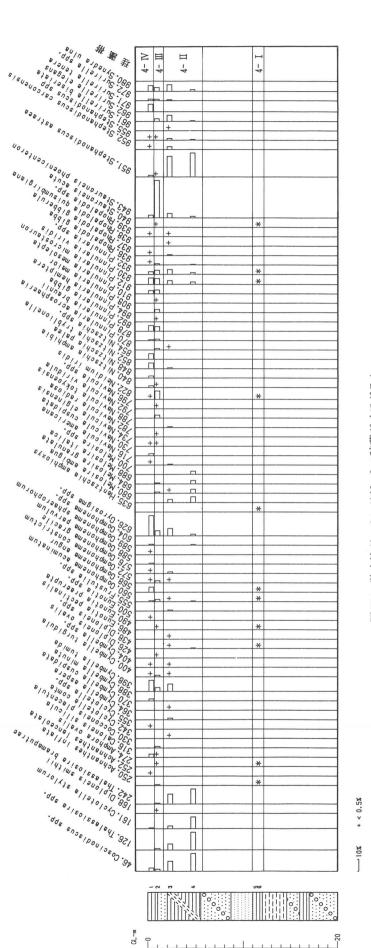
No. 4 地点(ボーリング No. 2)について、珪藻・花粉分析結果から古環境を推定する。

#### ◎ P-I帯(4-I帯:試料 No. 6、5)

試料 No. 6 では珪藻化石の検出量が少なかったが、淡水・底生種や、淡水・陸生種が比較的多く検出される。したがって、湿地あるいは周辺に湿地の広がる浅い沼での堆積が推定できる。花粉化石の検出料量も少なかったが、カラマツ属、トウヒ属、マツ属(単維管東亜属)など、亜寒帯林の構成要素と考えられる種類が検出された。これらのことから、試料 No. 6、5 層準の粘土層は現在より寒冷な時期に堆積したと推定できる。しかし連続した試料が得られなかったために、P—I帯が対応する年代は判断できなかった。

### ◎ P-Ⅱ帯(4-Ⅲ帯:試料 No. 4、3)

多くの珪藻化石が検出量されたが、海産~汽水産種および、淡水・浮遊種で全体の50%以上の出現



狭山池ボーリング No.2 の珪藻ダイア 294

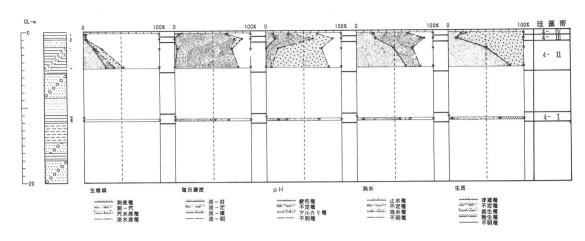


図 295 狭山池ボーリング No. 2 の珪藻総合ダイアグラム

率を占める。したがって、前途のように検出された珪藻化石のほとんどが二次化石である可能性がある。検出された淡水種の珪藻化石を一次的なものと考えると、比較的浅い池・湖であったと推定でき、狭山池の堆積物の可能性がある。花粉化石ではマツ属(複維管東亜属)が優占し、ツガ属、スギ属、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴うなど、古谷(1979)の F6 帯に対比される。また F6 帯はおよそ 5 世紀以降の植生を表すと考えられている(古谷、1979)。また、上部の試料 No. 3 からはワタ属の花粉が検出されている。ワタは外来種であり、近畿地方で連続的に栽培されたのは戦国時代(1500年頃)以降と考えられる(武部、1981)。ことから、本帯上部は16世紀以降の堆積であると考えられる。この時期の遺跡周辺の丘陵や山麓はマツ属(複維菅東亜属)を要素とする二次林に広く被われており、山腹にはツガ属、スギ属、コナラ亜属を要素とする中間温帯林や二次林が分布していたと考えられる。また近くの平地では、ワタやイネ(あるいはコムギなど)が栽培されていたと考えられる。

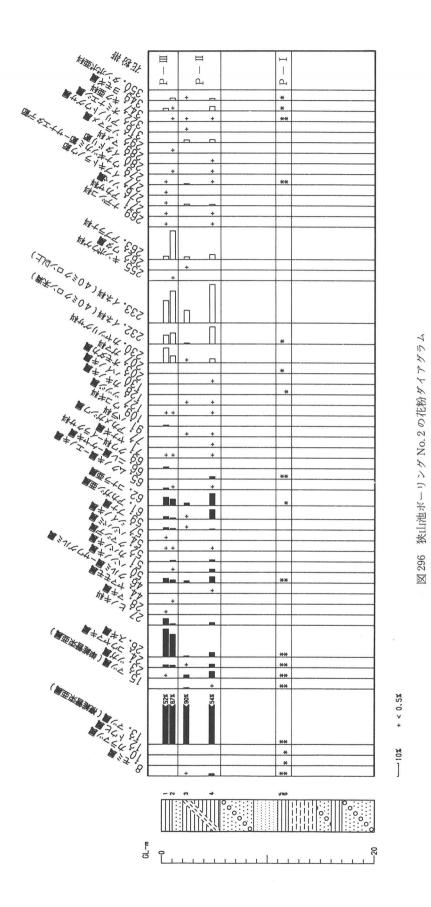
#### ◎ P—Ⅲ带(試料 No. 2、1)

多くの珪藻化石が検出され、淡水種がほぼ100%を占めた。底生種が淡水種の70%以上を占め、浅い沼や湿地での堆積が推定される。また酸性種が増加し、アルカリ種が減少することから、前帯に比べ腐植栄養型あるいは、酸栄養型の水域に変化して行ったと推定される。花粉化石では、P-II帯に比べマツ属(複維管東亜属)が減少し、スギ属が増加する。この変化は大阪府内各地で報告されており、近代以降、あるいは現代の植生を表していると考えられている。遺跡周辺の丘陵や山麓はマツ属(複維管東亜属)を要素とする二次林で被われ、スギの植林も山麓から山腹には広がっていたと考えられる。また近くの平地ではソバや、イネ(あるいはコムギなど)、アブラナなどが栽培されていたと考えられる(アブラナ科=アブラナは、藤田ほか(1991)による)。

#### 6 まとめ

今回行った珪藻分析・花粉分析から以下のことが明らかになった。特に狭山池周辺の環境変化を推定するためは、池内部でのボーリング試料を対象とした花粉分析が有効であることが、No.4 地点の分析から明らかになった。

- (1)珪藻分析結果から No. 3 地点では 3 I ~ $\mathbb{W}$ の 8 珪藻帯に、No. 4 地点では4— I ~ $\mathbb{W}$ の 4 珪藻帯に分帯できた。
- (2) 花粉分析結果から No. 4 地点では P-I ~ Ⅲの 3 花粉帯に分帯できた。
- (3)No. 1、2 地点での堆積環境、No. 3 地点での堆積環境変遷が推定できた。
- (4)No.4 地点での環境変遷が推定できた。



468

- (5)No. 4 地点試料 No. 5、6 層準は氷期の堆積物であると考えれらたが、年代は推定できなかった。
- (6)No. 4 地点 P─Ⅱ帯の内、下部の試料 No. 3 の層準は 5 世紀以降、上部の試料 No. 4 の層準は16 世紀以降の堆積であると推定できた
- (7)No. 4 地点試料 No. 1、2 の層準は近代以降の堆積であると推定できた。

#### 参考文献

- ①古谷正和 「大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷」(『第四紀研究』181 21-141 1979)
- ②藤田憲司・古谷正和・渡邉正己 「大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について」(『日本文化財科学会第8回大会研究発表要旨集』33、34 1991)
- ③中村 純 「イネ科花粉について、とくにイネ(Oryza sativa を中心として」(『第4紀研究』13 187-197 1974)
- ④西田一彦 「狭山池内堆積土の物理・力学的性質」(『狭山池調査事務所平成3年度調査報告書』72-84 1992)
- ⑤武部善人 『河内木綿史』p. 275、吉川弘文館 1981
- ⑥渡邉正巳 「40・珪藻分析方法」(『考古学ライブラリー65 考古資料分析方法』 86-87 ニューサイエン ス社 1995a)
- ⑦渡邉正巳 「40・花粉分析方法」(『考古学ライブラリー65 考古資料分析方法』 84-85 ニューサイエン ス社 1995b)

# 第3節 狭山池出土木樋の年輪年代

奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター 発掘技術研究室長 光 谷 拓 実

### 1 はじめに

大阪府大阪狭山市にある狭山池は、日本最古の溜池である。狭山池の名は「古事記」や「日本書紀」にも登場し、その築造は五世紀ごろのこととされてきた。狭山池は東西の段丘の間を流れる旧天野川を塞き止め溜池としていたもので、堤の長さは 500m、高さ 15m の巨大なものである。狭山池は、築造後幾度となく災害にあい、その都度大改修がおこなわれてきた。なかでも奈良時代の名僧行基によっておこなわれた改修はもっとも有名である。平成元年以降、実施されてきたダム化工事に伴って、狭山池調査事務所が本格的な発掘調査をおこなった結果、多くの新事実が明らかになった。狭山池の発掘調査では、北堤付近において中樋遺構、西樋遺構、東樋遺構の3つの樋の遺構が検出された。中樋遺構では、大正時代まで使用されていた尺八樋の最下段が出土した。これは慶長13年(1608)に片桐且元が改修した際に設置されたものである。西樋遺構は、中樋同様に慶長の改修の際に設置されたものであり、構造船の廃材が大量に転用されていた。東樋遺構は、もっとも東で発見された遺構で長さ70m以上の樋が上下2層になってそのまま残っていた。下層の樋は築造当初のもの、上層の樋はやはり慶長の改修で設置されたものである。

上記3つの樋のうち、東樋と中樋に使われていた部材の年輪年代法による年代測定をおこなったので以下にその概略について報告する。

### 2 東樋遺構

東樋下層の樋管は、コウヤマキの丸太材直径 60cm の内側を U 字状にくり貫いたもので、総数 9本の樋管を連続していた。東樋下層遺構の池側取水部においては築造当初の樋の先端部を切断し、補修がおこなわれていた。年代測定用の試料はコウヤマキの樋管のなかで一部に未加工部分が残っていたものが 5 本あり、それぞれ直径 5mm の棒状標本を採取した。池側のヒノキの補修材からは辺材部が完存していたもの 1 点、辺材部が 2.2cm 普通、ヒノキの平均辺材幅は 3cm 残っていたもの 1 点を選定、総数 7 試料を採取した。これらの年輪年代は樋管 5 本の伐採年がいずれも616年(推古24)、補修材 2 点の 5 ちの 1 点の年輪年代は726年と確定した。

以上をまとめると、下層の樋管には616年に伐採された木が使われていたことから、狭山池の築造は五世紀代ではなく七世紀代前半であることが確実となった。このことから、五世紀代の河内平野の大開発と結びつけてきた見方は、否定された。また池側の補修材の1点は、奈良時代大改修の際に使われた材とみてよかろう。もう一点の伐採年からは、記録にはないが9世紀の前半にも改修のあったことが明らかになった。

一方、東樋上層遺構は下層遺構の直上にあって、おもにヒノキの厚い板材を箱形に組み合わせた構造となっていた。この樋の長さは73mあり、取水部、樋管、排水部ともすべて存在していた。年代測定用の試料は、ヒノキの蓋材のなかで辺材部が完成していたもの2点を選定した。これら2点の伐採年は、1554年、1600年と確定した。伐採年は異なっているが、いずれも慶長13年の改修の時に使われた材とみてよかろう。ちなみに上下2層の年代差は約1000年、築造当初の樋本体が長年壊れること

なく機能していたことになり、当時の土木技術の水準の高さをうかがい知ることができる。

### 3 中樋遺構

この遺構では、護岸に伴う部材 1 点の年代測定をおこなった。材種はヒノキで辺材部は全く残っていなかった。この年輪年代は1566年と確定、これに削除された年輪層数を加算することを考えると、これまた慶長13年(1608)の時の改修材とみてよかろう。

# 第4節 TK217型式の類型化および他型式との相対評価

### ― 狭山池1号窯およびその近辺の窯跡資料を中心に ―

狭山池調査事務所 植 田 降 司

#### 1 はじめに

本節では、狭山池およびその近辺における一連の須恵器窯跡発掘調査で出土した須恵器について考察を行う。特に出土した須恵器の器種の中でも多くの数量を占める蓋杯の身の形態および法量の計測データを、陶邑窯跡群中の標式とされる窯跡資料と比較検討することで、それぞれの窯跡資料の陶邑須恵器編年における有用性を確認したい。

ここで取り上げる資料は、狭山池 1 号窯 [SI1]・狭山池 2 号窯 [SI2]・狭山池 3 号窯 [SI3]・狭山池 4 号窯 [SI4]・東池尻 1 号窯 [HI1] の各窯から出土した須恵器である。従来の概括的な編年観をもって各資料の型式を述べると、狭山池 2 号窯・狭山池 3 号窯は TK43 型式~TK209 型式、狭山池 1 号窯・狭山池 4 号窯・東池尻 1 号窯は TK209 型式~TK217 型式という幅の中におさまる。

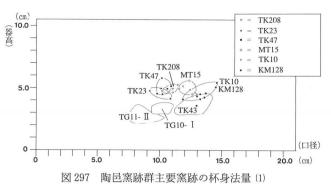
ただし、ここで問題となるのは、須恵器型式に対して研究者が各々設定している概念的な判断基準 の妥当性についてである。特に古墳時代後期以後においては、他の器種から得られる編年観も存在す るとはいえ、やはり多くの研究者が須恵器編年の基軸としているのは杯であろう。杯の個体情報のう ちで特に重視されてきたのは、杯нの場合、杯身のたちあがりと法量に関するデータである。たと えば 1 個体の杯 H に対して、TK10 型式か TK43 型式か TK209 型式か TK217 型式かを判断すると き、最重要視されるのはその個体の法量とたちあがり形状である。その個体に施されている調整の様 子は、二次的な着目点として扱われているように思われる。各研究者が既定事項のように行っている 峻別作業は、一見正確なもののようにみえる。この峻別作業は、編年基準とされている資料に従って、 各々の研究者が個別に把握している各型式に対する概念的な形態が存在するゆえに可能となる。須恵 器1個体を TK43 型式か TK209 型式かと判断するに際しては、この概念的な形態を基準に据えて観 察すれば問題がない。しかし、その際に基準に据えられた概念的な形態は、編年基準とされている資 料から得られていることを忘れてはならない。主に用いられている古墳時代の須恵器編年は、窯跡資 料をもって作成されている。周知のとおり、一つの窯から出土する須恵器の同一器種には、個体間に おいて形態・法量の差異が存在するの普通である。こうした個体間の差異には、層序的に先後関係を 確認できるものとそうでないものとの両方が存在する。たとえば、窯体内の焼成床面ごとに出土した 資料と灰原出土資料をクロスチェックして、灰原出土資料の型式学的分類を行う床式編年の事例が存 在するならば、その窯跡資料に含まれる個体間の差異は層序的な先後関係を確認できるといえよう。 ただし、こうした例を確認することはむつかしく、実際に行なわれた床式編年の過程を追確認するこ ともできない。このような状況をふまえると、一つの窯での資料中の個体間における差異は、窯の操 業期間も考慮する必要があるが、その窯跡資料の幅として捉えるのが妥当であろう。

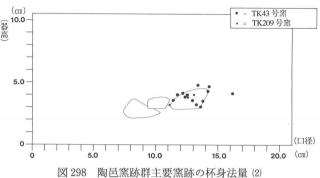
よって、本稿では、狭山池およびその近辺における一連の須恵器窯跡の資料と、基準資料として適当な陶邑窯跡群中の窯跡の資料を取り上げ、杯 H 身の形態と法量の幅を比較し、標式とすべき各型式の幅を抽出する作業に重点を置いた。

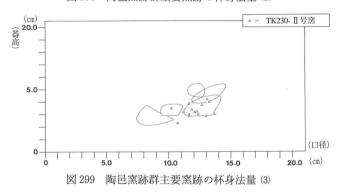
### 2 比較基準の設定

杯身の形態比較については、たちあがりの 角度と高さを比較要素とした。たちあがり高 は、たちあがり基部外面から口縁端部までの 鉛直方向の距離を計測し、図中の縦軸とした。 たちあがり角度は、たちあがり基部外面を中 心点として鉛直方向を0°とし、これから、 たちあがり基部外面と口縁端部を結んだ直線 までの角度を計測した。これを図中では横軸 とした。なお、個体中において、たちあがり 高・たちあがり角度にバラッキがある場合は その平均値をとった。従来、たちあがりの形 状を観察する際に、たちあがり高は数値的に 把握されていたが、たちあがりの内傾度合い は数値的に把握されておらず、客観的な形態 比較の要素とは言い難かった。ここで行って いる一連の作業は、たちあがり形状をより客 観的に評価しようとする試みである。

杯身の法量については、口径を図中の横軸に、器高を図中の縦軸にして、その数値分布を表した。そして、窯跡資料の比較対照を行う基準として、陶邑田辺編年の基準資料となっている窯跡資料®を採用した。







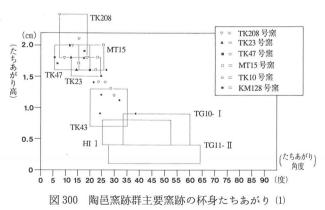
#### 3 陶邑窯跡群資料の TK217 型式に至るまでの変遷過程

図298に示しているように、TK208号窯・TK23号窯・TK47号窯の杯身は、口径 9cm~10cm・器高 5cm 前後の値を示している。MT15号窯の杯身は、口径 12cm 前後、器高 5cm 前後の値を示している。TK10号窯の杯身は、11.8cm~12.8cm、器高 4.4cm~4.8cm を測る。これらの杯身法量数値分布から、TK47型式以前の法量はあまり変化しておらず、MT15型式から口径の拡大が進行し、TK10型式で口径の拡大傾向をもっとも顕著に認めることができる。

図301に示しているように、MT15型式以前の杯身のたちあがりは、たちあがり高 1.3cm~2.0cm

・たちあがり角度 $20^\circ \sim 35^\circ$ の値を示している。 これに対して、TK10 号窯の杯身のたちあが り高は 1.2cm $\sim 1.4$ cm を測り、TK10 型式 ではたちあがりの低さが低下傾向にあること が確認できる。

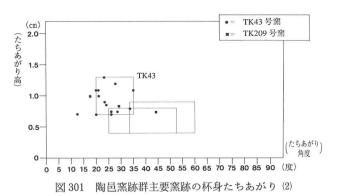
さらに、杯身の法量とたちあがり形状は、 次のような変遷をたどる。TK43 号窯の杯身 の口径は 11.3cm~16.0cm、器高は 3.0cm ~4.6cm を測り、図299のような数値分布域

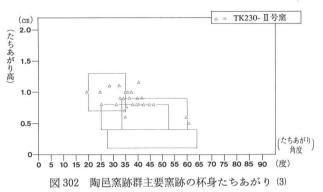


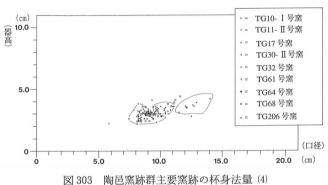
を示している。この数値分布状況から、TK 43 型式の杯身は TK10 型式のそれと口径は さほど異ならないが、器高が相対的に低いことが理解できる。TK43 号窯の杯身のたちあがり角度は、20°~35°の範囲に集中し、図 302のような数値分布域を示している。この数値分布状況は、すでに低下傾向にあった TK10 型式の杯身たちあがりの数値分布域を 内包するものであるが、MT15 型式以前のそれと比較すると、たちあがり角度の値はさほど変わらずに、主としてたちあがり高の数値分布域が下方へ移行していることがわかる。 以後、TK43 号窯資料の数値分布範囲を「TK43 集中域」と呼ぶ。

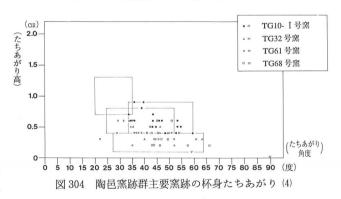
TK43 号窯と同様の杯身形態・法量の数値 分布を示している窯跡資料に TK118 号窯資 料がある。TK118 号窯の杯身のたちあがり 角度は 2 点を除いて20°~35°の範囲に集中し、 たちあがり高もほぼ TK43 号窯資料の分布 域におさまり、本窯の杯身は、そのたちあが り角度と高さにおいて TK43 号窯資料と近 似したものといえる。

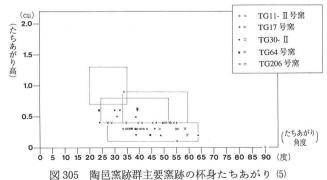
TK209 号窯資料の杯身の報告点数は非常 に少ないため、たちあがり・法量の数値分布 を設定することが困難である。よって、TK 209 型式併行期の窯と考えられている TK 230- Ⅱ 号窯の資料を参考として取り上げた。 TK230-Ⅱ 号窯の杯身のたちあがりは、その 半数以上の資料が TK43 号窯資料の分布域 の外にあって35°以上の内傾を示し、最も内 傾するもので59°に至る。その法量は、TK 43号窯資料の分布域から左外側へかけて分 布している。TK43型式の杯身法量とTK 209 型式の杯身法量との差異は、口径の縮小 化に求められる。ただし、その分布域は TK 43 集中域から大きくはずれたものではなく、 TK43 集中域に含まれる個体と口径の縮小化 した個体の両方が存在しているようである。











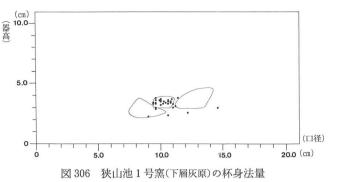
### 4 K217 型式に分類される窯跡資料の細分類

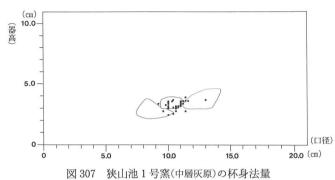
TK217 号窯資料の杯身の報告点数は非常に少ないため、たちあがり・法量の数値分布を設定する

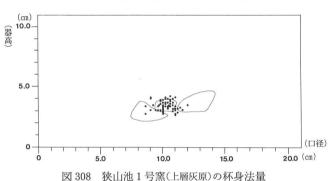
ことがむつかしい。このため、TK217型式 古段階の窯と考えられる TG10-I 号窯の資 料を参考として扱った。TG10-I 号窯の杯 身のたちあがりは、たちあがり高 0.4cm~ 0.9cm を測り、たちあがり角度33°~60°を 測る。この数値分布域は、TK43分布域とほ ぼ重複せず、たちあがり高の低い数値に限定 して、なおかつ、より内傾したたちあがり角 度を示すものである。これを「TG10-I分 布域」と呼ぶ。また、その法量は、口径9.4 cm~11.1cm・器高 3.0cm~3.6cm の範囲 に集中した分布を示している。この数値分布 範囲を「TG10-I集中域」と呼称する。TG 10-I 集中域は、TK43 集中域よりも口径が 縮小化した値を示しており、その集中域は重 複していない。このことから、TK217 型式 古段階の杯身法量と、TK43型式・TK209 型式の杯身法量との差異は、口径の縮小化に おいて明確に認められるといえよう。

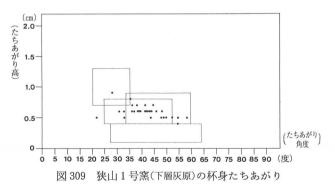
つぎに、TK217 型式新段階の窯と考えられる TG11-II 号窯の資料をみてみたい。TG 11-II 号窯の杯身のたちあがりは、たちあがり高 0.1 cm  $\sim 0.4$  cm を測り、たちあがり角度 $26^\circ \sim 64^\circ$  を測る。この数値分布域は TG10-I 分布域の下側にあり、明瞭なたちあがり高の低下が確認できる。これを「TG11-II 分布域」と呼ぶ。また、その法量は、口径 7.4 cm  $\sim 10.4$  cm  $\cdot$  器高 2.3 cm  $\sim 3.8$  cm の範囲に集中した分布を示している。この数値分布範囲を「TG11-II 集中域」と呼称する。

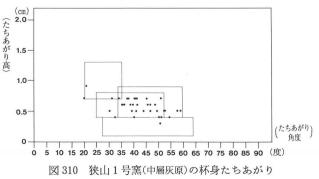
TG10-I 号窯資料と TG11-Ⅱ 号窯資料との中間的な経過型の法量・たちあがり数値分布を示す窯跡資料として、ひつ池西窯[HTW]があげられる。<sup>®</sup> ひつ池西窯の杯身法量の数値分布は、TG10-I 集中域と TG11-Ⅲ 集中域の境界を中心にして両方の集中域にまたがった分布を示している。たちあがりの数値分布も同様に両方の分布域にまたがっ





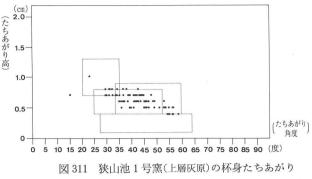






た分布である。

ところで、TG10-I号窯資料には杯Gが 含まれていない。この資料と同様の杯身法量 ・形態の数値分布を示す窯跡資料でも、杯G を含まないかもしくは少数にとどまる例が多 いようである。これに対して、ひつ池西窯お よびそれと同様の法量・数値分布を示す窯跡 資料では、杯Gを含む場合は杯Hに匹敵す



る数量の杯Gが出土する例が多い。蓋身逆転期の杯Hの法量・形態は、その前段階と比べて著しい 縮小・退化傾向にあり、その器形の矮小化は、杯田の生産が完全に停止する段階に至るまでの間、 継続的に進行していったと理解される。

これらの窯跡資料から、TK217 型式は、TG10- I →HTW→TG11-Ⅱ といった変遷過程を内包し ていると理解されよう。この型式内の細分類を便宜上、TK217型式第1類→TK217型式第2類→ TK217型式第3類と考えたい。

### 5 狭山池およびその近辺の窯跡資料

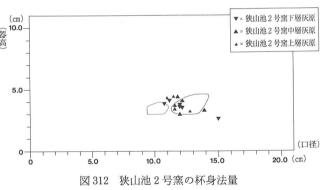
狭山池とその周辺における発掘調査で確認された窯跡には、狭山池1号窯・狭山池2号窯・狭山池 3号窯・狭山池4号窯・東池尻1号窯がある。これらの窯跡から出土した遺物の報告は、本書に掲載 しているとおりである。

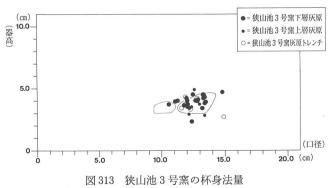
狭山池 1 号窯 [SI1] の灰原から出土した杯身のたちあがりは、たちあがり高 0.3cm~1.0cm を測り、 0.4cm $\sim$ 0.8cm に集中している。たちあがり角度は $15^\circ\sim$ 60 $^\circ$ を測り、 $30^\circ\sim$ 60 $^\circ$ に集中しており、TG10- I 分布域におさまる数値分布を示している(図310~312)。SI1 の杯身法量は、TK43 集中域と TG 11-Ⅱ 集中域にも若干の数値分布がみられるが、概ね TG10-Ⅰ 集中域を中心とした数値分布を示し ている(図307~309)。狭山池 2 号窯 [SI2] の灰原から出土した杯身のたちあがりは、たちあがり高 0.6

cm~1.1cm を測り、たちあがり角度20°~ 45°を測る。たちあがり角度が大きい、つま り内傾の度合いが大きいために、TK43分布 域からはずれた計測値を示す個体が多い。概 して、TK230-Ⅱ号窯資料に近い分布状況で あるといえよう。SI2の杯身法量は、TK43 集中域から TG10- I 集中域にかけて分布し ており、TK43集中域内での分布は口径8cm 前後に中心がある。SI2の杯身の法量とたち あがりは、TK209型式の典型的な数値分布 を示していると考える。

狭山池 3 号窯 [SI3] の灰原から出土した杯 身のたちあがりは、たちあがり高 0.6cm~ 1.4cm を測り、たちあがり角度14°~45°を 測る。SI2と同様に内傾度が大きく、TK43 分布域からはずれた計測値を示す個体が多い

476

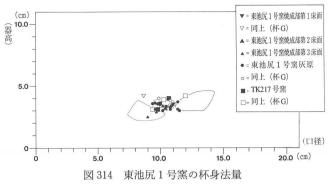


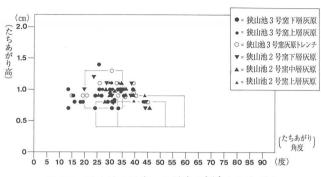


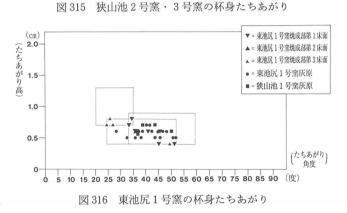
ため、TK230-II 号窯資料に近い分布状況を示している。SI3 の杯身法量は、TK43 集中域内においてほぼ均等な分布が認められるが、TG10-I 集中域に入る計測値を示す個体も認められる。SI3 の杯身の法量は、TK43 型式の資料の数値分布として、概ね把握することができるが、たちあがりは TK209 型式の数値分布として把握されるものである。

狭山池 4 号窯 [SI4] の灰原から出土した杯身のたちあがりは、たちあがり高 0.3cm~0.6cm を測り、たちあがり角度31°~66°を測る。 TG10-I 分布域から TG11-II 分布域にかけて分布しており、ひつ池西窯 [HTW]と同様の数値分布状況であるといえる。 SI4の杯身法量は、口径 8.8cm~11.8cm・器高2.1cm~3.3cm を測り、TG10-I 集中域から TG11-II 集中域にかけて分布しており、これもひつ池西窯と同様の数値分布状況である。

東池尻 1 号窯 [HI1] の灰原から出土した杯 身のたちあがりは、たちあがり高 0.4cm  $\sim$  0.8cm を測り、たちあがり角度25°  $\sim$  52° を 測る。たちあがり高は TG10- I 集中域にお さまる数値であるが、たちあがり角度が若干







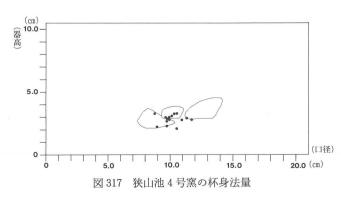
立ち気味であるので、参考として図のように HI1 集中域を設定した(図317)。HI1 の杯身法量は、ほぼ TG10-I 集中域内に数値分布が認められる。

以上のデーターから、各窯跡資料の型式は以下のように考えるのが妥当であろう。

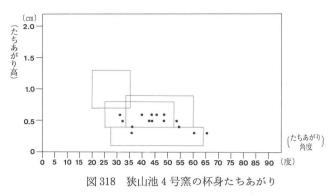
- ●TK43型式~TK209型式併行資料:狭山池3号窯
- ●TK209型式併行資料:狭山池2号窯
- ●TK217型式第1類:狭山池1号窯・東池尻1号窯
- ●TK217型式第2類:狭山池4号窯

#### 6 まとめ

今回の発掘調査において、操業期間が短期間と考えられる須恵器窯跡が確認され、この窯跡の操業時期の上限を実年代で示すことが可能であったのは、きわめて重要な成果であろう。TK217型式の古段階に位置付けられる窯跡資料を生産した狭山池1号窯は、その窯が構築された基盤層の下層にある東樋樋管



材の伐採年代 A.D.616 年を遡行する操業 開始時期を想定できない。また、狭山池 1号窯が生産した須恵器は型式的なまと まりが高い資料であると評価できる。つ まり、TK217 型式の古段階に位置付け られる陶邑窯跡群中の窯跡資料として、 狭山池1号窯資料は、実年代が判明した 有用性の高い基準資料であるといえよう。



ところで、東池尻1号窯で生産された須恵器は、狭山池1号窯のそれと同一型式に細分類されるものである。狭山池の築造過程の中で考えれば、東池尻1号窯は東樋設置と第1次堤体築造に先行する可能性がある。しかし、その場合においても、TK217型式の細分類内におさまる時間差しか考えられないため、狭山池北堤築造に関する一連の工程はきわめて短期間に実行されたと考えられよう。

狭山池4号窯から出土した須恵器は、狭山池1号窯よりも後出の要素をもった資料である。狭山池の北堤斜面に窯を造営したのち、狭山池の築造工事が完了していたであろう時期(おそらく7世紀中葉)に、池内の最高水位以上に位置する斜面において、なおも窯を造営していたのである。

#### 注)

①陶邑窯跡群中の基準資料については、下記の文献を参照した。

田辺昭三 『陶邑古窯址群 I 』平安学園考古学クラブ研究論集第10号 1968

田辺昭三 『須恵器大成』 1981

中村浩 『陶邑Ⅱ』大阪府文化財調査報告書第29集 1979

野上丈助 『陶邑V』大阪府文化財調査報告書第33集 1982

②大阪狭山市教育委員会 『ひつ池西窯』大阪狭山市文化財報告書10 1993

# 第5節 狭山池出土の樋の復元と系譜

狭山池調査事務所 市 川 秀 之

### 1 樋の形態と類型

狭山池からは多くの樋が出土している。その詳細は第2章において報告した通りであるが、本節ではそれらの復元を行うとともに、樋の系譜をたどり狭山池の樋をわが国の農業土木史のなかに位置づける作業を行いたい。

樋は堤、洪水吐(除)とともに溜池の根幹をなす施設である。現在の溜池においては近年の改修工事の結果、樋はコンクリート管や金属管に伏せ替えられ、また取水部もハンドル式のものが大半となっているが、少し以前までの溜池では伝統的な樋が利用されていた。以下、最近まで残存していた溜池の桶や、発掘事例、文献からの知見などを合わせて樋の類型をまず設定したい。

種は取水部、樋管、排水部から構成される。このうち発掘によって出土するのは大半が樋管の部分であり、他の部分が発掘されることはまれである。この点、取水部が多く出土している狭山池の事例は貴重である。取水部は大きく、一段だけの底樋型のものと、樋管に竪樋(斜樋)を取り付け、竪樋にいくつかの樋穴を設けた尺八型のものに分けられる。底樋型の場合、樋穴は樋管の上部にあけられそこに男柱がささる型式のものがもっとも多い。男柱は鳥居型のもので支持されるのでこれは鳥居建と呼ばれている。このほか前面に水門を持つものもみられる。尺八樋は竪樋にあけた穴に栓をするものがよくみられるが、狭山池の近世の尺八樋はこの栓を水門式にしたものである。この型式のものは狭山池をはじめ万濃池など大きな溜池に多い。なお堤を開削して水門を設置する型式のものは韓国の溜池では碧骨堤などでみられ、またわが国においても潮堤や河川堤防などにおいては存在するが、溜池においてはほとんどみられない。なお取水部は大半が木製であるが、鳥居建の笠木(男柱を支える横方向の木)を石で造ることが多く、また尺八の斜樋を石や土管などで造ることがある。<sup>①</sup>狭山池の中樋遺構から出土した石樋は取水部を石で造ったものである。

樋管は木製のものが大半で、U字型、O字型、箱型の3つの型式がある。東樋下層遺構でみられたものは典型的なU字型の樋管で、丸太材を断面の上から3分の2程度のところで割り、内部をえぐってU字管状にしたものに、板材による蓋材をかぶせたものである。また丸太を半切し双方の内部をえぐって再び併せて樋管としたものは、最近まで多くの溜池で利用されており、今回の調査でも池尻城跡で出土している。この形態をO字型と呼びたい。この型式は材木を半切したものだけでなく、土管などで造ったものもある。文献にも「土樋」<sup>②</sup>「石樋」<sup>③</sup>などの表現がみられる。量的に圧倒的に多かったのはやはり木製の樋管であったと思われる。次に板材を組み合わせて釘などで接合したものを箱型と呼びたい。材の組み合わせ方にはさまざまな類型がある。狭山池では東樋上層遺構、中桶遺構、西桶遺構などの樋管が箱型である。

排水部は池の中から樋を通って放出される水の圧力を弱めるために桝型の形態を持つものが多い。 狭山池の東樋下層遺構ではこの桝型がみられる。また樋の出口と水路のあいだに高低差がある場合に は滝のように水が吹き出すことになる。昭和の工事以前の狭山池中樋や、香川の万濃池では吹き出す 水で虹ができたほどである。しかしながら検出例も少なく類型化するにはいたっていない。

#### 2 狭山池出土の樋の復元

狭山池から出土した樋の復元案について、時代の古いものから順に述べることとしたい。

#### ①東樋下層遺構

東樋下層遺構の樋管部分の材木は616年に伐採されたことが年輪年代法によって明らかにされており、堤との層位関係からみても狭山池築造時に埋設された樋管であることが確実である。残念ながら樋管2の上流側先端部は切断されており、そこに奈良時代に樋管1が接続されているために、この時期の樋の取水部を復元することはできない。ただ他の出土例や奈良時代の東樋下層遺構と比較すれば、底樋型で鳥居建ての構造であったことは間違いがないだろう。この時期の堤防の高さは中樋地点では74.4m程度であり、水面はそれより約1m低く73.4m程度であったと考えられる(第6節参照)。東樋下層遺構の樋管の上端の標高は約70.5mであり、男柱の長さは最低でも3m以上は必要であったことになる。樋管は先に述べた通りU字型で、蓋板はほとんどの部分で長い板材を利用している。また樋管どうしは、上流側の材が上にくるように双方を加工して接続している。場所によっては接続部の両側に柱状に材木をたてている。蓋材も同様に2材がかみあうように加工している。排水部には桝型が設置してあるが樋管との落差はほとんどない。

#### ②東樋下層遺構(奈良時代)

東樋下層遺構は奈良時代の天平宝字6年(762)に池側に拡張し、新たに取水部を設けている。取水部は図319のように土留と上部構造、下部構造に分類できる。土留は樋管の両側に建つ計8本の丸太柱と取水部の周囲をコの字型にとりまく板材からなる。柱は樋の拡張工事を実施する際、池内に堆積していた土が樋の方に流入するのを防ぐ目的のものと思われ、当初は柱の間に板材が置かれていたと考えられる。樋の完成後、板材は撤去されたが、柱はそのまま残され堤の土がその上に盛られたと思われる。コの字型に置かれた板材のうち堤防側のものはおそらく堤体の土が取水部に流入するのを防ぐ目的で設置されたものであろう。つまりこの板材の箇所まで堤体の土が被覆していたと考えたい。また側面の板材は溜池の堆積物が取水部に流れてくるのを防ぐ目的のもので、樋の使用時の状況を意識して設置されたものであろう。上部構造および下部構造が取水部の心臓部である。樋管の先端のえぐりはやや小さくなっている。この部分から取水した可能性が考えられないわけではないが、底樋において前方から取水すれば樋管はまたたく間に土砂によって詰まるのが普通であるので、やはり上方にあけられた穴から水を入れたと考えておきたい。この場合、樋穴の上には男柱が設置されなければならないが、問題はこの男柱の長さである。中樋地点の堤体断面調査によればこの時期の堤防の標高は78.5m程度であり、水面の高さはこれより1.8m低く76.7m程度であることが推定される(第6節

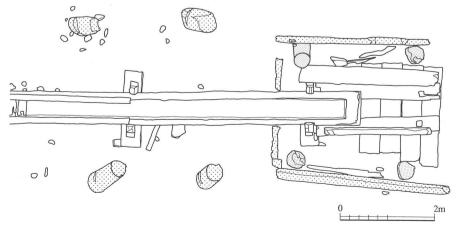


図 319 東樋下層遺構取水部 (細かいトーン; 上部構造・粗いトーン; 土留・トーンなし; 下部構造)

参照)。東樋下層遺構の樋管上端の標高は 70.5m であるか ら、男柱の先端を水面上に出すためには、最低でも 6.2m 以上の長さの男柱が必要となる。通常よくみられる2本柱 の鳥居建ではこのように長大な男柱を支持するのは困難で あるため、復元案としては樋管の先端部に残存していた4 本の柱に注目して図320、図321のようなものを考えている。 樋管の蓋板の止め方については残存部分の形状から、短い 材を利用してそれを2本の角材で押さえ、さらにそれを構 方向の板材で押さえる型式であったと思われる。この蓋材 に穴をあけたのであろう。ただ上部構造の高さが随分高い ために水に潜らずに男柱の上下をするのは困難であったこ とが予想される。復元案では点線で示しておいたが、中間 付近にもうひとつ梁を設置すれば、男柱は左右せず、上下 できる。ただしこれには何の根拠もない。この復元案を採 用した場合、樋管の先端よりさらに前方に2本の板材が延 びることとなるが、これは中樋や西樋など近世の樋でもみ られたハの字型の材と同じく、水流を制御する目的のもの であろう。

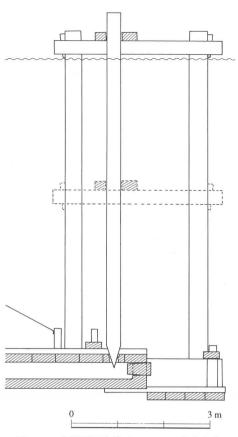


図 320 東樋下層遺構(奈良時代)取水部復元図(全体)

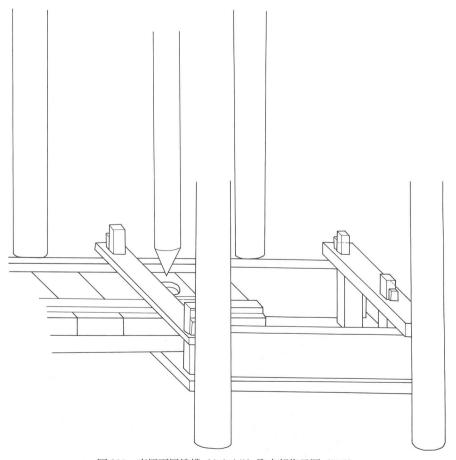


図 321 東樋下層遺構(奈良時代)取水部復元図(部分)

#### ③中樋遺構(鎌倉時代)

中樋遺構から出土した石棺群は僧重源が建仁2年(1202)に狭山池を改修した際に伏せた石樋である と考えられる。また昭和改修の時には堤防の下流側で計6基の石棺および1基の石材が出土している が、これも重源の石樋の一部としてよいだろう(石棺Aだけは樋管に沿った上流側の箇所において出土し ている)。『南無阿弥陀物作善集』には重源の改修について「臥石樋事六段云々」という記載がある。 六段の「段」とはこの場合長さを示す単位と考えられる。1段は6間であるから6段は約65mとい うことになる。この長さは現在の狭山池の堤の基底幅にほぼ等しく根拠のない数字とはいえない。し かしながら現在狭山池から出土している石棺をすべて主軸方向に連結しても全長は 33m 程度にしか ならない。もちろん後世持ち去られたり、破壊されたりした可能性もあり、検出数がそのまま当初の ものとは限らないが、建仁改修当時に樋の全長すべてが石棺からなっていたとは考えにくい状況であ る。このように主として出土した石棺の数の問題からここでは特に水圧を受けやすい樋の取水部およ び排水部付近だけに石棺を利用し、真ん中は木製の樋を利用したと考えたい。このように考えれば、 昭和の改修時に排水部付近において出土した石棺、あるいは今回の上流側で出土した石棺は、もちろ ん慶長改修などで多少の移動はあるとしても、ある程度重源改修時の原位置を保ったものであると考 えられる。石棺はおのおの3~5トンの重量を持ち、長距離の移動は現在でも困難をきわめるという 物理的な事情も先の推論の前提にある。以下の考察では重源の改修時においても、取水部付近で検出 されたものは取水部で、また排水部付近で検出されたものは排水部で利用されていたということを前 提としたい。

昭和改修時には末永雅雄氏が「石造物発見図」を作成し、この図は『狭山池改修誌』『池の文化』などに掲載されている。<sup>4</sup> この図には木製の樋管は描かれず、石棺のみを描いたものとなっているが、

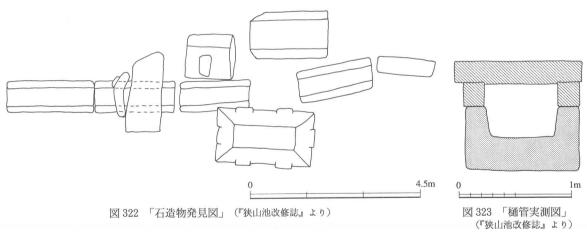




写真 106 石 棺 7



写真 107 石 棺 10

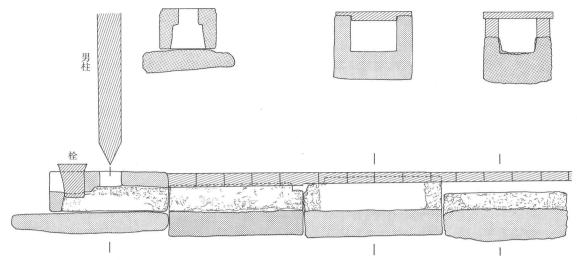


図324 中世石樋復元図

『池の文化』などに掲載されている写真や断面図と照合すると、石棺は中樋遺構樋管の下流側先端部において底板、側板の代替として用いられていたようであり、木製樋管の断面との高さの差は蓋板との間に板材を挟むことによって調整していたようである。また石棺のうちいくつかは蓋板の重しとしても利用されていたことが写真などからうかがわれる。このような状況は慶長の改修で生じたものと考えられるが、石棺をあたかも先述のU字型の樋管のように利用する方法はおそらく重源の改修時のものを踏襲したのであろう。さてそれならば建仁の改修時に石棺はどのようにして配列され石樋として再利用されたのであろうか。石棺そのものは慶長の改修時に移動しており、発掘による知見からそれを復元することは困難である。ただ石棺7のみは底部に二つの丸い穴があけられていることから、現在の一

表 31 狭山池出土石棺の法量

及 51							
	長さ	幅	内高	内幅			
石棺1	(201.5)	(127)	?	89			
石棺 2	227.0	122.0	42~45	69			
石棺3	222.0	130.0	51	70.5			
石棺4	226.0	113.0	43.5	70.5			
石棺5	198.0	109.5	24.8	55.5			
石棺6	(134.0)	138.0	36.9	75.0			
石棺7	199.5	98.0	39.0	54.0			
石棺8	244.0	119.5	43.5	57.0			
石棺9	263.0	128.0	49.5	61.5			
(石棺10)	259.0	160.0					
石棺A	214	102	13.5	66			
石棺B	223	135	12.6	58.5			
石棺C	186	102	30	55~57			
石棺D	158	102	30	45~50			
石棺E	167	75	24	50			
石棺F	180	112	20	53~63			
石棺G	官G ? ?		?	?			

樋との比較によって、これが樋の上流側先端に上下さかさまの状態で置かれ、この穴に上から男柱がささる状態であったことが推定できる。二つの穴のうち一方は小口にまで穴が拡張しており、清掃用にあけられたものである可能性が強い。普段は栓などが入れられていたことが推測できる。普段使用されていたのは底部中央の穴であろう。また中樋遺構の基礎として地面に敷かれていた石棺10は他の家型石棺とは異なり、まったく扁平な板石であるが、この石は重源改修時においても近世と同様に樋の基礎としての役割を果たしていたと考えたい。それ以外の機能がこの形態からは考えにくいからである。そして石棺10のうえに石棺7が上下逆さまの状態で置かれたものを、重源改修時の「石樋」の取水部の復元案としたい。鎌倉時代の段階では尺八樋の存在は想定しがたく、とすればこの石の樋管の上には男柱が立ち、またそれをささえる鳥居状、あるいは櫓状のものが存在したはずである。中樋地点の堤体断面調査の結果から、重源の改修時には堤体の高さは標高79.2m程度、また水面の標高はそれより2m低い77.2mと考えられる。重源の改修時の「石樋」の上面のレベルはもちろん不明であるが仮に近世の中樋遺構の樋管の上面と同じ(69.0m)とすると、先端が水面上に出るためには、男柱は最低で8.2m以上の長さであったこととなる。石棺を用いた樋管の埋設と同様、この上部構造の建設も相当な大工事であったと考えられる。重源狭山池改修碑には物部為里など当時一流の大工が

工事に参加したことが記されている。彼らの技量を考えればこのような上部構造の建設は不可能では なかったと思われる。

石桶取水部の構造を先のように復元すると、石棺7の内高(39cm)と内幅(54cm)がこの時代の樋管 の標準的な通水断面ということになる。他の部分においてはこの断面より内高や内幅が大きくなるこ とはあっても、小さくなることは考えにくい。断面が小さくなった部分では水の流れが阻害され、樋 管の破損を招くからである。以上のように前提条件を設定すれば石棺19においては石棺1、石棺5、 石棺6以外のものは樋管として使用されていた可能性が強いといえる。石棺1および6は現状での破 損が大きく重源改修時には樋管としての条件を満たしていた可能性があるが、石棺 6 は内面の掘りこ みが極端に浅く、木などによって側板を嵩上しないかぎり樋管としての使用は困難であったと思われ る。今回中樋遺構において検出された石棺は大半が家型石棺の身の部分であり、その小口の部分がく り抜かれていた。その形態から考えてこれらの石棺は U 字型樋管であるとすれば、当然その上に蓋 板が載るはずである。蓋と思われる石材は中樋遺構からは検出されておらず、取水部付近の蓋板には 木材が使用されていたと考えざるをえない。また石材どうしを組み合わせるよりも、材木と石材を組 み合わせるほうが水密のためには有効であろう。蓋材としては東樋下層遺構で検出されているような 長い板材のものも想定できるが、この型式のものは時代が下がるほど少なくなるため、ここでは短い 板材を横方向に並べた型式の復元案としている。先述の通り石棺 7 の内高である 39cm を樋管断面の 高さであると仮定すると、他の石棺の内高とは 10cm 前後の差が生じる。蓋板の形態は石棺の上に載 る形であったと思われるが、近世の中樋遺構の蓋板のように、その一部が少し削り残されて石棺の内 部にはまる形のものを想定すると、この部分において石棺の内高の差を調整できることとなる。また 石棺の内底面を一列にあわせた場合、石棺の底部は相当凸凹になることが想定される。おそらくは基 盤の土のレベルを切り盛りしてこの起伏を調整したものと考えられる。なお図325で示した復元案の うち石棺 7 および10以外の配列の順序については、なんら根拠はない。破損が小さく特色的な石棺を 任意に配列しただけのものである。石棺同士、あるいは石棺と材木の接合部においては当然水漏れが 予想される。石棺には漆喰の痕跡などは一切みられなかったので、外周に粘土などを巻いて水漏れを 防いだものと考えたい。

排水部の石棺についてはいずれも内高が先に述べた石棺7の39cmよりもはるかに小さく。単独の石棺では樋管としての機能を果たしえなかったことが明らかである。末永雅雄氏は『狭山池改修誌』のなかで家型石棺の蓋は、石樋(石棺)の上に載せられて使用されていたという考えを述べているが、石棺Cをほぼ内幅の等しい石棺Cの上に載せた場合、内高は約42cmとなり、先に基準とした39cmの内高にほぼ近似することとなる。末永雅雄氏の記載によるとこの工事の時には破壊された石棺もあったようであり、これも含めると排水部においては3~4組の石棺の身と蓋(あるいはそれに替わるもの)の組合せによって樋管が構成されていたと考えられる。また取水部と排水部にはさまれた樋管の部分については、木製であったと推定されることを先に述べたが、この部分については遺物が残存しない以上復元は不可能である。ただ中世の溜池樋管の一般的な形態を考えると、U字型の樋管の上に、短い板材の蓋板を横並べにした形態のものであった可能性が高いだろう。

### ④中樋遺構·西樋遺構(近世)

今回の調査で出土した中樋遺構・西樋遺構はともに昭和改修の際に撤去を免れた尺八樋の最下段であるが、中樋は上部が破損しており、西樋は後部が破損していた。近世には度々西樋、東樋の改修が行われたこともあって、いくつかの近世文書には樋の材料などが記載されている。特に享和3(1803)年7月に作成された「狭山池明細書」(田中家文書)は、樋の全体の状況がうかがえる好史料である。こ

#### 表32 尺八樋法量の比較

		部材	「狭山池明細書」 (享和3年·1803)	「河州佐山樋之帳」 (寛永 4 年・1627)	出土遺構
		内法(上口)	内法 2尺2寸2分	内法 3尺	内法 2尺3寸3分(70cm)
	樋	座敷板		長さ3間半 巾 2尺3寸 厚さ 7寸	長さ 不明 巾 1尺5寸3分(56cm) 厚さ 7寸3分(22cm)
	管	側 板		長さ2間 巾 2尺7寸 厚さ 7寸	長さ 不明 市 2尺3寸3分(70cm) 厚さ 6寸(18cm)
17		砂蓋		長さ 4尺5寸 巾 5尺 厚さ 7寸	長さ 3尺8分(114cm)
	摺	柱	長さ1間2尺5寸 巾 1尺4寸5分 厚さ 7寸	長さ2間 巾 1尺4寸 厚さ 6寸5分	
通		柱(おきの柱)	長さ2間2尺5寸 7寸5分角 2本	長さ2間 巾 8寸 厚さ 7寸5分	長さ1間4尺7寸(322cm) 巾 5寸(15cm) 厚さ 3寸7分(11cm)
	長	押		長さ1間半 6寸5分角	不 明
	前	壁 板	長さ 6尺 巾 1尺 厚さ 3寸		長さ 4尺5寸3分(136cm) 巾平均 1尺5寸(45cm) 厚さ 2寸(6cm)
	壁	板	長さ 9尺 巾 1尺 厚さ 3寸		長さ 不明 巾平均 1尺8寸7分(56cm) 厚さ 2寸(6cm)
	全	長		長さ2間	
		内法(上口)	内法 2尺2寸2分 板厚 9寸5分	内法 3尺	内法 1尺6寸(48cm)
	樋	底敷板		長さ3間 巾 2尺6寸 厚さ 7寸	長さ 不明 巾 1尺5寸(45cm) 厚さ 4寸5分(13.5cm
	棺	側 板		長さ2間 巾 2尺7寸 厚さ 7寸	長さ 不明 巾 1尺3寸(39cm) 6寸(18cm)
中		砂 蓋		長さ 4尺5寸 巾 5尺 厚さ 7寸	長さ 2尺7寸5分(82.5cm 巾 不明 厚さ 不明
<b>a</b>	擦り柱		長さ2間2尺 巾 1尺4寸5分 厚さ 7寸	長さ2間 巾 1尺4寸 厚さ 2寸5分	長さ 不明 巾 1尺 5分(31.5cm 厚さ 5寸(15cm)
<ul><li>焼</li><li>株住(おき</li><li>長</li><li>押</li><li>前壁板</li><li>壁板</li></ul>		柱(おきの柱)	長さ2間2尺 7寸5分角	長さ2間 巾 8寸 厚さ 7寸5分	巾 9寸(27cm) 厚さ 4寸(12cm)
		押	長さ 9寸5尺 厚さ 6寸角		不 明
		壁 板	長さ 6尺 巾 1尺 厚さ 3寸		長さ 3尺2寸5分(97.5cm 巾 不明 厚さ 不明
		板	長さ 9尺 巾 1尺 厚さ 3寸		長さ 6尺(180cm) 巾 1尺(30cm) 枚数不明 厚さ 4寸5分(13.5cm

の史料と、「狭山池樋之図」(田中家文書、図326・327)を参照して作成したのが図328の西樋復元図である。尺八樋は上の樋から順に水を入れていくために、堤高の高い溜池で多く用いられた樋である。「狭山池明細帳」などでは慶長改修の際に小和田惣右衛門・同久兵衛親子によって考案されたと記載されている。その真否は判断しがたいが、狭山池と同様に尺八樋が使われている万濃池のものは寛永3年(1626)、尾張の入鹿池のものは寛永10年(1633)に築造されており、文献であきらかな尺八樋としては狭山池のものがもっとも古いと思われる。出土した樋は破損が大きかったが部分的にはサイズのわかる箇所もあった。そこで遺構と「狭山池明細書」および近世前期の史料である「河州狭山樋之帳」(寛永4年・1627)の四番樋の比較を試みたのが

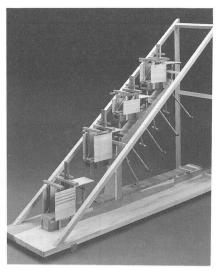


写真 108 西樋復元模型

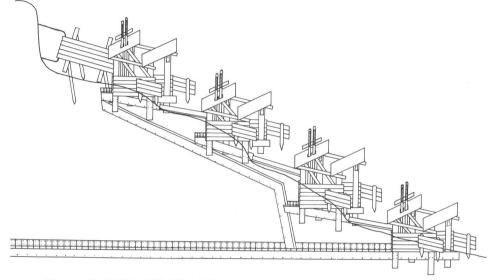


図 325 「河内国丹南郡狭山池東樋絵図」(田中家文書)トレース図(東樋は中樋のこと)

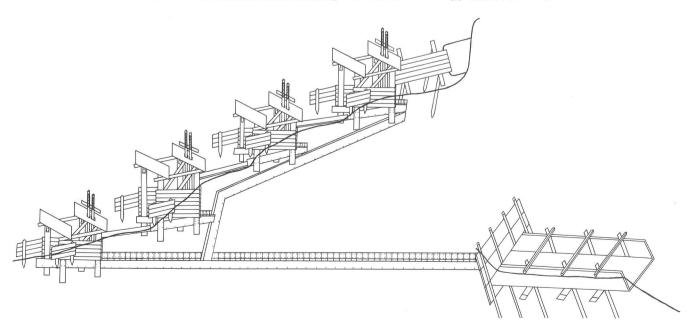
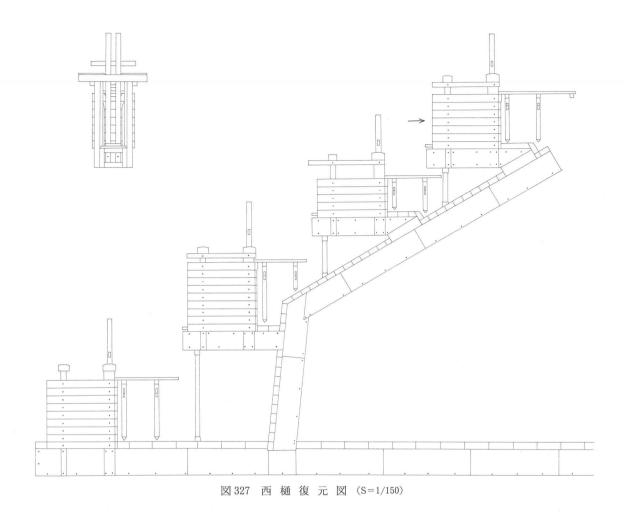


図 326 「河内国丹南郡西樋絵図」(田中家文書)トレース図



#### 表33である。

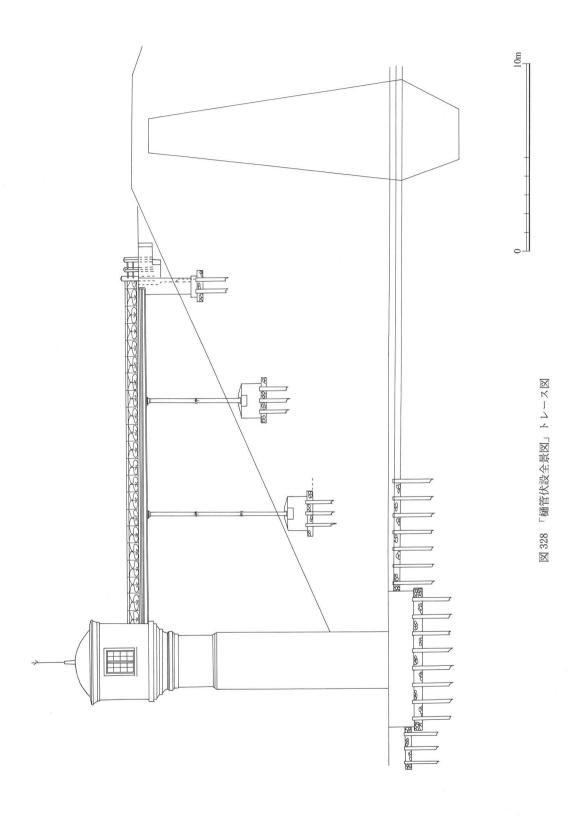
これをみるとごく一部の数値を除いて、両史料よりも西樋、中樋ともに遺構のほうが随分と小さく、これらの史料の通りに改修されたわけでないことは確実である。4段目の樋については慶長改修時に築造されたものが継続的に使用されたものと考えられよう。ただし3段目よりも上の取水部については近世に度々改修されたことが多くの史料に記載されているので、ここで参照した史料の数値はそれらの改修の結果を加味した数値と思われる。

#### ⑤東樋上層遺構(近世)

東樋上層遺構については、取水部、樋管、排水部のすべてがほぼ完全な形で出土しておりほとんど復元の必要はない。東樋上層遺構は西樋、中樋が尺八樋であるのに対して一段だけの底樋型であるために取水部の構造は両樋とは少し異なる。最大の差は西樋、東樋は後側の2本の柱の間に樋蓋がはまる形式であったのに、東樋では前の2本の間に樋蓋が入っている。このために東樋では取水部の内部まで樋管が伸びており、その砂蓋の上面に樋穴があけられている。またこれとも関連するが、西樋においては取水部の前面にも壁板が張られ、また中樋でも遺構には残存していないものの近世文書の記載によれば同様の状況であったと思われるのに対して、東樋では前面には壁板は張られていない。

#### ⑥取 水 塔

昭和の改修で中樋、西樋など近世に造られた木製の尺八樋はすべて撤去されて、西樋の場所にはハンドル式の樋が、また中樋の場所には取水塔形式の樋が新たに設置された。『狭山池改修誌』にはこの工事の設計図面が掲載されているが、縮尺が大きく、詳細の読解は困難であったが、大阪狭山市役所所蔵の資料の中に青焼きの図面があったため、これをトレースしたものを掲載しておいた。取水塔



# 精尽百余之(周祖,张家京京园



写真 109 取水塔全景



写真 110 取水塔の橋

は今回の平成の大改修まで多くの 人々に狭山池のシンボルとして親し まれてきたが、ダム工事に際しては 撤去されることとなった。しかし景 観的に狭山池と一体のものであり、 また近代の十木遺産としても重要な ものであるため保存することとなっ た。1994年に取水塔をワイヤーソウ で3つに切断して取り上げ池内に仮

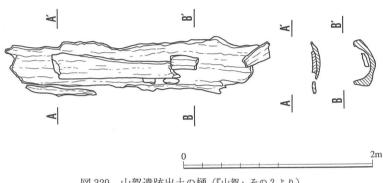


図 329 山賀遺跡出土の樋(『山賀』その2より)

置きし、1998年中には(仮称)狭山池ダム資料館内に搬入して原型に復して、将来的には中樋遺構など と一体的に展示する予定である。

#### 3 樋の系譜

#### ①溜め池に先行する樋

狭山池からは以上のように各時代の樋が出土している。これを他の発掘成果と照合しながら、溜池 の桶の系譜を考え、狭山池の桶をわが国の農業土木の歴史の中に位置づける作業を以下行ないたい。

わが国の灌漑施設では溜池の誕生以前から木樋が利用されている。管見の範囲ではもっとも古い樋 の出土例は大阪府山賀遺跡で検出された弥生時代前期の木樋である。<sup>⑤</sup> この樋は河川の自然堤防を掘 削して設置されたもので、樋管は半裁した丸太を刳り貫いたもの、蓋は板材である。ただし両者とも 十斤で相当な破損を受けている。 樋管は U 字型か、O 字型か判断が困難だが、蓋が板材であったこ とを考えればU字型の可能性が高い。弥生時代の遺跡からはこの他にも十数例の木樋の検出例があ る。多くは自然河川から水路への引水、あるいは水路から水田への引水の機能をもって設置されてい る。大阪府池島・福万寺遺跡の木樋の場合®は、自然河川にともなう自然堤防に溝を設置し、その中 にヤナギとアカガシの丸太を刳り貫いた樋管を設置したもので、構造としては山賀遺跡の木樋と類似 している。この樋管は設置後ほどなく砂つまりのために廃絶したようで、その後は素掘りの溝から引 水している。この例からもわかるように弥生時代の木樋は自然河川や水路からの引水に使用されてお り、機能としては素掘りの溝を補強するものであった。岸部が自然堤防などで深い掘削が必要な場合 に、単なる素掘り溝では崩壊の可能性が大きく木樋が用いられたと思われる。この意味で原始的な木 樋の機能は今日の U 字溝と同様であり、掘削が大きい場合にはそれを埋め戻す必要が生じ、樋に蓋 が設けられたと考えられる。この段階の樋の取水方法は前面の水をそのまま樋の中に飲み込む方法で あった。

#### ②初期の溜池

大規模な堤と樋をそなえた溜池としては現在のところ狭山池が最古のものであるが、古墳時代中期 以降には小規模な溜池が登場し、木樋も検出されている。近年あいついで発見されたこれらの遺構に ついては祭祀遺跡やトイレとしての性格も考えられており、必ずしも灌漑施設の範疇でとらえられる ものでもないが、樋の技術的な系譜を考える上では無視できない。奈良県南郷遺跡からは谷川をせき とめた小規模な池とそこから引水する3本の木樋が検出されている。® 樋は堤の下に埋め込まれたも のではなく池からあふれた水を導くようになっており、いわば余水吐の機能を担っている。したがっ て蓋もなかったようである。2本目の木樋には沈殿槽のような掘りこみがあり、また覆屋状の遺構の 存在も想定されるため調査担当者はこの遺構全体の性格を水を用いた祭祀と考えている。時代的には 5世紀中葉のものである。木樋こそ検出されていないが、同種の遺構としては弥生時代のものとして 福岡県の三苫永浦遺跡の池状遺構があり、南郷遺跡とほぼ同時期のものとして東大阪市西ノ辻遺跡で 検出された池状遺構がある。これはやはり谷川から水を引き、 5m 四方、深さ 0~80cm の池を上下 に4つ並べてつくり互いを木樋で連続したものである。樋はやはりオーバーフローする水だけを導く ものであり、たまった水全体を利用できる構造ではない。また藤井寺市の狼塚古墳からは木樋を形ど った埴輪が出土している。この樋のまわりには壁が回っており、南郷大東遺跡などの性格を考える上 で示唆に富む。発掘担当者はこれを浄水のための施設で用いられた樋と考えている。

これらの諸遺構で出土した木樋の性格は現在のところ不明確といわざるを得ない。ただ樋の設置技 術や堤との関係においては、狭山池や益田池のような樋と堤を備えた本格的な溜池とは大きな差を認 めておくべきであろう。

#### ③本格的溜池の誕生

以上のように木樋を設置する技術は弥牛中期に既にみられ、本格的な溜池誕牛のむしろ前提となる 技術であるといえよう。溜池の誕生は弥生時代以来の樋の制作技術と古墳時代になってはじめてわが 国に導入された堤を築造する技術の結合として評価すべきである。狭山池において実施した北堤断面 の観察調査では合計12回の盛土の痕跡が観察されているが、築造期の堤から奈良時代の堤までは土を 10~15cm 程度盛土したのち土の表面に枝についたままの葉を一面に敷きならべる敷葉工法がみられ る。また築造期の堤防では土を植物質のものでくるんだ土嚢状のブロックを斜面などに並べる技術も

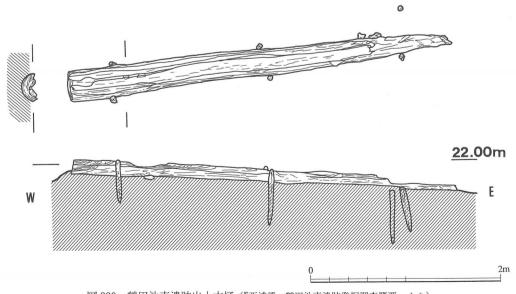


図 330 鶴田池東遺跡出土木樋(『西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要』より)

観察されている。前者の敷葉工法については大阪府八尾市の亀井遺跡、北九州の水城でも検出されている。工楽善通氏はこの工法が中国や朝鮮半島でもみられることから、これを渡来系の人びとによってわが国にもたらされた技術と評価している。® このような新しい築堤技術に、弥生時代以来はぐくまれてきた木工技術が結びついて初めて巨大な溜池の築造が可能となったのである。

狭山池が7世紀の始めに築造されたことはこれまで本書で何度も述べてきた通りであるが、7世紀以降溜池は少しずつわが国の風土に腰をおろしはじめ出土例も増加する。飛鳥時代の事例としては飛

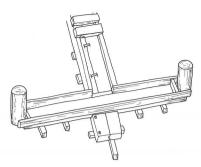


図 331 水城取水口復元図 (『特別史跡水城』より)

鳥の島宮遺跡で検出された石組の園池にともなう木樋がある。® この池は7世紀前半のもので日本書 紀推古34年条にみえる蘇我馬子邸の池に対応する遺跡と考えられるが、樋は U 字型の樋管と板材の 蓋を持つ。蓋の端部には樋穴があけられており、また樋をはさむように2本の柱が建ち、先に説明し た鳥居建による取水施設が伴っていたようである。狭山池東樋下層遺構も規模の差こそあれほぼ同様 の構造を持つ。奈良時代の溜池に伴う木樋の事例としては大阪府鶴田池東遺跡、兵庫県宅原遺跡、愛 知県室遺跡のものなどが知られている。鶴田池東遺跡の樋管は丸太を刳り貫いた樋管の上に板材の蓋 をのせたものであるが、陶製の取水部の一部が検出されているのが注目される。8世紀中葉から9世 紀にかけて設置されたと考えられる。⑩ 宅原遺跡では樋だけではなく余水吐、堤などが一体的に調査 されているが、築造時の樋はヒノキ材の丸太を刳り貫いたもので、その上にやはりヒノキ材の蓋板が かぶせられている。奈良時代前期に築造された溜池である。⑩ また室遺跡からは何本かの大型の木樋 が出土している。@ 小規模な溜池状の遺構にともなうものとみられるが、古いものは8世紀に設置さ れている。ヒノキ材の丸太を刳り貫いて樋管が作られているが蓋は検出されていない。狭山池東樋下 層遺構の先端部も奈良時代のものであるが、やはりヒノキ材の丸太を刳り貫いた樋管をもっている。 以上のように飛鳥・奈良時代の溜池の樋は、狭山池東樋下層遺構をはじめとして、いずれもU字型 の樋管をもつ。木樋は先述の通り弥生時代に素掘り溝の強化を目的に発生したと考えられるが、古代 の樋にU字型のものが多いのもその技術的な伝統を引くためであろう。

古代の樋のうち、まったく例外的な存在は福岡県太宰府市の水城で確認されている樋である。⑬ 水

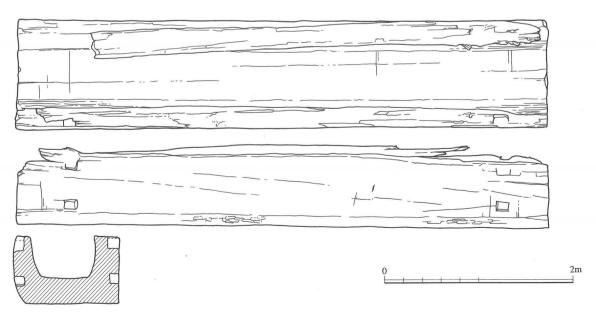


図 332 益田出土木樋(泉森皎「益田池の考古学的調査」より)

城は『日本書紀』天智3年条に築造記事がみられる防衛用の堤であるが、これまでの発掘調査の結果、図331のような取水部の復元案が示されている。樋管は板材を組み合わせて、カスガイなどで留めたもので先に述べた箱形の構造をしている。最近発掘された春日市の小水城でも同様の樋管が出土している。水城の築造には百済系の渡来人が関係したことが『日本書紀』などに記されているが、技術的な先進性にはその強い影響がみられるのだろうか。

#### ④池樋の画期

溜池の築造技術には古代・中世を通じてそれほどの変化はみられない。狭山池では鎌倉時代に重源によって石製の樋管が設置されているが、他の事例と比較するとこれは異端に属する事例といえるだろう。ただしこの事例においても材質面での特異性はみられるが、樋管の構造は U字型であり、同時期の一般

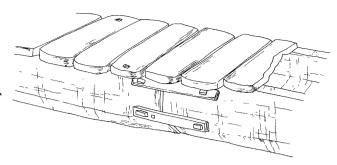


図 333 益田池出土木樋復元図 (泉森皎「益田池の考古学的調査」より)

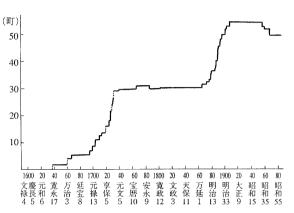


図 334 田原本町における溜池面積の推移 (宮本誠『奈良盆地の水土史』より)

的な形態を踏襲している。益田池は弘仁13年(822)に築造されたことが「大和州益田池碑銘並序」などの史料によって知られているが、その樋管と思われるものが検出されている。この樋管の刳り貫き部は内幅 60cm にも及び、一狭山池東樋下層遺構を凌ぐ規模である。注目されるのは樋管以外にも樋管と「うしの継手材や蓋板と思われる材が出土していることで、泉森皎氏はこれらの史料から図333のようにこの樋管の復元案を作成している。『この復元案は狭山池東樋下層遺構の両端部で検出されたものとほぼ等しく、奈良~平安」期の大型溜池の樋の標準を示すものといえる。樋管の形態は基本的にはU」字型で、小規模なものは蓋板として長い板材を使用したと思われるが、狭山や益田池のように大型のものでは短い板材を並べて蓋板としたのであろう。一

表 33 岩室村の溜池築 造年代

池名	築造年代
濁り池	明応 7 (1498)
北 池	天正11(1583)
尻 屋 池	慶長 6 (1601)
上 池	承応 1 (1652)
すっぽ池	不 明
芦 池	寛文 1 (1661)
永谷池	正保 2 (1645)
見取池	貞享 3 (1686)

狭山池においても全国的にも溜池築造技術に大きな画期が訪れるのは近世初頭を待たねばならない。 戦国時代に発達した鉱山開発や、建築、造船などの多様な技術がこの時期の灌漑施設に大きな影響を 与えている。狭山池で慶長の改修が行われ、長く荒廃していた讃岐の満濃池が改修されたのもこの時 期である。統一政権の誕生に伴ってこのような大型の灌漑施設が全国に続々と築造されていった。樋 に絞って考えても、狭山池ではこの時期はじめて板材を組み合わせて巨大な釘によって固定した箱型 の樋管(中樋遺構、西樋遺構、東樋上層遺構)や、尺八型の取水部(中樋遺構、西樋遺構)が登場する。これ らは明らかに専門職人の手による仕事であり、この時期に灌漑施設の建設に従事する樋大工、黒鍬な どの専門職人が誕生したことを示している。狭山池の樋では船材の再利用や舟釘、マキナワ技法の応 用など明らかに船大工が樋作りに関与した痕跡がみられる。箱型の樋管の導入によって長大な樋の築 造が可能となり、溜池の規模は一挙に巨大化した。戦国時代に発展した諸技術が統一政権の誕生や鎖 国の影響もあって内的発展に転じたのがこの時期であるといえる。もちろん溜池築造技術の進歩は、 近世における爆発的な耕地の増大の前提となるものであった。

近世初頭には灌漑施設の大型化だけではなくその量的な普及もみられた。大型の溜池が築造されていく反面で、谷間に小規模な溜池が多く築かれていったのもこの時期である。表33は狭山池にすぐ東接する大阪狭山市岩室の溜池の築造年代一覧であるが、近世前期に主な溜池が成立していることがわかる。 
⑤ また平野部には四周を堤防で囲んだ皿池がよく見られるが、このような皿池の起源こそ中世にさかのぼるものの、その多くが造られたのはやはり中世末から近世のことと思われる。図334は宮本誠氏によって明らかにされた奈良盆地の中央に位置する田原本町内の溜池面積の推移である。 
⑥ 元禄~享保期に多くの溜池が造られていることがわかるが、狭山池の灌漑範囲である南河内においては築造時期のピークはこれよりも若干古くなると思われる。

樋管の設置技術からみると古代から中世に至るまでは U 字型樋管が主流であるが、近世に入ると箱型樋管が採用されるだけではなく、小規模な溜池では丸太を半切して内側をえぐり再び組み合わせた O 字型の樋管が多く用いられるようになる。箱型樋管はその技術的な高さから船大工や建築大工などの系譜を引く専門職人(樋大工)によって作られたと考えられるが、O 型樋管はそれほどの技術を要するわけでもなく農民が自ら設置することが可能であったとみられる。近世初頭の溜池の大型化に対応する技術として箱型樋管や尺八樋が、また同時期の溜池の地域的・階層的普及に対応する技術として O 型樋管が誕生したと考えたい。狭山池のすぐ北側の池尻城跡でも近世のものと思われる O 型の樋管が出土している(第2章第5節参照)。

#### ⑤小 結

狭山池から出土した樋は年代的にもわが国の溜池の樋の歴史の全体をほぼカバーするものであり、また溜池の規模の巨大さから考えて、同時代の技術の中でも最先端を示すものと考えられる。以上の小論においては狭山池出土の樋の現時点での復元案と、樋の系譜について考えてみたが、樋をめぐってはさらに検討すべき事項が多く残されている。本論ではほとんど触れることができなかったが、木工技術が樋の築造技術に与えた影響には大きなものがあると考えられる。たとえば箱形樋管の誕生には、カンナや大鋸の存在が当然のことながら前提となるだろう。これらのことについては遺物の詳細な観察が必要であるが、現在、遺物は保存処理中であり果たせなかった。また東樋上層遺構では板に番号が書き入れられており、樋を造った職人集団の組織の存在が想定できるが、これらの樋築造の実際の担い手の問題は、文献の検討も含めて今後の課題である。幸いにも狭山池出土の樋は保存処理の後、(仮称)狭山池ダム資料館において展示される予定である。今後、モノに即した研究の進展がさらに期待できよう。

#### 注)

- ①九州地方にこの例が多い
- ②『住吉大社司解』にみえる
- ③「大和国弘福寺文書目録」にみえる
- ④『狭山池改修誌』1931・末永雅雄『池の文化』創元社 1947
- ⑤西口陽一他 『山賀 その2』大阪文化財センター 1983
- ⑥寺川史郎他 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』Ⅷ、大阪文化財センター 1992
- ⑦坂 靖 「古墳時代の導水施設と祭祀」(『考古学ジャーナル』No. 398 1995)
- ⑧工楽善通 「日本古代の一土木技術に関しての予察」(『奈良国立文化財研究所創設40周年記念論文集』 1998)
- ⑨秋山日出雄 「飛鳥島庄の苑池遺構」(『佛教藝術』109号 1974)
- ⑩芝野圭之助他 『西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1979

- ⑪須藤宏他 『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1995
- ⑩都築暢也 「木樋を伴った灌漑施設について」(『室遺跡愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』 第49集 1994)
- ③『特別史跡水城跡』太宰府市教育委員会 1994
- ⑭泉森皎 (「益田池の考古学調査」『橿原市千塚資料館報』1 1978)
- ⑤『大阪狭山市史』民俗編 1997より
- ⑯宮本誠 『奈良盆地の水土史』農山漁村文化協会 1994

## 第6節 発掘成果からみた各時代の狭山池

狭山池調査事務所 市 川 秀 之

#### 1 はじめに

本報告書の第2章で報告した通り1987年の狭山池調査事務所設立以来、狭山池内外の発掘調査は継続的に実施されてきた。個々の発掘調査は工事の進捗にあわせて、年度ごとに調査区を設定して実施したために、その成果には注目すべきものが多かったものの、概要を個別に報告するだけでは狭山池の歴史の全体像を表現しえないという問題がある。発掘調査成果を統合し、さらに同時に進められてきた文献史料の調査や、自然科学の調査の成果とも照合していく作業が、狭山池の全体像の理解には不可欠である。本項においては、報告書のまとめの意味もこめて、発掘調査からみた各時代の狭山池の復元作業を、下流の開発史とも関連づけながら行うこととしたい。

#### 2 各時代の狭山池の規模

各時代の狭山池の規模を復元するためにはいくつかのデータが必要であるが、特に重要なのは各時代の北堤の高さであろう。この問題については北堤断面の調査によって、時代ごとの堤体の高さがほぼ明らかになっている。しかしながらさらに詳細に池の規模を復元するためには、狭山池築造以前の地表面の状況と、各時代の水面の標高を知る必要がある。前者については三田村宗樹氏が工事用に実施された膨大な数のボーリングデータを集成、解析して図335のような等高線図を作成している。©この等高線図はダム工事以前の池底の標高から池による堆積物を除去した数値を出して作成されたものである。この図は狭山池築造以前、あるいは拡張過程の狭山池の復元にとって非常に有効な情報を

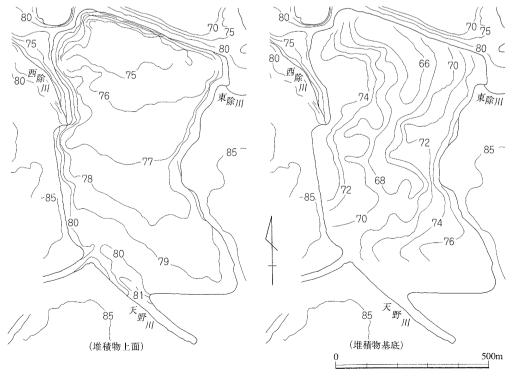


図 335 狭山池内の等高線図 (三田村宗樹「既存ボーリング資料のデータベース化と狭山池堆積物の分布状況」より)

与えてくれる。また各時代の池の水位については、堤防の高さからある程度の推定が可能であるが、厳密な復元を行うためには池の洪水吐(除)の標高を知る必要がある。除は堤とは異なり、災害や改修を重ねるたびに前時代のものが破壊されていくので、発掘調査では情報を得ることは困難である。そこで本項においては、各時代の除の標高を考える資料として、現在の大阪狭山市とその周辺の溜池の堤体天端の高さと、余裕高(堤体天端の標高から除の標高を引いた数値)を調べ、堤体の高さを横軸に余裕高を縦軸に図336のようなグラフを作成した。溜池を造る場合、可能な限り最大限の水を貯めようとするのは当然であるが、除の高さをあまりに高くすると、洪水時に甚大な被害をもたらす恐れがある。度重なる災害の歴史の中で、堤防の高さと余裕高には経験的に一定の関係が生じることが考えられる。図336をみると両者にはおおむね直線で示したような相関関係があり、この関係は溜池の性格が歴史的に不変である以上、過去の溜池にも適応できると考えたい。なお大阪府の耕地課では、風による波が1m以内の溜池の場合、次のような式で溜池の余裕高を計算している。

余裕高 $(h_2)=0.05H_2+1.0m$ (5m 以内単位以下切り上げ)  $H_2$ :最高水深 最高水深は堆積物がないときには堤防の高さ $(h_1)$ から余裕高を引いた数字になるので、上記の式は次のように書き替えられる。

 $h_2 = 0.05(h_1 - h_2) + 1.0m$ 

 $h_2 = 0.0476h_1 + 0.952$ 

この一次関数式で求められる直線を図336には点線で示しておいた。これをみると天端高が 7m 以上

の溜池においては数値 (m)3 で求められる余裕高よ りも随分安全をみて除 の高さを設定している ことがわかる。大型の 溜池では災害時の被害 も大きいためであろう。 以上のように堤体の高 さと余裕高想定値の関 係が明らかになったの で、狭山池についても 各時代の堤防の高さが 決まればグラフと照合 することによって余裕 高が求められることと なる。除の標高も同時 に明らかになるので、 その標高を先の図の等 高線図で追い掛ければ ある程度各時代の狭山 池の規模を明らかにす ることが可能となる。 もちろん池底について

は人工的な開削が想定

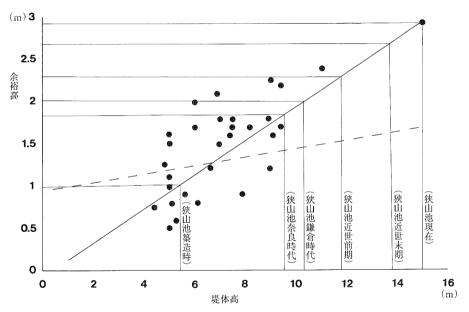


図 336 堤体高と余裕高の関係

表34 各時代の狭山池

	天 端 高	余裕高	常時	発掘文献で確認	下流の動向			
	標高(基盤高)	不怕的	満水位	樋	除け	1 印成为到161		
築造前						小規模な水田		
6 世紀	74.4( 5.4)	1.0	73.4	東樋下層遺構	(東 除)	沖積平野の開発		
奈良時代	78.5( 9.5)	1.8	76.7	東下層遺構		太満池・段丘開発		
鎌倉時代	79.2(10.2)	2.0	77.2	中樋石樋		西除左岸の開発		
近世初頭	80.8(11.8)	2.3	78.5	中 樋 遺 構西 樋 遺 構東樋上層遺構	西 除 康	水路網の整備		
近世末期	82.8(13.8)	2.7	80.1	中 樋・西 樋	西除・東除	水下村の離脱		

できるが、この点は各時代の条件を考慮する必要がある。

以下の考察においては、発掘調査以前に発表されている日下雅義氏の研究®や、調査と同時期に発表された木村昌弘氏らの研究®を参照しながら、発掘調査で堤や樋などの様子が明らかになっている、狭山池築造時(6世紀)、奈良時代、鎌倉時代、近世初頭、近世末期および狭山池築造以前の様子を可能な限り復元することに努めたい。

#### 3 狭山池築造以前

狭山池の築造以前には、旧天野川と三津屋川は現在の狭山池内において合流し、北流していたことは間違いがない。日下雅義氏は航空写真の判読や、ハンドオーガーによる地質の調査によって北堤以北の旧河道の流路を図337のルート1のように復元されている。<sup>④</sup> 今回の調査で狭山池の北側で行っ

た調査としては池尻遺跡(1)、(2)の調査があるが、 これらの調査の結果によると、池尻遺跡(1)では図 337の B 調査区より西において厚い砂層が確認さ れているので日下氏のこの部分の復元はほぼ正確 であるといえる。ただB調査区の箇所について は狭山池築造直前には河川は埋まり水田が造られ ている。またC調査区においては庄内期の遺構 が検出されておりしかも砂層はみられなかったの で、川幅は復元よりもやや細かったと思われる。 また北堤の直下にあたる池尻遺跡(2)においては① の地点よりも東において砂層が観察できた。①地 点はちょうど日下氏が復元された河川の西端にあ たる。また東池尻1号窯の箇所ではこのような厚 い砂層はみられなかったので、この箇所において も概ね日下氏の復元は正確であるといえる。ただ このような沖積地では河道は何度も変更している ことが予想される。狭山池内部の掘削工事では中 樋の箇所よりも西側において旧河道が検出されて

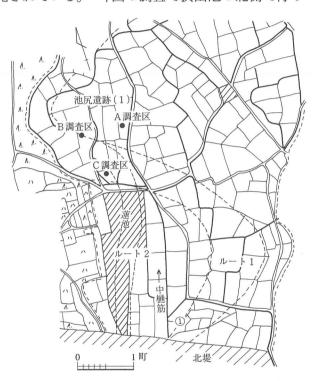


図 337 北堤以北の旧流路 (日下雅義『歴史時代の地形環境』所載図に加筆)

いるので時期によれば図にルート 2 として示したように、現在の蓮池の場所を通って北流する河川が存在した可能性がある。そして河川の東西に池尻遺跡(2)あるいは池尻遺跡(1)の C 調査区・B 調査区のような小区画の水田が河川の周辺に点在する風景を狭山池築造直前のものとして推定できる。

近世初頭に狭山池の灌漑範囲に含まれていた範囲を示したのが、図338である。この時期に狭山池の灌漑範囲はもっとも広くなっている。狭山池と下流の開発動向を考える時にはひとまずはこの範囲が考察の対象となろう。またこの地域のうち旧丹南郡については鋤柄俊夫氏による詳細な遺跡分布論が出されている®ので、これらの研究や大阪府教育委員会、働大阪府文化財調査研究センター、各市町村教育委員会から出されている報告書類を参照しながら、当該地域の開発の状況を考えていきたい。

7世紀初頭の狭山池築造以前にもこの地域においては、黒姫山古墳を始めとするいくつかの古墳や、 須恵器窯、埴輪窯などの生産遺跡などが見られるが、集落遺跡に限定するとその数は東側の石川流域 や、西側の石津川流域と比較して非常に少ない。西除川流域の弥生時代の大規模な集落跡としては、 弥生後期の水田が多く出土している上田町遺跡があり、また古墳時代の遺跡としては5世紀初頭から 大規模な集落がみられる 大和川今池遺跡がある。 ともに狭山池からははる か北側の遺跡であり、ま た旧天野川が形成した氾 濫原や沖積段丘上に展開 する遺跡である。さらに 流域の南側では河川の東 西に中位段丘が広がって いるが、この地域におい ては狭山池築造以前の集 落遺跡としては6世紀末 以降に集落が展開する太 井遺跡・平尾遺跡がわず かにあげられるだけであ る。以上のことからも明 らかなように、7世紀初 頭の狭山池築造以前にお いては、北部の氾濫原や 沖積平野においては集落 や水田が営まれていたも のの、南部の中位段丘に おいてはほとんど開発は 進んでおらず、谷地形や 氾濫原を利用して小規模 な水田や集落が営まれて いたという状況がうかが える。狭山池の築造はこ の地域の開発にとって非

若江 西足代/矢柄 国分 北蛇草 西郡 林寺新宗 江堂 大地 田島 柏田 方井 衣摺 四条 萱振 佐堂 桑津 大連 入尾 大信寺新田 西郷 成法寺 東郷 今井 木戸 別宮 庄の内 勝間 鞍作 今在家 久宝寺 北田辺 平野西脇町 島町 南田辺 背野 百野 丁平野 渋川 原松 粉浜 竹淵 植松 鷹合 喜連 安中 出戸 堀 上住吉 **F**体 殿辻 六反 老原 矢田部 住道 沢の口 長原 宮田新田 東瓜破 田井中 苅田 七道館 枯木 城蓮、寺 庭井 若林 大堀 太田 池内 小野 一字 沼 小川 花田新田 西萬屋新田 我高 北花田 阿保 小山 向井井城 小山口 奥 船堂 津屋 島泉 林 東代島 上田 丹下西南島泉 南花田 沢田 中筋 古室 新堂 長曽根 野渍 立部 野 圌 赤畑 野中 野人樫山 伊賀 金口 丹南 錯 計 寺 原 金田 井今 高田 郡戸 軽 莫. 石原 東 **苦提** 不保 西 菩提 河原城 西浦 野尻 北 1. Giff 小平尾 北余部 成成之 関茶屋新田 原寺 深井 土塔 田中新田 内 新田澤田豫 南余部 平尾 田子田 堀上 高松 畑山新田人 出理出 喜志 八田 福田 東野 菅生 東山 南野田 平井 )新田 小坂 İΗ 中野 つ 伏尾 池尻 新 袁 見 和田 廿山 代

図 338 慶長期の狭山池灌漑範囲(薄:西樋掛り・濃:中樋掛り・点:狭山池太満池直法)

常に大きなできごとであった。

#### 4 築造時の狭山池

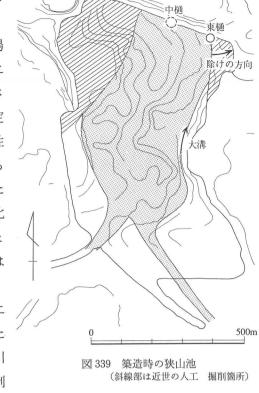
狭山池の築造時の遺構として検出されているのは東樋下層遺構および北堤断面の12層である。北堤 のレベルから当時の水面は 73.4m 程度と推定される。図335に示された等高線を追い掛け、西除、東 除付近のように後世に人為的に掘削が行われた部分についてはその影響を考慮して作成したのが図 339である。この時期の樋のうち発掘調査で確認されているのは東樋下層遺構だけであるが、谷底平 野の一番低い箇所である中樋付近にも、底水を取るために当然樋が存在したと思われる。問題は西樋 が存在したかどうかであるが、考古学的には判断できない。ただこの時期の堤防の規模は、東西の段 丘面よりも低いことを考慮すれば樋から出た水を現在の西除川方面に流すことは困難であり、西樋が 存在したとしても堤の北側の谷底平野に落とすしかない。仮に中樋が存在したとすれば灌漑の面でこ

れは余り意味のない樋である。よってこの時期には東樋お よび中樋の二つだけが存在したと考えたい。

また築造時から除は当然存在したと思われるが、その場 所についても不明である。工事の中で現在の東除の北側に おいて御庭池方面にむかって伸びる溝状の掘りこみ検出さ れたが、この掘りこみの底部は約 73m であり、先に推定 した常時満水位にほぼ等しい。もちろんこの掘りこみの性 格については後世の掘削や災害の痕跡である可能性がある が、ここではそのレベルを重視して築造当初の除と考えた い。この除の水は現在の御庭池を通って北堤より 400m 北 側で谷底平野に流れこみ東樋からの水路と合流していたと 思われる。西側の除についてはその存在を裏付ける根拠は ないが、存在した可能性は高い。

築造直後の狭山池の規模、施設については以上のように 推定しているが、その築造方法についても少し考えてみた い。溜池築造以前には先にも述べたように谷底平野を河川 が北流していたが、溜池を造る際には、この河川をどう制

御するかがまず問題と なる。ここでは東岸部 の調査で出土している 大溝を工事のために河 川をつけかえたバイパ ス水路の痕跡と考えた い。この水路は現在の 狭山池の東岸に沿って 北流し、東樋遺構付近



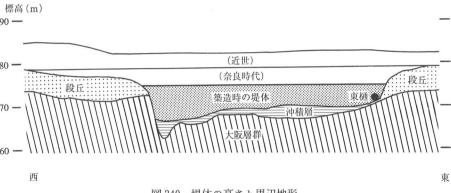


図340 堤体の高さと周辺地形

に至っていたと思われる。東樋下層遺構はこのバイパス水路を利用して敷設された可能性があろう。 このようにして河川を東側に付け替え、その間に中樋を設置し、その後に再び河川を戻して、今度は 東樋を設置したのち堤防の築造に移ったものと思われる。堤防の築造方法は北堤断面の項で述べた通 りであるが、堤防の長さは図339の通りであるとすれば約 300m となる。

次に狭山池築造の下流への影響を考えたい。狭山池はもちろん狭山池より下流側の農業用水の確保 のために築造された溜池であるが、築造当初の灌漑範囲はどの範囲であったのであろうか。その際に 狭山池が北側の沖積地の灌漑を目的としたものか、あるいはその東西に広がる段丘面までも灌漑範囲 としていたのかがまず問題となろう。沖積平野については池尻遺跡(1)・池尻遺跡(2)の項で述べたよう に狭山池築造以前から小規模な水田は谷底平野の各所に存在しており、狭山池ができてはじめてこの 地域に水田が造られたと考える必要はない。むしろ沖積地の開発については狭山池の築造によって、 点的な開発が面的に拡大し、またその安定性を増したものとして評価されよう。池尻遺跡(1)の □調 査区においては狭山池築造前には、不整形の小区画水田が存在していたが、 7 世紀には整然と北西方 向を向いた畔をもつ水田が形成されている。また北堤の直下に位置する池尻遺跡(2)の水田は狭山池築 造に伴って廃棄されている。狭山池の築造によって、北側の沖積地においては大規模な区画、水利の

再編成が行なわれたことが想定できる。また狭山池の築造についてはこれまで段丘上の開発と関連して論じられることが多かったが、段丘面の高さにまで達していない堤防の規模を考えると、この段階の狭山池が東西の段丘面に水を送る可能性は少ないだろう。狭山池の築造はまず沖積平野の開発を第一義的な目標としてなされたものと考えられる。

#### 5 奈良時代の狭山池

奈良時代には文献で知られている改修として、天平3年(731)の行基の改修と天平宝字6年(762)の改修がある。これらの改修の痕跡は今回の北堤断面調査でも確認されている。また東樋下層遺構が上流側に延長されているのも天平宝字6年の工事に伴うものと考えられる。特に天平宝字6年の改修は大規模なもので狭山池の堤防はこの段階で初めて東西の段丘上面の標高に達している。それに伴って汀線は南側に拡大したものと思われる。この時期の樋は基本的には前代のものを改修して利用しているので、中樋および東樋が存在したと思われる。またこの時代には堤防が段丘面の高さまで達したために、段丘面を大規模に掘削して除を設けることが可能となった。もちろん除の場所を特定することはできないが、いくつかの候補地は考えられる。日下雅義氏は行基の改修のころまでに池の西側の段丘面を掘削して現在の西樋→副池の方向に西除が設けられた可能性を述べておられるが、除としては日下氏の想定ルート以外にも、現在の池尻新池付近の谷などが考えられる。また先に述べた東側の除については底面のレベルが約73mと低いためこの時期には放棄された可能性が強い。

また狭山池に関連する奈良時代の動向として重要なのが『続日本紀』に記された天平4年(732)の狭 山下池の築造である。この狭山下池は狭山池よりも約 1km 北側に所在する太満池のこととしてほぼ 間違いがない。太満池は狭山池と同様に南河内の開発にとって大きな意味をもつ溜池である。それは 太満池が丹南郡の条里地割の南限となっていることからもうかがわれる。現在の狭山池の堤防は東北 ー南西方向を向いており、この方向は築造以来変化がないことが調査の結果明らかになっているが、 これに対して太満池の堤防は正しく東西方向を向いている。このことは太満池が、この地域の条里制 の施工と一体となって築造されたことを示している。図341は狭山池周辺の谷底平野の底部および東 側の段丘面の高さを示した模式図である。この図をみれば築造当初の狭山池の堤防は段丘面まで達せ ず、奈良時代になってようやく堤防がその高さに至ったことが読み取れる。また狭山池の水を段丘上 に導くためには相当な距離の水路が必要であることもわかる。次に太満池に注目すると太満池の箇所 において沖積地の底面レベルと段丘面のレベルの差が非常に小さくなっていることが明らかである。 この立地から考えても太満池は東側の段丘面上に水をあげる目的で築造された溜池であることがうか がわれるが、現在の水利形態をみても太満池はこの機能を果たしている。太満池の三つある樋のうち もっとも東にある牢樋から出た水は段丘崖にそって流れ、美原町の平尾、菅生よりも北においては段 丘上の水田に水を供給している。以上のことから考えて奈良時代の狭山池改修および下流の太満池の 築造は南河内の段丘面上の開発を大きな目標としたものであったと思われる。この時期の下流遺跡の 動向をみても、観音寺遺跡、真福寺遺跡、太井遺跡、日置庄遺跡、丹上遺跡など狭山池の灌漑範囲で

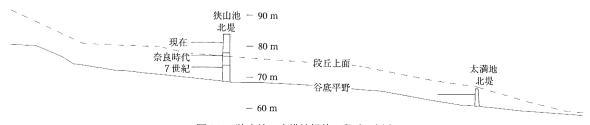


図 341 狭山池・太満池堤体の段丘の標高

あったと思われる中位段丘上の遺跡において、8世紀を契機として集落が営まれるようになってくる。 狭山池が築造された7世紀初頭にまでさかのぼる集落遺跡は、清堂遺跡や新金岡更池遺跡などその数 も少なくまた狭山池からも北側にずいぶん離れた遺跡であることを考えれば、8世紀が旧天野川流域 の開発にとって一つの画期をなすことは明らかであろう。奈良時代の狭山池改修と太満池の築造によってこの地域の段丘上の開発はようやく本格化したのである。

#### 6 鎌倉時代の狭山池

鎌倉時代の狭山池の状況についてはきわめて情報が少ない。中樋遺構から出土した石樋や重源狭山 池改修碑によって重源の手で中樋が改修されたことが確実であるが、考古学的な遺構からはそれ以外 のことは読み取れない。

重源狭山池改修碑文の中で当時の灌漑範囲に多少とも関連するのは「摂津河内和泉之人民之誘引」 によって重源が改修に乗り出したという部分である。狭山池が荒廃したので、これらの地域の人々が 重源に工事を依頼したという内容からは、少なくとも当時の灌漑範囲が摂河泉の三ケ国にまたがって いたことが推定できる。狭山池が所在する河内が狭山池の灌漑範囲であるのは当然であるが、摂津や 和泉がその灌漑範囲となるためにはいくつかの前提が必要である。摂津については狭山池の灌漑範囲 がもっとも広かったと思われる慶長17年(1612)に平野郷・喜連村・鷹合村・湯谷嶋村・我孫子村・庭 井村など摂津の村落に狭山池の水が供給されている(図338参照)。これらの村のうち平野村の一部と喜 連村以外は、西樋→西除川のルートをたどって、西除川に設置された各村の井堰から取水している。 また同様に和泉については慶長17年の段階では大豆塚村が狭山池の灌漑範囲に含まれているが、この 村も西樋→西除川のルートで水を引き入れている。したがって摂津や和泉の村落に水を送るためには 西除川に水を落とす樋の存在が前提となる。慶長改修以降はこの機能を西樋が担うこととなるが、鎌 倉時代の段階でこの西樋に替わる樋が存在したとみるのか、あるいは樋は中樋が唯一の樋で太満池に おいて東西への分水がなされていたのかは現在のところ判断できない。ただ重源の工事がほぼ中樋周 辺に限られていたと思われることからここでは一応後者の立場を取っておきたい。 しかしながら鋤柄 氏の研究においては、鎌倉時代以後西除川左岸の遺跡が飛躍的に増加したことが明らかにされている。 このような下流遺跡の動向が重源の改修のみによるものとは思えないが、この時期を画期として西除 川が狭山池の主要水路としての機能を担うようになり、左岸の開発が大きく進展したことは指摘でき よう。重源の改修よりも約1世紀後には西除川に沿って、池尻城や野田城・大饗城が出現する。これ はもちろん南北朝期の政治状況に対応したものであるが、これらがいずれも西除川に沿った水利の重 要地点に立地していることは、狭山池とその水利の掌握が当時の地域権力にとっても重要な課題であ ったことを示している。

#### 7 慶長改修時以降の狭山池

慶長の改修時の汀線は近世の絵図などからある程度復元が可能であるが、いくつか解決すべき問題点がある。図342に実線で示したのは、「狭山池法下耕地整理地区及ビ之ニ隣接スル土地現形并予定図」(狭山池土地改良区蔵)などから復元した昭和の改修以前の汀線である。現在と比較すると、東除の南側に2ヶ所入江状の地形があり、また西側にも2ヶ所同様の入江状の地形がみられる。いずれも東西の段丘に刻まれた開析谷の影響を受けたものである。また南岸には現在南堤があり直線的なものとなっているが、かつては小規模なデルタ地形を示していた。北堤および東岸については近世を通じて、この昭和改修以前の汀線のままであったと思われるが、南岸の河川の流入状況および西除の場所につ

いては近世の中でも時代によって 変化がみられる。南岸については 慶長改修当時の状況を復元した図 343に示した通り大きく南に広が っていた。この部分は河川の流入 口に近いために土砂の流入が激し く、ことに上流で新田開発がさか んに行われるようになった元禄時 代以降は堆積物が池を埋め、ほと んど水が溜まらなくなった。その ためこの部分は埋め立てられて田 畑となり、池内新開と呼ばれた。 この部分については点線で表示し てある。池尻新開ができて以降は 天野川も現在の流路よりも少し東 側を流れていたことがいくつかの 絵図に描かれている。天野川の付 け替えの時期は史料的に明らかで はないが、明治6年(1873)に作成 された「河内国丹南郡狭山池図 面」(田中家文書)などではすでに 現在の位置に付け替えられている ので近世後期の改修で流路が変更 されたことがわかる。西除の位置

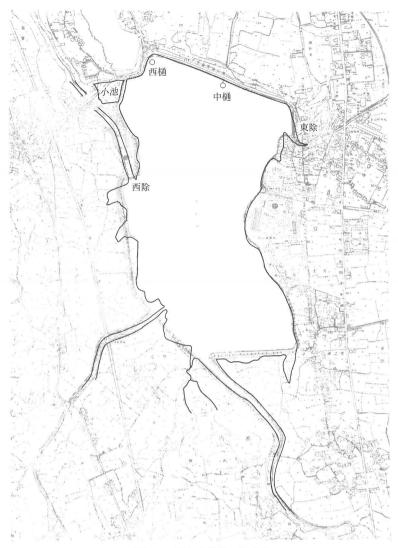


図 342 昭和改修前の狭山池

についてはさらに複雑である。図152に示した「狭山池西除ケ略図」(田中家文書)には黒い太線で堤が印されているが、これの堤が直線部からはみでた場所はかって西除が存在した場所に残された腕堤であると思われる。この絵図をみる限りでも4回程度西除が改修され、その位置も少しづつ南側に移動していることが読み取れる。昭和の改修においては西除の場所自体は移動しておらず、現在の場所に西除けが設置されたのは安政の改修の時と考えられる。図343には近世の絵図や古文書から推定される各時代の西除の場所を示しておいた。天明期以降には西樋の西南に小池という小さな池が存在するが、天和3年(1683)「狭山池巡見絵図」(田中家文書)にはちょうどこの小池のあたりに西除が描かれている。近世には西除がたびたび決壊したことが多くの近世史料に記されているが、おそらく慶長の改修の時には小池の場所に除が築かれ、決壊と改修の連続によって除の場所が南に移動したため、元の除の場所に小池が造られたものと思われる。

慶長改修では中樋・西樋・東樋の三つの樋と東西二つの除が造られている。ダム工事前のボーリング調査や、工事中の観察によれば、図339の斜線の部分は大阪層群が池底にほとんど露出していた。この場所にも元来は段丘層がのっていたはずであるので、西樋の位置を考えると慶長の工事の時にこの部分の掘削がなされた可能性が大きい。ただし先にも述べたように中世段階での狭山池の様相は重源の中樋の改修以外はほとんど不明であるため、この部分が慶長以前に掘削されていた可能性も否定はできない。また東除については狭山池から池尻新池北側までの間の東除川は慶長改修の時にはじめ

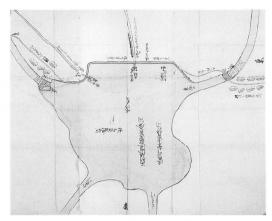


写真 111 狭山池巡見絵図 (天和 3 年・1683・田中家文書)

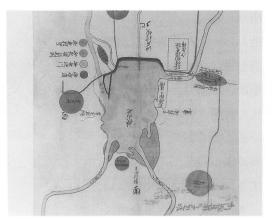


写真 112 御巡見御改狭山池絵図 (天明8年・1778・田中家文書)

て掘削されたことが正保期に作成された「河内国絵図」(内閣文庫蔵)などの史料によって明らかである。東除が現在の位置に設置されたのも慶長改修時であろう。現在の東除は段丘崖よりもさらに東に存在するので図339の斜線の部分が慶長改修に際して掘削されたと思われる。また三つの樋については今回の調査ですべてその遺構を発掘することができた。中樋と西樋については割賦帳などの史料によってその灌漑範囲が明らかであるが、東樋については近世初期に既に廃絶していることもあって灌漑範囲は明瞭ではない。東樋は1段であり、規模の点で他の樋とは大きな差があり、狭山池と太満池の間の谷底平野の東



写真 113 河内国丹南郡狭山池図面 (明治 6 年・1873・田中家文書)

半分を潤したものと考えられる。慶長の改修が下流に与えた大きな影響については既にいくつかの研究がある。朝尾直弘氏の研究によって更池村(現松原市)では新たに溜池が造られ、また耕地の間の水路が整備されより生産制が高まったことが明らかにされている。® 三宅村(現松原市)の大海池や深淵池のような大型の溜池が慶長期に築造されているように、® 狭山池の改修は下流の水路網、溜池網の再整備を随伴現象としてひきおこし、結果として近世初期のこの地域の生産性は飛躍的に高まったといえる。これら下流の水利に関する研究については本報告についで刊行される『狭山池』論考編にいくつかが掲載される予定である。

近世に狭山池では度重なる改修が行なわれており、それを示す多くの史料も残されている。狭山池 調査事務所ではこれらの狭山池関係の古文書、絵図の調査にも取り組みすでに『狭山池』史料編を刊行している。同書巻末の年表には知りうる限りの狭山池の改修を掲載しているが、同書の刊行後、さらに新史料の発見が相次いでいる。近世の度重なる改修の原因となったのはやはり災害であった。慶長元年(1595)の大地震が狭山池の慶長改修の一つの原因となったことは、地質学者の共同研究によって明らかにされているが、このほかにも宝永 4 年(1707)の地震でも狭山池が被害を受けたことが「中林池日記」(中林家文書)などに記されている。また東樋が放棄されたのも元和 6 年(1620)の台風が直接の契機であったと思われる。近世を通じて北堤が災害の被害を受けた例は比較的少ないが、西除についてはたびたび洪水によって崩壊している。このような災害と改修の繰り返しは明治以後も継続してみられる。明治39年(1906)に完成した工事で初めてコンクリートが使用され、また昭和初期の大改修が実施されることによって、ようやく災害と改修の繰り返しから脱却することができたのである。

#### 8 小 結

狭山池から出土した遺物、遺構 のもつ情報量は果てしなく大きい。 行基や重源、片桐且元、小堀遠州 ら各時代の著名人物が改修にかか わっていることもあり、狭山池を 縦軸にわが国の農業土木史の縦軸 を構成することも不可能ではない だろう。また狭山池調査事務所で は豊富に残された文献史料の分析 や、下流で行なっていた水利慣行 調査を実施しており、多くの研究 者の手によって堤体や池内堆積物 の自然科学的な分析も進められて いる。発掘調査の成果に加えて、 これら多くの分野の成果を参照で きたことが、狭山池研究に厚みを 加えたのではないかと自負する一 方で、あまりに情報が多いために それらを十分消化しきれなかった のではないかと畏れている。狭山 池からは多くの遺物、遺構が出土 しているが、狭山池自体は埋蔵文 化財ではない。7世紀から現在に

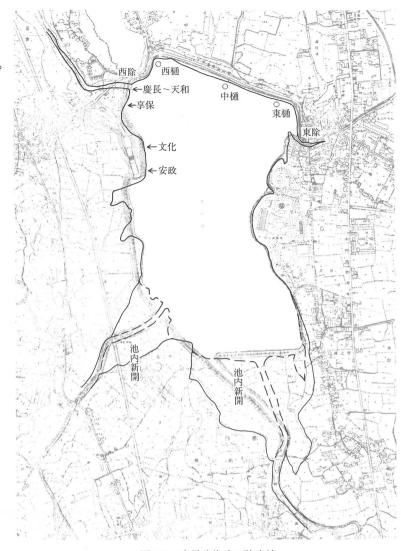


図 343 慶長改修時の狭山池

至るまで、時に災害のために荒廃することはあっても、そのたびに多くの人々の手で改修がなされ使い続けられてきた生きた文化財である。そしてその使命は今回のダム工事の後も変わることはないだろう。災害と改修の歴史に象徴されるように溜池は自然と文化の接点に位置する存在である。溜池の歴史の探求は、自然と人間の関係性についての考察に連続していく。工事を終えて、装いを新たにした狭山池が、自然と人間、環境と開発の関係を見つめなおす場となれば幸いである。

#### 注)

- ①三田村宗樹 「既存ボーリング資料のデータベース化と狭山池堆積物の分布状況」(『狭山池調査事務所平成元年度調査報告書』狭山池調査事務所 1990)
- ②日下雅義 『歴史時代の地形環境』 古今書院 1980
- ③金盛弥・古澤裕・木村昌弘・西園恵次 「狭山池ダム・古代の堤体が語る土木技術史について」(『土木史研究』15 1995)
- ④日下雅義 『歴史時代の地形環境』 古今書院 1980
- ⑤鋤柄俊夫 「中世丹南における職能民の集落遺跡」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集 1993)
- ⑥朝尾直弘 『近世封建社会の基礎構造』 御茶の水書房 1967
- ⑦『松原市史』第1巻 1985

# 報告書抄録

書 名	『狭山	いけ まいぞうぶん か ざい 池』埋蔵文化財	編								
副書名											
シリーズ名											
シリーズ番号											
編著者名	市川家	市川秀之・植田隆司・光谷拓実・渡邉正巳									
編集機関	狭山池	也調查事務所									
所 在 地	<b>〒</b> 589	〒589-8501 大阪府大阪狭山市狭山一丁目2384-1 TEL0723-66-0011									
発行年月日	西暦	1998年3月31日									
所収遺跡名	所	在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調	査	原	因	
狭山池	まおきか な おおきか き やま し 大阪府大阪狭山市 いたもろ 岩室		27231	34度30分 15秒	135度33分 45秒	198810~ 199612	狭山池ダム化」 ともなう埋蔵5 財調査				
東池尻1号窯	東池尻		27231	34度30分 15秒	135度33分 30秒	199209~ 199303					
池尻遺跡	池尻		27231	34度30分 0秒	135度33分 45秒	199109~ 199303					
池尻城跡	池尻		27231	34度30分 15秒	135度33分 45秒	198810~ 199210					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特	記	事	項		
狭山池堤北地上地基地基上上上2234555555555565758585859515152535455555657575858595<	溜池	7世紀~現代 江戸戸時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時	堤護 樋 樋 樋 樋 大 須 須 須 須 須 須 須 須 須 須 須 須 須 須 須	須磁碑樋樋樋須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須須							
N. E. I. Kr.		~鎌倉時代	and all								
池尻城跡		近世	溜池								



# 図 版



1 狭山池の全景 北から・1985年



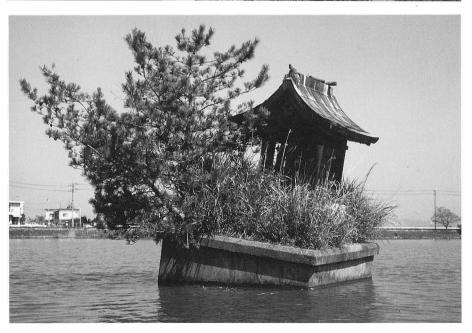
2 狭山池の全景 北から・1990年



1 東 除 (1989年)



2 西 除 (1989年)



3 龍神祠 (1989年)



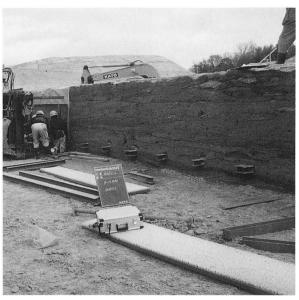
1 堤体保存箇所(中樋地点)



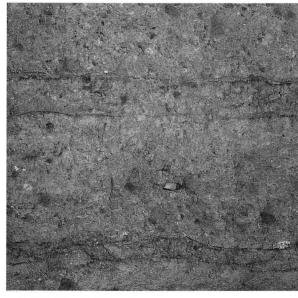
2 中樋地点西側断面



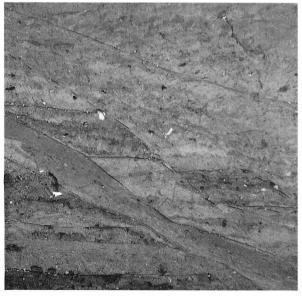
3 断面の整形作業



4 H 鋼の挿入作業



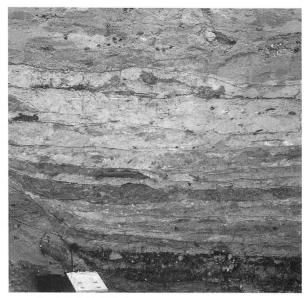
5 第8層の液状化の跡



6 第8層の滑り痕



7 第10層灰土層の広がり



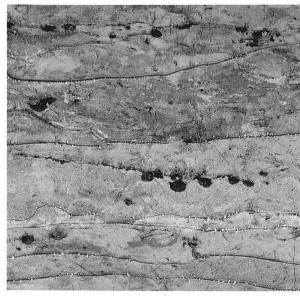
8 第10層灰土層断面



9 第10層灰土層遺物出土状況



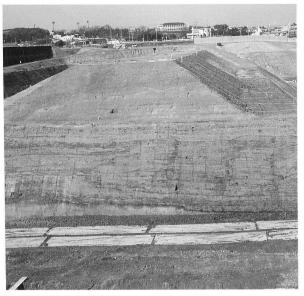
10 第10層敷葉



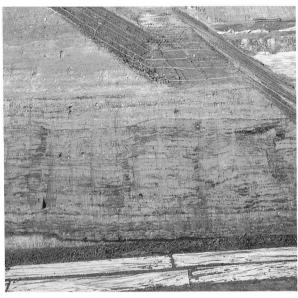
11 第10層敷葉



12 第12層土囊積み (斜面部分)



13 東樋地点西側断面



14 東樋地点西側断面土嚢積み



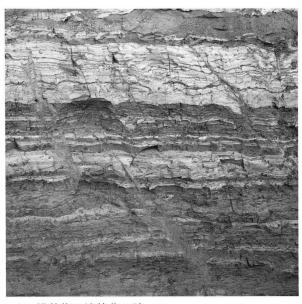
15 東樋地点東側断面



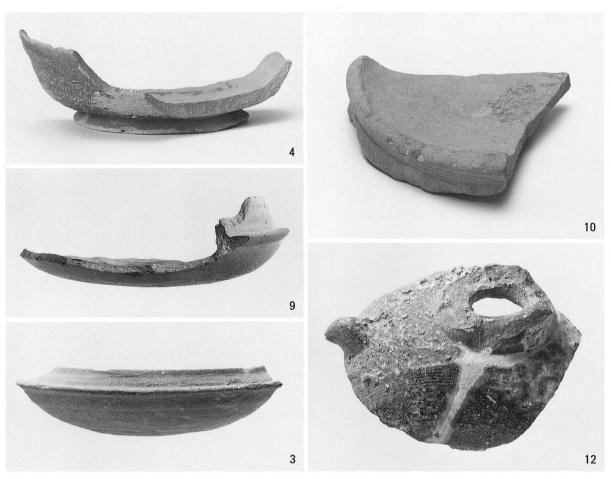
16 堤体の滑り痕(池内)

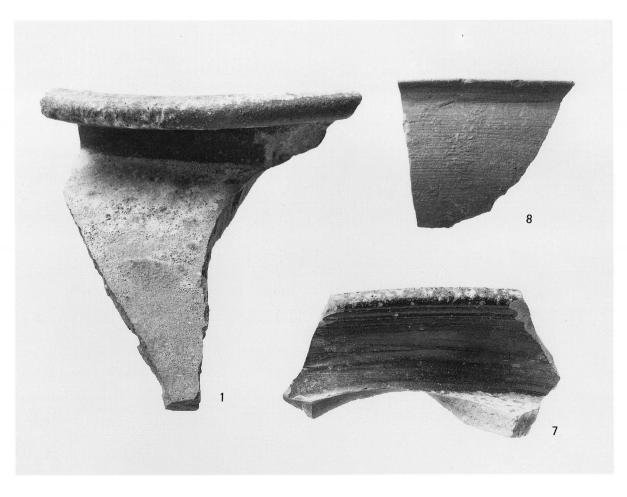


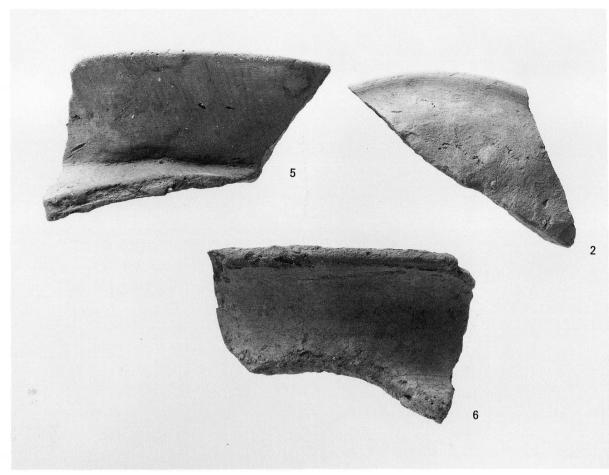
17 池内の砂層

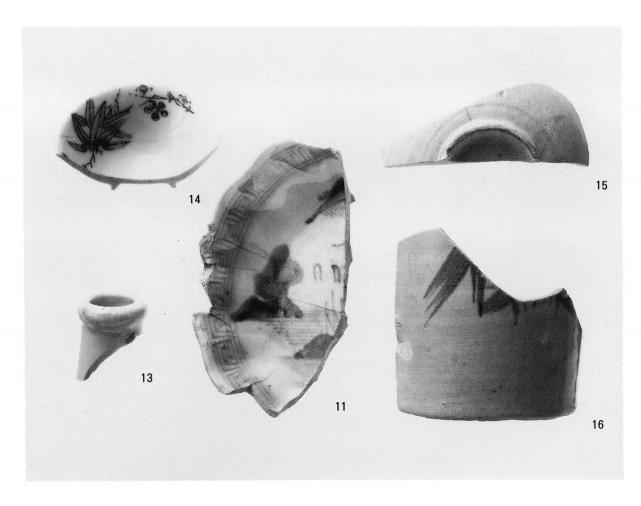


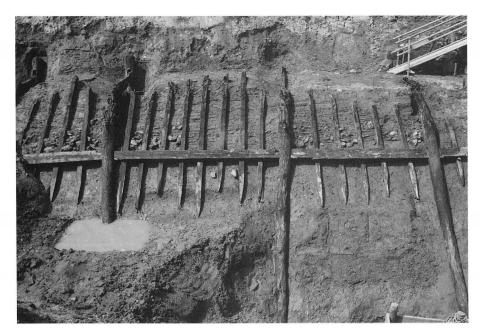
18 堆積物の液状化の跡











1 土中に埋め込まれた 丸太材



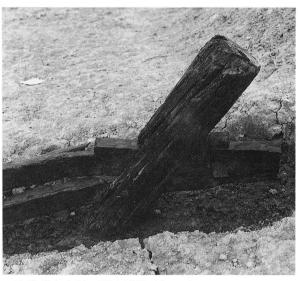
2 杭材と竹



3 東側断面



4 後方丸太材と梁の接続(西から)



5 後方丸太材と梁の接続(東から)



6 前方丸太材と梁の接続



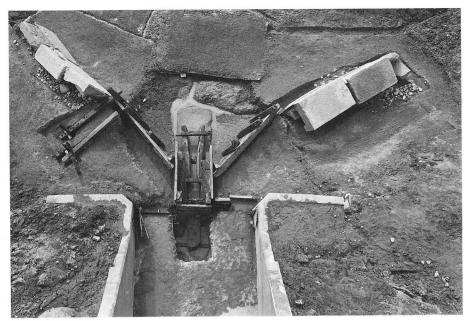
7 横板どうしの接続



8 横板切断部



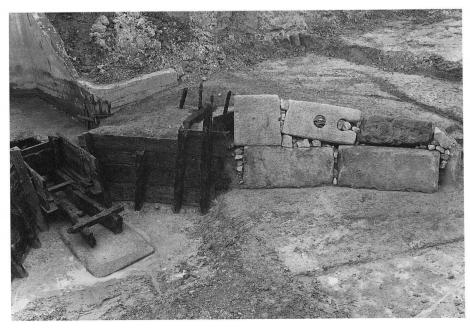
9 横板の鋸痕



1 中樋遺構全景 (上から)



2 中樋遺構(西側)



3 中樋遺構 (東側)



4 樋本体 (上から)



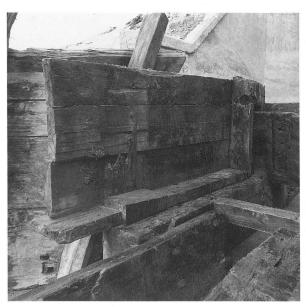
5 樋本体(切断された柱)



6 樋本体 (側板間の梁)



7 樋本体西側壁板



8 樋本体東側壁板



9 西側扇板



10 東側扇板



11 西側扇板(背後から)



12 東側扇板 (背後から)



13 西側石組



14 東側石組



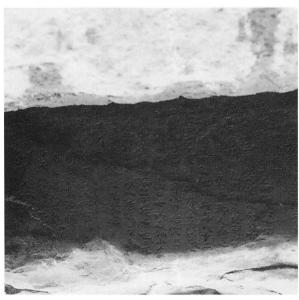
15 東側石組の裏込め石



16 西側石組の裏込め石



17 石棺に残された墨書



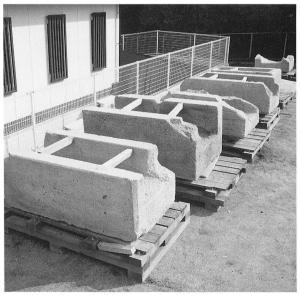
18 重源改修碑の状況



19 重源改修碑取り上げ作業



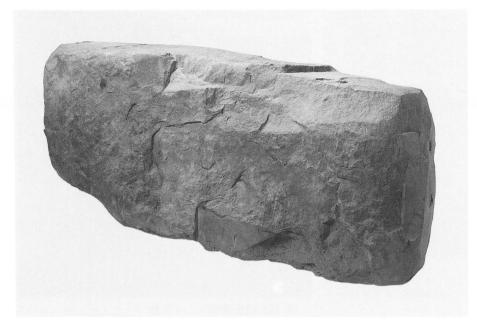
20 石棺取り上げ作業



21 石棺仮置き状況



1 碑 文



2 側 面



3 側 面



4 石棺 1 (上面)



5 石棺 1 (斜めから)



6 石棺 2 (斜めから)



7 石棺 2 (小口)



8 石棺 3 (斜めから)



9 石棺 3 (小口)



10 石棺 3 (主軸方向から)



11 石棺 3 (墨書)



12 石棺 4 (斜めから)



13 石棺 4 (主軸方向から)

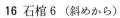


14 石棺 5 (斜めから)



15 石棺 5 (主軸方向から)







17 石棺 6 (主軸方向から)



18 石棺 7 (主軸方向から)



19 石棺 7 (小口)



20 石棺 7 (斜めから)



21 石棺 8 (斜めから)



22 石棺 8 (主軸方向から)



23 石棺 9 (主軸方向から)



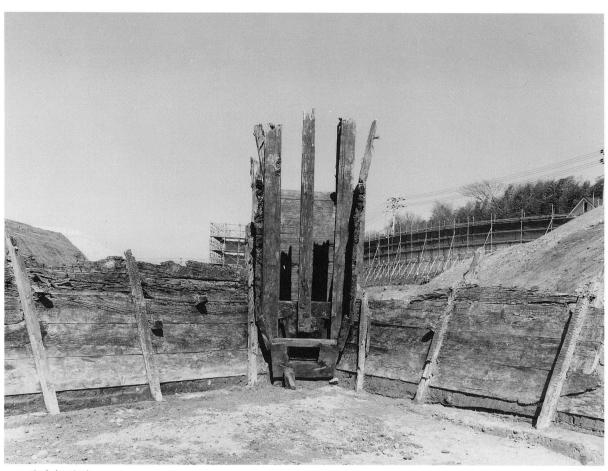
24 石棺 9 (斜めから)



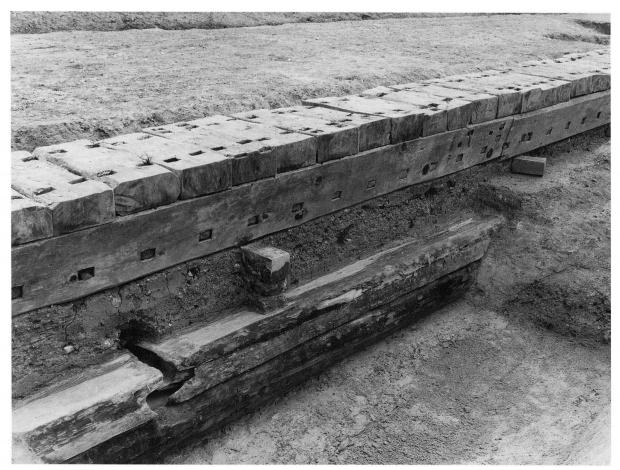
25 石棺10 (主軸方向から)



26 石棺10 (斜めから)



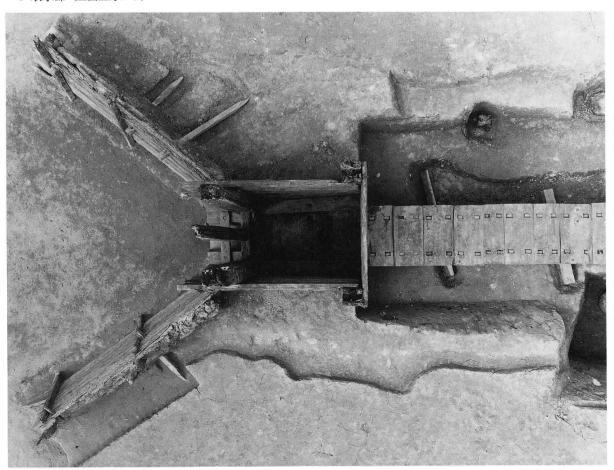
1 取水部正面



2 上層・下層の重なり



3 取水部 (正面上方から)



4 取水部 (上から)



5 取水部 (西から)



6 取水部樋蓋(前方から)



7 取水部(背後から)



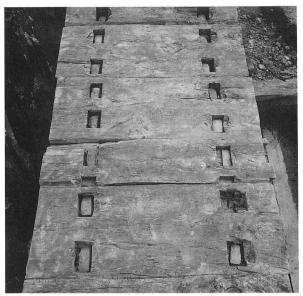
8 取水部樋蓋(背後から)



9 取水部樋穴 (上から)



10 樋管接続部



11 樋管砂蓋



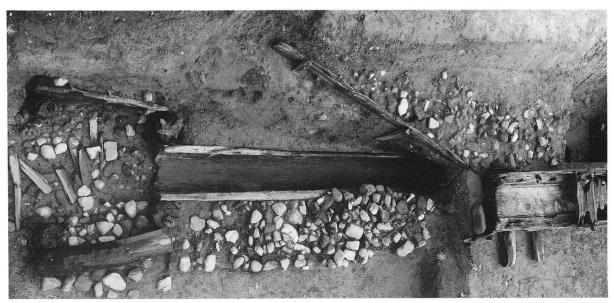
12 樋管砂蓋の釘穴



13 樋管側板の墨書



14 樋管砂蓋の釘



15 排水部 (上から)

図版24 東樋上層遺構墨書(1)









